
魔法先生ネギま！ ～もう一人の未来人～

神駈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ ～もう一人の未来人～

【Nコード】

N1316U

【作者名】

神駆

【あらすじ】

ある時代、その世界は歪んでいた。少なくとも、彼らの目にはそう映った。だから彼女はそれを変えるために旅立った。自らのような存在を生まないために。彼は彼女のために旅立った。彼女は自分の幸せを考えていない。それは、とても危ういことだと知っているから。それは、歴史を改変する行為。自分の存在を否定する可能性のある所業。決して自分の行いが『正義』ではないことを彼らは知っている。それでも彼らは進む。未来を救うために。

現在第5部開始。

第一話・「すべての始まり」(前書き)

小説を書くのは初めてです。誤字脱字・乱文・口調の不安定に注意してください。

第一話・「すべての始まり」

こんな摩訶不思議な迷路には誰も踏み込んだことがない。これには自然の営みを超えた力が働いている。

『テンペスト』 シェイクスピア著

それは、ある時代のある場所でのやり取り。

「やっぱり行くのか？」

彼は問い掛けた。

「……行くよ。私はこんな世界にならないように、例え自分の存在が消えようとも、遣り遂げてみせる」

彼女の意思は固かった。そして彼女はそれを遣り遂げられるであろう頭脳を持っている。もはや止めることは不可能だろう。それに、彼には止める権利はない。なぜならこのような考えに至ったのには、自分のせいでもあるのだから。ただ、そこは彼女が否定したが。

「そっか。じゃあ、仮契約しようぜ。前からしようと思ってたんだ。そうすれば、確かに君がこの時代、俺と居たっていう証になるだろ？」

「わかったよ。私のファーストキスを君にあげる」

彼女は少し恥ずかしそうに言った。心なしか、頬が赤くなっている。

その言葉を聞き彼は満足げに頷きながら魔方陣を書き出した。彼はこの時代である異名を持つ魔法使いだ。すぐに魔方陣は出来上がった。

「意外と緊張するな。お前はどつだ？ リン」

「私も緊張しているみたい。科学に魂を売った私がキスごときで緊張するなんて……」

最後の方は声が小さく彼には聞き取れなかった。そして二人は仮契約を結んだ。

「さて、もうそろそろ時間ね。……私は遣り遂げてみせる。だから安心してね。ユウ」

その言葉を最後に彼女は時間を越え旅立っていった。向かったのは過去。それも1000年も前。

「絶対俺もそつちに行くからな」

彼のその声は誰もいなくなった場所に響いていた。

第一話・「すべての始まり」(後書き)

小説って難しい(汗)次の更新はなるべく早くしたいです。

第二話・「新たな目標」(前書き)

小説って難しい……。

一人称が変わってますが、意味があるのであまり気にしないで下さい。

第二話・「新たな目標」

汝の欲する所を成せ。それが汝の法とならん

『法の書』 アレイスター・クロウリー（とある魔術の禁書目録）

リンが過去へと向かった後、俺は自分も時間跳躍を行うべく研究を始めることにした。だがまずは、現状確認からだ。リンが過去での歴史の改竄に成功したならば、何か変化があってもいいだろう。俺は大通りへと向かった。

「んー。何も変わってないな。まさか失敗？」

いや、まだそうと決まった訳ではない。そう自分に言い聞かせ街を歩くことにした。

（一時間後）

「やっぱり前と変わっていない。ならば「ユウ様」を見つけましたよ……」

見つかってしまった。抜け出したのがばれていたのか。俺は急いでその場から離脱した。

「俺がまだ王子の立場にあるということは失敗したのか」

リンが失敗した。そのことは俺にとっては信じられないことであり、同時に納得できるものでもあった。そう簡単に過去を変えることなど出来る筈がない。

それにリンは人を試す癖のようなものがある。恐らく今のような状況を作り出した先祖に対してもそれをしたのだろう。そしてリンが納得するようなものだったのだろう。だがそれでは……リンの存在は消えてしまう。

「俺も行くしかないか。どうせこの時代においても駄父のあとを継がされて知らない人と結ばれて、面白味のない生活を送るだけだし。いつそ過去に行つてそこで楽しく過ごしたほうがいいや」

そうして俺は、自分 ユウ・スプリングフィールド の死を装い、アリアドネーへと向かった。

「アリアドネー」

アリアドネーについた俺はシエリアさんを訪ねることにした。シエリアさんはユウ・スプリングフィールドとしての俺と、秋野友としての僕を知っている数少ない人だ。彼女に頼めば籍を置くことぐらひは出来るだろう。ちなみに秋野友とは俺のアーティファクトを使った姿で、性別は女だ。

「シエリアさん居ますか？ 秋野友です」

僕は彼女の部屋の前で呼びかけた。すぐに彼女から入っていいという許可が出た。

「失礼します。今日は頼みがあつてきました」

シエリアさんはそれだけで分かったようで、いろいろな手続き用紙を出してきた。

「ここに説明とか書いてあるからよく読んで書きなさい。私は今から少し出かけてくるからこの部屋好きに使っていいわよ」

シエリアさんはそう言うやいなや、影の転移を使ってどこかに行ってしまった。

「好きに使って言ったって特にやることはないというか、ここじや出来ないんだよな。まあいいやゆっくりしてよう」

僕はソファーに座って今自分ができることを数えてみた。

（魔法は全属性使えるようになった。肉体変化は元から持つてる能力だから十全に使える。調合も普通の人並みには出来る。でも何か足りない。そうだ！アニメや小説の技を再現してみよう！うん。なんだか楽しそうだ）

当面の目標ができたユウ改め秋野友だった。

第二話・「新たな目標」(後書き)

しばらくの間テストやらレポートがあるので亀更新です。

肉体変化の能力の元ネタは、ハリーポッターのトンクスの七変化です。

第三話・「僕の思考」(前書き)

独自解釈あり

第三話・「僕の思考」

生きることの有益さは、その長さにあるのではなく、その用い
かたにある。

『随想録』 モンテーニュ著

さて、目標は決まった。あとは実行するだけだ。

シエリアさんが帰ってきた。多分魔法騎士団をいじめ……もとい
訓練してきたのだろう。

「書いたかい？　ならここで自由に過ごすがいいさ。ここはアリア
ドネー。学ぶ意欲さえあればだれでも受け入れるんだから」

僕はここに至った経緯を聞いてこないシエリアさんに感謝しつつ、
以前使っていた部屋に向かった。

（Sideシエリア）

私はシエリア。現在アリアドネーの総長をやっている。

ユウ・スプリングフィールドが死んだと聞いた時には流石に驚い

たね。なにせ明日が丁度スプリングフィールド国の百周年記念式典なんだから。あいつは一応第一継承者だしね。

「それにしてもそんなに国王になるのが嫌だったのかねえ。ま、あいつのことだからそんな理由じゃないとは思うけど」

あいつが来てここに籍を置きたそうな顔をしてたから書類を渡してやった。詳しく話を聞きたいところだが、多分話さないだろうな。こっちもそんなに暇じゃないし。

「ここに説明とか書いてあるからよく読んで書きなさい。私は今から少し出かけてくるからこの部屋好きに使っていいわよ」

私はそう言って影の転移で訓練所に向かった。いやあ表向きのお調子は面倒だねえ。

さて、訓練を開始しようじゃないか。

「いいかい、明日は記念式典だから警備は厳重にっていうお達しが来てるんだ。いつもよりも厳しくやるよ。覚悟はいいかい？ じゃあまずはこれを防ぎな。魔法の射手・闇の1001矢!!」

ふう。これ位防ぐだろうし次は何にするかねえ……ククク。

シエリアSide end

僕は一先ず前に使っていた部屋にやって来た。ここはシェリアさんに頼んで誰も入れないようにしてたから前の時のままだ。

「まずは掃除からだね。風の精霊さん手伝ってくださいませんか？」

すると、まるで「いいよ」とでもいうように部屋の中を風が吹き抜けて埃を一カ所に集めた。

「ありがとう」

僕はそうお礼を言って埃をゴミ袋に入れた。

部屋が綺麗になったので僕は考えを巡らせた。

カシオペアはリンと一緒に作ったから作ることは出来る。ただ時間跳躍をした時にリンのいる時代に行くことが出来るかどうかは別だ。

まずリンが行ったのが本当に過去なのか分からない。この時代の文献には、あの特殊なクラスにリンと思われる人物は居なかった。もし本当に過去に行ったのなら、名簿に名前位載っているはずだ。名前を消されたという線もあるが……。

実験の結果では、未来にも過去にも行くことはできた。だけど、過去といっても精々一週間程度のものしか実験出来なかった。

ここからは僕の推論で、リンと意見が対立したことだが、未来に行くというのはそう難しいものではない。別荘の一日を現実の二日にすれば、これは未来に行っているということになるだろう。体感

上は一日でも現実には二日たっているのだから。それにカシオペアを使っても同じ説明で適応できる。でも過去はそうはいかない。過去に行くということは歴史を変えるということに繋がるのだから。

今、この瞬間を基点とした未来に行く場合、基点では”未来に行った”という認識があるからどのように世界が分岐しようとも、その分岐した世界では未来に行ったということが分かる。ただ過去ならばその過去において行ったことによる世界の分岐の結果、基点となった世界にその結果が伝わることは不可能に近いのではないかももちろん可能性は零ではない。だけど基点となっている世界は過去における行動がない場合の未来だから実質零といってもいいだろう。

「……ということはやっぱり同じ物語を綴っている平行世界への移動ということかな。でもこれはこれで問題なんだよなあ。行った平行世界が僕の知っているリンがいる世界とはかぎらないんだから」

どうすればいいんだろう。この推論が合っているとすると平行世界の数はとてつもない数なんだよなあ。そのなかからリンを探し当てるなんて不可能に近いのかなあ。

突然。僕の頭に激痛が走った。最後に見たものは白い世界だった。

Side Other

ふん。あの馬鹿^{ユウ}が死んで清々したわ。儂の息子のくせに魔力量も

少なく、魔法も使えない落ちこぼれとこそ何かをやりおつて。その点アギは魔力量も多く、儂に従順じゃ。あやつが死んだおかげでアギを次期国王にすることができそうじゃ。

……とか糞親父は思ってるんだろうな。ていうか盗聴してるから丸聞こえだし。まったくあいつは人を見る目がない。俺がいつ従順になった？ ただ聞き流してただけなんだけどな。それに兄さんは天才だ。あいつは何かを開発するのが得意だからな。ずいぶん前に見せてもらった指輪は凄いな。魔力を溜めておける指輪なんてどうやって作ってるんだよ。

さて、ユウも居なくなつたし、ここらが潮時だな。さつさと糞親父を国王の座から引きずり降ろして民のために色々やんなくちゃな。それが兄さんの望みだしな。

Side Other end

僕が目覚めると、真っ白い場所に居た。

「まさか……いろんなアニメでいう根源に至ってしまったか？」

「それは違つぜ、俺。ここは俺の心象世界であり、僕の心象世界であり、私の心象世界だ。簡単に言うなら心の中みたいな感じだ」

「やあ、僕。で、なんのようだい？」

「いやあ、俺がぐだぐだと悩んでるからさ。心の中ではとっくに結論は出てるっていうのにな」

「そうなんだ。僕」

「おう。世界のことなんか考える必要はねえんだよ。仮契約のラインたどってきやいいじゃねえか」

「そうか！ そんな方法があつたね。ありがとう、僕」

「気にすんな。どうせこれは自己との対話だからな。ほらさっさと行けよ、俺」

その言葉を聞いて僕は眠りから覚めた。

「知らな……いや、知っている天井だ」

どつやらの激痛はぐちゃぐちゃと考えている間に倒れたときの痛みだったらしい。

僕が起きるとシエリアさんが近寄ってきた。

「ようやく起きたか。まったく一週間も寝るなんて何してたんだよ。お前が寝てる間に世界は随分変わっちまったぜ」

何があつたのだろう。

シエリアさんに聞いた話をまとめると、どうやらアギがクーデターを起こして駄父を国王の地位から引きずり降ろして処刑したらしい。アギは僕の願いを聞いてくれたのか。ならば僕もリンと平穩に暮らすということを実現しなければ！

リンのもとへ行く方法も分かったことだし、アニメ技の開発開始だ！

第三話・「僕の思考」(後書き)

レポートが追ってくる!!!

一週間以内には次話を投稿したいです。

第四話・「新たなる魔法」

学園都市じゃ超能力なんて珍しくもねーんだ。人間の脳なんざ静脈にエスペリン打って首に電極貼り付けて、イヤホンでリズム刻めば誰だって回線開いて『開発』できちまう。一切合財が科学で説明できちまうんじゃ誰だって認めて当然だろ？

上条当麻（とある魔術の禁書目録）

さて開発を始めよう。

まずはテイルズからにしよう。テイルズの魔法は魔法陣を使うからやりやすいかな。

しかも下級・中級術は技名だけでいいから使いやすい。上級術は詠唱いるけど、慣れれば省略出来るし。

まずは魔法陣の構成を考えよう。魔法陣の文字に引き起こす現象を入れれば出来るかな？

「よし。理論はこれでいいや。微調整は実験のあとだ。まずは初級術からやってみよう。『ファイヤーボール』！」

僕が技名を言うと、一応再現は出来たみたいだ。ただ思ったよりも威力が小さいかな。これだったら無詠唱の魔法の射手のほうが使いやすい。

初級術はあんまり使う意味ないかも。あと、どうやらティルズの魔法は精霊を通さなくても自分の魔力だけで発動出来るみたい。

「次は中級術やってみようかな。『イラプション』！」

今回は術が発だった。詠唱いらないうって事でも簡単な特徴を表す言霊言ったほうがいいかな。

「火よ！ 『イラプション』！」

うん。このほうが良いみたい。でもこれじゃあ何系統の魔法が来るか分かつちゃうしなあ。

魔法陣のほうを弄ってみようかな。現象だけじゃなくてそこに至る過程とかも加えてみよう。

「『イラプション』！」

出来た。魔法陣を弄るほうが正解だったみたいだ。

上級術は詠唱があるから中級術と同じ魔法陣で内容だけ変えれば出来るかな。

「古より伝わりし浄化の炎！ 『エンシエント・ノウア』！」

出来たのは出来た。でも威力が凄すぎて周りが大変なことに……。ま、まあ、実験に犠牲は付き物だし諦めよう。

そのあと僕は一週間かけて再現出来た術を完璧にした。但し地形が変わってしまったのでシェリアさんにたっぷり怒られた。

そして、シエリアさんに注文していたカシオペアの材料が届いた。僕は早速カシオペアの作成を始めた。ちなみに先日習得したNAR UTO式の影分身を使って修行も同時進行でしてます。

「影分身A Side」

やあ。僕は影分身Aだよ。僕はFateの魔術担当なんだ。

はつきり言って再現は無理。まあ理論は作中で書かれてはいるけど魔術回路なんて作れないし、宝石魔術は効率悪いし、投影なんて絶対無理！ 魔力を具現化なんて出来るわけないよ。影魔法で形は作れても魔力切れたら消えちゃうし。

あ、王の財宝もどきは出来たよ。影魔法使つて王の財宝みたいにゲイトオブバビロンして影の倉庫から撃ち出す感じ。

それ以外は出来ないから僕は一生懸命武器を作つてそこに魔術概念籠めて概念武装を作ることにしたんだ。それでも再現不可能なものエクスカリバーは沢山あるけどね。乖離剣エアとかわけ分かんないし。

今作ってるのは、約束された勝利の剣だよ。完全な再現は無理だけど、似たような効果を出すために魔力を込めたら光の奔流となつて原作みたいになるようにしたんだ。

さあ、頑張つてつくるぞ。

〈影分身A Side end〉

〈影分身B Side〉

やあ。僕は影分身Bだよ。僕はとある魔術の禁書目録担当なんだ。

超能力は魔法に近いから案外簡単にできたなあ。レールガンはいね。適当な電気を通す金属があれば無詠唱の雷の魔法の射手を使つて再現できるし、魔法の射手よりも威力高いし。

ベクトル変化は残念ながら無理だったよ。一応再現はしてみたけど、あれを使うくらいなら普通に避けたほうがいいね。あんな複雑な演算に頭使つてたらその他のことが全然できないよ。

そして幻想殺し^{イマジンプレイカー}。これは必要なかった。王家の魔力使つて無効化すればいいだけだし。ただ形はできたからネタ技としては使えるかも。

魔術はなんというか原作に出てるのが特殊なやつばかりでステイルのルーン魔術位しか再現できるのがなかったね。しかもテイルズのほうが使い勝手がいい。

さて、僕は自分の役目は終えたから、消えようかな。

〈影分身B Side end〉

（影分身C Side）

僕は影分身Cさ。僕の担当は呪文の暗記という地味な作業さ。

テイルズは全部覚えた。ハリーポッターも覚えた。あとなんかあったっけ？ ま、いいか。足りなかったら本体が覚えるだろう。

もうやることがなくなってしまったよ。なにしていればいいんだろ
う。

復習でもしてるか。

「天光満つる所に我はあり、黄泉の門開く所に汝あり。出でよ神の
雷！ 『インディグネーション』！」

「氷結は終焉、せめて刹那にて砕けよ！ 『インブレイスエンド』
！」

「裁きるとき来たれり、帰れ！ 虚無の彼方！ 『エクセキューシ
ョン』！」

「万象を成しえる根源たる力、太古に刻まれしその記憶、我が呼び
声に応え、今、此処に蘇れ！ 『エンシエントカタストロフィ』！」

「『エクスカリバー約束された勝利の剣』！」

「『エクスペクト・パトローナム』！」

「ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マギステル 契約に従い我に従え、炎の霸王。来れ、浄化の炎、燃え盛る大剣。ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄。罪ありし者を死の塵に！
燃える天空』！」

あ、魔力切れた。

〈影分身C Side end〉

どうやらA以外の影分身は終わったみたいだね。そろそろ僕もベツドに行かないと、フィードバックで倒れちゃうかな。カシオペアもあと少少で完成するし、あと少少でリンのところに行けそうだね。

それにしても、何か嫌な予感がするんだよなあ。何も起きなければいいけど。

「おやすみ」

く???く???

某国某所。そこにはある共通点を持った人々が集まっていた。

その共通点とは、ある男に地位を奪われたということ。

「おい、準備はできたか？」

「はい。これなら確実に……。さらにもう一つ情報が」

「話せ」

「はい。ユウ・スプリングフィールドの生存が確認されました。現在アリアドネーで秋野友と名を変え、生活しているようです」

「ふん。あいつなどどうでもいいが、生きていたとなれば邪魔な存在だ。消せ」

「かしこまりました」

敬語を使っていた男はその場を去っていった。

「あの小僧め、貴様のせいで僕はこんなことに……許さんぞ。首を洗って待っているといい……………アギ・スプリングフィールド。それに秋野友。貴様らはこのネイが殺してくれるわ」

それは、波乱の幕開け。始まりの終わり。

第四話・「新たなる魔法」(後書き)

レポートが終わらない。試験が来る！

誰か助けて！

第五話・「平和と暗躍」

この世に悪があるとすれば、それは人の心だ。そして最も恐れるもの。勝たねばならない敵、それは自分の心だ。

ダオス（ティルズオブファンタジア）

くアギ Side

まったくもって糞親父は糞だな。なんだよこれ。元老院の四分の三が賄賂で成り上がったクズどもだぜ？ よくこれで国が潰れなかったな。

これの処理のために一週間もかかっちゃまったぜ。旧世界から人員呼ばなきゃ過労死してたかもな。

「まだこんなにあんのかよ。俺そろそろ休みたいんだけど」

俺がこう言うと必ず誰かが、「ダメですよ」って言いやる。

くそつ、こうなったら兄さんの便利発明の一つ『性別詐称薬』使って抜け出すか。いや、ダメだ。飲む隙がねえ。

「そついえば三雨は自分の分終わったのか？」

俺はいつの間にか部屋にいた三雨に聞いてみた。

「終わってるに決まってるだろ。じゃねえと、こんなところでパソコンなんか出来ねえよ。大体なんでお前のはそんなにあるんだよ」

「知らねえよ。つーか知ってたら教えて欲しい位だぜ」

本当この量はありえねえって。書類で山が出来るってなんだよ。

俺は書類仕事は苦手なんだよ。こついうのは兄さんが得意なんだよなあ。

俺は……こつ魔法ぶっ放すほうが得意なんだよ。書類仕事なんてこの世から消えちまえばいいのに。

はあ。憂鬱だ。

「あ。そうだ、アギ。あいつの衣装貰ってっていいか？ あいつの作ったやつって無駄にクオリティー高いからさ、今度使いたいんだ」

「俺は何も言われてねえからいいんじゃないかねえの？ ほれ、鍵だ」

三雨はサンキュって言って部屋から出てった。

あ、話し相手いなくなっちゃった。いや、これはチャンスだ。今なら抜け出せる！

「そうと決まったらさっさと」「さっさと何処に行くんですか？ 教えて下さいよ。アギ様」……」

どうやら詰んだみたいだな。俺を見つけたのは、兄さんとリンさ

んの合作発明NO.1『アギ専用逃走防止用メイドロボ』の伊織だ。

伊織は高性能なんだがその目的が俺の逃走防止って……俺は実の兄にも書類仕事においては信用されてないのか？

「アギ様。早く仕事にお戻り下さい。まだ二山ほど残っているのですから」

「いや……そのトイレに……」嘘ですね。心拍数が上昇しています。以前嘘をついたときと同様の上昇値です……大人しく仕事します」

迫力に負けちまった。だって前に脱走したときは椅子に縛られて仕事させられたんだぜ？ 今そんな時と同じ目してたんだよ……。

その時俺の部屋がノックされた。

「アギはん。入っていいですか」

「は……入っていいぜ」

入ってきたのは俺のいとこのアカリだった。まったく、兄さんの便利発明『声真似』使ってたから、あいつが来たのかと思っちゃったぜ。

「兄貴騙されたら。ユウ兄の発明って本当に凄いね」

「お前それだけはやめろって言っただろ！ あいつは部屋に入れないと扉壊して入ってくるし、入れたら入れた「死合いやりましょう」って……まさか！」

「その ま・さ・か です」

ああ、夢なんだな。だって昨日旧世界に依頼で行ってもらったのにもうこっちに居るなんて。

「夢じゃないです。死合いたいからさっさと仕事終わらせて来てください」

ああ、終わった。兄さん俺は今日死にます。

「アギ様。早く終わらせて下さいませ。仕事がたくさん残っていますので」

伊織に見捨てられた。

「兄貴、がんばれ」

アカリにも見捨てられた。

「ん？ なんだ、またか。アギ、鍵置いとく。また来るな」

三雨にも見捨てられた。

「早く逝きましょう」

俺は命みことに引きずられて部屋を出た。っていつか立場俺のほづが上だからね！

「アギ Side end」

僕は今アリアドネーの闘技場に来ている。目的はシェリアさんとの模擬戦。僕が再現した魔法がどのくらい実戦で使えるのか試す為だ。

「おい、ボーツとしてどうしたんだ？」

「なんだかアギが皆に見捨てられて死合いをしてる気がする」

「今はどうでもいいだろ。早く始めるとしようじゃないか」

そうだった。今から僕は模擬戦をするんだった。変な電波を受信してる場合じゃない。

「私から行くよ！ レイ・ライ・クライ・ローレイ！ 『魔法の射手・連弾・闇の101矢』！」

シェリアさんは魔法の射手を使ってきた。とりあえず防いでみようかな。

「『プロテゴ』！」

僕が使ったのは、ハリーポッターの防御呪文。果して耐えられるのかな。

魔法がぶつかったとき、僕の使った『プロテゴ』はシェリアさん

の魔法の射手を防ぐことが出来た。けどそのあと粉々に砕けたから、あんまり実用性はないかな。

「次は僕からいきます。聖なる槍よ、敵を貫け！ 『ホーリーランス』！」

シエリアさん目掛けて光の槍が向かっていく。さあシエリアさんはどうするかな？

「これはきついかねえ。レイ・ライ・クライ・ローレライ！ 詠唱省略！ 『闇の吹雪』！」

シエリアさんが放った『闇の吹雪』と『ホーリーランス』がぶつかり、一瞬の拮抗ののち『ホーリーランス』が『闇の吹雪』を貫いて、シエリアさんのほうへ向かっていった。

「ヤバいつて！ ちょっと、止まれよ！ うおーい！」

シエリアさんが女性があげるとは思えない悲鳴をあげて吹き飛んでいった。

「シエリアさん大丈夫かな？」

僕はシエリアさんの心配をしているとシエリアさんの声が聞こえた。

「てめえ、ゆるさねえ。死ねやゴリア！」

シエリアさんがキレた！ これはヤバいかも。

「いくぜ！ レイ・ライ・クライ・ローレイ！ 契約により我に従え高殿の王！ 来たれ巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆！ 百重千重となつて走れよ稲妻！ 『千の雷』！！」

「天光満つる所に我はあり、黄泉の門開く所に汝あり。来たれ神の雷。『インディグネーション』！」

さあ、シエリアさんの『千の雷』と僕の『インディグネーション』どっちが強いかな。

そして……二つの魔法がぶつかった。

大きな音のあと一面に砂煙が立ち込めた。煙が晴れるとあつた筈の天井は無くなり、地面が割れ、ところどころが溶けていた。そして立っているのは僕だけだった。

「ふう。なんとか勝てたかな。テイルズの上級術は強いな。まあ、実用レベルでいいだろう。さて、シエリアさんを治療したら時間跳躍しようかな」

僕はシエリアさんに『キュア』をかけて、治療実験をしたあと自分の部屋に戻った。

シエリア Side

今日の模擬戦は最悪だよ。『闇の吹雪』は簡単に貫かれるし、『

千の雷』は撃ち負けるし。

「少し鈍ったかねえ。『千の雷』が本来の威力が出てなかったし。ま、騎士団相手に少しづつ勘を取り戻していけばいいか」

それにしても最後の魔法はやばい威力だったね。あれが直撃したら塵も残らないんじゃないか？

「ん？　なんか入って来た？」

私が部屋でくつろいでいると何者かが学園内に侵入してきた。まったく今は疲れてるんだからやめてくれよ。

私はそんなことを思いながらその場に向かった。

そしてその場にいたのは……………

血まみれのアギと命、
片腕と片足が無くなった伊織だった。

物語は加速する。
登場人物を嘲笑うかのように。

第五話・「平和と暗躍」(後書き)

小説に関係ないけど囃物語最高(^ o ^) /

感想お待ちしております。

第六話・「王宮襲撃！」（前書き）

思ったより早くできたので投稿〜

まさかのユニーク1000人越え！！

閲覧ありがとうございます。

第六話・「王宮襲撃！」

この世は、金だ。無償の愛？ そんなものそういえばあったな。

ネイ・スプリングフィールド

くシエリア Sideく

「おい！ 生きてるか！？ アギ、命、伊織！」

私が反応のあった場所に行くと、血まみれになったアギと命、伊織がいた。この出血量はヤバいな。

私は念話で医療班を呼ぶ。とりあえず状況を聞けるなら聞いとかないと、対応も何も出来ないからな。

「おい、どうしたんだよ！」

私が必死に問い掛けるとアギから返事があった。

「……………王宮が襲撃された。……………いつからか知らねーが、敷地内に……………戦略魔法陣が仕掛けてあった。あと……………グツ……………兄さんが危ねえ！ 兄さんも狙われてる……………気……………をつ……………」

アギはそれだけ言う意識を失ってしまった。ちょうど医療班が来たから、私は彼らを預けて友の部屋に向かった。

……もし私の予想通りだったらまずいな。

シエリア Side end

アギ Side

それは突然やって来た。

俺がいつものように命との死合いを別荘でやって、体力が回復してから戻ってきたことだった。

「ん？　なんか変な感じがするぜ？　命、なんだか分かるか？」

「確かになんや変な感じがしますな。これは……魔力？」

命がそう言った瞬間だった。地面が光り、魔法陣が姿を表した。

「これはヤバい！　大規模転移魔法陣だ。……来るぞー！」

そして出て来たのは、仮面をした数百の人間と同じぐらいの数の悪魔だった。

「命！！　アカリと三雨を転移魔法符で安全な所まで飛ばしてこい！」

「でもそれをしてたらアギはんが！」

命は俺の心配をしてくれるみたいだが、無用だ。どうせもうすぐ……。

「アギ様、どういたしますか？」

さすが伊織、ナイスタイミングだ。

「そういうことでしたか。では行ってきます。」

「なるべく早く帰って来い！」

俺はそう言って命を送り出した。さすがにこの量は俺と伊織だけじゃ無理だ。

「伊織！ 殲滅するぞ！ 制限解除しろ！」

「了解しました。『伊織』ノ制限ヲ解除シマス。5秒後ニ解除終了
デス。5……4……3……2……1……完了シマシタ。終わりました、マスター」

「分かった。いつものように行くぜ！！ 時間稼ぎ頼む」

伊織が時間を稼いでくれる間に、俺は準備をする。

「NO・666『擬似闇の魔法』……左腕解放固定『千の雷』・右腕解放固定『千の雷』・左脚解放固定『千の雷』・右脚解放固定『千の雷』、双腕双脚掌握！！ 術式兵装・『雷天大壮4』！！ 伊織！ 準備完了だ！ 行くぜ！」

俺は自分を雷化して敵に突っ込んでいった。

「RPG発射します！」

伊織の放ったRPGは魔法の射手で撃墜され爆発した。そしてあたり一面に煙が漂い、お互いの姿が見えなくなった。それが俺の目的だ！

「くらえ！ リア・メア・フレア・クーレイア！ 来たれ水精、土の精。混じりて降れよ豪雨！！ 『重き雨』！」

俺が使ったのは広範囲に濁った雨を降らす普通はあまり使えない術だ。だが不純物の混じった水は電気をよく通すんだぜ！

「双脚解放！ 右脚固定『千の雷』・左脚固定『千の雷』！ 術式統合！ 『万の雷』！！！」

俺は、『千の雷』の強化版、『万の雷』を使った。

「これでどうだ」

そして、視界が開けたときそこに見えたのは……………無傷の集団だった。

「ありえねえ。水に濡れたうえに『万の雷』くらってんだぞ。なんでも無傷なんだよ」

本当にありえねえ。あれを防いだっていつのか？ 一体どうやって…………いや、まさかそんな。

「試してみるか。リア・メア・フレア・クーレイア！ 雷の精霊1
001矢！ 『魔法の射手・連弾・雷の1001矢』！！」

これで見極めてみせる！

俺が撃った『魔法の射手』は敵に到達する前にかき消された。

「やっぱりか。大体分かったけど、まだどっちかわかんねえな」

セル この世界において魔法を無効化出来るモンなんて、魔法無効化能
力か造物主の掟ぐらいだからな。
マシクキャン

「とりあえずもう一発だ。リア・メア・フレア・クーレイア！ 影
の地統ぶる者、スカサハの、三十の棘もつ愛しき槍を、我が手に授
けん！ 『雷の投擲』！」

そして『雷の投擲』が相手にあたる瞬間何が見えた。

「伊織！ さつき何が見えた？」

伊織なら捉えられたはずだ。

「鍵のようなものが見えました。もしかしてあれは……」

「ああ。その予想あってるぜ。最悪だ。造物主の掟が向こうにある
なら、魔法はほとんど効かない。一応俺も旧世界の血が流れてつか
ら魔法は効くはずなんだけどなあ。やっぱり血族が向こうにいるな。
大方王位を奪った俺への復讐か、糞親父の甘い蜜を吸っていたやつ
らが解職された恨みからのことだろうな」

これで犯人はほぼ確定だな。造物主の掟は先祖が宮殿の奥深くに封印したものだし、その封印を解くには、血族の血が必要。なおかつ旧世界の血が入っている俺の魔法を無効化するには、魔法無効化能力がないとできない。

この条件を両方とも満たすのは、ネイ・スプリングフィールドただ一人。

奴は、自分が魔法無効化能力を持っているからって威張りくさって、色々な悪行に手を染めていたみたいだからな。そもそもあいつの魔法無効化能力も自分のものじゃねえし。証拠不十分で奴は処罰できなかったから監視付きで、飛ばしてやったんだがそれが今回の動機か。まあ、まだ確定ではないけどな。他にも魔法無効化能力持っているやつもいるかも知れないしな。

「とりあえず犯人は絞れた。伊織、命が合流するまで持ちこたえるぞ！」

「了解しました。マスター」

それから奴らは魔法をバカス力撃ってきやがった。俺は常時雷化してるからいいけど伊織はきつそうだな。

俺は武器使って戦うのは嫌なんだよなあ。はっきり言って武器を扱う才能が皆無だからな。

「そうは言ってもらえない、か。まあ、頑張るとしますか」

俺は兄さんから貰った指輪にしまっておいた槍を取り出して、戦

い始めた。伊織も重火器を使って戦ってる。

「ちつ。数が多すぎる!」

俺たちはどんどん疲弊していった。まだ数はほとんど減っていない。

「マスター! 後ろ!」

俺が振り向いた時には、既に刃が振り下ろされようとしていた。こんなところで死ぬるかっ!

「斬岩剣!」

その攻撃は俺に届くことはなかった。

「大丈夫ですか? 本気ださせてもらいますえ!」

「おい、命。本気出すというなら兄さんから預かった刀使えよ。ほら。妖刀『ひな』って言ったっけな」

確か兄さんから預かった時には、「本当にヤバいときに使ってくださいね」って言われたから、今が使い時だろ!

「うふふ。最高の気分や」

あれ? 命の目が白黒反対に!

「斬らせてまらいますえ〜」

とりあえず今やれることをやろう。俺が出来るのは……無い。いや、王宮内の人の安否確認をしよう！

「伊織、命。俺は王宮内に行って生存者の保護をしてくる。ここは頼んだ」

情けないが魔法が無効化される状況では俺は役立たずだ。だから俺は自分のできることをやる！

第六話・「王宮襲撃！」（後書き）

中途半端なところで切れてますが、続きはなるべく早く投稿したいです。

感想があると作者のやる気がアップします。感想よろしくお願いします。

第七話・「撤退と憤怒」(前書き)

連続投稿)。。

第七話・「撤退と憤怒」

最も尊いものは、楽しい日常。最も忌むべきものは、必要のない争い。

ユウ・スプリングフィールド

くアギ Side

俺は王宮内に入って、生存者を探しはじめた。

「誰かいないのか？ いたら返事しろ！」

俺は声をかけてみるが返事は無かった。でも諦めたりはしねえ。

俺は、奥にある広間に向かった。しかしそこには死体しか無かった。

「くそ。ここは全滅かよ」

俺は更に奥へと向かった。そしてそこにいたのは、悪魔の集団だった。

「チッ。なんでこんなに居るんだよ！」

ヤベーな。一人でこの量のはつきり言って無理だ。守りに入った

らやられるな。攻め続けるしかねえ！

「NO.7『指輪の魔法』発動！ 『闇の吹雪』！」

兄さんから貰っていた指輪に予め籠めておいた魔法を使ったがあんまり減ってねえ。この指輪は使い捨てだからな。だが、鍵持ちはいねえみたいだな。

「まだストックはもつ。なら戦闘続行だ！ 次！ 『燃える天空』」

次は『燃える天空』を使った。これなら結構逝ったかな？

「チツ。あんまり減ってねえ。一応今の燃える天空に気付いて援軍来てくれりゃいいんだけどな」

まあ、援軍なんて来ないだろうけどな。今軍の大半は各地で起こっている暴動の鎮圧に行ってるからな。

「暴動もあいつが起こしたのか？ うわーやりそうだな」

残ってた兵士もさっきの大広間で死んでたってことは、今居るのは、俺、伊織、命の三人か？ だったら王宮棄てて逃げたほうがいいんじゃない？

「よし。方針決定。じゃあまずは目「やらせると思うかね？」グッ」

俺が詠唱しようとしたら後ろからの攻撃をくらった。ヤバいなこいつ伯爵とかより位高い気がするぜ。

「この数相手に一人で戦ったことは立派だ。お礼に私の名を教えてくださいあげよう。私の名は、サタンという。一応魔界の王をしている」

「は？ サタン？ これ逃げるの無理だろ！ っていうかなんでこんな人が来てんだよ！」

「ふむ。もつともな疑問だな。なに、簡単なことだよ。さすがの私といえども数百人の生贄があれば呼び出されもするさ」

「っ！ 心を読んだ！？」

「驚くところはそこじゃないと思うがね。ちなみに途中から声に出していたよ」

「……数百人だと？ あいつはそんなことしやがったのか。」

「さて、君との話はこれで終わりだ。存分に殺し合おうではないか」
「どうする？ このままじゃ一方的にやられて終わっちゃう。どうにかして伊織たちと合流しないと。」

その時だった。俺がいた所まで、伊織と命が飛んできた。

「おい！ どうした！」

二人は血まみれだった。伊織にいたっては片腕片足が無かった。

「マスター、すみません。敵の中に、位の高い悪魔がいたようです」

「アギはん、すんません。これでも、ひなの力使って威力減らした

んです。ついでにもう戦えそうにありません」

一応生きてるみたいだな。俺はそれに安心してしまっただ。

「戦場で気を抜くとは、愚かな」

俺が気付いたときには、三人とも吹き飛ばされていた。

「ガハツ……これはヤバいな。いや今なら……！」

俺はサタンとの距離が離れたこの時に、転移魔法符を使ってその場から離脱した。その直前サタンは「次はユウ・スプリングフィールドか」と言っていたのを俺は聞いた。

アリアドナーに着いたときにはほとんど意識は無かった。その場にいたシェリアに兄さんが危ないということを伝え、俺は意識を手放した。

「アギ Side end」

僕はシェリアさんとの模擬戦を終えて部屋に戻ってから、別荘に行つて、影分身同士で戦わせ、自分はカシオペアを調整していた。

「よし。これで仮契約のラインを辿って同じ世界に行ける」

僕がカシオペアの調整を終えたころ、影分身によるトーナメントは終わっていた。

「さて、フィードバックに備えて寝ますか」

僕はその時外がどんな状況なのか、知ることはなかった。

そして、起きたときの惨状も。

シエリア Side

私はアギから話を聞いてからユウの部屋に向かった。その間私はいろいろと思索した。

アギは元々の膨大な魔力量に加え、友から貰った『魔法の指輪』を使うことで魔法戦においては最強といってもいい。

例え魔法が使えなくても、武器は苦手みたいだが、体術はある程度使えるし、伊織と命が居れば接近戦でも負けないはずだ。

ということは、予想外が起きたか、圧倒的な強さを誇る敵が居たということか。一応アリアドネーに来るかも知れないから準備しておくか。

「沙映聞こえてるか？ なら今から言うことをやっつけ。まず第一

に教授たちと生徒たちを避難させる。理由は適当に付けとけ。第二に貴重な魔法書を緊急時保管場所に移動させる。第三に騎士団の中でもAランク以下の奴は避難を助け、戦闘になった場合はその場を守れ。Aランク以上は小隊で戦闘に加われ。最後に、アギ、伊織、命をゲートを開いて旧世界の麻帆良に送れ。それで沙映は三人に着いて行って、学園長に三人を治療してもらえ。分かったか？」

「了解したです」

沙映から了解の返事を得たので私は友の部屋へと急いだ。

友の部屋に着くと私は、ノックもなしに部屋に入った。すると友の姿はなく、別荘が置いてあった。

「あいつ別荘に居るのか。確かあいつの別荘の設定は中での一週間が二時間だっけか」

私との模擬戦が終わってから、三十分くらいだから、あと一時間半か。もし敵が来たら間に合わねえかも。

三十分が経った。そこで沙映から念話があった。

「こちら沙映です。避難は完了しました。あとは私達が旧世界に行くだけです。あ……アギ様、無理をしてはいけません」

「シエリア聞こえてっか？ いいか、兄さんの一人称が『俺』になったら恥も外聞も無しに防御に徹しろ！ なんなら逃げてもいい。詳しく話してる時間はねえからそれだけ覚えてろ」

「分かった。沙映、そっちは頼んだ」

「了解したです。総長」

これで一つ心配事が減ったか。このまま攻めて来なけりやいいんだが。

もうそろそろ友が別荘から出る時間だな。どうやって話すかねえ。

シエリア Side end

僕が別荘から出て来ると、そこにはシエリアさんがいた。

「どうしたんですか？ シエリアさんが僕の部屋に来るなんて珍しいですね」

なんかまたやらかしたかなあ？

それになんか空気が変な感じがするなあ。

「友、落ち着いて聞いてくれよ。二時間程前王宮が襲撃された」

は？ 王宮が襲撃？ どういうことだ？

「それによって、伊織が半壊、アギと命が重傷を負った。そしてアギが言うにはお前も狙われてるらしい。だから避難の準備を……」

シェリアさんの声は途中からまったく聞こえなくなった。

伊織が半壊？ アギが重傷？ 命が重傷？ ふざけるな。

相手は誰だ？ この空気はなんだ？ 相手が来たのか？

「……聞いているか、友」

もうシェリアさんの声はただの音に成り下がった。

「シェリア。相手は誰だ？」

「いや、まだ分かんない」

「そうか。まあいいか。これから『俺』を襲撃してくる奴が敵だ」

『俺』がそう言つとシェリアは黙ってしまった。

「俺の家族・仲間に出した奴は皆殺した。塵一つ残さず消し飛ばしてやる。早く来いよお。コロシテヤルカラ」

＼シェリア Side＼

私が友に話し出すと、どんどん雰囲気やバくなってきた。

「……伊織が半壊、アギと命が重傷を負った。そしてアギが言うにはお前も狙われてるらしい。だから避難の準備を……」

私がそう言ったとき、友に変化が起こった。秋野友の姿からユウ・スプリングフィールドの姿に戻った。

そして口を開いた時には、一人称が『俺』になっていた。そして同時に濃密な死の気配が立ち込めた。魔力量もおかしい。今までとは比べものにならないくらい増えている。

私はここに至ってようやくアギの言った意味に気付いた。これはヤバすぎる。

「俺の家族・仲間に出した奴は皆殺しだ。塵一つ残さず消し飛ばしてやる。早く来いよお。コロシテヤルカラ」

私の本能が言ってる。「同じ場に居てはいけない。逃げろ」と。

逃げよう。

そして私は恥も外聞も無く逃げ出した。

＼シエリア Side end＼

第七話・「撤退と憤怒」(後書き)

テストが迫ってます。はっきり言ってヤバいです。更新ストップの危機です！

感想お待ちしております。

第八話・「麻帆良の戦い。そして旅立ち」(前書き)

友「作者よ。テストやレポートがあるのに更新なんかしていて大丈夫か？」

作者「大丈夫じゃない。大問題だ」

第八話・「麻帆良の戦い。そして旅立ち」

殺して解して並べて揃えて晒してやんよ

零崎人識（戯言シリーズ）

俺は待っているのが面倒臭くなり、出迎えに行く事にした。

「早く来いよ。さっさと殺してやっから」

まだ奴らは来ない。

「あ？ 人の気配があるな。一応結界貼っとくか。関係ない奴にちよっかい出されんのは嫌だしな」

俺は、俺が居なくなると解除されない結界を貼った。

「これで邪魔者はいない。まあ、攻撃を防ぐ結界じゃないからそこはなんとかしてくれよ」

そうこうしている間に、奴らが来た。

さあ、虐殺の始まりだ。

「アギ Side」

「知らな……いや知ってる天井だ」

俺が目覚めると旧世界の麻帆良にいた。横を見ると、命がいた。

「とりあえずは皆助かったのか。あとは兄さんか」

兄さん今頃ブチ切れモードだろうな。あれははっきり言って、魔カブーストに近い現象だから時間制限あるからな。大丈夫ならいいけど。

「あら、アギ様の目が覚めましたえ」

今の声は木乃実さんか？　じゃあ俺達の傷を治してくれたのは彼女か。お礼言わなきゃな。

「木乃実さん。ありがとうございます」

俺がお礼を言うとはほぼ同時にアカリが部屋に入って来た。

「兄貴！　大丈夫か？　一体何があったんだよ」

アカリが問い詰めてきたが、俺は言うのかどうか迷っていた。

話したらアカリは、どうにかなっちまう。前の時にもギリギリだったんだ。今度はもたないかも知れねえ。

「まあまあアカリはん。目が覚めたばっかしなんやから。もうしばらく休ませてあげなはれ」

木乃実さんの言う事を聞いて、アカリは黙って部屋から出ていった。

「伊織はんは今大学のほうにいますえ」

「木乃実さん、またありがとうございます。では木乃実さんには話しておきましょう。一体何があったのかを」

俺は木乃実さんに一切を包み隠さずに話した。血族が犯人の可能性が高いこと、魔王サタンのことなども話した。

「俺達がここに来たから、奴らもここに来る可能性があります。ですから、避難の準備をお願いします。俺達が動ければ、俺達が出てけばいいんですが」

木乃実さんは話しを真剣に聞いてくれた。彼女はすぐにどこかに電話をして、避難準備を始めてくれた。

「今、避難準備をしますえ。どうするんどす？ 来た場合ここで戦うんどすか？」

確かに麻帆良は戦場になっちまうだろうな。

「すみません。奴らが来たらここで迎え撃つしかないと思います。なので、ランクAA以上の魔法使いを集めて貰えると助かります」

本当は他人を巻き込みたくねえんだが、あの量の悪魔が来たらそ

うは言ってられなくなっちまうからな。

「わかりましたえ。ほな、エヴァはんにも来てもらいますか」

ハイデライト・ウオーカー
真祖の吸血鬼が居れば、なんとかなるか？

「まだエヴァさんは麻帆良に居たんですか？」

これは疑問だ。登校地獄の呪いは、もう解けてるからどっか行っちまっつてんのかと思っただけだな。

「エヴァはんは今京都のうちの実家いるはずや」

そついやエヴァさんは西洋の吸血鬼なのに日本被れだっつけ。

「でも来るんですか？」

いくら長い間居た土地とはいえ、自分とは全く関係ないことだし。彼女が京都の誘惑から離れられんのかなあ。欲に良い意味で忠実だし。

「大丈夫や。最高級の和菓子を後であげれば大丈夫や。それその口調気味悪いんで止めてもらえまへんか？」

エヴァさ〜ん！！ 胃袋つかまれていますよ〜！

「はあ。じゃあ口調戻すぜ。そつちの戦力はどんくらいだ？ 俺達は回復し次第参加するぜ」

伊織は今大学の研究室で直してもらってるから大丈夫だろうな。

命はどうせ戦いが始まったら起きて戦うだろうし。

「うちらからは、うちとエヴァはん、刹華はん、あと神鳴流で何人かしか居ませんえ」

木乃実さんは申し訳なさそうに言ったが、俺達が三人だったから十分に聞こえる。これでも少ないとは思うけどな。

「まあなんとかするしかないでしょう。じゃあ次のこ「アギ」生きてつか?」……シエリアか。おいシエリア。どうしてこっちに居るんだ? まあ大体予想は出来るけどな」

大方兄さんが『俺』って言いはじめたから逃げて来たんだだろうな。

「いやー、あれは無理。あの場に居たら死ぬわ」

だろうな。あの圧力は耐えらんねえよ。

「つーか後ろにいんの誰?」

気になってたんだよな。木乃実さんも気になってたみたいだし。

「ああこいつはゲートで拾ったんだよ。確か……琴美って言ったっけか」

「あ、そうだ、アギ様。向ここの情報ありますけど聞きますか?」

こいつ情報屋か。

「聞こうか。一体何が起きてたんだ? 俺も全部知ってる訳じゃな

いからな」

「うん。まずヘラス帝国周辺の街がいくつか消えた。多分今回の悪魔召喚の生贄にでも使ったんじゃないかな。ちなみに亜人以外は生きてるみたい」

あの糞野郎本当にム力つく奴だな。あいつのことだ。亜人は人間じゃないからいいってことかよ。

「次は、詳しくはわかんなかったけど、アリアドネーに入れなくなってる。シェリアさんに聞いてみたらユウ様がやったみたいなこと言ってたね」

ああ、兄さんの特殊結界か。

「最後にこれが一番ヤバいのかな。魔法世界全体で魔力消失現象が起きてる。魔法が使えなくなってきたから、最終的に魔法世界が無くなっちゃうかも知れないよ」

それはマジでヤバいな。ん？

「なんでお前魔法世界が無くなるって知ってるんだ？ 一応最重要機密なんだけど？」

いくら情報屋とはいえそれを知ってる訳ないんだけどな。

「あーそっか。普通は知らないのか。えっと、私の先祖は白き翼の朝倉和美だから、そういうの伝わってるんだよね。ちなみに普段は伏せられてるミドルネームのことも知ってるよ」

なら納得だな。ミドルネームのこと知ってるのは白き翼のメンバーの子孫だけだからな。

「じゃあ魔法世界はどうなってきた？ 百年前と同じようなことになってんのか？」

もし百年前と同じなら今度こそ魔法世界は終わりだな。そんなと同じ方法は俺には使えねえからな。

今ですら人の住める土地がほとんどねえのに、次は住めなくなっちゃう。

「うーん。まだそこには至ってないと思うよ。でも時間が経ったら分かんない」

ちっ。今の俺にはどうしようもねえ。

そんな時だった。

「アギはん！ 奴らが来ましたえ」

どうやら最悪の予想が当たっちゃったようだな。

くアギ Side ends

俺がアリアドネーの敷地を歩いてると地面に書かれてあった魔法陣が光りだした。

「ようやく来やがったか。さあ虐殺の始まりだ」

出て来たのは数百はいるであろう悪魔の群れだけ。

「見ツケタゼ。アイツガユウダ！ 殺セ！」

下級の悪魔がなんか言ってるが、あんな奴相手にするだけ無駄だ。

「邪魔だ。『フォトン』」

五月蠅い。雑魚のくせに喋りやがって。

「見ツケタゼ。アイツガユウダ！ 殺セ！」

またか。いい加減五月蠅いんだよ！！

「出でよ、創世の輝き。『ビックバン』」

これで雑魚は消えたか。

「あとは貴様等だけだ。さっさと死ね」

俺のビックバンに耐えられたのは三人だった。

ん？ なんか見覚えがあるな。

「意気がるなよ小僧。俺は七大罪の一人ベルゼブブ。小僧ごときに

は負けんわ」

「全く、ベルゼブブは意気込みすぎよ。そんなんじゃ足元掬われるわよ。あ、私はレヴィアタン。レヴィって呼んでね」

「はあ。二人とも久しぶりに友人と戦えるからといってはしゃぎすぎだ。名前なぞ知っているのに何故自己紹介なんてしたんだ？」

「いやーなんかしなきゃいけない気がして。っていうかなんでそんなやる気無いのよ」

「忘れたのか？ 私は怠惰のベルフェゴールだぞ？ 基本的にやる気など無い」

「はあ。残ったのってこいつらかよ。はっきり言おう。面倒臭い。まあおかげで頭が冷えたからいいか。」

「で？ 出来れば首謀者教えてくれると嬉しいんだけど」

「一応聞いてみるか。多分、「戦って勝ったら」とか言われるんだろっつな。」

「うん。いいよ。だってあいつ私のこといやらしい目で見るんだもん」

「いいんだ。誰だか知らんけど、レヴィに向かっていやらしい目とは。命知らずな奴だな。」

「確かネイ・スプリングフィールドって言ってたっけ？」

あいつか。惨殺決定だな。リンが言わなかったから聞かなかったが、あいつはリンを奴隷にしようと、拉致しかけやがったからな。

ちなみにこの時確か公的な証拠がなくて、処罰されなかったんだよな。まあ家が不審火で全焼したかな。

「で、何処に居るんだ？」

「あー、あいつは旧世界に向かった。サタン連れてな」

ちつ。今から行っても最低一時間はかかるな。なら早く行くか。

「ありがとな。じゃあ俺は行くから。あ、この魔法止めといて」

早速その場から行こうとするとベルゼブブに止められた。

「儂が送ろう。魔界を通ればすぐに行ける。儂は蠅の王。旧世界で儂が蠅を集めて身体を構成したら魔界から召喚してやる」

確かにそれならすぐに行ける。

「じゃあ頼んだ。っていうかあの屑に召喚されたのに勝手に帰っていいのか？」

一応召喚者には従うはずなんだけどな。

「心配するな。儂があ奴ごときに御されるはずがなかるう。それに小僧は、儂たちの盟友にして契約関係にある。あとから呼び出したあ奴よりも小僧の命令のほうが優先じゃ」

そう言つとベルゼブブは魔界に還つていった。すぐに俺も魔界へと呼ばれた。

「魔界に来るのは久しぶりだな。まあ今はそんなこと言ってる暇は無いか」

またすぐにベルゼブブから念話があつて、俺は麻帆良に召喚された。さて、ネイを殺すか。

くアギ Side)

考えてた中で、最悪なのが当たつちまった。まだ伊織は直つてねえし、命はまだ起きねえ。俺だって、体調が完璧とは言えねえ。エヴァさんもまだ来てない。

「木乃実さん、エヴァさんはあとどれくらいで来る？」

「それなら、もう準備してらつていう連絡が来ましたえ」

なら、少しの間耐えればなんとかなるか？

「よし。俺も出る。この際指輪もケチらねえ」

残りの指輪は、『燃える天空』が一個、『千の雷』が二個、『闇の吹雪』が五個、『雷の投擲』が五個か。まあもつたる。

「なら手伝ってもらいますえ。エヴァはんが来るまで頑張りや」

「じゃあやりますか」

今の俺に出来ることは遠距離からの援護しかねえな。

「刹華っていったっけ？ 一応魔法で援護すつけど、鍵みたいなモン持ってる奴いたら魔法効かねえから出来れば鍵壊してほしいな」

「わかりました。お任せ下さい」

刹華は神鳴流剣士だからな。命と組んでる時と同じ感じでいけるだろ。

「さあ、行くぜ。指輪解放、『千の雷』!!」

とりあえず、奴らが固まってる場所に撃ち込んでみたがやっぱり消されてしまった。

「刹華！ やっぱり鍵持ちが居るぞ！ 頼んだ」

そう言つと刹華は鍵持ちのところへ行き、鍵を壊してくれた。

「よし。次行くぜ！ 多分あと二、三本しかねえから、俺が魔法撃つたら鍵使ってる奴見つけて破壊してくれ」

刹華は神鳴流の中でもかなり強い方みたいだな。普通の剣士なら鍵は破壊出来ないからな。

「リア・メア・フレア・クレーリア！ 『雷の射手・連弾・雷の1

01矢』！」

俺はわざと広範囲に魔法を撃った。これで無効化される場所が分かるはずだ。

そして、見つけた。上空に2カ所、地上に1カ所。

「刹華！ 上空に2カ所、地上に1カ所だ！ 上空は頼んだ」

刹華は、白い羽を出すと、一目散にその場へと向かった。

「さて、地上は……命、頼めるか？」

俺はいつの間にか戦いに参戦していた命に問い掛けた。

「分かったえ。えい」

命は気の抜ける掛け声とともに瞬動をして、鍵を破壊した。同じころ、刹華も鍵を破壊し終えた。

「よし、これで俺の魔法も効くぜ！ 指輪解放！ 『雷の投擲』！」

俺が魔法を放つと、今度は無効化されることなく、相手へと当たった。

「まだまだ行くぜ！ リア・メア・フレア・クレーリア！ 来たれ雷精、光の精。光を纏いて流れる、浄化の雷。『光の奔流』！！」

『光の奔流』は、『雷の暴風』と同じレベルの魔法だ。これであると半分くらいか？

「アギはん、余裕があつたらこつちに来てもらえまへんか。サタンは強すぎますえ」

そうか、サタンがまだ残っていやがつたか。

俺が木乃実さんのところに行こうとした瞬間、半端じゃない轟音が響き渡って、残っていた悪魔や召喚主たちを蒸発させた。

俺が知っている中で、このバカげた現象を起こすことができるのは、兄さんしかない！

俺が、魔法が放たれた場所を見ると、ユウ・スプリングフィールドとしての姿で、兄さんが立っていた。

「アギ Side end」

俺がベルゼブブの召喚で麻帆良についた時には、どうやら鍵の破壊は終わっていたらしい。なにせアギの魔法が普通に効いていたからな。

「さて、まだ半分ほど残っているようだし、派手なのやるか。天光満つる所に我はあり、黄泉の門開く所に汝あり。出でよ神の雷！

『インディグネイション』……」

これで雑魚掃除は終わりだな。あとは、サタンに会って命令を止めさせて、ネイを殺すだけだな。

そんなことを考えている間にアギがこっちにやってきた。

「兄さん、魔力は大丈夫か？」

ああ、俺が暴走状態に入ったのを聞いたのか。

「大丈夫だ。すぐに頭が冷えてブースト状態を解除したからな。それよりも怪我はいいのか？」

確かアギも重傷だった気がするんだが。

「ああ、木乃実さんが直してくれたんだ。命は、無理して戦ってたみたいだから、さっきの轟音で倒れちゃったけど、伊織が回収してっから大丈夫だろ」

む、口調がかぶっているな。ならば変えるとしてよう。

「さて、アギがこれから何をするのかは知りませんが、僕はネイを探し出して殺しに行きます。ついでにサタンにもO H A N A S Iしておきますから、そちらは心配しなくてもいいですよ」

まったく。サタンは何に釣られたんでしょうか。

「分かった。じゃあ俺は木乃実さんと一緒に負傷者の治療でもするよ」

さて、場所はもう分かっています。行きましようかね。

僕が来たのは、世界樹の広場です。そこにはサタンがいました。

「サタン、いったい何で釣られたんですか？」

僕はそれはもうにこやかに問い掛けました。はて、なんでサタンは震えてるんでしょうかね。

「わ……私は……すみませんでした」

理由はまあ言わなくてもわかってるんですけどね。

「じゃあ、そんな理由でこんなことをすることが無いように、少し
O H A N A S I I しましょうか」

その後サタンの悲鳴が学園中に響いたとか。

さて、今回の僕の目標、ネイの隠れ家にやってきました。

「さて、殺しますか」

僕は周りに脱出不可、転移不可の結界を張り、ドアを蹴破って入りました。

「ネイ・スプリングフィールド、今回の事件の首謀者として貴様を殺す。だから……さつさと死んでくれるなよ？ 貴様にはたっぷり苦しんでから死んでもらうんだからな」

『俺』がそう言うと、奴は命乞いを始めた。

「何でもする。だから助けてくれ。お願いだ」

ウザい。

「いいだろう。何でもすると言ったな？」

俺はわざと優しい声で言った。

「ああ、何でもする。だから」

この屑は、自己保身しか頭にないのか？

「じゃあ……………死んでもらおうか」

何でもすると言ったんだ。それには当然死ぬことも含まれている。

「な……………何故だ！ 何でもすると言っただろう！」

何こいつ切れてんだ？

「そうだな。何でもすると確かにお前は口にした。当然その『何で

も』には死ぬことも含まれているよな？ だからお前はここで死ぬんだよ」

「ひ……止める！ 近づくな！ ……サ……サタンはどこだ！ 僕を助ける！」

「サタンはもう居ないよ。既に魔界へと還った」

いい加減この雑音が五月蠅いな。こんな奴のために自分の手を汚したくないな。

「もういいよ。だから……さっさと死ぬ。集え暗き炎よ、宴の客を戦慄の歌で迎え、もて成せ。『ブラッディハウリング』」

これで終わりが。

さて、アギに伝えること言ったらリンのもとへ行きますかね。

「アギ、こっちは終わったよ」

僕は事後報告をするためにアギのもとへと行った。

「そうか。で、兄さん。一つ聞きたいんだが、魔力消失現象を止めるにはどうしたらいい？」

ああ、そのことか。

「そのことなら心配しなくてもいいよ。僕がこっちに来る前に彼らに術式の再封印を頼んできたから、被害はほとんど出てないと思うよ。まあしばらくは要観察だと思っけど」

まあ、他にもやり方はあったんだけど時間がなかったからね。この方法は白き翼がやったことと同じものだからすぐ出来るんだよ。

「じゃあ、こっちのことはアギに任せるよ。頼んだね」

さて、時間跳躍の準備をするか。

「兄さん、アカリには会わないのか？」

「彼女の中では僕はもう死んだ人なんだよ。それに、アカリには秋野友としての僕から沢山贈り物をしておいたさ。今会っても次会うことはほとんどできないんだから、いいんだよ」

僕としてもアカリに会えないのは少し残念だけど、これ以上アカリに失う怖さを味わってほしくないからね。

「さて、アギと話してるうちに準備ができたよ。さて、シエリアさん、あんまり騎士団を苛めないで下さいね。木乃実さん、今回はありがとうございました。命、その『ひな』はあなたにあげます。でもあんまりアギと死合わないでね。可哀想だから。伊織、アギの監視よろしくね。最後にアギ、魔法世界を頼んだ。じゃあ、行ってきます」

僕はそう言って旅立っていった。

〈第一部・完〉

〈お・ま・け〉

「木乃実。来てやったぞ。敵はどこだ？」

「あ、エヴァはん。来るのが遅すぎてもう敵なんていませんえ」

「な……なんだって……」

「だから、活躍はなしということで和菓子も無しや」

「く………つわあああああああん」

「あ、エヴァはんがどっかに行っけしもうた」

「まあ、迷子になることはないからいいだろ」

「そうですね。ほな、アギはんもまだ怪我人なんどすから、保健室
行きますえ」

その日、麻帆良には、泣きながら大通りを走り抜ける金髪幼女の姿があった。

第八話・「麻帆良の戦い。そして旅立ち」(後書き)

これにて第一部・完です。

主人公設定とかオリキャラ設定とか載せたほうがいいのか？

載せてほしい方はコメントお願いします。

ついでに感想も書いてくれると作者は狂喜乱舞します。

第九話・「二人組とぬらりひよんとの邂逅」(前書き)

アクセス10000、ユニーク2000突破！

読んでくれてありがとうございます。

第九話・「二人組とぬらりひよんとの邂逅」

私の名前はリン。あなたはなんで私を助けてくれたの？
リン

（リン Side）

「9月」

私は無事に時間跳躍を終え、麻帆良中の一年生として生活している。

名前もリンから超鈴音に変えて、超包子を経営している。今のところ経営は順調だ。

計画も支障なく進んでいる。

「1月」

学園に目を付けられてしまった。どうやらロボットを見られたらしい。

まあ、奥の手は見られていないから大丈夫だろう。

超包子は大人気だ。このまま行けば億万長者も夢では……いやそのためにやっているのではない！

「3月」

楽しかった一年間も終わってしまった。来年からは忙しくなりそうだ。

ちなみに今年はずっと全教科満点だった。

「4月」

そういえばクラス替えは無いんだった。すっかり忘れていた。でもこのクラスは楽しいから何の苦もない。

さあ準備しなければ。

「12月」

さあ、あと一月でご先祖様がやって来る。一体どんな人なのか。

書物は美化されているから本人を見ないと、分からないこともあるだろうし。

くリン改め超 Side endく

僕は無事に時間跳躍が出来たらしい。

らしい、というのは、今日の前で鬼と桜崎刹那らしき人物が戦っていたからだ。

僕が姿を現してから、鬼も桜崎さんも一旦戦うのを止めて僕の方を見ている。

「あなたは誰ですか？」

うん。いきなり切り掛かって来なくて助かったよ。

「僕は秋野友といいます。えっとここは何処ですか？ 魔法で失敗しちゃって。あとどついう状況ですか？」

とりあえず誤魔化すことにした。敵ではないことを示さないと、撃ち抜かれそうで怖いんです。

「えーとここは麻帆良学園で今は、その鬼と戦闘中でした」

桜崎さんは律儀に答えてくれた。あ、鬼が空気になってる。

「刹那。まずは鬼だ」

やっぱり桜崎さんと合ってた。じゃあこの人は龍宮さんかな。っていかいつの間に僕の隣に？

「あ……ああそつだな。じゃあ龍宮はこいつを見張っていてくれ」
まだ僕は怪しい人扱いか。まあしょうがないか。

「任せておけ」

はあ。しばらく暇かな。龍宮さんと話でもしてるかな。

「龍宮さんでいいのかな？ 聞きたいんだけど、今何年生？」

この答えによって時間跳躍の成否が判明する。ちょっとだけ聞くのが怖いのは秘密だ。

「確かに私は龍宮だが。ちなみに中学二年生だ」

うん。成功したみたいだ。じゃあもう一つ。

「今つて何月？」

あ、龍宮さんが変な目で僕を見てる。やっぱり自分で確かめればよかったかな？

「あー、僕実はずっと研究所に籠ってたんで」

ちょっと言い訳追加。

「今日は12月28日だよ。一体何の研究をしてたんだい？ ちょっと興味が湧いてね」

なら三学期が始まる前か。ちょうどいい時期に来れたみたいだな。

「うん。僕の研究は始動キーや詠唱を必要としない魔法の開発だよ」
別に嘘は言っていない。実際に使えるんだから。

「それは凄いな。出来たのか？」

「ここらでまた嘘を混ぜておこうかな。上手く理由付けて麻帆良に転入させてもらおう。」

「出来たんですけど……それが運悪く目を付けられてしまって、逃げるために転移魔法使ったらここに出ちゃって。だから出来れば保護してもらえればなーとか思っています」

「龍宮さんがどう判断するか。まあ、僕の交渉術はリンから満点をもたらったから大丈夫かな。」

「そうだったのか。私が学園長に掛け合ってみようか？」

「出来ればお願いします」

「あ、また鬼がこつちに来てる。」

「じゃあ龍宮さんにお礼として研究の成果をお見せしますよ。ちょうど鬼がこつちに来ましたしね」

「なんか一つ目の鬼が向かって来ました。」

「この術でいいかな。『フォトン』」

『フォトン』は鬼をいともかんたんに消し去った。

「凄いな、その魔法は。確かに目を付けられるな」

やっぱり魔法を使う人からしたらこの術は異端かな。

「あ、龍宮さん。このことは秘密で」

さすがにバラされたらまずいからね。

「わかった。お、帰ってきたか刹那」

桜崎さんも鬼退治を終えて戻って来たみたいだ。

「龍宮、こいつをどうする？ 私としてはとりあえず学園長に相談するべきだと思うのだが」

「ああ。そうするべきだろう。私は少し話したが悪い奴には思えなかった」

どうやら僕は学園長のところに行くということまで話は纏まりそうみたい。

さあ、ぬらりひよんの対面だ。

「秋野。学園長に会わせるがいいか？」

龍宮さんが聞いてきたが、もちろんいいに決まっている。

「はい。お願いします」

「龍宮、こんな時間だが大丈夫なのか？」

「ああ、大丈夫だよ。さつき連絡を取ったらぜひ連れてきてくれと」

「おや？ てつきり明日になると思ってたのに。まあ早いほうがいいか。」

「じゃあ、行こうか」

僕は二人に連れられて学園長室へと向かった。

そして今、僕は学園長がくえんちやうの前に座っている。

「君の名前は何と言ったかのう」

学園長は名前を聞いてきた。ふふ、いい度胸をしてるじゃないか。読心術を掛けながらとは。

「あ、はい。僕は秋野友といいます。ちなみに14歳です」

さりげなく年齢を言って少しずつ学園に転入するための条件を学園長に提示していく。

「ふむ。ではなぜあそこにいたのじゃ？ 君は外部の人間じゃと思

うのじゃが」

いくらやったって無駄ですよ。僕に読心術は効きませんから。

「魔法に失敗して飛ばされた先があそこでした」

これも微妙に嘘ではない。確かに魔法の術式であの場に現れたんだから。

「そうか。それとあと二つほど聞きたいことがあるのじゃが」

あれ？ 読心術止めちゃったんだ。今度は口で聞き出す気かな？

「ええ。構いませんよ。その代わり僕の希望も聞いていただきたいのですが。ああ、僕の希望はこの学園に転入させて欲しいというものです」

僕の希望を先に言うておくことにしました。これならこの後の話を聞いた後でメリットデメリットの判断がしやすいでしょうからね。

「考えておこうかの。ではまず第一に、君はいつたい何者なんじゃ？ 旧世界・魔法世界に戸籍がないのじゃが。第二に、何の魔法を失敗したんじゃ？ 転移系統というのは分かったんじゃが、まったく理解できん構造だったのにな」

ふむ。もう戸籍のことを調べたんですか。さすがですね。

「戸籍の件に関しては、あんまり言いたくないんですけど、まあ疑われるよりはマシなので言います。僕は親に捨てられ、戸籍まで抹消されたんですよ。だから名前も自分でつけました。前の名前はも

う覚えてません。失敗した魔法は転移魔法ですよ。ただ、僕が術式を弄ったので少し難しくなりましたけどね。転移魔法は魔力の消費が大きいので、それを減らすためにいろいろな術式を加えたり変化させたりしていたらあんなのになっちゃいました」

嘘だらけですけど、まあ現実にあってもおかしくない程度の話だから信じてもらえますかね？

「そういうことじゃったのか。ならよいじゃろう。三学期から転入という形にしておこうかの。ああ、君は魔法を使えるのじゃったな。できれば夜の警備もやってもらいたいんじゃないが」

どうやらメリットのほうが大きかったみたいかな。警備くらいは許容範囲かな。

「いいですよ。僕はどのクラスに入るんですか？」

これは結構重要。多分2 - Aになると思っただね。

「ふむ。2 - Aじゃな。あそこはほかのクラスと違って人数が少ないからの」

「分かりました。ではよろしくお願いします」

僕が部屋を出ていくときに学園長は、部屋の準備ができるまでは龍宮さんと桜崎さんのところに泊めてもらいなさいって言ってたからお願いして、僕は彼女たちの部屋に泊まることになった。

〈学園長 Side〉

龍宮君から連絡があつてから、わしは彼女について調べた。結果は何もわからないということじゃった。

彼女が部屋に来てからわしはずっと読心術をかけておつたが何かに消され続けるような感覚があり全く効いておらんかった。

そのようなことが出来るのをわしは一つしか知らない。魔法無効化能力じゃ。ならば彼女は明日菜君の血筋の者なのじゃろうか。

その後もわしは彼女の話を読み、そして考えた。

彼女がもし魔法無効化能力を持っているのなら、ネギ君のパートナー候補としてもいいのではないじゃろうか。それに彼女は魔法を知つておる。ならばネギ君のサポート役としても適任じゃろう。

魔法を弄るなどということは普通は出来んものじゃ。彼女ならネギ君の力をさらに伸ばすことができるじゃろう。

今しばらくは監視もしなければいかんかのう。敵意はないようじやが、正体不明なんでのう。

〈学園長 Side end〉

第九話・「二人組とぬらりひよんとの邂逅」(後書き)

感想お待ちしております。

第十話・「深夜の戦い」(前書き)

キャラ崩壊があります。

注意してください。

第十話・「深夜の戦い」

僕は戦うのは嫌いです。

秋野友

僕が麻帆良に来てから数日。龍宮さんから夜に世界樹広場に来るように言われた。多分実力を見るためかな。

さあ、約束の時間になった。僕は向こうから来るときに『ひな』をあげたときに命がくれた二本の太刀を持って広場に居た。

そこにはこの学園の魔法先生や生徒がいた。

僕が来たのを見ると学園長が周りに向かって説明し始めた。

「今日集まってもらったのは、新たにここにいる秋野友君が警備に加わることとなったからじゃ」

周りの視線が一斉に僕の方を向く。あんまり注目されたくないんだけどな。

「そこでの、実力を知るために誰か試合をしてもらいたいんじゃないか。やっぱりそうなるのか。やだなあ。」

「私がやりますわ」

ん？ 誰だ？

「高音君か。よろしい。ではわしが審判をやるうかの。両者準備はいいかの？」

高音さんはいいいみただし、僕はいつでもいけるから大丈夫。

「では、始め！」

先制しますか。

「ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マジステル。光の精霊101矢。『魔法の射手・連弾・光の101矢』」

まずは様子見て魔法の射手を撃ってみた。

「あまいですわ。この程度！ 『百の影槍』！」

高音さんは影使いか。撃ちもらしなく防いだか。なかなか強いみたいだね。じゃあこれはどうかな。

「ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マジステル。来たれ浄化の光。消し去れ。『光の一閃』」

これは『雷の斧』と同じ上位古代語魔法だから、どうするのかな？

「これはマズイですわね。『黒衣の夜想曲』！」

確かそれは近接戦闘用だった気がするんだけど。

やっぱり防げずに吹き飛ばされた。あ、服が脱げてる。

ああ、思い出した！ 確か脱げ女って書いてあった人だ。

「それまでじゃ。あまり実力は分からなかったのう」

学園長、それはひどいと思います。高音さんは影使いの中では結構強いと思いますよ。ただ相性が悪かっただけです。影対光じゃ光の方が強いからですからね。

「ふむ。では次に高畑君と戦ってもらおうかの」

ふざけんなよ、学園長。

いくらなんでも今の僕じゃ無理ですよ。

「僕は構いませんよ」

コラ高畑。何認めてんだよ！

「では準備をよろしくの」

ああ、戦うのは嫌いなのに。

まあ頑張りますか。

「では始める。始めじゃ」

どうするか僕が考えている時だった。いきなり僕は吹き飛ばされた。

「君はそんなものではないだろう？」

高畑さんが僕のことを挑発してくる。はっきり言って先生が生徒を吹き飛ばすって有り得ないでしょ。倫理的に。

まあ遠慮なく反撃させてもらいますけどね。

「ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マギステル。来たれ雷精、光の精。光を纏いて流れろ、浄化の雷。『光の奔流』」

僕が放った魔法は真っ直ぐに高畑さんの下へ向かっていく。

「正面から来るなんて、どうしたんだい？ 避けてくれと言ってるようなものじゃないか」

まあ普通はそう思うよね。でもそんな訳ないよ。

「頑張つて避けてくださいね。高畑さん」

僕が放ったのは、一点突破型の魔法だから、普通は一直線にしか飛ばない。でも僕は術式を弄ってこの魔法を操作出来るようにした。つまり……。

「これはきついね。避けても追ってくる。じゃあ僕も少しだけ本気を出そうかな」

そう言って高畑さんは大きく距離をとった。

え？ 右手に気、左手に魔力が集まってきた？ 威卦法ですか？ 僕泣きますよ？

「まずはこの魔法を消そうかな。『豪殺……居合拳』！」

ああ、僕の魔法がいつも簡単に破られた。

「ほら、次いくよ！」

「にぎやー！」

ああ、キャラ崩壊しちゃったじゃないか。

もうどうなっても知らない！

「ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マギステル！ 契約により我に従え、太陽の王。来たれ、闇を砕く真実の象徴。燃え上がりて下せ。神の鉄槌！ 『陽の審判』！！！」

本来の出力は出てないけどこれでどうだ！

「『豪殺居合拳・連撃』！！！」

そ……そんな技知らないよー！

そして今の僕が撃てる最強の魔法は相殺された。

僕の意識はそこで途切れた。

＼高畑 Side＼

僕は新しい魔法生徒が来るからといって招集された。

秋野友っていつのか。口調が丁寧だけど男っぽい話し方だね。

高音さんはそんなに弱い訳ではないけど、それをあっさりと破った彼女に僕は興味が出て来た。

学園長が僕と戦うように言ってきたから、僕はいいと言った。

彼女に先制攻撃として居合拳を撃つてみたら簡単に当たった。防ぐと思ってたのに当たったから少し拍子抜けだった。

でも彼女の魔法は凄かった。直線でしか来ないはずの光の奔流がまるで操られているかのように僕の方に迫ってきた。

僕はちよつと楽しくなってきた。咸卦法を使った。そしたら彼女が涙目になってきたから少し罪悪感が出て来たけど、そのまま続行した。

彼女は光系最大呪文を使ってきた。でも本来の威力は出てないみたいだった。僕は『豪殺居合拳』を連発してなんとか相殺した。

彼女はそのあと気を失ってしまった。魔力切れかな。

なかなか彼女は強かったし、警備に関しては問題ないかな。

これからが楽しみだ。

＼高畑 Side end＼

「知らない天井だ」

僕が目覚めると、多分保健室と思われる場所にいた。

ベッドの横には、龍宮さんがいて、僕が目覚めるとあのあとのことを教えてくれた。

あのあと僕が倒れたあとも高畑さんは普通に立っていたから、高畑さんの勝ちになった。で、僕は龍宮さんと桜崎さんと組むことになったらしい。

「魔力切れで倒れたんだからしつかり休むといい。警備は新学期に入ってからだ」

龍宮さんはそう言うと、部屋を出て行った。

部屋に誰も居なくなったので僕は少し思考の海に漂うことにした。

多分学園長は僕にネギのサポートを頼んでくると思う。

その場合僕はどつするべきか。

サポートして、ネギの歪みを矯正して未来を変えるか。やっぱり僕もリンと同じか。あの未来は変えられるなら変えたいしね。

次はリンの計画についてか。リンの計画に参加して、将来の白き翼と戦うのは面白そうだな。

よし。リンの計画には参加。

さあ、どうやってリンにそのことを伝えるか考えないと。リンは学園から目を付けられてるみたいだから、僕があからさまに協力してると思われる行動は出来ないし。

……普通に友達として接していればいいか。あとはなるべく早い時期にリンに計画に参加すると伝えなきゃ。

僕はそのあと二時間くらい考えたあと、寝ることにした。

第十話・「深夜の戦い」(後書き)

テストがあるにも関わらず書いてしまった。

後悔はしていないが反省はしている。

感想お待ちしております。

第十一話・「賑やかなクラス」(前書き)

口調が乱れてます。

注意してください。

第十一話・「賑やかなクラス」

イケるイケる！

ファラ・エルステッド（テイルズオブエターニア）

今日から新学期が始まる。

僕は初めての学生生活だから楽しみだ。

そして僕は今学園長室にいる。新任の先生が来るのを待ってるんだ。

そういえば僕の部屋はどうなるんだろう？ 今は二人と一緒だけど、もともと二人部屋だからなんか申し訳ないんだよね。

「学園長、僕の部屋ってどうなったんですか？」

これで用意出来てないって言ったらどうしてくれようか。

「何か悪寒がするのう（うむ。一人部屋だがよいかのう」

なんだちゃんと用意してたのか。

「ええ。それで構いません。で、いつまで待ってればいいんですか？」

実はもう30分くらい待ってるんだよね。

「もう着いてもいい頃なんじゃがのう」

着いてもいい頃らしい。

それから少し経つと廊下が騒がしくなった。

そして扉が勢いよく開けられた。そこにいたのは、なぜかジャージ姿のアスナ姫……じゃなくて神楽坂明日菜と近衛木乃香、そして頭を掴まれ、ぶら下げられている僕の先祖ネギ・スプリングフィールドだった。

神楽坂さんは、なぜか学園長に詰め寄っている。状況が分からなかったので高畑さん……高畑先生に聞いてみることにした。

「高畑先生、一体何があつたんですか？」

すると高畑先生は苦笑しながら言った。

「ネギ君がくしゃみで武装解除を暴発させてね。それで明日菜君の制服が吹き飛んで、そのあとネギ君が僕に代わって担任になるっていうことを言ったらこんな感じさ」

ああ、神楽坂さん可哀相に。

「じゃあ高畑先生は彼女の下着姿を見たんですね？ このロリコン」

あ、高畑先生が落ち込んだ。なんかブツブツと「僕はアルとは違う……」って言ってる。

放置しておこう。

そんなことしてる間に、話は進んでいたらしい。学園長が修業のことを言ってる。

でもまだ彼女たちいるからね！ 秘匿はどうした！

「明日菜君に木乃香や。時間じゃからクラスに行きなさい。わしはネギ君と秋野君に話すことがあるのじゃ」

「わかったえ、おじいちゃん。秋野さんもうちのクラスに入るん？」

近衛さんが僕に声をかけてくれた。

「はい。僕は2-Aに入ります。これからよろしくお願いします。近衛さん」

僕が近衛さんと呼ぶとびっくりしたらしい。

「なんでうちの名前知つとるん？」

ああ、そういうことですか。

「さつき名簿を見せてもらっただんです」

近衛さんは納得したようで、「またあとでなー」と言って出て行った。ちなみに神楽坂さんは学園長に言われるとほぼ同時に出て行った。

「さて本題に入ろうかの。ネギ君、彼女は秋野友。今日から転入してくるんじゃない」

学園長がネギ君に僕のことを話した。

「あ、僕はネギ・スプリングフィールドっていいいます。よろしくお願ひします」

礼儀正しいのはいいんだけどさ、その背中の杖はどうにかなんなかつたのかな？

「でじゃ。秋野君、ネギ君のサポートをしてくれんかの？」

やっぱりこうなったか。まあ僕は、もう決めてるけどね。

「分かりました。ですが条件を付けさせてもらいます。まず、あくまで僕はサポートであり、従者にはなりません。次にこちらの修業方法に口出ししないでください。別に変なことはしませんから安心してください。最後に、サポートするにおいて必要な経費はそちらでもってください。これだけです」

別に難しいことを言ってるわけじゃないし、呑んでもらえるだろう。

「うむ。よいじゃろう。ネギ君、彼女はこちらの人間じゃから何かあったら彼女を頼るとよい。さあクラスに行くがよい」

これで話は終わりらしい。僕はネギ先生と一緒に部屋を出た。

「秋野さんも魔法使いなんですね。これからよろしくお願いします」

素直でいい子だなあ。だから歪んだんだろうけど。

「よろしくお願いしますね、ネギ先生。そういえば武装解除を暴発させたそうですが、魔力制御の練習はしたんですか？」

まあしてないんだろうけど。

「いえ、してないです。やっぱりした方がいいんですか？」

そんなことも知らないのか。これは修業が大変だ。

「ええ、した方がいいですよ。そうすれば、今までより少ない魔力で今までより威力の大きい魔法が撃てますから。あと障壁は切ってください。魔法ばれしますよ」

ずっと障壁張りっぱなしってどんくらい魔力あるんでしょう？

こんなことを話していると、クラスの前にいつの間にか着いていた。

「ネギ先生、ドアに気をつけてください」

僕がそう言った時にはもう遅かった。

ネギ先生にはありとあらゆる罫が襲い掛かっていた。

クラスの人が慌てているのが教室の外からでも分かる。

やっとクラスが落ち着いたようで（他のクラスに比べるとまだ騒がしいが）僕が呼ばれた。

僕がクラスに入るとまた騒がしくなった。

そんな中一人だけ妙に慌ててる人がいた。っていうかリンだった。

あまりにも騒がしく、僕が何もできないでいると、源先生が場を収めてくれた。

「えーと、今日からこのクラスに転入してきた秋野さんです。みんな仲良くしてくださいね」

ネギ先生が僕のことを紹介してくれたので、自己紹介することにしました。

「僕は秋野友といいます。皆さんよろしくお願いします。何か質問

ありますか？」

すると少し静かになっていたクラスがまた騒がしくなった。

「はいはい。質問はこの私がするからねー」

彼女が朝倉さんかな。

「まずは出身は？」

ふふ。本当のことを言ってあげようじゃないか。

「僕は火星出身ですよ」

するとクラスが静かになった。

あれ？　なんか残念な空気に。

「友ちゃん、そのネタはもう超がやったよ」

え？　ネタかぶり？

「じゃあ金星で」

クラス中からつつこまれた。

「じゃあ次いくよ。身長体重スリーサイズは？」

失礼な。

「身長は159cm、体重秘密、スリーサイズ秘密」

そう簡単に個人情報渡さないよ。高畑先生ロケットもいるんだし。

「それじゃつまないよ。じゃあ目標は？」

決まってるじゃないか。

「テストで麻帆良の頭脳と呼ばれている超さんに勝つこと」

多分引き分けだけどね。全教科満点で。

ちょうどその質問に答えた後、チャイムが鳴って質問タイムは終わった。

放課後、僕は超に呼び出された。

「久しぶりだね。リン」

ずっと黙ったままは嫌だったので僕から声をかけてみた。

「はあ、久しぶりネ。ユウ」

なんで片言に？ ああ、キャラか。

「で、どうしてこっちに来たネ？」

うん。やっぱり聞いてくるよな。

「リンが過去に行っても僕の周りは何も変化しなかった。だから、僕はリンと一緒にいたいからここまで来たんだよ。もちろんリンの計画を止めるなんて馬鹿げたことはしないし、僕もできれば参加したいかな」

あんまりリンに対して隠し事はしたくないんだよね。

「そうだったか。でもこの世界の未来は変えられるはずネ。協力してくれるならこれ以上ないことネ」

なんか話してて調子狂うしゃべり方だなあ。ま、いいか。

「リンが行った後のこと知りたい？」

僕は一応聞いてみた。

「いや、聞く必要はないネ。あちらの世界とここの世界が繋がっていないと確認できた以上、あちらはあちらで頑張ってもらっしかないネ」

さすがリン。簡単に割り切れるとは。

「ちなみに僕は僕でネギ先生の指導をやるから。ああ、計画には支障をきたさないようにするから心配しないで」

一応言っておかないと、あとで僕が怖い思いをすることになってしまう。

「そういえば、私とユウは同じ年になたヨ」

一気に雑談になったな。

「うん、そうだね。でも対して変わりはないけどね」

そのあともしばらくの間僕とリンは話し続けていた。

「あ、そうだ。ユウを呼ぶように言われていたネ」

歓迎会かな。

「早く行くヨ」

僕はリンに腕を引っ張られ、教室に連れて行かれた。

教室ではすでに歓迎会が始まっていた。

なにやらネギ先生が高畑先生と神楽坂さんの間を行ったり来たり

している。

会話を聞くに、「くまパン」やらパ○パンやらが高畑先生の神楽坂さんに対する印象らしいので、ロリコンは確定した。

ん？　なんで神楽坂さんが読心術のこと知ってるの？　まさかもうバレたのか？

まあ、いいや。それよりも楽しまないかね。

まずは、長谷川さんを探さないで。

窓際にその長谷川さんはいた。さて、なんて声をかけようかな。

まあ、決まってるけどね。

「初めまして。ちづさん」

すると長谷川さんは驚いた顔で僕を引っ張って、廊下へと連れ出していった。

「おい、なんでそのこと知ってるんだよ」

ふふふ。毎日チェックしてるのさ。

「実は僕も同じなんです。だから趣味が同じ人を見つけようと思ったら、ホームページを見つけて、それが自分のクラスの人だっただけですよ」

なんか長谷川さんが疲れた顔をしている。

「よくわかったな。結構パソコンで処理してるんだが。でも、まあ趣味が同じ人がいてよかったよ。なあ、今度一緒に写真撮らないか？」

計画通り！

僕は某新世界の神のように見えないところで笑った。

「ええ、いいですよ」

そのあと僕たちは、いつ撮るのかという約束をして教室に戻った。

さてと、みんなの質問に答えないとね。

〈超 Side〉

今日から三学期が始まるネ。私の計画も今のところ順調だ。

朝学校に着くと、朝倉さんが新任の先生が来るって言ってたネ。ご先祖様との対面ネ。

でも気になることが一つあったネ。この時期に転入生はいなかったはずネ。

まあ一応気にかけておくヨ。

そしてネギ坊主が畏に引っ掛かったあと転入生が入って来たネ。

ん？ 秋野友？ まさか、そんなはずはないネ！

ど……どどどどうしてここにユウがいるネ！？

こっちに来てから一番驚いたネ。

そのあとのことは何も耳に入って来なかつたヨ。

放課後屋上に呼び出して真意を聞いたヨ。

むづ。何も言えないネ。

向こうから話し掛けてくれたネ。

久しぶりに話しをして楽しかったネ。

でもやはり未来は繋がてなかつたヨ。こちらに来た時に、ほぼ確信したとはいえ、少々キツイものがあるネ。

そのあと歓迎会でみんなと楽しく話すユウを見て、苛立ったネ。

ま、まさか嫉妬！？

そして私はここに至ってようやく気付いたネ。

私がユウを好きだということに。

）超 Side ends（

第十一話・「賑やかなクラス」(後書き)

感想お待ちしております。

第十二話・「或る一日」(前書き)

テストが終わったので更新再開です！

結果？知らないよそんなの。

第十二話・「或る一日」

皆さん忘れてませんか？『僕』は女の子ですよ？

秋野友

今日は僕の或る一日を紹介しようかな。

僕は毎日5時には起きる。もちろんトレーニングを欠かさないのだ。

「ふう。今日はこんなもんでいいかな」

だいたい1時間くらい走っている。

そしてもうそろそろ……

「おはようございます。神楽坂さん」

新聞配達している神楽坂さんに会う。これも日課になってきている。

「あ、おはよー。秋野さんその話し方面倒じゃないの？」

「この話し方で慣れたのでそんなことないですよ。そういえばテスト近いですけど、大丈夫ですか？」

いやあ、記録としては知ってましたが、こんなに勉強が出来ないとは知らなかったですよ。さすがはバカレッドです。

「う、私が勉強出来ないの知ってるでしょ。ていうかなんで皆出来るのよ」

「そこはほら……努力とか？」

「なんで疑問形なのよ」

こんな会話を毎日している。

あ、神楽坂さんには魔法がばれてるみたい。この前ネギ先生が相談に来たから。

さあ、時間は跳んで、授業の時間だ。

最近先生が僕を指名しなくなっちゃったんだよね。リンに聞いたら、僕が悪いらしいけど何したっけ？

そんなことを考えてると、いつの間にか授業が終わっていた。

ちなみに昼食はリンと食べたり、ちづ……じゃなくて長谷川さんと食べたりしてるよ。

今日は長谷川さんの日。

「なあ、今日やらないか？」

もちろんコスプレのことですよ？ 変なこと想像した奴は爆殺ですよ？

「いいよ。うん」

ああ、楽しみだな。

「じゃあ私の部屋に夜来てくれ。飯は用意しておくよ」

長谷川さんの部屋行くの初めてだ。どんな部屋かな。

「わかったよ。うん。今日はどんな格好がいいかな？ うん」

大抵のものは魔法無しでも出来るから何でも来い！

「今日のキャラはデイダラか？ まあ、それは置いといて、今日はテイルズのキャラで」

テイルズか。じゃあジュデイスとかにしようかな。

「よくわかったね。うん。以上今日のキャラでした。じゃあテイルズね。わかった」

長谷川さんと話しているとネタが通じて嬉しいよ。

また時間が跳んで放課後。今日は予定がいっぱいだ。

まずはリンとその仲間との秘密の会合。

「ようやく来た力。10分遅刻ネ」

いやあ、しょうがないじゃないか。今日日直だったんだから。

「君もこちら側だったのか」

声をかけてきたのは龍宮さん……え？ 龍宮さん？

「なんで龍宮さんがここに？ てっきり学園側だと思ったのに」

「それは私も思ったよ。君はネギ先生の補佐役だからね」

まあ仲間なら心強いからいいか。

「じゃあここにいる皆にもう一度自己紹介するよ。教室で言ったのはあくまでも表向きものだからね」

さて、姿も戻そうかな。

「アベアット。まずは僕の秘密その一。これが僕の本来の姿」

あー、皆ビツクリしてる。まあクラスメイトが実は男だなんて普通は思わないよね。

「この姿は久しぶりに見るネ」

「ん？　ということは君も超と同じなのか？」

さすがにばれるか。

「そうだよ。僕も未来人だよ。ちなみに本名は、ユウ・M・スプリングフィールドだよ」

あれ？　周りが急に静かに。機械の音しかない。

「いや、本名を言うとは思わなかつたネ」

と、リン。

「君はネギ先生の子孫なのかな？」

と、龍宮さん。

「……………」

言葉が出ない葉加瀬さん。

「……………マスターに話さなくては」

と、茶々丸さん。

……待つて！

「茶々丸さん、それは秘密にしておいて下さい」

「わかりました」

よかった。ばれたらなんか面倒になりそうだったし。

「ユウが言たなら私も本名を言うネ。私の本名はリン・オータム。一応私もネギ坊主の子孫ネ」

へえ。リンも全部言うんだ。

未来では、スプリングフィールド王家に連なる家は季節に関する姓を持っている。

たとえば、本家はスプリングフィールド（spring field）だし、リンのオータム（autumn）とか、沙映のヴィンター（winter）とか。

「ところでミドルネームのMは何の略なんだい？」

やっぱり気になるかあ。

「秘密だよ。壮大なネタバレになるからね」

本当に大変だからね。簡単に未来が変わっちゃう可能性が……うん。僕が消えるかも。

いや、消えないか。だって平行世界だし。

「さて、話を戻させてもらうネ。今日は顔合わせだけの予定だったんだが、ちよつと問題が発生したネ。異常気象で世界樹の発光が早まるネ。だから準備を怠らないでほしいネ」

「だけどたかが異常気象ごときで世界樹の発光って早まるかなあ？

未来知ってるから、何でなのかは知ってるけどね。」

「あ、僕は当日ネギ先生と一緒に行動するから。味方だと思ってたのに実は敵だったなんて面白いじゃないか」

「確かにその方が疑われないからいいかもしれないね」

え、僕はそこまで考えて無かったけど確かにいいかも。」

「じゃあ僕はリンから計画の大筋は聞いたから帰るよ。細かい計画知らない方が楽しめそうだし」

そう言って僕は「アデアット」と言い、姿を秋野友に戻して出て行った。

さて、次は長谷川さんとの約束か。

「何持ってこうかな？ とりあえずジュデイスとシエリアで、うー」

ん、あとは適当に選ぶかな」

まだ約束の時間まで結構あるな。もうちょっとリンの所に居ればよかったかな？

「うーん、じゃあ久しぶりに開発でもしますか」

今日は、オルフィクション大嘘憑きもどきの幻術でも作ろうかな。

あれから2時間後。

僕は長谷川さん……もういいや。ちうたんのところで夕食を食べている。え？ オルフィクション大嘘憑きはどうしたって？ 幻術ベースだから簡単にできたよ。だって実際に因果律に影響与えるわけじゃないし。

「ちうたん、おいしかったよ。ごちそうさま」

ちなみに今日のメニューは、シチューでした。

「おそまつさま。で、今日は何持ってきたんだ？」

「とりあえず、ジュデイスとシエリア。あとは適当に突っ込んだからわかんない」

「じゃあ確認してみようぜ」

僕はちうたんと一緒に鞆の中を開けてみた。

ジュデイス、シエリア。ここまでは問題なし。

ロンドリーネ、パスカ・カノンノ。うん、問題なし。

黒神めだか、玖渚友。まあ、作品違っけど問題なし。

神裂火燄、キヤス狐。まあいいか。

「おい、友。これなんだよ……」

ちうたんが掴んでいたのは、全身青タイツ。つまり……

「なんで、バルバトスの衣装があるんだよっ！」

問題が発生しました。

「多分ネタ用で作ったやつだと思っただけど、なんで入ってるんだろっ？」

とても不思議です。だって鍵かけて封印してたはずなのに。

そして鞆の中にはあと一着……！

「あー、友？ また変なの出てきたぞ」

そんな馬鹿な……。なんで最後に上条刀夜が着せたあの犯罪スレ

スレの水着がっ！

「ちうたん。気にしないでくれる？ そうしてくれるととてもありがたいんだけど」

大問題です！！

これは向こうこいに置いてきたはずなのに。

「まあ、誰にでも失敗はあるさ。だからそれしまっ、いつものやろっぜ」

うん。忘れよう。

「さあ、これからゆうの時間の始まりだよ」

「同じくちうの時間も始まるよ」

こうして夜は更けていく。

今日は忙しいことに夜の警備まである。今日は龍宮さんはお休みなので桜咲さんと二人きりだ。

「今日はもう来ないんじゃないですか？」

「いえ。油断はできません。最近は深夜の侵入が多くなってきたので」

桜咲さんは固くて話しづらいなだね。

「秋野さん！ 来ました！」

おお。やっと出てきたか。あまりに暇で帰ろっかなーなんて思い始めてたのでちょうどいいや。

「『斬岩剣』！！」

もうやってるのか。早いなー。

「さあ、僕も行きますか。ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マガステル。来たれ、光精101柱。さらに、来たれ、闇精101柱。我が剣に宿りて敵を討つ。『魔法の射手・連弾・双刀付加』」

僕は二本の小太刀に魔法を付加して、鬼の集団に突っ込んでいった。

「さーて、始めますか。命直伝！ 『斬魔剣・弐の太刀・モード光陰』！」

戦闘はあっけなく終わってしまった。

はっきり言ってこのレベルの相手に双刀付加だとオーバーキルみたい。

「秋野さん、大丈夫でしたか？」

桜咲さんも終わったみたい。さあ帰ろうかな。

「多分今日はおしまいだと思うの……………はい。わかりました。秋野さん、どうやら西側で人員が不足しているようなので救援に行つてほしいと、学園長が……………」

僕は桜咲さんが全部を言う前にその場から駆け出した。

ふふふ。もう今日は疲れたのだよ。だから、さっさと終わらして寝る！！ 僕の全力なら、西側まで30秒つてとこだらう。

「ちょうどいい。ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マジステル！ 契約により我に従え、太陽の王。来たれ、闇を砕く真実の象徴。燃え上がりて下せ。神の鉄槌！」

ちょうど詠唱が終わるころ、敵の一団が見えた。

「魔法先生並びに魔法生徒のみなさん。危ないからどいてくださいねー。5秒前ー。5……………4321！消えちゃえ！ 『陽の審判』！！」

辺りを秘匿など無視した強烈な光が襲い、敵は跡形もなく消え去った。

「はーあ。帰って寝よ」

後日、僕はあの光が麻帆良の七不思議じゃすまない七不思議に加

えられているのを知った。

くおまけ

- 神楽坂明日菜 -

あ、友さん行っちゃった。そういえばネギとよく話してるわね。
魔法関係なのかしら？

「げ、もうこんな時間！ 急がないと！！」
今度会ったら聞いてみようかな。

- 長谷川千雨 -

「いやー楽しかったぜ」

友が来てからは、趣味を分かち合える仲間が出来て、毎日が楽しいよ。

「ん？ あいつなんか忘れてったのか？」

私はその袋を開けたことをあとで後悔することになった。

「茶々丸、あいつの情報は集まったのか？」

あの秋野とかいう奴の目的が分からん。私がぼーやを襲うのに対しては細心の注意が必要だ。不安要素など取り除きたい。

「いえ。彼女の情報は一切ありません。過去においても、存在したという記録すらありませんでした」

ええい！ 訳分からんわ！

「そうか。何か分かったら教えてくれ」

「かしこまりました。マスター」

ふん。まあ邪魔をしないのであれば見逃してやろつ。

第十二話・「或る一日」(後書き)

ちなみに短編投稿しました。よかったら読んでください。

感想お待ちしております。

第十三話・「図書館島」

まったく。先生は魔法が使えるなんて思ってたんですか？

秋野友

どうやら僕が学校を休んだ日に、例のドッジボール事件があったらしい。

ま、関係ないけどね。

それより問題はテストが近いということだ。僕は自己紹介の時にリンに勝つと宣言している。つまりは満点を取らなくてはいけないのだ。

だからこんな噂に付き合っている暇はない。ない……のだが。

「なんで僕は図書館島の前にいるんでしょう」

確か僕は、部屋でぐっすりと眠っていたはずんだけど。

「ごめんなさい。明日菜さんが無理矢理に……」

ネギ先生、周りをよく見てそういうことは言ったほうがいいと思いますよ。ほらすぐ後ろに般若……失礼。神楽坂さんが。

「秋野さんも魔法使いなんですよ？ ネギから聞いたわよ。お願い、

協力して」

ネギ先生？ 秘匿はどうしたんですか？

まあここまで来ちゃったら行くしかないですね。

「では出発するです」

綾瀬さんの掛け声でバカレンジャー一行＋近衛さん、ネギ先生、僕の8人は出発した。

いろいろあって明らかに怪しいゴーレムのいる部屋に到着しました。

「あつ……あれは！？ あれは伝説のメルキセデクの書ですよ！！最高の魔法書ですよ！！ あれならちよつと頭をよくすることぐらい簡単かも」

だからネギ先生。秘匿はどうした。

「やったー」

「これで最下位脱出よー」

「一番乗りアルー」

「あーあたしもー」

絶対罫あるよね。

「あ、みんな待って！！ あんな貴重な魔法書絶対罫があるに決まっています。気を付けて！！」

あ、落ちた。

それにしてもツイスタゲームですか。しかもVer10.5ってことは前にもあったのかなあ。

「フオフオフオ。この本が欲しくば……わしの質問に答えるのじゃーフオフオフオ」

学園長は何をしてるんでしょう。とりあえずはみんなが怪我しないための見張り役ということにしておきましょう。

「では第一問。『difficult』日本語訳は？」

「ちゃんと問題に答えれば罫は解けるはずです。ツイスターゲームの要領で踏むんです」

「デイ……デイフィコロトってなんだっけ先生ー」

「いっ……easyの反対ですよ！えと『簡単じゃない』！」

「む」

「ず」

「い」

『難しい』じゃないの？ まあ正解みただけだよ。

まあそのあと問題は続いて、みんなが大変な体勢になりました。

あのじじい、これみて楽しんでるだけなんじゃないの？

「最後の問題じゃ。『dish』の日本語訳は？」

おさらねえ。なんで「お」を付けるんでしょう。つけないほうが簡単なのに。

「…………おさる？」

え、間違えたの？

「ハズレじゃな。フォフォフォ」

学園長…………もうじじいでいいや。なんでハンマーを振り下ろす？

「アスナのおさる……………！！」

ああ、みんなが落ちて行った。僕？ 空中にいますか何か？

「じじい、言い訳はあるか？」

「フォッ！ わしはただのゴーレムじゃよ！？」

「その魔力の波長はじじいのもだろうがよ！ いい加減しらばくれるのやめろよ。潰すぞ？」

「わ……わかったからその魔力収めてくれんかのう。寿命が縮みそうじゃ」

「しょうがないから収めてやるよ。で、言い訳は？」

「口調違くないかのう。君は誰じゃ？」

「『俺』は秋野友だぜ。何か問題でも？」

「いや、何も言うまい。わしがこういうことをしたのは訳があるんじゃないよ。ネギ君には、こういう簡単な方法に頼ってほしくはないのじゃ。だから少々荒っぽいのが、こういうことをさせてもらったのじゃ」

「そういうことにしといてやるよ。だが……女子中学生の下着を見たことは許せんからなあ。とりあえず喰らうとけ！ 『斬岩剣』！

「フオ~~~~~」

「……ここは幻の地底図書室！？」

「何やそれ。夕映？」

「地底なのに暖かい光に満ちて数々の貴重品にあふれた本好きにとつてはまさに楽園という幻の図書館……。ただしこの図書室を見て生きて帰った者はいないとか」

「じゃなんで夕映が知ってるアルか？」

ていうかこれもろに魔法だね。水に浸かっている本が濡れてないとかありえないでしょ。

「みなさんあきらめないで期末に向けて勉強しておきましょう！」

いやまあ、勉強するのはいいんですけど、何で教科書とかがここにあるんでしょう？ まあ、じじいが置いたんでしょうけど。

「秋野さん、勉強しなくていいんですか？」

ネギ先生、僕はみんなに教えたりしませんからね？

「はい。ちょっと興味が湧く本がいっぱいあったので、それを読んでいますから」

「あのー、じゃあみんなに勉強を教えてくださいませんか？」

ほらきた。

「いやー、僕は誰のせいでここに来たんでしょうたっけ？」

「う………わかりました」

お、諦めてくれたのか？ まあいいや。僕はこの『死者の書』を

読んでますかね。

「キヤーーーーーッ！」

ん？ せっかく気持ちよく寝ていたのに何事ですか？

「大変やアスナー」

「どうしたの？ このか？」

「フオフオフオ」

「ま……またあのでかいの!？」

じじいめ。消してやろうか？

「ぼぼ、僕の生徒をいじめたなつ。いくらゴーレムでも許さないぞ」

ネギ先生？ 杖をもって何する気ですか？

「ラ・ステル・マ・スキル・マギステル！ 光の精霊11柱！ 集
い来たりて敵を撃て!!! くらえ魔法の矢!!! 『魔法の射手』!
!」

堂々と魔法使ってんじゃない!!

「フオ!?!」

ほらじじいも慌てる。

「ま……まほーのや……?」

秘匿を知らないのかー!!

「ネギ先生はまだ魔法を使えると思っっている年頃なんです。それよりも佐々木さんを助けないと」

「あ……本をいただきます! まき絵さん、クーフエさん、楓さん!」

「OK! バカリーダー」

まだ本にこだわりますか。ていうかみんな強いですね。

古さん、素手で石像叩いて痛くないんですか? (疑問)

長瀬さん、あなた忍者ですね。(確信)

佐々木さん、あなたのリボンの強度半端じゃないですね。(驚愕)

「あっ見つけた。滝の裏側に非常口です!」

僕は知ってましたけどね。

「まっ……待つんじゃないっ」

まだ追ってくるか。じじい。

「うっ……！？ なにこれ。扉に問題がついてる！」

これ、中学一年生程度の問題ですよ？

お、古さんが正解した。

そして、次々と正解していくバカレンジャー。

「あ！ エレベーターよ！」

うん。みんな乗り込んだけど重量オーバーみたい。

「「「いつ……いやあああああああ！」」」

絶叫。うん。体重は敵だからね。

「僕がおりますよ。だから早く地上に行ってください。そのあとでエレベーター使って戻りますから」

「じゃあ僕が残りますよ。秋野さんを巻き込んだのは僕だし」

「先生が学校に行かなくてどうするんです？ さ、早く行ってください」

僕は、本を持ってエレベーターから降りた。

「あ！ 動くアル！」

僕は強制的にドアを閉めて、みんなを地上に送った。さてと……。

「もう言い訳は聞かねえぞ、じじい。てめえは下着姿では飽き足らず、全裸まで見やがって。死刑だ！ ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マジステル！ 喰らえ！ 『陽の審判』！！」

ひよっつっつという変な声が聞こえた後、ゴーレムは下へと落ちて行った。

「さて、僕も地上に行きますか」

テスト当日。

僕は時間に遅れなかったのに、バカレンジャーほかにも数人遅刻してきた。今は別室でテストを受けている。

ちなみに僕も今テスト中だが、問題が簡単すぎて、暇している。リンを見てみると寝ていた。僕も寝よ。

そして結果発表。僕はリンと一緒にパソコンで見ている。あと二クラスしか残っていない。

「ブービー賞は2・Kですね」

最下位決定ですか。まあどうせ撤回されるでしょうけど。

あ、ネギ先生が駆け出して行った。

「えーただいま学園長のミスで点数を再計算しております。しばらくお待ちください」

どうせ遅刻組の点数を加え忘れたとかでしょうね。

「結果が出ました。一位が2・Aとなります」

一位ですか。裏工作がありそうですね。

「さて、リン。勝負の結果発表と行くこうじゃないか」

今僕の周りには、葉加瀬さん、雪広さん、朝倉さん、那波さん、長谷川さんがいる。

「うむ。じゃあ英語からネ」

リン：100点

僕：100点

「引き分けですか。じゃあ次は、数学です！」

リン：100点

僕：100点

「また引き分けネ。次は理科ネ」

リン：100点

僕：100点

周りが息をのむのが聞こえる。

「次は社会です」

リン：100点

僕：100点

「ここまでとは思わなかつたネ。次で決着ネ」

最後は国語だ。

リン：98点

僕：100点

「僕の勝ちみたいだね」

「慢心せずして何が王ネ」

「どこの慢心王だよ、あんたは」

やっぱり長谷川さんのツツコミは的確だなあ。

「次は勝つネ」

「いや次も僕の勝ちだね」

こうして僕のテストは終わった。

どうやらネギ先生も、最終試験に合格したみたいだね。

「さて、新学期になったら始めるぞ。準備はいいか？ 茶々丸」

「はい。大丈夫です。マスター」

「クツクツクツ……ハツハツハツハ……ハーツハツハゲホツゲホ」

第十三話・「図書館島」(後書き)

感想お待ちしております。

第十四話・「新学年と桜通り」

吸血鬼なんてファンタジーなもん現実にいるわけねーだろ

長谷川千雨

今日から僕たちは三年生となった。記録によれば、この一年は色々なことが起こるらしい。しかもリンの計画も今年行うそうなので、大変な一年間となりそうだ。

「……三年！ A組！！ ネギ先生……」

騒がしいクラスですね。ていうか君たち中学生ですよ？

「バカどもが……」

「アホばっかです……」

はあ。何でこんなにテンション高いんでしょう。リンもちゃっかり参加してるし。

「えと……改めまして3年A組の担任になりましたネギ・スプリングフィールドです。これから来年の3月までの一年間よろしくお願ひします」

ぜひ、頑張ってください。まあ、確か吸血鬼事件がすぐあったは

ずなんです。

やっぱり。隣の席のエヴァちゃんがネギ先生のことを睨んでいる。

「ネギ先生、今日は身体測定ですよ。3・Aのみんなもすぐ準備してくださいね」

「あ、そうでした。ではみなさん身体測定ですので、今すぐ脱いで準備してください!!」

このエロガキが!!

「「ネギ先生のエッチ!!」」

「うわ~~~~ん。まちがえました!」

さて、身体測定ですか。最近体重測ってないのでちょっと怖いですね。

「いいんちよ65キロね」

「ひいっ!」

椎名さん、それは酷いと思いますよ。

「秋野さん53キロです」

よかった。そんなに増えてなかった。

「ねえところでさ、最近寮で流行ってる桜通りの吸血鬼についてど

「思うっ?」

「もーそんな噂でたために決まってるでしょ」

「いえいえ。クラスにいますからね。吸血鬼。」

「噂の吸血鬼はお前のような元気でいきのいい女が好きらしい。十分気を付けることだ」

「ほら、吸血鬼本人のご登場だよ。」

「先生ーっ、大変やーっ。まき絵がつ」

「何!? まき絵がどーしたの!?!」

「みんな慎みを持ちましょうよ。いくら女子校とはいえ、男性教員はいるんですから。下着姿で顔を出すっていうのはどうかと思いますよ?」

「どうやら下着姿で保健室に行くようなことはしなかったようで、クラスから数人が保健室にやってきました。」

「わかりやすく魔法の力を残してますねえ。ある程度魔力に通じている人なら、簡単に個人が特定できますよ。」

「……それとアスナさん、僕今日帰りが遅くなりますので晩御飯いりませんから」

なんかネギ先生が宣言しちゃってますね。あれじゃあ夜になんかやりますって言ってるようなものじゃないですか。

クラスみんなが出て行ったあと、ネギ先生は何か考え込んでいました。

夜。今日は満月。絶好の吸血鬼日和ですね。

宮崎さんが一人で桜通りを歩いていきます。よくあんな噂が流れているのにそんなことができますね。

あ、エヴァちゃん登場。

「キヤアアアアツ！」

「待てーっ！ ラス・テル・マ・スキル・マギステル、風の精霊11人縛鎖となりて敵を捕まえる！ 『魔法の射手・戒めの風矢』」

「もう気づいたか。『氷楯』」

二人とも、まだ宮崎さんいますからね。失神してるみたいですけど。

「き……君は、エヴァンジェリンさん!？」

「新学期に入ったことだし、改めて歓迎の挨拶と行こうか先生。……いや、ネギ・スプリングフィールド。10歳にしてこの力……さすがに奴の息子だけはある」

「な……何者なんですかあなたはっ！ 僕と同じ魔法使いのくせになぜこんなことを!?」

「この世にはいい魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよ。『氷結・武装解除』！」

やっぱりネギ先生の思考は改善しないといけないな。大体いい魔法使いしかいない世界があるわけないじゃないか。一見いい魔法使いに見える学園長のじじいだって、裏じゃ何人も殺してるだろうし、今現在も魔法ばれを狙って孫をネギ先生と同居させるし。

そしてエヴァちゃん。宮崎さんがいるのに武装解除ってひどくない？ いきなり失神して、目覚めたら全裸とかトラウマものだよ？

あ、神楽坂さんと近衛さんが来た。この状況はネギ先生が吸血鬼と思われちゃうね。

「ネ……ネギ君が吸血鬼やったんか……!?」

「ち……違います！ 誤解です！」

ほらそんなことやってる間にエヴァちゃん逃げちゃうよ。

「アスナさん、このかさん。宮崎さんを頼みます！ 僕はこれから事件の犯人を追いますので、心配ないですから先に帰っててください」

い！」

ああ、行っちゃった。さて、僕も行きませうかね。

「ラス・テル・マ・スキル・マジステル！ 風精召喚！！ 『剣を執る戦友』！！ 捕まえて！！」

もう始まってましたか。まあ、今日は見物に来ただけですから、楽しませてもらいましょう。

「追い詰めた！ これで終わりです。『風花・武装解除』」

二人はどっかの建物の屋上にたどり着いたみたいです。

「約束通り教えてもらいますよ。なんでこんなことしたのか。それに……お父さんのことも」

奴としか言っていないのに、父のことですか。もしかしたら母のことかもしれないのに。

「魔力もなくマントも触媒もないあなたに勝ち目はないですよ！！」

「これで勝ったつもりなのか？ さあお前の得意な呪文を唱えてみるがいい」

「ラス・テル・マ・スキル・マジステル、風の精霊11人縛鎖とな

りて敵を捕まえる！ サギ……あたっ」

詠唱遅いですね。ていうかこの程度の魔法ネギ先生なら詠唱いら
ないと思うんですけど。だから茶々丸さんに詠唱妨害されちゃうん
ですよ。

「紹介しよう。私のパートナー、”魔法使いの従者”絡繰茶々丸だ」
このネーミングセンスはどうかと思いますけどね。

「元々魔法使いの従者とは戦いのための道具だ。我々魔法使いは呪
文詠唱中完全に無防備となり……」

エヴァちゃん説明長過ぎ。ていうか説明する必要あるの？

「申し訳ありませんネギ先生。マスターの命令ですので」

「ようやくこの日が来たか。これで奴が私にかけた呪いも解ける！」

「呪いですか!？」

「そうだ。真祖にして最強の魔法使い、闇の世界でも恐れられたこ
の私になめた苦汁……。私はお前の父、つまりサウザンドマスター
に敗れて以来魔力も極限まで封じられ、も~~~~15年間もあの教
室でノー天気な女子中学生と一緒に勉強させられているんだよ！
！！ このバカげた呪いを解くには、奴の血縁たるお前の血が大量
に必要なんだ。……悪いが死ぬまで吸わせてもらう」

途中キャラ崩壊してますよ。一応助けにいかないとマズイかな。
主に僕の立場的なもので。

「コラーツこの変質者どもー！！　ウチの居候に何すんのよー
ー！！」

神楽坂さん。ここ屋根の上ですよ？　飛び蹴りって……。エウア
ちゃんも顔面で滑って行つたし。

「か、神楽坂明日菜！！」

「あんたたちうちのクラスの……。ちよつどーゆーことよ！？　ま…
…まさかあんたたちが今回の事件の犯人なの！？」

僕の出番が……。

「よくも私の顔を足蹴にしたな。覚えておけよ」

「あ……ちよつと！　ここ8階よ？」

さて、今回はこれで終わりかな。

「ネギ先生大丈夫ですか？」

「あ、秋野さん！　どこにいたんですか？」

「ずっと近くにいましたよ？」

まったく。何でも一人でやろうとするのがネギ先生の弱点ですか
ね。

「僕はネギ先生の相談役みたいなものですよ。少しは他人に相談す

るということを覚えてくださいな」

「な……なんで近くにいたのに助けてあげなかったのよ!？」

「さすがに命の危険があれば助けますが、それ以外では、助力を請われない限り助けませんよ。僕は、あくまで相談役みたいのものであって、パートナーではないんですから」

僕がパートナーになることを狙ってるんでしょうけどな。あのじじいは。

「とにかく、ネギ先生は他人に相談するということ覚えてください。まだ10歳なんですから、一人でできないことのほうが多いんですから。ああ、怪我治しときますか。プラクテ・ビギナル。汝が為にユピテル王の恩寵あれ。『治癒』」

こんなところで僕の始動キーは明かす必要はないですしね。初心者用の始動キーで十分です。

「本当に秋野さんも魔法使いだっただんだね」

「ありがとうございます、秋野さん」

「さあ、帰りますよ」

今日は警備もないですし、ゆっくり寝れそうですね。

第十四話・「新学年と桜通り」(後書き)

感想お待ちしております。

第十五話・「吸血幼女」(前書き)

バイトで忙しく更新できませんでした。すみません。

それではどうぶ。

第十五話・「吸血幼女」

私は悪の魔法使いだ！ 断じて悪の幼女ではない！！

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

桜通りの一件の後、すっかりネギ先生はエヴァちゃんに怯えてしまった。なにせ翌日は、教師だというのに登校拒否するぐらいだからね。まあ、神楽坂に担がれてきたけど。

そして僕は一応確認のため、じじいを訪ねている。

「で、じじい。今回の一件は、どういふつもりなんですか？ それによつては僕の対応も変わってくるんですけど」

前にも言つたけど、僕はパートナーじゃない。あくまでじじいが、ネギ先生の補佐をやってくれと頼んできたから、それをやっているだけだ。だから、僕は戦闘に関わるつもりは、頼まれでもない限りしない。

「敬語なのかどうか微妙な口調じゃのう。……この件については、ネギ君に経験を積ませるために、わしがエヴァンジェリンに依頼したのじゃ。じゃからこれによつてネギ君が死ぬようなことはないじやろう。君が協力してくれるというなら、ネギ君に稽古をつけてやつてはくれんかのう」

つまりこれは、英雄の子に箔をつけるためのものか。

「一応聞いておきます。この稽古に対しては拒否権はありますか？」

「もちろんじゃ。別に拒否してもらっても構わん」

拒否はできるってことか。一応リンの計画通りに進めるからこゝは拒否したほうがいいな。僕が稽古をつけると、記録と違っちゃうからね。

「すみませんが、この件に関しては拒否させていただきます。今のネギ先生がどれくらい戦えるのかを見ておきたいので」

まあ、実際は記録と違うところはないか確認したいだけなんだけどね。

「うむ。じゃが、精神面のケアはしてもらいたい。いくら立派な魔法使いになるための修行で教師をやっているとはいえ、さすがに登校拒否はまずいからのう」

確かにそれは言ってるな。教師に登校拒否とか普通はありえないからね。

「わかりました。それぐらいはしましょう。あとエヴァンジェリンさんに一つ注意をしてもらいたいのですが。今までの被害者が、皆魔法を知らない生徒ばかりだったので、そのことに関して注意をしてもらえますか？」

「確かにそれはダメじゃな。わかった、注意しておこう。では、授業に向かいなさい」

まあ、今回の事件がじじいの仕業だと分かったし、あとはネギ先生のメンタル面のケアだけか。でもクラスのみんながしてくれると思っただよなあ。

結局、放課後に「ネギ先生を元気づける会」が開かれて、少しは良くなったみたい。

なんかみんな騒いでたけど、何かあったのかなあ。

次の日、僕は風邪をひいて、学校を休んでいた。なにが悪かったかといえば、多分風呂上りに、髪を乾かしもせずに、徹夜でゲームをやっていたことだろう。ていうかそれ以外の原因が思いつかない。リンにも呆れられてしまった。まあ、今日はゆっくりと休むとしよう。

次に僕が目を覚ましたのは、夕方だった。とりあえず熱は下がり、体のだるさも取れたので、夕食をとろうと考えていた時に、ネギ先生と神楽坂さんが僕の部屋にやってきた。僕の部屋は嚴重に鍵がかかっているの、僕が迎えに行かなければならない。

「どうしたんですか？ 一応熱は下がりましたが、風邪をうつしたくはないんですが」

それにしても、ネギ先生の肩にオコジヨがいますね。

「すみません。でも相談したいことがあったので、少しでもいいので聞いてくれますか？」

まあ、僕が人に相談するということ覚えろと言ったんですから、責任はとりますか。

「じゃあ、入ってください。中で話を聞きましょう」

さすがに魔法関連の話は廊下で出来るようなものじゃないですからね。

「ねえ、秋野さん。この部屋って鍵無いの？」

「ここは、6ヶタの暗証番号で入るんですよ。ちなみに一回ごとに番号は変わります」

「え？ フラスコ計画なんかやってるの？」

おお。まさか神楽坂さんがこのネタを知ってるとは！

「いえ、冗談です。暗証番号はフェイクで、実際は指紋認証です」

ま、そんなことはおいといて。

「で、ネギ先生。相談したいことってなんですか？ あとそのオコジヨについても聞きたいんですが」

多分そのオコジヨは使い魔的なものなんだろうけど。

「俺っちのことは自分で言うぜ。俺っちはアルベール・カモミール。

兄貴の使い魔さ」

ああ、これが女性の敵、カモカ。

「えと、パートナーのことなんですけど……やっぱりパートナーって居たほうがいいんでしょうか。この前、エヴァンジェリンさんと戦った時に、詠唱を妨害されちゃって、魔法が使えなかったんです」

僕、その場にいたから知ってるよ？ そのこともちゃんと聞いたはずなんだけど。

「それで、パートナーがいたらそんなことはないのかなって」

ふーん。一応考えてるんだ。でもパートナーって今から選んでも、あんまり役に立たないと思うんだよなあ。ネギ先生ってほかの魔法生徒や魔法先生とあんまり関わってないから、選択肢が少ないんだよね。

「ネギ先生、パートナーは確かに居たほうがいいです。ですが、今からとなると先生には魔法関係の知り合いが少なすぎて、選択肢が少なすぎます。一応言っておきますけど、魔法関係者じゃない人に仮契約なんてしないで下さいよ？ そんなことしたら、相手の方が死んじゃいます」

「え？ そんなんですか？ じゃあ宮崎さんと契約しなくて良かった」

え？ そんなことしようとしてたんですか？ 先生が自分からそんなことするはずはないから、原因はこのオコジョカ。

「そのカモ。君は無関係の人を巻き込もうとしたのかな？」

僕は久しぶりに極上の笑顔を浮かべて、カモに迫った。なんで逃げるのかな？

「そ……そそそそれは、兄貴と相性がよさそうだったからで……」

そんな理由で巻き込もうとしたんですか。少ーし反省してもらいますか。

「反省しなさい。『開け、影の門』」

僕は自分の影にカモを突っ込んで、少しお仕置きを受けてもらうことにしました。

「じゃあ、どうすればいいんですか!？」

先生、カモのことはスルーですか？ 結構薄情ですね。

「あんまりおすすめは出来ませんが、神楽坂さんをパートナーにしてはどうでしょうか。彼女もこちらのことは知っているわけですし」

どうせ記録ではこの事件の時に仮契約するんですから、少し早まったくらいなら大丈夫ですよ。

「私はイヤよ。なんでこいつとキスしなきゃいけないのよ！ 秋野さんはどうなの？ 秋野さんだって魔法関係者じゃない！」

この切り返しは予想外でした。

「僕はダメですよ。既にある人と仮契約してますし、その人以外とする気もありません」

「え、そうなの？　じゃあ誰としてるのよ！？」

「秘密です」

絶対教えませんよ。しかるべき時が来るまでは。

「秋野さん、相談に乗ってくれてありがとうございます。あとは何とかしてみます」

「そうですか、頑張ってくださいね。あと明日も念のため学校休みますので」

実はまた体がだるくなってきたんだよね。今日は早く寝なきゃ。

「あ、そういえば秋野さんは風邪ひいてただっけ。ごめんね、押しかけちゃって」

「いいですよ。これは僕の役目ですし」

「じゃあこれで失礼します」

二人が帰って行ったあと、僕はリンに夕食の配達を頼んで、それを食べた後寝た。

「ネギ Side」

昨日秋野さんに話を聞いてもらったことで少し気が楽になった。
ちなみにカモくんは、今日の朝、玄関扉の前に居た。

「兄貴、今日俺っちも学校に行ってもいいっすか？」

まあ、喋らなければ大丈夫かな。

「うん。でも喋っちゃダメだよ」

「ネギーー。早くしないと遅刻するわよー」

うわあ。早く行かないと！！

「おはよう、ネギ先生」

僕が昇降口でエヴァンジェリンさんを探していると、向こうから
声をかけてきた。うう、やっぱり怖いや。

「今日もまったりサボらせてもらっよ。フフ、ネギ先生が担任にな
ってからいろいろ楽になった。そうそう、タカミチや学園長に助け
を求めようなどと思うなよ。また生徒を襲われたりしたくはないだ
ろ？」

うっ。

僕はその場から離れるために走ってしまった。これじゃあ先生失格だよ……。

「ネギの兄貴、すっかりしろよ！ あの二人っスね！？ 舎弟の俺
つちが……」

「エヴァンジェリンさんは吸血鬼なんだ……。しかも真祖の」

「故郷へ帰らせていただきます」

どうしよう……。このままじゃいけないよね。

「だったらネギの兄貴と姐さんが仮契約して相手の片一方をボッコ
ちまえばいいんだよ！」

でも……でも秋野さんは仮契約はあんまりおすすめできないって言
ってたし……。でもこのまま次の満月になるまでやられるのを待つ
てるよりかは反撃したほうが……。それにこのままじゃ僕先生とし
て失格だし……。

「わ……わかった、やるよ僕！」

「もっつ、一回だけよ」

「仮契約……！」

僕、頑張らなくちゃ！

僕は放課後に茶々丸さんを尾行することにした。

茶々丸さんはロボットだったんだ。全然知らなかったよ。それにしてもすごいいい人だな。でもなんでそんな人がエヴァンジェリンさんの従者をやってるんだろう？

「……こんにちは。ネギ先生、神楽坂さん。油断しました。でもお相手はします」

「茶々丸さん、僕を狙うのはやめていただけませんか？」

茶々丸さんはいい人だから、やめてくれないかなあ。

「……申し訳ありませんネギ先生。私にとってマスターの命令は絶対ですので」

うう。しょうがない。やるしかないか。

「行きます！！ 契約執行10秒間！！ ネギの従者『神楽坂明日菜』！！！！」

すごい！ もともと速かったアスナさんがさらに速くなって！

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル、光の精霊11柱……集い来たりて……『魔法の射手・連弾・光の11矢』！！」

これでっ！

「追尾型魔法至近弾多数、よけません。すいません、マスター……もし私が動かなくなったらネコのエサを」

や……やっぱりダメ！！でも間に合わない！！

「喰らえ。『影の門』」

え？ 僕の魔法が消えた！？

「どづいうことなのよ！ なんであんたがここにいるの！？」

そこにいたのは、今日学校を休んだはずの秋野さんでした。

〈ネギ Side end〉

まったく。教師なのに生徒に手を出すとは最低ですね。まあ、原因はどうせあのオコジヨだし、そもそも教師と生徒という関係を見れば正しい戦法ですしね。

「秋野さん、何でここに居んのよっ！」

まるで僕がいたらいけないみたいない振りですね。

「家に食材が何もなくて、買い物に出かけようとしたところで、魔法反応があつたので、来てみたらこんな状況で。ああ、状況は大体理解しましたから説明しなくても結構ですよ。あ、絡繰さん。帰ってもらって構いませんよ。あとのことは僕がやっておきますから」
「では、お願いします」

うーん、まだ感情と呼べるようなものはないか。やっぱり伊織の時みたいにはすぐは無理か。まあ、それは置いていて。

「で、ネギ先生。なんで絡繰さんを襲ったんですか？」

「やいやい、てめえもエヴァンジェリンの一味なんだから！ 兄貴、こいつの話なんて聞かなくていいですぜ」

この害獣が。消し去ってやろうか？

「黙りなさい、害獣。それ以上戯言をぬかすというなら、処分するぞ」

「ひいひいひい」

さて、邪魔な害獣も静かになつたし、話を進めますか。

「もう一度聞きます。なんで絡繰さんを襲ったんですか？」

「……エヴァンジェリンさんの従者だからです」

ふむ。確かに彼女は従者だし、戦いとしては間違っていない。

「それだけですか？ たったそれだけの理由であなたは自分の生徒を襲ったんですか。はつきりいみましょう。あなたは教師として失格です。ただし、それを反省してるといふなら、その経験を次に生かせばいい。大体、なんでそんな害獣の助言に従ったんですか？ 宮崎さんと仮契約させようとした時点で僕なら信用しませんけどね」

ネギ先生は疑うということをおまじりしないからね。でもこのままだけじゃ将来騙されて利用されちゃうし、性格矯正でもしようかな？

「俺たちは害獣じゃない！ 立派なオコジヨ妖精だ！！」

本当に消そうかな？ こいついなくても仮契約なら僕が魔方陣書けばいいだけだし。

「消すぞ？ いい加減自分の立場が分かってもいいんじゃないかな？ 僕は君の罪状についても詳しく知ってるし、向こうの友人と連絡とればいつでも君を刑務所送りにできるんだよ？」

さてと、言いたいことは言ったし、買い物して帰ろうかな。

「では、明後日学校で会いましょう」

今日は何が安いかな。

さて、時間はとんで、今日は停電の日だ。この日は学園結界の効力が落ちるらしく、侵入者が多くなるらしい。だから、僕も夜の警備をすることになった。

「龍宮さん、眠くないんですか？」

龍宮さんは昨日も警備してたから寝不足だと思うんだけど。授業中にも寝てないし。

僕？ 僕は授業中は頭の中で新しい魔法考えてますよ。だって、先生が僕のこと指してくれないから暇なんだもん。

「いや、私だって眠いさ。ただまあ、たった二日の徹夜ぐらいで泣き言を言っているには生きていけない世界にいたからね。こんな程度で腕が鈍ることなどないさ。それよりも集中したほうがいいぞ。私と違って君は前線で戦っているんだから」

そうでした。あまりにも弱くて眠くなってきたから話してるんです。……あれ？ もう敵がないいや。

「刹那、そっちは終わったのか？」

あ、桜咲さんも帰ってきた。

「ああ。そっちは大丈夫だったか？ まあ、秋野さんと龍宮なら心配など無用とは思いますが……」

ええ。心配無用です。あんな雑魚に手間取るほど僕や龍宮さんは弱くありませんから。

「それより、秋野さん。聞きたいことがあるのですがいいですか？」

桜咲さんが僕に聞きたいこと？ …… ああ！ 神鳴流のことか。

「神鳴流のことですか？」

「はい。あなたは神鳴流をどこで習ったんですか？ 私の記憶にある限りでは、あなたは一門の中にいなかったのですが」

さて、どう言い訳しようかな。未来人っていうことを明かすわけにはいかないし、誰かに習いましたっていうのが無難かな。

「僕の神鳴流は僕の剣の師匠から教わりました。師匠はもう亡くなりましたが、最後の最後で自分が教えていたのが神鳴流だと教えてくれました。だから僕は正式な神鳴流の継承者ではありません」

微妙に真実の入ってる嘘って見抜きづらいからね。そんなに嘘を言ってるわけでもないし。まあ、師匠が命だったから、僕もちよつと興奮したりすると目の色が反転しちゃうんだよね。

「そうだったんですか。じゃあ、今度一緒に稽古しませんか？ まだまだ私にはお嬢様を守るだけの力が無いので、二人で切磋琢磨していけばいいと思うんです」

稽古か。まあ、腕が鈍らなくなるし、いいかもね。

「ええ、いいですよ。まあ僕は二刀流なので参考にならないかもしれませんが」

さて、停電復旧まであと10分。今から行けば間に合うかな？

結論。間に合わなかった。

僕が橋に着いたときは、予定よりも早く復旧したおかげでエヴァちゃんが空中から落ちているところだった。そしてネギ先生がエヴァちゃんを助けて、和解していた。

「ネギ先生が勝ったんですか？」

僕は絡繰さんに聞いてみた。

「最初はマスターが遊んでいて、わざと同じ呪文を使っていたのですが、『雷の暴風』と『闇の吹雪』のぶつかり合いの時にネギ先生の魔力が暴発してマスターの服が吹き飛ばされました。マスターは反撃しようとしたんですが、停電が復旧してしまい、そのあとはご覧になったとおりです。客観的な目線から言わせていただきますと、まだ決着はついていないというところでしょうか」

やっぱりそうだったのか。記録だとネギ・スプリングフィールドはこの戦いにおいて圧勝したことになっていただけどやっぱり違ったか。ていうかこの時点で闇の福音を圧倒出来るなら、そのあとにある方法をとることはなかっただろうし。

「ありがとうございます。絡繰さん」

「あ、秋野さん。いつからここにいたの？」

おや、気づかれてしまいましたか。

「貴様、いつからいた？」

エヴァちゃんに凄まれても全然怖くありません。だって今は魔力もないただの幼女ですし。

「えーとですね、確か闇の福い……失礼。闇の幼女が無様に落ちていくところからですね」

「なぜ言い直した！ 私は闇の福音で、悪の魔法使いだ！！ 闇の幼女ではない！！！！！」

「では、ダーク・エターナル・ロリータと」

「それも違ーーーーーう！！！！」

ふふふ。弄りがいがありますね。

え？ だれかに似ている？ 気のせいですよ。僕はどこの司書じゃないですよ。

「ふふふ、月夜だけとは思っなよ」

だから凄んでも今はただの幼女だって。

まあ、こうして吸血鬼事件は幕をおろしたのであった。おしまい。おしまい。

後日談というか今回のオチ。

僕はいつも通り携帯のアラーム（曲は内緒）で起きて、いつものランニングをして、いつも通り神楽坂さんと会って、いつも通り授業を受けた。

変わったことといえば、桜咲さんが話しかけてくるようになったことと、エヴァちゃんと普通に会話できるようになったことかな。周りの人はエヴァちゃんが話していることに驚いてたけどね。ていうかどんだけエヴァちゃんは話していなかったんだらうか。

まあ、そんなこともあつて放課後。

僕はたまたま通りかかった喫茶店にエヴァちゃんがいるのを見つけて、入って行った。すぐあとにネギ先生がきたからエヴァちゃんを弄り倒すことができなかった。残念。

どうやらエヴァちゃんはナギ・スプリングフィールドのことが好きだったらしい。僕の真の姿を見たらびっくりするだらうな。いつかやってみよう。

なにやら店を出るようなので僕もついていくことにした。

「京都に行ってみるがいい。どこかに奴が一時期住んでいた家があ

るはずだ。奴の死が嘘だというのなら、そこに何か手がかりがあるかも知れん」

エヴァちゃん、なんで隠れ家のこと知ってるんだろう？ やっぱリストーカーしてたのかな？じゃあ、名前を変えなきゃね。うーん、エヴァンジェリン・A・K・S・マクダウエル……微妙だな。じゃあ、闇の付き纏い幼女にしよう！

「何やらすごく不名誉な名をつけられた気がするんだが……。貴様か！」

あ、ニヤニヤしてたのバレたかな？

「いいえ、別にあなたのことを闇の付き纏い幼女だと思ってませんよ？」

「全部言ってるわーーーー！！！！！！」

やっぱり弄ると面白いや。

第十五話・「吸血幼女」(後書き)

感想お待ちしております。

第十六話・「修学旅行」(前書き)

今更ですけど、この小説は基本的に主人公目線で進んでいます。

なので、原作の場面がたびたびスルーされます。そこらへんは各自脳内補完でお願いします。

第十六話・「修学旅行」

ふふふふ。京都サイコーー!!!
作者

お昼に学園長室に呼び出されました。正直面倒です。なんで後頭部の長いじじいを見なければいけないんでしょうか。

「え……修学旅行の京都行きは中止!？」

叫ばないで下さい。頭に響く。

「まだ中止とは決まっとらん。ただ先方がかなりイヤがっておつてのっ」

「先方？ 京都の市役所ですか？」

いや、市役所の訳ないでしょうが。せつかく金ヅル……失礼。お客様が来るのに断るわけないでしょう。

「関西呪術協会、それが先方の名前じゃな。じつはわし、関東魔法協会の理事もやっとなるんじゃが、関東魔法協会と関西呪術協会は昔から仲が悪くてのう。今年は魔法先生が一人いると言ったら、修学旅行での京都入りに難色を示してきおつた」

敵対してるんだったら逆にもっと多く魔法先生付けたほうがいい

んじゃないかなあ。もちろん秘密で。だってこのままじゃ何も知らない一般の麻帆良生徒を影から人質にとって脅迫できるじゃん。まあ、向こうの長が自分の義理の息子だからそんな心配をしてないんだろっけどさ。」

「で、その確執を取り除くために特使として西へ行ってもらいたい。この親書を向こうの長に渡してくれるだけでいい。ただ道中向こうからの妨害があるかも知れん。彼らも魔法使いである以上生徒たちや一般人に迷惑がかかることはせんじやろうが……。受けてもらえるかの？」

「はい。任せてください」

話は終わりかな。次は僕が。

「では、ネギ君は退出してよろしい。秋野君、君にはまだ話があるのじゃ。こっそり出ようとするでない」

ちっ、バレたか。

「で、話ってなんですか？　じじい」

「のう、さすがにじじいは止めてくれんかのう」

「しょうがないですね。では、学園長。話とは？」

実は僕もじじいって言いづらかったんだ。だってじじいって呼んでると、つい敬語を忘れそうになっちゃっし。

「うむ。今回の修学旅行中、ネギ君のサポートをやって欲しいんじ

やが

「別にかまいませんよ。もともとそういう条件でしたからね。ですが、基本的にはネギ先生に行動は一任します。僕が出張らないといけないような事態になるまでは僕は相談こそすれど手は出しませんが、それでもいいですか？」

僕だって京都を楽しみたいんだから、これくらいはいいよね？

「まあ、いいじゃろ。ついでに木乃香の護衛もやってくれんかの？」

「近衛さんにはもう桜咲さんがいるじゃないですか。それでも護衛を頼むというなら、追加料金を請求しますよ。具体的には、大体夜の警備の十回分くらい」

「うむ。わかった。それで手を打とう。それにしても随分と控えめじゃのう。もっと請求してくると思ったんじゃないが」

学園長は僕のことをそんな風に思ってたんですか。僕はそこまでお金に執着してませんよ。

「まあ、近衛さんの護衛につけば、僕が気になってる人とも会えるかな、と思ひまして」

「ほう、君が気になるといふ人はどんな人なんじゃ？」

「僕と同じ二刀流の娘ですよ。ふふ、早く戦いたいなあ」

修学旅行当日。僕が駅に着くと、もうほとんどの人が来ていました。あ、エヴァちゃんと絡繰さんは来ないから僕が最後か。

「そつえば桜咲さん。僕たちの班ってどうなるんでしょう。三人しかないから、他の班に入るんでしょうか」

ああ、そつえば桜咲さんには僕も護衛になりましたってちゃんと話してありますよ。

「ええ、多分そつなると……」

そつえばザジちゃんと話したこと無い気がする。

「ねえザジちゃん、手に乗ってるのって何？」

「……………」

「へえー、トモダチかあ」

ザジちゃんとも仲良くなれそうです。

「……………ネギ先生、どうすればいいんでしょうか」

ああ、もう僕たちの班の点呼だったんですか。

「じゃあ、アスナさんは桜咲さんを、いいんちよさんはザジさんを、

超さんは秋野さんをお願いできますか？」

「はいはい」

「構いませんわ、ネギ先生」

「分かったネ」

運よくリンの班に入ることが出来ました。……嘘です。運じゃないです。僕がちょっとネギ先生を人心操作しました。反省も後悔もしてません。もう効果は切れてますので、バレることもありません。

「で？ ネギ坊主に何を使ったネ？」

前言撤回。リンにはバレてました。

「いやーちょっとした暗示を？」

「まったく、これが私の従者とは呆れるネ」

別にいいじゃないですか。誰にも被害は及んでないですし。

「ひい！ カ……カエルはダメでござる~~~~!!!!」

これは珍しい。長瀬さんが悲鳴をあげるなんて。

「楓はカエルが苦手ネ。これも記録通りか……」

こんなときまで計画のこと考えるなんてまじめ過ぎですよ。少しは気を抜かないと肝心なところで失敗しちゃうよ？

「カエル108匹回収終わったアルよ」

古さん、さすが武道四天王。でもカエルを（おそらく）素手で捕まえるっていうのは、女子的にはどうなんだろう。

「あつ、親書が！」

燕の式神か。まあ僕もとりあえず追いかけてみるか。

「……ネギ先生、コレ落し物です」

「ありがとうございます、助かりました！」

「それは先生のモノですか？ 気を付けたほうがいいですね。特に向こうについてからは……」

おい、その言い方は明らかに勘違いされるよ！！ なんか言葉の端々から敵対オーラが！

ネギ先生は害獣に唆されて勘違いしちゃったみたいだし。

とりあえずネギ先生も自分の席に帰って行ったし、一応桜咲さんに言っておこうかな。

「桜咲さん、あれじゃあ自分が敵ですって言うてるようなものだよ？ どうやら勘違いしちゃったみたいだし」

「え………そうですか？ まあ、お嬢様の護衛に影響が出なければ構いません」

絶対影響出ると思っただけ。まあ、本人がいろいろ言ってるなら僕もいいや。

「じゃあ、僕は席に戻るんで、何か協力してほしいことがあったら言ってください」

さてと。京都まであと一時間くらいあるし、一眠りするか。

やってきました、京都！　実は僕京都大好きなんですよね。一番好きなのは平等院です。　—

「これが噂の飛び降りるアレ」

「誰かつ！！　飛び降りれっ」

「では拙者が」

「おやめなさいっ」

だから、僕は静かに鑑賞したいんです。まあ、この面子じゃ無理だとは思いますがね。

「ここが清水の本堂、いわゆる『清水の舞台』ですね。本来は本尊の観音様に能や踊りを楽しんでもらう装置であり国宝に指定されて

います。有名な『清水の舞台から飛び降りたつもりで……』の言葉通り、江戸時代実際に234件もの飛び降り事件が記録されていますが、生存率は85%と意外に高く……」

「うわっ、変な人がいるよ」

「夕映は神社仏閣仏像マニアだから」

「そして、来たるべき時のために、修復のための木を育てているんだ」

「うわっ、ここにも！」

失礼な。僕は綾瀬さんみたいに長く話してません。まあ、僕も語るうと思えばあれくらいなら語れますけどね。

さて、僕はもう少し堪能しますか。

ふと周りを見るとクラスメイトが一人もいませんでした。時計を見れば集合時間間近でした。京都の魔力にあてられたみたいですよ。

僕がバスのところに行くと、なんだかお酒の匂いがしました。

リンに聞いてみようと思ったら、リンが酔い潰れていたのので桜咲さんに聞くことにしました。どうやら音羽の滝にお酒が混入されて

いたようです。

どんな味でしょう？ 確かめようと滝に行こうとすると、桜咲さんにとめられました。

桜咲さん曰く「秋野さんが酔って暴れられたら京都がなくなる」そうです。僕、そんなに暴れたことあったっけ？

無事にホテルに到着しました。滝での一件以来妨害もなくてよかったです。

さてリンの様子でも見てきますか。

部屋に行く途中に桜咲さんとすれ違いましたが、どこに行くんでしょうか。

手にお風呂用具を持っていたので、お風呂だろっけど今って教員の時間だったよっけ……。

僕が部屋に着いたとき、リンは起きていました。でもまだ頭痛そうにしているのでアルコールは抜けてないみたいですけど。」

「大丈夫？ リンが酔い潰れるなんてどんな量飲んだの？」

あ、実は僕たち向こうで飲んだことがあります。

みんなは真似しちゃダメだよ。お酒は20歳から。

「いや、喉が渴いてたヨ」

頭がまわってないみたいで言い訳に説得力がないです。まあ追及はしませんけど。」

「じゃあスポーツドリンク買って来るよ。少し待ってて」

そう言っ僕は部屋から足早に立ち去りました。

……実は理性が負けそうだったんです。だって上気した頬に涙目、しかも上目遣いなんて反則ですよ！！

ん？ 怪しい気配がありますね。まあ、まだ僕が出るような感じじゃないし、ネギ先生たちに任せるか。

気持ちも落ち着いたし、飲み物買って帰りますか。

ホテルの入口付近でお札を貼っている桜咲さんに遭遇しました。

「どうやら式神が近衛さんを連れ去ろうとしたらしく、次はそんなことがないようにとしているみたいです。」

「じゃああの時の怪しい気配はそれか」

僕が呟くとみんな驚いたようにこっちを見てきました。

「気付いてたんだったら手伝ってよ!」

「いや、気配っていつてもかなり遠い所でしたし、何より僕にはりに飲み物を買っていくという重要な任務があったので……」

まあ、被害はほとんど出てないのでいいと思うんですけどね。

「それよりもこれからのことです。敵が近衛さんを狙っているというなら、誰か一緒にいたほうがいいんじゃないですか?」

「だって事情を知ってるメンバー全員がここにいちや対応出来ないよ?」

「じゃあ私が木乃香の傍にいるわ。桜咲さん、あとよろしくね」

でもあの気配はどっかで会った気がするんだよなあ。

僕は記録を熱心に読み込んだわけじゃないし、細かい所はわからないんだよね。

リンに聞こうにも寝ちゃってるし。受け身になるしかないか。

「じゃあ僕も部屋に戻りますね。何かあれば連絡して下さい」

考えててもわかんないし、部屋に戻ってリンの寝顔でも鑑賞してるとしよう。

僕は携帯の着信音で目が覚めました。どうやらリンの寝顔を見て、そのまま寝ちゃったみたいです。

近衛さんが攫われたようなので、僕も動きますか。一応護衛任務を受けてるしね。

「じゃあ、桜咲さん、今から向かいますんで」

僕は言うことだけ言って電話を切って、準備をして、影の転移で現場に向かいました。

僕が桜咲さんの影から出てきたとき、いきなり目の前に火があつてびっくりしました。

「あ、秋野さん！ 今どこから出てきたんですか！？」

「え？ 桜咲さんの影からですが、わかりませんでした？」

なんで桜咲さんがびっくりしてるんだろ。今までだってそういうことしたことあるのに。まあいっか。とりあえずは現状を把握しないと。

「で、今はどういう状況ですか？ 近衛さんが攫われかけてるっていうのは分かりますが」

「ちょっと待っててください、まずこの火を消します！ 『風花風塵乱舞』！！」

ああ、大文字焼きが……。なんて思ってる場合じゃないんですけどね。

「奴はおそらく関西呪術協会の過激派だと。お嬢様の力を利用して協会を牛耳るつもりだと思われませう。協力してくれませうか」

あ、今思い出した。確かこの時にあの娘が登場するはずだ！ なんだかテンションが上がってきました！！

「分かりました。では『開け、影の門』……行きますよ！」

前鬼と後鬼は二人が相手をしているので僕は近衛さんの奪還を目指します。

「え〜〜い」

うおっ！ 急に現れたから反射的に斬り殺すところだった。さすがにネギ先生の前で殺しはアウトだろうし、多分目的の娘だったし。

「どうも〜神鳴流です〜。ところでお姉さん、なんでうちの剣筋と同じなんやる」

だって僕の師匠は君の子孫だから……なんて言えませんし。どう言えばいいんでしょう。……言わなくてもいいか。

「そのことは戦いに関係ないでしょう。ほら、早くやり合いましょ
しゅ」

「なんやお姉さんと気が合いそうですな〜」

ふふふ。楽しくなってきましたよ。

「『ざーんがーんけーん』」

「じゃあ、同じく『斬岩剣』」

ガキツという音とともに僕たちはお互いに弾き飛ばされました。

「じゃあ、次は……『斬空閃』」

「おなじく〜。『ざーんくーせーん』」

「またも相殺。でもお互いにまだ本気じゃないし、もっと長く戦っていたいな。」

「あぶるぺらーっ」

ん？ なんだこの変な悲鳴は。

「つ……月詠はん。て、撤退やっ」

「え、終わりですか？」

なんだ、決着がついたのか。

「じゃあ、月詠さん。私の名前は秋野友といいます。ではまた今度」

「うう、また今度やり合いまひょう」

とりあえずは僕の計画は成功ですね。向こうが興味を持ってくれたみたいだし。近衛さんが無事かどうかは桜咲さんが確認してまし、僕は帰りますか。

「ねえ、秋野さん。なんで敵と仲良く話してたのよ」

「あの子僕と同じ二刀流ですし、戦ってて楽しいんですよ。だからまた今度やりましようって」

なんで、神楽坂さんは呆れた顔してるんでしょう。

「まあいいわ。早くホテルに帰りましよう」

こうして僕の修学旅行初日は幕を閉じた。

第十六話・「修学旅行」(後書き)

感想お待ちしております。

第十七話・「昼間の出会い」(前書き)

すみません。いつにもまして短いです。

第十七話・「昼間の出会い」

お茶はおいしいなあ

秋野友

修学旅行二日目の朝を迎えた。昨日は夜遅くまで行動していたので朝が辛い。

「リン、今日僕たちってどこ行くんだった？」

「今日は東大寺に行く予定ネ。どうせならあのシーンでも見に行くか？」

ああ、悩むなー。東大寺もゆっくり見たいしな。

「いや、止めておこう。僕は東大寺をゆっくり見ることにするよ」

さてと、昨日の今日で襲ってくることはないだろうし、桜咲さんもいるから大丈夫かな。今日一日は好きに行動させてもらおうとしよう。

ん？ 向こうが騒がしいな。まあいつか。僕が行く意味もないし。

やってきました東大寺。公園ではザジちゃんが曲芸をしてましたが、東大寺が優先です。

「大きいですね……。昔の人はよくこんな大きい仏像を作れましたね」

僕の周りに班員はいません。みんなどっかに行っちゃいました。つまり、誰に気を使うこともなく、存分に鑑賞できるということですよ。

「っ大仏が大好きでっ」

この声は宮崎さんかな。できれば声はもう少し控えめにしてくれるところらしいな。

まあ、しょうがないか。告白するっていうのは宮崎さんにとっては大変なことだし、変に緊張して違う言葉が出ちゃったのかな。

「で、その君。僕に何か用でも？」

「驚いたね。僕に気づいていたのか。少し外で話さないかい？」

その少年はそれだけ言うとさっさと外に出て行ってしまった。はあ。一応行きますか。

「で、君。名前はなんていうのかな。いつまでも君っていう呼び方はイヤなんだよね」

「そついえば言ってなかったね。僕はフェイト。君は秋野友であつてるかい？」

えー、なんでここにフェイトがいるの？ 僕はまだ接点なかったと思うんだけどな。

「うん、合ってるよ。で、話ってなんだい？」

「そんなに警戒しなくてもいいよ。君の名前は月詠さんとアリスさんから聞いたんだ。どうやら君は月詠さんにかなり好かれているらしいよ。アリスさんからは、一度会ってみるといって言われたんだ。だからこうして会いに来ただけさ。僕個人は君と敵対するつもりはないよ。まあ、命令でもされれば話は別だけど」

月詠さんに好かれたのか。思ったよりもあの戦いがよかつたみたいだね。

アリスさんだつたらありえそつな話だな。あの人は面白くなりそつなことは全力でやる人だし。

「そうだったんですか。僕から一つ聞いてもいいかな。ああ、答えることで不都合が生じるなら答えなくてもいいよ。で、フェイト君はなんで関西呪術協会に協力してるの？」

「まあ、名前は明かせないけどある人からの依頼でね。内容も詳しく聞かないでくれるとありがたいな」

「そう。ならいいよ。で、君は僕に聞きたいことはないの？」

アリスさんのもとを訪ねたつてことは、何か聞きたいことがあつたはずなんだよなあ。あの人確か、『未知の開拓者』つていう風に呼ばれるくらいの人だし。

「僕が聞きたいのは、君が何者かつていうことだよ。月詠さんが昨日まつたく同じ剣筋の人と戦つたと言つててね。そのことが僕には不思議に思えたんだ。なにせ一回も見たことのない人の剣筋と同じ剣筋で戦うなんてありえないと思つていたからね」

「そのことなら、簡単だよ。僕も月詠さんと同じ二刀流で、神鳴流で、しかも月詠さんと同じように対人に特化した剣筋だからね。自然に同じようなものになるんだよ。だから、一回見てしまえば同じ剣筋にすることもできる。相手がそれを見れば、あたかも最初から同じだと錯覚しちゃうだろうね」

自分で言つてて苦しい言い訳だなあ。本当のこと言つても信じてくれないだろうけど。

「ふうん、そう。本当はもうちょっと話していたんだけど、もうそろそろ君は時間だろう？ ここの会計は僕が持つから」

太っ腹だね。まあ、お茶一杯だし大した金額でもないけど。

「じゃあね。また君とは会うことになりそうだね。 テルティウム 3番目」

フェイトは驚いた顔をして僕を見送ってくれた。

第十七話・「昼間の出会い」(後書き)

感想お待ちしております。

第十八話・「夜の宴」

枕でも十分危ないんじゃない

秋野友

昼に予想外のことが起こったけど、東大寺はゆっくり見れたのでよかった。

で、今現在目の前に床を転がっているネギ先生がいるんだけど、どうすればいいんだろう。

「えーと、神楽坂さん、なんでこんな状況に？」

「あ、うん。ちょっとね」

このままじゃ役に立たないからどうにか……あ！消えた！……放っておこう。

その時探しておけば、こんな状況にはならなかったと、僕は今になって思った。

「で、回想はもう終わったのかな？」

はい。僕は今リンに追いかけてる最中です。

どうやって逃げよう。くそっ、この事件のこと忘れてたっ。

とりあえず。

「リン、まだ回想は終わってない。待ってくれ」

「しょうがない従者ネ。いいだろうっ、待ってあげるヨ」

か……回想スタート……！

ネギ先生が消えたあと、僕は神楽坂さんと桜咲さんと昨日の敵について話すことにした。

「ねえ、桜咲さん、なんで木乃香が狙われたの？ 親書持ってるのはネギじゃない」

バカレッドにしてはよく考えてるじゃん。

「前にも言いましたが、奴らは関西呪術協会の強硬派と思われま。奴らはお嬢様の莫大な魔力を使って、関西呪術協会を牛耳ろうとしているのでしよう」

「加えて近衛さんは大戦の英雄、近衛詠春の一人娘。それだけでも狙う価値はありますね。なんにせよ、近衛さんの護衛には桜咲さんと僕が就いてますから、神楽坂さんはあまり心配しなくてもいいですよ」

一応これが親書を奪う為の準備段階かもしれないという疑念はありますし。

「でも、木乃香は放っておけないわ！ それに桜咲さんが強いのは知ってるけど秋野さんはどれだけ強いのか？」

僕の強さですか。僕は周りの条件や状況で強さが変わるからなあ。

「からぐ……神楽坂さん、秋野さんは強いですよ。魔法も最大魔法も使えますし、剣の腕も神鳴流が使えるので私よりも強いですよ」

あら、僕ってそんなに高く評価されてたんだ。今はそんなに魔法が得意なわけじゃないから遠距離で攻められたら負けちゃうよ？

「へえー。秋野さんってそんなに強かったんだ。あ、桜咲さん、私のこと明日菜でいいわよ。私も刹那さんって呼ぶから」

「あ、わかりました」

「まあ、ちょっと過大評価ですけどね。明日の班別行動は僕は緊急時以外はあまり関わらないようにします。ですので何かあったら携帯に連絡を。ちなみに僕がこういう行動するのは学園長から許可されてます」

学園長に許可取つといてよかった。これなら学園長のせいにも出
来ますし。

「え？　もしかして明日は私たちだけ？」

そうは言ってないはず。ちゃんと緊急時には働きますから。

「いや、そうは言ってないですよ、明日菜さん」

「へ？　そうなの？」

「ええ。僕は緊急時以外は普通の行動をしますが何かあったらすぐ
駆け付けますよ」

じゃあ着いて行って、普通の行動してればいいじゃんっていうツ
ッコミは無しで。………そういえば普通の行動ってなんでしょう？

「………なんか違う気がするような。とりあえずなんかあったら秋野
さんと呼べばいいのね？」

「はい。まあ何も無ければいいんですけど………」

まあ、絶対何か起きるんですけどね。

「うわ~~~~~ん」

ん？ 今の声は。

「ネギ？ 私ちよっと思つてくるわ」

神楽坂さんは声の聞こえた方へ全速力で走って行った。放つておいてもいいんじゃないの？

「じゃあ桜咲さん、僕は部屋に戻るんで」

「あ、はい」

さて、部屋でまったりしよ。

時間は跳んで、就寝時間辺り。僕は温泉に入りたくなつたので人払い（ルーン使用）をして、温泉に入っていました。

「ふう。いい気分です。……でも僕、女の子ですよ？ 覗きですか、フェイト君」

一応気配は隠してみたんだけど本気じゃないだろうね。むしろ僕に見付けて欲しいのかな。

「済まなかつたね。でも君が一人になるタイミングが無くてね。許してくれるかな」

「まあ、怒ってないし、許すも許さないもないですけど。で、何か用ですか？」

僕は覗かれたくらいじゃ怒りませんよ。本来僕は男だから。

「一つだけね。なんで君は『三番目』っていう呼称を知ってるのかわかって思ってるね」

「そのことはアリスさんから聞いたんだよ。春休みにアリアドネーに行ったときにアリスさんと一緒に行動した時があつてね、その時に『フェイトってやつは三番目だから』って言われたのを思い出してね。まさかそれが当たってるなんて思わなかったけど」

「アリスさんか。なら知ってても不思議じゃないね。じゃあ、僕はこれで」

ええ！？ 本当にこれだけのために来たの！？

「ああ、それと君に一つ言っておこうかな。今この旅館の敷地全体に仮契約の魔方陣が書かれているみたいだから、気を付けてね」

それだけ言うと本当にフェイト君は帰って行った。もちろん水のゲートで。

っていうか今日だったか。あの害獣の金儲けのための催し。まあ、これがないと宮崎さんの仮契約がなくなっちゃいそうだから、仕方なく容認してあげよう。

「さて、ありがとうございます」

長く浸かっているとのぼせちゃうし。

僕が部屋に帰ると、リンがいなかった。更にはバカレンジャーの二人もいなかった。葉加瀬さんに聞くと、怪しいゲームに参加するためにバカレンジャーはいなくなっただけらしい。

「リンは？」

「えっと、超さんならその水筒の中身を飲んだ後どっか行きました」

ん？ 水筒？ まさか！

「これは僕の水筒……しかも空になってる」

「何入れてたんですか？」

「……音羽の滝で流れてたお酒」

非常にマズイです。この水筒（1・5？）の中身を全部飲んだって……。

「見つけたヨ。さあ、私とキスするネ」

はい。リンが暴走状態に入りました。

さあ、逃げよう……！

で、冒頭へと。

「ふう。少し頭を冷やさないか、リン」

「十分私の頭は冷えてるネ」

こりゃダメだ。話し合いができない。

「いや、冷えてないからね。酔っぱらってるから」

「酔っぱらってらいネ」

呂律も怪しくなってきた……！！

「仕方ない。強制的に頭を冷やすか。まずは……人払いのルーンを蒔いて……よし。ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マジステル。来たれ水精1柱。『魔法の射手（極弱）・水の一矢』」

魔法の射手はリンの頭に正確にあたり、リンはずぶぬれになった。……失敗した！！ 浴衣が透けて大変なことに……！！

と、とりあえず、浴衣を乾かさないと!!

「プラクテ・ビギ・ナル。『火よ灯れ』」

ふう。危なかった（主に理性的な面で）。

「で、リン、頭は冷えたかな？」

「……冷えたネ。で、仮契約はどうするネ」

まだ引っ張るの？

「ここではダメかな。大体僕もリンも偽名使ってるのに仮契約なんてしたらお互いの本名ばれちゃうよ。この魔方陣だとカードが害獣のほうに行くから」

「それもそうネ。じゃあ、麻帆良に帰たらするネ」

「うん。約束しよう」

「じゃあ、部屋に帰るネ」

はあ。これでひと段落かな。僕も部屋に帰って寝よ。

翌朝。

記録通りネギ先生と宮崎さんが仮契約をしていた。宮崎さんには教えない方針で行くのかな？ そっちのほうが僕は危険だと思うんだけど。

「友ちゃんも魔法使いなんだって？」

ああ、朝倉さんにはれたんだ。ていうかなんで僕のことか？

「カモつちに聞いたんだ」

害獣め。

「『開け、影の門』」

とりあえず害獣を放り込んで制裁です。

「へえー、それが友ちゃんの魔法かー」

まったく、どんどん魔法ばれが加速してる気が……。

さて、今日も楽しみますか。

第十八話・「夜の宴」(後書き)

感想お待ちしております。

第十九話・「シネマ村の戦い」

これくらい自力で切り抜けましょうよ

秋野友

やってきましたシネマ村！ ……あれ？ ここって確か何か起ったような……まあ、いつか。とりあえず着替えよう！！

僕はくノ一の格好に決めました。あ、長瀬さんとかぶった。

「秋野殿は本物の忍者のようでごさるな」

いや、リアル忍者が何をおっしゃる。

「「これでどうネ（アル）！！」「」

いや、江戸時代にチャイナ服ってあったっけ？ 似合ってるけど、いつもと変わんないじゃん。

四葉さんは普通の町娘。なんかいい服無かったのかなあ？

「どいてくださ〜い」

ん？ この声は……。

僕はリンを呼んで、ここで何があったのかを聞くことにした。

「ねえリン。ここって何か記録に書いてあったっけ？」

「確か……月詠が刹那サンと戦うはずネ」

そうだったんだ。じゃあ、さっさとここから出よう。月詠ちゃんが僕に興味を持ってくれたのはうれしいけど、こんなに人がいる中じゃ周りが大変なことになっちゃうし。

「じゃあさ、もう少し楽しんだら次のところ行こうよ」

この程度じゃ僕は関わんなくてもいいよね。

「ん？ 向こうが騒がしくなたネ。行ってみるヨ」

嫌な予感しかしない。

案の定、僕の嫌な予感は当たってしまった。そこには男装の桜咲さんと外人風の衣装を着た月詠ちゃんがいた。周りの人は劇だと思ってるみたいだけど、ちょっと危ないかも。

「おお、この場面だたネ」

絶対リンはこのこと分かってたな。

あれ？ そういえば、長瀬さんに古さん、四葉さんがいない。ど

「こ行ったんだろう？」

「お嬢様は私が守る！」

「一層劇つぼさが増したね。まあ、こつすれば相手も手加減せざるをえないからね。でも月詠ちゃんだし……一応警戒はしておこうかな。」

「30分後」

「決戦の場所にやって来ました。とりあえずここら一带に認識障害の結界を張ったのである程度までの現象は劇の演出として認識されるでしょう。」

「ひゃっきゃこお〜」

「おい！ なにやってんだよ！」

「何コレ〜。脱がそうとしてくる〜」

「なんか拍子抜けした。さっき焦ってた僕がバカみたい。これくらいなら僕がやらなくてもいいですよ。」

「雪中花！」

「おお、雪広さん強い！ あ、潰された。一応助けよう。」

「ダイナミックエントリー！！」

「技の選択に文句は受け付けません。だって今の格好忍者だもん。」

「あ……ありがとうございます、秋野さん。……ネギ先生は!？」
タフですね。

ん？ 天守閣の上にネギ先生がいますね。あとは、近衛さんと、
フェイト君、一昨日のサルの人と、鬼がいます。

「む？ 私に挑むとは愚かな河童ネ。力の差を思い知るがいいネ」
リンの心配は要らないみたいですね。じゃあ僕は向こうが心配で
たまらない桜咲さんに代わって月詠ちゃんの相手でもしますか。

「その剣士よ。この勝負は拙者が代わる。早く姫の所へ行くがよ
い」

「あ、秋野さん!？ ……わかりました」

桜咲さんは驚いてたけどすぐに状況を理解して近衛さんの所に行
つてくれました。

問題は月詠ちゃんのほうです。

「あ〜ん。せつかく先輩と楽しく戦ってたのに……。……おろ？ も
しかしてあの時のお姉さんどすか？」

分かってくれたのはよかったけど、こっから先どうしよう。

「月詠はん、撤退や」

ふう。撤退してくれるようでよかった。さて、劇という認識を徹底しようか。

「時間のようだ。だが次も狙うようならば、拙者の全力を以って相手いたそう」

「……次こそ奪いますえ」

月詠ちゃんも空気読んでくれてよかった。月詠ちゃんが帰っていったので僕も退散しよう。

さてと、桜咲さんの提案で近衛さんの実家に行くことになりました。でも、僕は行きません。なぜかって？ だって緊急時に呼んでくれれば影の転移使ってすぐ行けるし。

「じゃあ、何かあったら呼んでください。僕は旅館で待機してますので。ああ、そのまま泊まっても構いませんよ。僕が身代わり作りますし。旅館の防衛は僕がしますので、こちらに敵が来ることになっても大丈夫ですよ」

とりあえず心配事はないよと伝えたかった。

「では、私たちは行きますので、万が一の時はお願いします」

「りょーかいしました」

さて、着いていこうとしてる朝倉さんには僕の携帯番号は教えてあるし、何かあっても大丈夫でしょう。

「友、次の場所行くから早く来るネ」

リンも呼んでるし、行くか。

くお・ま・け

ネギ

「やっぱり他の魔法体系って難しいね」

「いや、使える兄貴のほうがすげえって」

「あー、お弁当なくなりますよ?」

「あ! 僕の分がない!!」

「あんたが食べるの遅いのが悪いのよ」

「アスナさんひどい!」

エヴァ

「暇だ……」

「私はネコにエサをあげに行ってきます」

「私も行く」

「ならばワシも行くのか」

「おい、なんでここにいる？」

「暇なんじゃよ」

「……」

第十九話・「シネマ村の戦い」(後書き)

感想お待ちしております。

第二十話・「湖畔の戦い」(前書き)

うー、うまく文章にならないー！。

第二十話・「湖畔の戦い」

あら？ いい実験材料がいるわね。
アリス・クロイツ

〈三人称Side〉

親善大使ネギ・スプリングフィールドによる関西呪術協会への親書の受け渡しは、犬上小太郎の妨害を除けば、つつがなく行われた。

今は歓迎の宴も終わり、各人が部屋で寛いでいる。

「木乃香、刹那さんが呼んでるわよ」

「せつちゃんが？」

部屋にいた近衛木乃香が出ていく。

そして程なくして白い少年が部屋にやってきた。

その少年は煙幕のようなものを出すと、部屋から去って行った。部屋には物言わぬ石像と化した三人がいた。

一方その頃部屋から出た近衛木乃香は神楽坂明日菜と一緒に庭に向かっていた。

「一体なんの用なんやる？　せつちゃん」

と、歩いている二人の頭に何かが当たった。

よく見ると、今まで普通にしていたであろう巫女たちが石になっていた。

「な……何よこれ。木乃香！　とりあえず刹那さんの所に行くわよ！　……『アデアット』！」

明日菜は自身のアーティファクトを出して、辺りを警戒しながら廊下を歩く。

「……ッ！　ハッ！」

明日菜は後ろに迫っていた白い少年に気付き、ハマノツルギを振るった。だがそれが当たることはなく、隙を突かれて木乃香を奪われてしまった。

ネギ・スプリングフィールドは焦っていた。自分の生徒である朝倉、早乙女、宮崎が石にされてしまった。そのことが彼のトラウマを刺激していた。

だが立ち止まってはられない。先程合流した桜咲刹那と一緒に木乃香を救わなければならないからだ。

ネギが明日菜に連絡を取ったときには、既に木乃香は敵の手に渡っていた。

「お嬢様を助けましょう。奴らの目的はわかりませんが、お嬢様の魔力を利用するというならば、リョウメンスクナの復活が目的の可能性があります」

「わかりました。では行きましょう！」

「はい。私は秋野さんに連絡をとります」

ネギは木乃香の奪還に向けて動き出した。

～三人称Side end～

僕が連絡を受けたのは、温泉から上がってすぐのことでした。

近衛さんがさらわれたようなので、僕も急いで向かいます。

「『開け、影の門』」

僕が桜咲さんの影から出てきたとき、ちょうどネギ先生が魔法を使つて、周りの奴らから身を隠しているところでした。

「桜咲さん、どういう状況ですか？」

「あ、秋野さん。今はお嬢様の魔力を使つて召喚された鬼に囲まれています。お嬢様を連れた奴らは湖の方へ向かいました」

湖つてことはリヨウメンスクナか。

「では、二手に別れましょう。僕がここに残ります。ネギ先生たちは近衛さんの所へ」

「え、秋野さん大丈夫？ 結構いるわよ」

「まあ、なんとか」

「じゃあ私も残るわ。私はネギの杖に乗れないみたいだし、刹那さんみたいに早く動けないから。それにこのハリセンはなんだか強いみたいだし」

確かに一発で召喚取り消しになるからいいかな。

「わかりました。では僕が道を切り開くので、そこを抜けて行つてください。ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マジステル。契約により我に従え、四属性の天使。聖なる力を以つて、魔を掃え。其は天より来たりし浄化の輝き。『天の方陣』……さあ、早く！」

くっ、さすがにかなりの魔力を持って行かれました。やっぱりこの姿じゃこの魔法は一回が限度ですね。

まあ、鬼の三分の二は吹き飛んだし、よしとしましょう。

「秋野さんて本当に強いんだね……」

「でも魔力をかなり持ってかれました。とりあえず鬼を蹴散らして二人に追いつきましょう」

「ええ！」

さてと、どうしようかな。もう魔力はすっからかんまではいかないにしても、『光の奔流』がギリギリ撃てる程度しか残ってないし……気で頑張りますか。

「覚悟しなさい。神鳴流奥義、『雷光剣』!!」

これでまた何体が消えましたね。そういえば神楽坂さんのほうはどうなっただんでしょう？

「きゃー、なんでこんな役ばっかー!!」

ノーパン見られたのかな？ まあ、無事みただし、次の相手にかかりますか。

「……月詠ちゃん、そんなとこに隠れてないで出てきたらどうですか？」

実は、初めから殺気バリバリで潜んでいたのは知っていました。

「おろ？ バレてたんどすか」

「そりゃあ、あんなに殺気振り撒いてたらわかりますよ。まあ、桜咲さんは気づかなかつたみたいですけど」

大方、近衛さんのほうに気がいってたんでしょうけど。

「さて、やり合いますか。今度は邪魔するものはないし、決着つけますよ」

「ふふふ。おねーさん最高やわ」

さあ、ここから先は一方通行です。

〈桜咲刹那 Side〉

秋野さんが放った魔法は、私が今まで見たことがないものだった。ざっとだが鬼の三分の二は消えていた。

ネギ先生に聞いたところ、あの魔法は特一級の禁魔法らしい。通常は二属性魔法まで使えれば、魔法使いとしてはなかなからしい。だがあの魔法は四属性を使うらしい。なんで禁魔法となったかは不

明らしいが、ネギ先生が読んだ本には高すぎる威力と扱いの難しさから暴発の危険が高いからだろうと書いてあったようだ。

それを使いこなしているように見えた秋野さんは一体？

……いや、今はそのことを気にしている場合ではない。敵はなにやら儀式を始めてしまっている。先ほどまではネギ先生も一緒だったが、今は狗族の少年と戦っている。

今やお嬢様を助けられるのは私だけなのだ。

だが……、目の前にいる少年は別格だ。彼我の実力差があまりにもかけ離れている。

くっ、このままでは！

私がそう思った時、一人のフードをかぶった人が姿を現した。

〈桜咲刹那 Side end〉

僕と月詠ちゃんとの戦いは、すでに数えきれないほどの合数を重ねている。

「……強いね、月詠ちゃん」

「そついうおねーさんも強いどす」

もつお互いに満身創痍です。まあ、僕には奥の手がありますけど。

「ふふふ、こんな戦いは初めてやわ〜。だから………もっとやりまひよつ」

月詠ちゃんの目が反転しました。ここからが本当の勝負ということですか。

ちなみに神楽坂さんは先に行かせました。ここにいられたら巻き込まない保証がありません。鬼もいつのまにか僕たちの戦いを観戦しながら賭けをしたり、酒を飲んだりしています。たまに何体が巻き込まれて消えてますが。

月詠ちゃんの攻撃が変わりました。今までとは違い、力のこもっている一撃になってます。もはや神鳴流の原型がなくなるほどの苛烈さです。

「くっ、『斬岩剣』!?!」

「にとーれんげき、『ざんがんけん』」

口調は変わってないのに!?!

まあいいです。奥の手を出しましょう。そろそろ湖のほつのが強くなってきました。

「ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マギステル！ ……
くっ！」

なかなか詠唱する隙がありませんね。

「……魔法の射手・連弾・光の11矢」……装填対象、小太刀二
刀。いきますよ！！ 「疑似・約束された勝利の剣」

お手軽版のものですけど。まあ、それでも地形を変えるくらいは
出来るでしょう。

僕が放った『疑似・約束された勝利の剣』^{エクスカリバー}によって、月詠ちゃん
は吹き飛んでいきました。さて、追いかけて勝利宣言しないと。ほ
かにも言いたいことはあるしね。

まあ、僕の出番はこれまでかな。もう魔力残ってないし。

「????? Side」

ふうん。フェイト君が言ったのはこのことね。でも、まだこの
儀式完成してないのよね。じゃあ、それまで遊ぶかな。

「久しぶり、フェイト君。暇だしさあ、ちょっと遊ばない？」

あら、感情がないはずの彼が露骨に嫌な顔をしてる。面白い

「あなたは何者ですか！ いきなりあらわれて！..!」

この子のこと忘れてたね。一応説明してあげましょうかね。

「私はアリス・クロイツ。魔法世界のアリアドネーで研究者をやっているわ。別にあなたの敵じゃあないから安心なさい」

なんか後ろのほうから「安心なんてできないよ」「っていう声が聞こえたけど気にしない。

「さあ、フェイト君。遊びましょう。まだ時間はあるんでしょう?」

「時間はあるけどね。僕は君とは戦いたくないな」

「戦いじゃなくて遊びよ、遊び。ルールは簡単、どちらが先に湖に落ちるか。もちろん落ちたほうの負けよ」

「それは戦いじゃないのかな」

なーんかブツブツ言ってるけど無視でいいよね。

「私から行くよ！ 喰らいなさい！ 『レールガン超電磁砲』!..!」

あらま、簡単に避けられちゃった。まあ、この程度は避けてもらわないとつまんないし。さっきの子はこの隙に儀式場に向かったみたいね。

「まったく、君は好戦的だね。もう嫌だよ。うんざりだよ。君がそういう性格じゃなければ良かったのに」

「諦めなさい。私はこういう性格なんですもの。ちなみに訂正しておく、私は好戦的なんじゃなくて、娯楽好きなのよ」

まったく、私のどこが好戦的なんでしょう？

「それつ。『超電磁砲・連射型』」

それに、こんなことくらいで何言ってるんでしょう。アリアドネーの騎士団なんて毎日これよりも厳しい訓練してるんだから。

「くっ……ねえ、アリスさん。儀式が終わったみたいだよ」

あら？ 無駄話をしてる間にいつのまにか儀式が完成しちゃったのね。

へえー、これが鬼神リョウメンスクナかー。いい実験材料になりそうね。

「……『雷の暴風』……！」

あら？ あの赤毛はもしかしてネギ・スプリングフィールドかしら。じゃあさっきの半魔の子も彼の仲間なのかしら。

ということは、友もどつかにいるはずなんだけど……ま、いつか。気にしなくても勝手にわかるし。

ん？ 鬼神の制御が乱れてるわね。贄の子がいなくなったからか

しら。今は月を背景にその子はいちゃいちゃしてるし。

「……あと一分半持ちこたえる。そうしたら私が決着をつけてやる」
念話的なものかしら。でもこう言われたら、先に決着つけたくな
つちやうよね。

「フェイト君、逃げてね。……原始にて万物の生たる燐光、汝が力
我に示せ。轟け！ 『ビツクバン』！！」

ふふふ。私の魔法で鬼神なんか木端微塵よ！

「な……私の出番が………」

……なんか罪悪感が。

「ありがとうございます。それで、あなたは？」

ネギ君が私に尋ねてきた。

「私は、アリス・クロイツ。さっきそつちの子にも言ったけど、ア
リアドネーで研究者をやっているわ。君はネギ・スプリングフィー
ルドでいいんだよね？」

「どうして僕の名前を!？」

「友ちゃんに聞いたんだよ。それにそつちの幼女は闇の福音でいい
のかな？」

ダーク・エヴァンジェル

「……ああ」

いや、本当に罪悪感が半端ない。……そうだ！ 私の研究の成果を教えてみよう！！

「ねえ、エヴァちゃん。成長してみたくない？」

お、すごい勢いでこっちに振り向いた。

「で……出来るのか！？ 一体どうやるんだ！？ 聞かせろ！！」

「まあ、聞かせますから。とりあえずは今回の事後処理が終わってからよ。今は修学旅行中だったよね？ それが終わったら、麻帆良に行くからそれまでは我慢しててね」

「う……いいだろう。600年も待ったんだ。なんてことない」

虚勢張ってるのがバレバレだね。顔がにやけてるもん。

「じゃあ、私はいったん帰るから。あ、何かあったら友ちゃんを通して言ってくれれば私の耳に入るから。じゃあね〜」

さって、『ビックバン』の威力も分かったし、かーえろっと。

くアリス Side endく

第二十話・「湖畔の戦い」(後書き)

どうしようかな。エヴァを成長させることは確定してるけど何歳ぐらいにしようかな？やっぱり中3だしそのあたりかな？

感想お待ちしております。

第二十一話・「事後処理？ と弟子入り？」（前書き）

これで修学旅行編は終わりです。。

なんか会話文が多くなってしまった……。

独自設定が含まれる内容となっています。ご注意ください。

第二十一話・「事後処理？ と弟子入り？」

まずは足を舐める。我が下僕として永遠の忠誠を誓え。話はそれからだ

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

翌朝、僕が近衛家の屋敷に行くと、なにやら騒がしい状況になっていました。どうやら桜咲さんが出て行くとか行かないとかで揉めてるみたいです。

「あ、エヴァちゃん。来てたんだ」

「ふん。貴様もいたのか。昨日は見かけなかったがどこにいたんだ？」

あー、鬼神が出たころに来たのかなあ。確か記録だとそうなたし、僕の記憶でもそうだ。まあ、厳密には僕の記憶じゃないけれど。

「僕は昨日はとある剣士とずっと戦ってたんですよ。つい楽しくて長引いてしまって」

あ、話聞いてないぞ、この幼女。そっぽ向いてやがる。

「とりあえずみなさん、一回旅館に帰りましょう。いつまでも身代

わりを置いておくのはよくないですよ。ネギ先生の父親の別荘探索はあとでにしましょう」

話が一向に進まないの、僕が指揮をとります。ふわあ。眠い。

僕たちは旅館に帰ってから一休みすることにしました。リンもそこどころ分かってくれたので、今日の行動は自由にしてくださいました。

「で、昨日は記録と何か違う点はなかつたかな？」

「あー、違う点ねえ。あ、そういえば長瀬さんはいたけど龍宮さんと古さんはいなかつたような」

「二人ともそつちに行つたはずネ。私がこの目で確認したネ」

「じゃあ、特になしかな」

いや、アリスさんのことがあるけど、言つたら混乱すると思つし、言わなくても大差ない。

「ああ、リン。一つ聞きたいんだけど、………つていうことは、計画に対して問題ある？」

「いや、その程度なら問題ないネ」

よかった。これで約束は守れるな。

「じゃあ、私は行ってくるネ」

「いってらっさい」

扉が閉まる音が聞こえて、部屋が静かになった。さて、寝よう。
寝不足は敵だからね。

今日は修学旅行の代休日です。ああ、修学旅行はあれ以来いたしたこともなく平和に終わりました。なので特別言うことはありません。

で、今日はゆっくり過ごそうと思ってました。ええ、過去形です。
現に僕の現在地は、エヴァちゃんの別荘です。

「アリスさんはここにいますか？」

原因はネギ先生です。アリスさんに弟子入りしたいという暴挙に出たので、エヴァちゃんを訪ねて来ていたアリスさんに会いに行くことになってしまいました。

「僕は何があっても責任とりませんからね」

「え？ そんなに危ない人なの？ ネギ、考え直したほうがいいんじゃない？」

「まあ、アリスさんは娯楽に命を懸けるような人ですし、変に興味を持たねければ大丈夫ですよ。……保障はできませんが」

そんなことを話しながら歩いていると、目の前にエヴァちゃんとアリスさんがいました。

「今は取り込み中みたいなんで少し待ちますか」

何話してるんでしょう？

〈アリス Side〉

私は今エヴァちゃんとの約束を守るために麻帆良に来てます。

「で、真祖たる私が成長するというのはどういづことだ？」

「ん、そのことなんだけど、一応これから私が言う質問に答えてい
つてくれる？」

「いいだろう」

さて、こっからは会話オンリーの時間だよ。

ん？ 私は何を？

「じゃあまずは基本的なことから。エヴァちゃんが認識してる能力は？」

「私が知っているのは、不老不死、吸血能力とそれに伴う人間の吸血鬼化、あとは流水や十字架が効かず、ネギやニンニクが嫌いな程度になる、魔力の増大くらいだ」

「うん。じゃあ次。エヴァちゃんの身体年齢は？」

「10歳だ。誕生日に真祖にされたからな」

「次で最後。エヴァちゃんは自分以外の真祖のことをどれくらい知ってる？」

「書物で読んだだけだ。大昔にいたようだな。詳しくは知らん」

「やっぱりそうか。まあ、これからする説明を聞いてくれればわかるかな。」

「うん。基本情報は揃ったね。よく聞いてね。まあ簡単に言っちゃうと、真祖の能力には不老不死があるけど、それってちょっと違うんだよね。厳密に言うなら、『ある程度の身体年齢になったあとの不老』と『死にづらい』ってところかな。だからエヴァちゃんはまだ成長の余地があるんだよ」

「ならばなぜ今まで私は成長しなかったのだ？」

「多分後天的な真祖だからじゃないかな。生まれながらの真祖もいるはずでしょ？　じゃなきゃ真祖という存在は認識されないはずだよ。真祖っていうものが認識されたってことは、必ず初めの一人がいる。その一人は先天的なものだよ。もしそれが本当に不老不死なら赤ちゃんのまま成長しないよ。だからこそある程度までは成長出来るっていう仮説が成り立つんだ」

「確かに言われてみればそうだな。で、肝心の方法は何だ？」

「これは私の持論だけどね、人間だけに限らず生物っていうのは認識することによって能力を獲得出来る。だから、自分が成長するのが当然だと認識したエヴァちゃんはこれから普通に成長していくはずだよ。今までは半信半疑だったでしょう？　今度は確信してるのだから」

「そ………そうなのか？　なら別荘にいれば勝手に成長していくのか」

「うん。一応茶々丸ちゃんに毎日計ってもらえばいいんじゃない？　もし成長してなかったら言っただけ」

さてと、後ろで待ってるみたいだし、用件を聞こうかな。

＼アリス Side end＼

どうやら話は終わったみたいだ。

「ほら、ネギ先生、行きますよ」

久しぶりだなあ。アリスさんと顔合わせるの。

「ネギ君、何の用かな？」

「あ……あの、僕を弟子にしてください」

「いやよ」

うわ、即答した。

「な……何ですか？」

「いやー、私個人としては『ネギ君改造』も面白そうなんだけどねえ。でも、私は一応アリアドネーの所属だし、関東魔法協会、ひいてはMMの支配下にあるこの場所だと難癖つけられそうなのよねえ。ま、私にかかればMMくらい簡単に滅ぼすことは出来るけど、できればやりたくないし。……あ、そうそう。エヴァちゃんに頼んでみたら？ 今気分いいから弟子にしてくれるかもよ」

「そ……そうですか」

あ、ネギ先生が引いてる。まあ、MMを簡単に滅ぼせるなんて聞いたらそうなるか。……ネギ先生の想像は攻撃魔法で滅ぼすほうだろうけど、アリスさんは内部崩壊萌えでもあるからそっち方面かな。

……内部崩壊萌えって自分で言ってるって怖くなるね。

「……エヴァンジェリンさんってそんなに強いんですか？ 確か学園内だと力が出ないって……」

「ああ、それなら大丈夫よ。この別荘内には学園結界は働かないから。それにエヴァちゃんの本気は凄いよ。この学園くらいだったら一時間ともたずに消えちゃうんじゃない？」

「ほえー、エヴァちゃんってそんなに強かったんや」

お、この話聞いてネギ先生がエヴァちゃんのほうに行ったぞ。まあ、こっちでやることあるからそっちは頑張つて。

「ねえ、アリスさん。あの魔道具貸してくれませんか？」

「あ、いいわよ。ていうかあなたが発掘したんだからあなたが持つてなさいよ」

「ありがとうございます」

「ねえ、秋野さん、それ何？」

「これはですね、その人がどの属性に向いてるかを調べるものですよ。これで今からみんなのを調べようと思ひまして」

神楽坂さんもやって大丈夫かな？ 魔法無効化能力で壊れたりしないよね？

「じゃあ、近衛さんからやりましょうか」

……

……
……
……

「では、結果発表です。近衛さんの属性は光と水、あとは治癒魔法に適性がありますね。これからは僕が教えることになるでしょう。宮崎さんは、風ですね。アーティファクトとの相性を考えると、防衛系の呪文を覚えたほうがよさそうです。宮崎さんはネギ先生に教えてもらってください。ネギ先生は風系が得意ですから。朝倉さんは、闇ですね。まだアーティファクトは持ってないので、なくても戦えるくらいになってもらいましょう。ちなみに教えるのはエヴァちゃんです。覚悟しておいたほうがいいでしょう。桜咲さんは、あまり魔法に適性がありませんね。幼いころから呪術のほうをやっていたからでしょう。気を強化する方面の修行をしたほうがいいでしょう。まあ、僕と一緒に修行です」

「よろしくなー秋野さん」

「え、ネギせんせいとですか？」

「私、生きて帰れるの？」

「はい」

「ねえ、私は？ 測定すらしてないんだけど？」

「神楽坂さんはこれに触っちゃダメです。魔法無効化能力でこの魔道具が壊れます。まあ、僕や桜咲さんと一緒に剣の練習をするくらいでしょうか。とりあえず接近戦が出来るようにならないと」

ふう。これで一応の区分は出来ましたね。

「…………『闇の吹雪』!!」

「うわっ、いきなり何やってるんですか! 『守れ、影の門』最大展開!!」

いきなりネギ先生とエヴァちゃんが戦い始めました。いや、修行かな?」

でも場所を考えてほしいなあ。

「…………ネギ先生もエヴァちゃんも場所考えてよ…………」

「あ…………秋野さん!? なんか雰囲気怖く…………」

「明日菜さん! 下がってください! 巻き込まれます!!」

「ふふふ…………もう限界です…………朝早くから起こされるし、来てみたらいきなり戦い始めるし…………『陽の審判』収束、圧縮、圧縮…………喰らいなさい!! 『陽の審判・収束砲』!!」

「ちよっ…………待て待て待て! それはヤバ」

「え? なにが起こ」

「…………ふふふ。悪は消え去りました」

「明日菜さん。帰ったほうがよさそうですね」

「うん。さようなら。ネギ、エヴァちゃん」

あれ？ みんななに遠いトコ見てるんですか？
え去ったのに。 せっかく悪が消

ま、いいや。 超包子行って昼飯食べて寝よ。

第二十一話・「事後処理？ と弟子入り？」（後書き）

感想お待ちしております。

第二十二話・「変化する日常」(前書き)

- ・ 短いです。
- ・ セリフ多めです。
- ・ 原作乖離始まりました。

以上の点に注意してください。

第二十二話・「変化する日常」

『It's all fiction』

球磨川禊（めだかボックス）

ふわぁ。休日明けの学校は面倒ですね。まあ、基本学校が面倒なんですけど。

「おはよう、友さん」

「あ、おはようございます。明日菜さん」

修行してるなかでいつの間にか名前呼び合ってたんで。

「ねえ友さん、朝倉が言ってたんだけど今日転入生が来るんだって」

「へえ。まあ、僕が学園長に掛け合ってたんですけどね」

「ええー！ 一体誰なのよ！」

「ほら、チャイム鳴りましたから。すぐ来ますよ」

あ、黒板消しトランプ準備するの忘れた。

「おはようございます。皆さん」

「「「おはようございます、ネギ先生!」「」」

相変わらず騒がしいクラスですね。ま、それがいいところですけど。

「えーと、今日は転入生が来てます。じゃあ入ってください」

んで、教室のドアをくぐってきたのは……。

「月詠!」

月詠ちゃんです。

おお、あの時のメンバーの驚きは凄いですね。

「……今日から転入しました、神凧月詠です。よろしく」

まあ紆余曲折はあってもこのクラスには馴染むでしょうね。

そんなこんなで放課後。僕はみんな（主に刹那さん）に追及されてます。

「なんで月詠がいるんですか!! 友さん!!」

「いや、月詠ちゃんもこの前のは依頼だったから。今はフリーだから

ら問題ないって」

「でもっ！ 万が一おじょ……このちゃんに何かあつたら！！」

「だから、大丈夫だつて。ていうか月詠ちゃんの興味の対象は僕と刹那さんだよ？ 絶対自分の心配したほうがいいって。現に僕、休み時間に「今日の放課後やりあいましようよ〜」って言われたんですから！」

まあ、月詠ちゃんとの試合は楽しいんですけど。今日はやる時間ないだろうし、明日かなあ。

「もう、せつちゃんは心配しすぎや。うちも自分の身くらい守れるえ」

「それに僕もいますし、そんなに心配しなくてもいいですよ」

「そうですね〜。心配なんか無用どす。うちが興味あるんはお二人だけどす」

「ほら、月詠ちゃんもこう言ってるんだし……っていつからいたの！？」

「今さつきどす。なんかうちの歓迎会を開いてくれるみたいなんでき呼びに来たんどす」

「あ、すっかり忘れてた。うんすぐ行こう」

まだ刹那さんは納得してないみたいだね。ま、そのうち分かってくれるでしょ。月詠ちゃんの重要性に。

時刻は夜の9時。今僕たちはエヴァちゃんの別荘に居ます。もちろんこれから修行をするんですよ？

「……『雷の暴風』!!」

「ははっ、まだまだ魔力の無駄が多いぞ」

「はい、^{マスター}師匠」

もう向こうは始めてるみたいだね。

「はい、じゃあこっちも修行始めるよ。まず、刹那さんと明日菜さんはいつも通り組手からはじめてください」

「はい」

「分かりました」

二人が少し離れた場所に行って、組手を始めた。

「月詠ちゃんはどっしよっかな？ んー、じゃあ、今日は見学で。修行終わったら相手してあげるから」

「えっ、見学う？ うちも混ぜりたいわ」

「木乃香さんは昨日の復習から始めようか。じゃあまずは『火よ灯れ』から」

「プラクテ・ビギナル、『火よ灯れ』」

おお、一発でできるとは思いませんでしたよ。それに炎の色が少し白いですね。無意識に光属性が入っちゃってるのか。

「じゃあ、次は防御魔法にしましょう。詠唱は必要ないので、始動キーの後に直接唱えてください。まずはお手本です。プラクテ・ビギナル、『光楯』。まあ、この呪文があれば大抵の打撃技なら無効化できます。慣れれば『魔法の矢』や、もうちよつと威力の高い攻撃も防げるようになりますが」

「むむむ、そういえば友ちゃん、回復魔法はまだ先？」

「ええ。回復魔法は意外に難しいんですよ。それに、防御魔法が使えなければ、回復させる前に自分が倒されちゃいますしね。しばらくは防御魔法と、基本的な攻撃魔法だけですな」

「はあ。早くせつちゃんを治したいえ……」

まだまだ道のりは長いですよ。

お・ま・け

「エヴァ&ネギ」

「マスター 師匠、なんで僕たちはこんなところで修行してるんですか？」

「……ぼーやも味わっただろうが。あの強烈な一撃を……」

「あ、あああああああああああああああああああああ
あ」

「ゲシユタルト崩壊シテヤガルゼ」

「明日菜&刹那」

「明日菜さん、覚えるの早いですね」

「そうかな？ でも、やっぱり魔法使ってみたいなあ」

「じゃあ、友さんに頼んでみましょうよ」

「そうね。あ、宿題忘れてた……」

「月詠」

「暇どす〜〜〜」

「……………にゃあ」

「暇どす〜〜」

「にゃあにゃあ」

「アリス」

「はあ。暇だね。もういつそのことMMでも潰しちゃおうかなあ」

「それだけは止めて下さいよ。せっかく私、新オステイア総督まで上り詰めたんですから」

「別にいいじゃない。私が新しく国つくったら要職に就かせてあげるからさ」

「ふむ、考えどころですね」

「ところでさあ、こんなところにいるけど、仕事大丈夫なの？」

「ええ、ご心配なく。すべて有能な部下に押し付けてきましたから」

「じゃあ、ちょっと出かけましょうよ。さ、行くわよ…！ いざ墓守り人の宮殿へ…！」

「ちよっ！ 無理ですよ…！」

「或る未来の住人達」

「なあ、これなんだかわかるか？」

「わからんえ」

「さあ？」

「どうでもいいだろ」

「うお、なんか光り出したぞ！！」

「~~~~~」

「超鈴音」

「ん？ カシオペアに反応？ 気のせいカ」

「超さん、試作機出来ましたよー」

「今いくネ」

「これが私の弟にあたるのですか」

「そうそう。学園祭で活躍してもらったから」

「性能実験を始めるネ」

「……なぜ男型ばかりなのでしょう……」

第二十二話・「変化する日常」(後書き)

感想お待ちしております。

第二十三話・「雨中の紳士」(前書き)

- ・ 短いです。
- ・ 原作乖離してます。

以上の点にご注意ください。

第二十三話・「雨中の紳士」

私に力を貸して欲しいならそれなりのモノを払いなさい。それがイヤなら私に力を貸してもらうのは諦めなさい。

アリス・クロイツ

別荘での修行のおかげで皆さんそこそこ魔法が使えるようになりました。

「あー、せつちゃんケガしてるえ。今治したる」

木乃香さんの上達スピードは凄いです。もしかしたらネギ先生の故郷の人達治せるかもしれません。

「これくらい大丈夫ですよ」

刹那さんも僕や月詠ちゃんと毎日試合してるのでかなり上達しました。『斬魔剣』はあともう少しで使えそうです。

「あ、友ちゃん。言われてたメニュー終わったけどどうする？」

「んー今日は終わりです」

明日菜さんは魔法適正が調べられなかったので、僕の時代の記録

に残っていた記述を参考に火属性を教えてみたら適性があつたようです。すでに『燃える天空』を使えます。まあ、制御ができないので実戦ではまだ使えません。それにしても成長率が半端ないです。さすがは姫君ですね。

ネギ先生のほうも順調なようで、まあ、一般的な魔法使いなら相手にならないくらいまで成長したようです。

あと、この前エヴァちゃんを見たら12歳くらいまで成長してました。幼女から少女へと無事に進化したようです。

そういえばこの前カシオペアが反応したんですけどなんだったんでしょう？ リンのものも反応したようだったので……。まあ、不具合が発生したわけではなさそうなので原因不明のままです。

「今日はここら辺にしましょうか。さ、寝ましょう」

さてと、皆が寝たら僕の個人トレーニングの開始です。

まったく、なんで私が行かなくちゃいけないのよ！

あ、どうも。アリス・クロイツです。私は今イギリスのゲートの所に居ます。エヴァちゃんの成長のことを確かめて、これから帰る

うって時にあの陰険メガネから連絡があって麻帆良に行かなきゃいけないなっちゃったのよ。

「爵位級の悪魔が麻帆良に……ねえ。友ちゃんもいるし私が行く必要あるのかなあ？」

友ちゃんがいれば爵位級なんか問題ないと思うんだけど……あ、友ちゃんのことあの陰険メガネは知らないのか！

「それにしても爵位級……まさかヘルマンじゃないよね？」

もし、ヘルマンだったらお仕置きね。誰と契約したかも聞き出さなきゃいけないし。

「はあ。面倒くさい。ていうか、なんで私を使うのよ。ご自慢の私兵でも使えばいいのに」

はあ。幸せが逃げまくってるわ。さっさと行って片付けちゃいましょ。

「『開け、影の門』」

ん？ 外が騒がしいですね。なにやらネギ先生の周りに集まっているようですが……。

「ま、関係ないでしょ。さて、もうそろそろ出れる時間だし、準備しよつと」

〜一時間後〜

「うわー、雨降ってるよ」

「僕は傘持ってるんで問題ないですね。あと2本ならありますよ?」

僕の『影の門』には傘も入ってます。

「ええと、ここらへんに……」

あれ? 僕の影が勝手に広がって……。

「ふう。到着つと」

アリスさんが出てきました。予想外です。

「あれー? みんなしてどうしたの? 今はもう友ちゃん一人だと思っただのに」

「別荘で修行してたんですよ。で、今はその帰りです」

「ふーん。あ、そうそう。今日はなるべく外に出ないでね。ていうかここにいたほうがいいよ。なんか麻帆良に悪魔が紛れ込んだらしくてさ、ちよっくら退治に行くから私が帰ってくるまで待つ

「ててよ」

「え！？ 悪魔が！？ だったら僕も行きます！！」

今のネギ先生が行っても足手まといなんじゃ……。アリスさんが来るってことは低くても爵位級だし。

「来たいなら来れば？ でも命の保証はしないよ？」

「やめときなさいって。ネギ」

「うう。足手まといは嫌なので止めておきます」

「賢明ね。ま、そんなに時間はかからないわ」

アリスさんはそう言つと出て行きました。ま、僕たちは待つてますか。

再び私サイドよ！

「さてと、とりあえずは気配を探ってみようか」

魔力を広げて……。……。……。お、見つけた。世界樹広場の前か！。でも、何人かつかまつてるみたいだね。しかも予想通りヘルマンだ

し。

「『開け、影の門』」

く世界樹広場く

ふう。転移完了。

「おや？ 君は誰だね？」

ヘルマンが聞いてきてるけど無視無視。あ、今の私はフードかぶってるから正体不明に見えるはず。

人質は……那波さん、雪広さん、村上さん、長谷川さんか。ま、みんな気を失ってるみたいだし、記憶処置もしなくていいから楽だね。

「まったくさあ、何でこんなことしてるわけ？ ヘルマン」

「む、そ……そそそその声は、まさか……！」

「そうよ、そのまさかよ。アリス・クロイツよ！」

「お……あ……う……すみません、急用を思い出したので私はこれで……」

「逃がすと思うっ？」

「思いません」

「で、君の雇い主は？ あ、契約なら切つといたから話しても大丈夫よ」

「今回の雇い主は、MM元老院の過激派です。目的は、『麻帆良学園の調査』および『ネギ・スプリングフィールド、神楽坂明日菜の戦力調査』です」

「そう。もういいわよ。……あとでお仕置きよ」

「それだけのご勘弁を」

「ダメ。ほら、さっさと帰りなさい。アリアドネーに着いたら呼ぶから」

一件落着くと。MMの過激派ねえ。やっぱり潰そうかしら。

友ちゃんに連絡したら帰って陰険メガネに苦情言っつて、ヘルマンにお仕置きね。

第二十三話・「雨中の紳士」(後書き)

感想お待ちしております。

第二十四話・「大切なもの」(前書き)

・会話文多めです。

第二十四話・「大切なもの」

私は失敗するわけにはいかない。だから……私のすべてをかける。

リン・オータム

本日は晴天です。そして、教室の中は混沌です。

え？ 何を言ってるかわからない？ しょうがないですね。詳しく説明してあげましょう。

現在我がクラス3-Aでは麻帆良祭での出し物を決めようとしていました。最初は普通に話し合っていたのですが、ネギ先生がやってくる時間が近づくと、一部のお調子者たちがネギ先生をからかうと、どこから入手してきたのかはわかりませんが、明らかに喫茶店とは趣旨の違う、言ってみればキャバクラのような雰囲気です。先生に対して行動しました。

当然ネギ先生はそのことも知らず教室に入ってくるわけで、明らかに法外な料金を吹っかけられています。

……とまあ、こんな感じです。でももうそろそろ新田先生がやってくるようなので、僕は寝たふりをしてやり過ごすことにします。長谷川さんがなにやら力説しようとしてますが。

「コラー！ 全員正座！！」

え？ 僕も？

放課後になりました。今日も修行です。

「じゃあ、明日菜さんは『燃える天空』の制御を練習しましょうか。的を用意したので、そこを狙って撃ってください。刹那さんは月詠ちゃんと稽古、木乃香さんは僕と一緒にやりましょう」

「え？ 的ってあれ！？ 小っちゃくない？」

「わかった」

「先輩とは久しぶりですな〜」

「わかったえ」

「そういえばネギ先生たちの修行はどうなったんでしょ。最近あまり会わないのでわかりませんね。」

「今日は何するん？」

「今日は僕とアリスさんが考えた魔法を覚えてもらおうと思います。難易度は高いですが、使えればネギ先生よりも強くなれるかも……」

「え！ よーし、頑張るえ」

といつても習得にどれくらいかかるかな。一応難易度的には僕の使ってる『天の方陣』より少し簡単なくらいだし。

「じゃあ、とりあえず僕が使ってみるから。ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マジステル。来たれ、大蛇より出でし三種の一。己が力を以って我が敵を薙げ。『天叢雲剣』」

光が収束して剣の形をとります。一応これは術式兵装の一種として作ったので、魔力が消えない限りは持続します。

「これが、二つ目の『天叢雲剣』です。名前からわかると思います。日本における三種の神器をモデルにしたものです。これは攻撃魔法に分類できて、魔力を用いて遠隔操作が可能です。もちろん手に持って戦うこともできます。また、味方に持たせることもできるので、応用性の高い魔法です」

「ほえ、キレイな剣やね」

「では、次。ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マジステル。来たれ、謎に包まれし三種の一。己が力を我に与え給え。『八尺瓊勾玉』」

またも光が収束して形をとります。勾玉の形となり、僕の首の周りにネックレスのようになってかかります。

「これが二つ目の『八尺瓊勾玉』です。能力は自身の強化が主なものです。基本的には魔法を強化して使うことが多いでしょう。また、身体能力も強化されるので、多少なら肉弾戦をしても大丈夫です。ただし、これは自分専用なので味方に与えることはできません」

「ほえ」

「で、最後です。ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マジステル。来たれ、世を照らす三種の一。己が力で我を守り給え。『八咫鏡』」

光が収束して今度は鏡の形になりました。

「これが最後の『八咫鏡』です。これは攻撃防御両方に使えるものです。簡単に言うと、相手の攻撃を吸収・無力化し、その攻撃を任意のタイミングで返すことが出来るものです。ただし、他の二つに比べて扱いがはるかに難しいです。……とまあ、こんな感じですよ。分かりましたか？」

「うーん、一応は。でもこんなうちが使えるん？」

「まあ、練習次第ですけど、相性はいいはずですよ。日本の神話をもとに作ったものなので、呪術の血統である近衛家本家の木乃香さんなら使えるはずですよ。それに詠唱も日本語ですよ」

「なら頑張ってみるえ」

そんなに簡単なわけでもないし、とりあえずこれで僕は暇になりましたね。さて、僕は僕がやるべきことをしますか。

あの人達のこともありますし。計画を詰めなくてはいけないです。まずはリンのここに行きますか。

「ではこれから作戦会議を始めるネ」

ここは僕の魔法球の中です。

「リン、一つ質問があるんだけど」

「何かナ？」

「うん。言いたいことはいっぱいあるんだけど……これって作戦会議なの？」

みなさんにもわかるようにしましょう。この場にいるのは、僕とリンだけです。

「そうネ。立派な作戦会議ヨ」

そういうことにおこう。

「で、今日は最終確認をするネ。といっても特に作戦変更はないネ。だから、前のときと同じことをしてほしいというだけネ」

やる意味ないよね？

「じゃあ、帰るよ。まだみんなの修行終わってないしね」

「ちょっと待つネ。あとどれくらいなら時間あるネ？」

「うーん、まあ、エヴァちゃんの別荘使ってるからそんなに時間は無いよ?」

「……じゃあ、デートはお預けネ……」

うーん最後なんて言ってたか聞こえなかったけど、たまにはリンと一緒に掛けるか。

「じゃあ、僕のカシオペア使って時間作って二人でどっか行こうよ。それなら時間はあるし」

「そうするネ!」

「ただし、朝倉さんとかに見つかると面倒だから変装して行こう。僕は元の姿になればいいだろうし、リンは喋り方と髪形元に戻せばいいんじゃない?」

「わかたネ。じゃあ、30分後にここに集合ネ」

さて、僕も着替えなきゃね。

〈30分後〉

「用意できたよ。似合ってる……かな?」

「ああ、似合ってるぜ。ほら、俺につかまれよ。んー、5時間が限界みたいだな。5時間でいいか?」

「うん。早く行こ」

俺達は指輪とカシオペアを使って5時間前へと跳んだ。

「っと、到着つと」

「うー、この感覚久しぶりだよ」

ありゃ、少し目回してるよ。ま、少し休んでからにするか。

「ほら、そこにベンチあるからさ、少し休んでから行こつぜ」

「うー」

まったく。ベンチに向かう間もふらふらしてるし。

「ほら、少し寝てるよ。どうせ寝てなかったんだろ？ 膝貸してや

つから」

「うん。ありがと」

少しすると寝息を立て始めた。やっぱり疲れてたのか。

いくら実行の日が近いからって無茶はすんなよな。心配するんだから。

「……懐かしいな。まだ半年しかたってないのに向こうにいたことがまるでかなり昔みたいだ。向こうじゃよくこんなことしてたよな。王宮抜け出して、いつもの場所に行つて。でもあの時から考えてたんだろうなあ。ま、あんな環境じゃしょうがないとも言えるか。そ

れに頭もよかったから余計に分かってたんだろうな。今の時代じゃ解決できないってことも」

「……………うん。だから私はここに来たんだよ。だから、失敗するわけにはいかないんだ」

「いつから起きてたんだよ。ま、今日くらいはそのこと忘れてあの時みたいに遊ぼうぜ」

「そうだね。さ、行こ。時間は限られてるんだから」

ははっ、今日は大変になりそうだ。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、もう俺たちが跳んだ時間になろうとしている。

「どうだ、楽しかったか？」

「うん。久しぶりに楽しめたよ。……………ねえ、聞いてほしいことがあるんだ」

「ん？ なんだよ？」

「うん。……………えーと、あー、……………あのね、私、ユウのことが好き。もうずっと前から。こんな時について思うかもしれないけど、やっぱり好きだから、伝えたくて」

……ふっ。なんだよ、考えてたことは同じか。

「俺もリンが好きだよ。……ったく、俺から言おうと思ってたのに。まさか先に言われるなんてな。お、そうそう。これ、プレゼントだ」

俺が今日持ってきたのは、シンプルな指輪型の自作のペンダント。もちろん魔道具としても使える。

「あ、ありがとう！ ……ねえ、着けてよ」

「はいはい。……ほら、俺のお揃いだ」

「うん！ ……ちょっと目つぶってて？」

言われたとおりに目をつぶる。

数瞬後、俺の唇に柔らかいものが触れた。人生2回目のキスだった。おまけに仮契約付きの。ちゃっかりしてるぜ。

俺が目を開けると、顔を真っ赤にしたリンがいた。可愛いやつ。

「……俺がやられっぱなしだと思うなよ？」

今度は俺からキスをしてやる。

そのあと、俺たちは仲良く腕を組み、帰って行った。

くお・ま・けく

「明日菜&木乃香」

「うひー、こんな小さい的になんか当たらないよー。あ、的ごと周
り全部燃やしちゃえば……あれ？ 体に力が……」

「明日菜、それ魔力切れや。休まなあかんで」

「あ、木乃香。そっちはどうなのよ」

「んー、難しすぎて何をやればいいのかもわからないような感じや」

「そっちも大変なのね……」

「刹那&月詠」

「先輩、だからそっじゃないって」

「う……」

「こんな感じどす。『斬魔剣・弐の太刀』」

「それじゃあ、分からないわ~~~~~!!」

「エヴァ&ネギ」

「ほら、もっと素早くだよ。ぼーやの魔法は威力が高いが詠唱が遅

い！ それじゃあ魔法拳士としては役に立たん。もう一度だ」

「はい！ 師匠^{マスター}！ ラス・テル・マ・スキル・マギズツ！」

「こらー！ 始動キーを早く言えなくてどうするー！」

「す……すみまひえん」

第二十四話・「大切なもの」(後書き)

感想お待ちしております。

第二十五話・「幽霊と修行と」(前書き)

では、今回の注意点。

- ・原作乖離。
- ・おまけはほぼ会話文。

第二十五話・「幽霊と修行と」

幽霊ねえ。確かアギが苦手だったっけ。

秋野友

麻帆良祭の出し物はお化け屋敷に決定しました。まあ、ノーパン喫茶やらにならなくて良かったです。まあ、学園側の許可が下りるとは思いませんが。

で、今は絶賛作業中です。このままのペースじゃ間に合わないよ
うな気がします。クラス全員が魔法を知ってたら魔法球使って出
るんですけど……。

「……眠い」

もう帰りたいです。ただでさえ計画の準備で睡眠時間が削られて
るし、これ以上は無理です。

「……でさー、このクラスに幽霊が出るらしいよ」

「「「ええー!?!?!」」」

幽霊ねえ。相坂さんのことだよ。そんなに心配しなくても悪霊
じゃないから大丈夫だって。むしろ協力してもらえばお化け屋敷の
リアル感が増すんじゃないかな？

「じゃあちよつと写真撮ってみようよ。何か写るかも」

あー映るだろうな。

「んー……うわっ!」

「ぎゃー! 悪霊だよ」

え? もしかして相坂さん以外が映った? でも僕がわかる範囲では相坂さん以外の幽霊はいないはずんだけど……。

「じゃあゴーストバスターやるネ。明日には装置を作るネ」

いや、そんなことしなくてもクラスに神鳴流二人に魔眼持ちいるから頼めばいいじゃん。

「「「おおー!」」」

結局やるのか。さすがは3-A。

翌日。もう下校時刻はとくに過ぎている時間。3-Aは教室に残り、ゴーストバスターを開始しました。

でも、相坂さんは必死の抵抗。ラップ音やポルターガイスト、あ

げくの果てには憑依まで。

これって完璧に悪霊扱いされても問題ないくらいだよな。

「幽霊は〜ん、一緒に遊びましょう〜」

月詠ちゃん、それって遊ぶじゃなくて死合いだね。剣を抜いてる相手に対して出てこないって。

「おろ？ あなたが幽霊はんどすか？」

え？ 出てきたの？ そんな！

「あ、あのー、見えてるんですか？」

「見えてるし、聞こえてます〜」

「おい、月詠、何が見えるんだ？ 私には何も見えないんだが……」

「ああ。私にも見えないな。どんな姿してるんだ？」

龍宮さんは見えてるよね。だって表情が見えてますって感じだし、明らかに相坂さんのほう見てるし。説得力無いよ。

「ん〜、どっかで見たようなく？ ……あ、ネギ先生、クラス名簿持っとります？」

「あ、持ってますよ。はい」

「……あー、この子どす。相坂さよ」

「確かにこの子だな」

「な!?! 龍宮、見えてたのか!?!」

「当然だ。むしろ見えていない刹那は修行が足りないんじゃないか?」

「え? 見えてたんですか?」

周りの人が置いてけぼりだね。いったい何があったの? みたいな目で見てる。

「ゴーストバスターは中止ネ。どうやら悪霊ではなかたみたいヨ」

リンがまとめてくれた。まあ、悪霊じゃないんだし、クラスメイトだから本気でバスターするつもりはリンにはなかったんだろっけど。

「ん? なんだ、あの幽霊ようやく認知されたのか」

「あ、エヴァちゃん。やっぱり気づいてたんだね」

「当然だ。私は真祖の吸血鬼だからな」

だったら話しかけてあげればいいのに。ま、僕も人のこと言えないけどさ。

相坂さんも友達が出来て、地縛霊から浮遊霊にランクアップ。みんなは成仏したって考えてるみたいだけど、朝倉さんの肩に手おいてるからね。いや、朝倉さんは気づいてるみたいだから何も僕から

は言わないけど。

「一応今日で一旦修行は終了です。さすがに麻帆良祭の間はやりません。」

「というわけで、今日は修行の成果を発表しましょう」

「いきなり」というわけで「って言われてもわかんないえ」

えー、そこは分かってよ。

「まあ、とりあえず修行の成果を見せてくれればいいんです。じゃあ、明日菜さんから」

指名されたことで明日菜さんの顔が引き攣ってます。

「う………なんで私なのよ。……まあ、いいわ。友ちゃん、魔法の射撃撃ってくれる？」

あれ？ 『燃える天空』じゃないのかな？

「いいですよ。準備はいいですか？」

「あ、ちよつと待って。『アダアット』………いいわよ！ どーんと

来なさい！」

じゃ、遠慮無く。

「ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マギステル。来たれ、光の精霊1001柱。……行くよ。『魔法の射手・連弾・光の1001矢』」

辺り一面を覆うほどの『魔法の射手』を放つたら、明日菜さんの顔がまた引き攣りました。……やり過ぎたかな？

「行くわよ！」
トミー・アルケース・カイ・アナルキアース
『無極而太極斬』！！！」

明日菜さんが技を使った途端、僕の放った魔法の矢が消え去りました。一本残らずです。

「どうよ！ これで魔法は怖くないわ！」

「すごいです、明日菜さん！」

「わー、いつの間にこんなんでできるようになったん？」

「一度戦ってくれまへんか？」

本当、すごいわ。一応僕がこの技の存在を教えて、やり方も大雑把に説明したけど。この短時間で出来るようになるとは。やっぱり元が元だからね。

「はい、じゃあ、木乃香さんはやらなくてもいいので、次、刹那さん」

「えー、うちもやりたいー」

「木乃香さんの成果って回復魔法でしょう。今、回復魔法が必要な人はいませんし」

さすがに三種の神器シリーズは出来なかったみたいだし。

「……わかったえ。せつちゃん、頑張つてー」

「う……はい。では行きます！ 『斬魔剣・弐の太刀』！」

ん？ なんで僕のほうに向かってきてるのかな？ 弐の太刀じゃ避けるしかないじゃん。

僕は刹那さんの後ろに回り込んでお仕置きすることにした。

「刹那さん？ なんで僕のほうに撃ちこんできたのかな？」

「え……いや、その……一応急所は避けてましたし、障壁すり抜けないと効果が分らないので……」

「まあ、理屈は分かるよ。でも、一言声かけてくれてもいいんじゃないかな？ それに急所は避けてってことは他の所に当てる気はあったんだ。ふーん」

「あ……すみません！……」

「お仕置きだよ。『斬岩剣』！」

ふふふ。お仕置き終了。刹那さんは木乃香さんが治してくれるだろっし。

「月詠ちゃんはどう？」

「うちは何にもないどす。神鳴流は一通り技の習得は終わりました」

「そっか。じゃあ、新しい技でも作ってみたら？」

「そうします」

「いやー、みんな成長してますねー。」

「あ、友ちゃんの最強技つてあの鬼に使ったやつ？ 違ったら見せてくれない？」

「んー、僕の最強技ですか。『天の方陣』は一応最強技なんですけど……まあ、本来の威力は出てないから微妙なトコかな。」

威力でいったらあっちかな。

「じゃあいきますよ。ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マジステル。来たれ、王を選別する湖と台座の剣。その輝きを以って我が敵を討て。『選定の剣』！」

この魔法は術式兵装なので、僕の手握られる形で出てきます。

「へー、それが友ちゃんの最強技？ なんかこの前のほうがすごいと思うんだけど……」

「ああ、この名前はみんなにわかるように言うと、エクスカリバーです。名前ぐらいは知ってるでしょう？ それを魔法で再現したものです」

「ほえーそれがあのエクスカリバーですか。ちょっと打ち合ってみまへんか？」

「ダメ。疑似のほう受けて気絶したでしょ？ あれの何十倍も威力があるから月詠ちゃんが木端微塵になっちゃっよ」

「じゃあ、やめときます」

さて、肝心の威力を見せますか。

「あー、向こうの山に向かって使ってみるね」

そういつて僕は剣を思い切り振り下ろす。

たったそれだけの動作で、山は消し飛んだ。そして僕の魔力も消し飛んだ。正確には空っぽになった。

「あ、もう無理。木乃香さん、あとよろしく」

そのあとは僕はもう覚えていない。

くお・ま・け

「エヴァ&ネギ」

ドーン!!

「ん？ なん……だと……。山が吹き飛んでいる……っ」

「師匠、もしかしてあれって……」

「ああ、間違いないだろう。友のやつだ」

「あの人って本当に人間なんでしょうか？」

「……人間だろう」

「その間は何ですか!？」

「アリス」

「はあー。暇だわ。ねえ、なんか面白いことない？」

「ありませんよ。というより早く帰りたいんですけど……」

「うーん、帰ってもいいんだけど私が退屈になるから却下」

「なんですか、その理由！」

「あ、その君ー！　ちょっとこっちおいで。とっておきの魔法教えてあげるから」

「わ、私！？　えっと何の用……ってネカネお姉ちゃん！？」

「あ、アーニヤちゃんー！　こっちに来ちゃダメよー！」

「なんだ、知り合いかー。じゃあ、アーニヤちゃん、さっきも言ったけどとっておきの魔法教えてあげるよ」

「えーと、よろしく願いします？」

「アーニヤちゃんー！」

「或る未来」

「アギ様、仕事ですよ……っていない！！　またどこかに抜け出しましたねー！！」

「大丈夫ですって。伊織さんもないってことはアギ様を鹵獲に行ってるはずだから」

「それもそうね。そういえば奥方様も見ないわねえ」

「あの方も自由人なところがあるから……。まあ、伊織さんに任せとおけば大丈夫よ」

「……さて、私たちも仕事しますか」

彼女たちは知らない。伊織も居なくなっただというところ。そしてのちに絶望する。仕事量に。

第二十五話・「幽霊と修行と」(後書き)

感想お待ちしております。

第二十六話・「裏側」(前書き)

では、今回の注意点。

- ・原作乖離
- ・短い
- ・おまけも重要かもしれない。

第二十六話・「裏側」

ほう。貴様もそちら側だったのか。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

お呼びだしがありました。世界樹広場に集まってということですが。一緒にいた刹那さん、ネギ先生、犬上君（悪魔が来たときに麻帆良に来たらしい）とその場に向かいます。

「なんの用事なんでしょうか？」

「僕が思うに麻帆良祭での注意事項とかそんな感じじゃないかと。テンション上がって魔法使うなよーみたいな」

「あー、ネギならありそうやな」

「そ、そんなことしないよ！」

多分するだろうな。何せ今回の麻帆良祭は普通じゃないんだから。

さて、広場に着きました。そこには、麻帆良の魔法先生・生徒が

いました。ま、全員じゃないんですけど。

「今日皆に集まってもらったのは世界樹の噂に関することじゃ。実はこの世界樹、『蟠桃』というのじゃが、本当に願いを叶えてしまふんじゃよ」

「じゃあ、あの噂は本当なんですか？」

「うむ。『金をくれ』のような即物的な願いは無理じゃが、こと告白にいたってはなんとその成率は120%なんじゃ。本来なら最終日だけ警戒しておればいいんじゃが、今年は大発光じゃから他の日にも叶ってしまうんじゃよ」

「じゃあ僕たちの役目は告白阻止ってことかな？」

「うむ」

やりたくないな。怨まれそうだし。ていうか予定がいっぱいになっちゃうし。

「今日はその見回りの分担を決めるんじゃが……………」

ああ、もう適当に決めてくれていいよ。拒否権なさそうだし。

「……………誰かに見られています」

パチツと音がして、リンの放った機械が粉々になりました。ああ、確かあれの開発費は……………。

「追います」

すぐに数人が向かいました。

「今日はこれまでじゃ。では頼んだぞ」

ふう。さて、行きますか。

「あ、秋野さん、どこ行くんですか？」

「今日は修行は無いので、自分の部屋の片付けを。最近忙しくて掃除もしてなかったんで」

「そうですか」

そうです（嘘）。

くエヴァ Side く

学園祭か。今年で15回目だが、違う気持ちで見れそうだ。だがクラスの手伝いはせん。面倒だからな。

と、その時私の携帯が鳴った。私はこんなもの要らないと言っただがな。まあ、今では操作に慣れて、授業中のいい暇潰しになっ

ているが。

ディスプレイを見るとジジイだったので、私は取らずに切ることにした。

「ふう。やはり昼は眠いな。かといって昨日は一日中寝ていたしな。久しぶりに箸で飛ぶか」

はて、箸はどこに閉まったかな？

「茶々丸……は超鈴音のところか。しょうがない、自力で探すか」

私が飛んでいると、超鈴音が見えた。どうせだから挨拶しておくか。

「超鈴音……」

「やあ、エヴァンジェリン。何の用かな？」

「いや、たまたま見かけたから声をかけたただけだ。そうそう、茶々丸のことだが、貸してやる。壊すなよ」

「当然ネ」

「ん？ そのフードは……くっくっく……そういつとか。まさかお前がそちら側だとは。これは面白そうだな」

「うん。僕は最初からこっち側さ。だから裏切りでも何でもない」

「まあいい。楽しみにしてるよ」

それにしても面白いことになったな。よもやぼーやまあいつが敵側だとは思ってもみないだろうからな。楽しみが増えたよ。

「エヴァ Side end」

「おまけという名の本編」

「木乃香&刹那&月詠」

某日。

「あ、せつちゃん、仮契約するえ」

「え!?! い、いいいきなり何を言い出すんですか!?!」

いきなりのことに慌てふためく刹那。

「友ちゃんがしといたほうがいいよって言うってたんよ」

「えーと、その心の準備というかなんというか……」

刹那はブツブツと何かを言うが、木乃香の耳には届かない。

「えー、せつちゃんしてくれんの？ むー。あ、つーちゃん！ うちと仮契約せえへん？」

「いきなりどうしたんですか？ 構いまへんけど」

そこへ、偶然通りかかった月詠に木乃香が仮契約の話を持ちかける。

当然、慌てる刹那。

「な！？ このちゃん、仮契約しましょう！！」

「あ、言い忘れとったけど2回や。主従変更分で」

結局きちんと2回行い、無事に仮契約は終わった。

「つーちゃんもするえ」

まだ波乱は続くらしい。

「アリス&アーニヤ」

「さあ、アーニヤちゃん。今日はここに行ってもらおうわ」

「えーと、ここってどこですか？」

「私の魔法球の中の火山エリアよ。今のアーニヤちゃんの実力なら、

頂上まで行けるはずだわ。あ、私は命の危険がない限りは干渉しないから。今回は自力で頑張ってるね」

「え……無理ですよー!!」

「人間やってみないとわからないものよ。さ、逝ってらっしゃい」

「え、ちょっ、待って。まだ準備が……」

アーニヤは扉の向こうへ消えて行った。

「さて、どこまで成長するかな？ できればあのレベルまでは到達してほしいわねえ。なにせ私の初めての弟子なんだから」

一方、火山のアーニヤ。

「暑い！ ていうかなんなのよ、今までと違って目標が大雑把ね。とりあえずこの火山を登ればいいのよね」

立つてても始まらないので、アーニヤは火山を登り始めた。マントは暑いので、スタート地点にあった籠に入れてきたようだ。

「それにしてもこの火山っていったい何mあるのかしら」

当然の疑問だが、答えてくれる者はいない。

「でも、なんか思ったほどきつくないわね。戦闘もないし」

と、その時だった。アーニヤの体が大きな影で包まれた。

「え？ 何よ？」

上を見るアーニヤ。

「ド……ドラゴン！？ こ、これはまずいわ。とりあえず気配を消して……」

だが、すでにアーニヤはドラゴンによって発見されていた。

「あれ？ なんかあのドラゴン見覚えがあるような……。なんだっただけ？ リ……リオ……リオなんとか！ ってそんな場合じゃない！ 早く逃げない！」

アーニヤの苦勞は続く。

第二十六話・「裏側」(後書き)

エヴァのところは原作ではもっとあとですが、あえて先に入れまし
た。

感想お待ちしております。

第二十七話・「麻帆良祭開幕」(前書き)

では、今回の注意点。

- ・ 独自設定
- ・ 原作乖離
- ・ 視点変更多し

第二十七話・「麻帆良祭開幕」

いやーよかたネ。もしかしたら時空の狭間に漂うことになってたかも知れなかつたヨ

超鈴音

「只今より、第78回麻帆良祭を開催します。一般入場の方は……」

ついに始まりました、麻帆良祭。ま、一日目は、ほとんどが告白阻止に動かなきゃいけないんで楽しいんですけどね。あ、僕のクラスでの役は声役です。以前にいろいろな声マネをしてたら、頼まれました。だから当日はやることはないんです。なにせ録音ですし。

「さて、龍宮さん、行きましようか」

「そつだな。こんな朝早くから告白するようなやつがないとも限らないからな」

龍宮さんがパートナーだけど、一人で十分なんじゃないのかなあ？ 狙撃するみたいだし。

「そつだ。一つ聞いておきたいんだが、未来で私はどうなった？」

未来で……か。ここは僕たちの未来とはつながってないみたいだ

し、言っても大丈夫だよね？

「言う前に、ちょっと確認です。聞いたからと言って、そのおりの未来になるかは分かりません。あと、聞いた後に後悔しないで下さい。それでもいいなら話しますよ」

「ああ、聞こう。どうせそれは君の世界での話だ。私にはあまり関係ない」

「では。龍宮さんは、このあとも傭兵として、活動します。今と変わらず、貰った報酬分はしっかりと働き、ジャック・ラカンまではいかないにしても、かなり有名な傭兵となります。半魔族であるがゆえに、他のクラスメイトよりも長生きしました。実は、僕が未来で生まれたときにも龍宮さんは生きていました。まあ、会うことはなかったんですけど。で、未来では弟子を一人とっていました。名前は忘れましたが、戦争孤児の子だったはずです。その子と一緒に世界を回っていました。最期はやはり戦場でした。戦場で危機に晒されたその子を助けるために、わが身を犠牲にして、その傷が元で、二日後に亡くなりました。記録では、最後にあなたが言った言葉は……」

「いや、もういいよ。大体分かった。私が最後に言う言葉もね。そうだったのか。そちらの私は幸せだったのだろう」

ああ、空気が重くなっちゃった。だからあんまり未来の話はしたくないんだよね。大抵、こんな空気になっちゃうから。

「む、反応があったぞ。狙撃するには少し遠いな。秋野、転移してくれるか？」

「了解！ 『開け、影の門』」

さて、仕事再開です。

はあ。これが麻帆良祭ですか。人がいっぱいで斬りたくなくてき
ちやいます〜。

「つーちゃん？ 物騒なこと考えたらあかんよ」

「……分かってます〜」

「その間が怖いえ」

今日はセンパイがネギ先生のほうに行っちゃったので代わりに木
乃香はんの護衛どす。

「木乃香はん、どこ行きます?」

「うーん、まずはクラスの宣伝や。適当にぶらぶらしてればいいん
ちやう?」

その適当にの場所が知りたかったんどす。

「ひゃっきゃこーでも引き連れます?」

「ダメや」

「ふう。少し休憩するネ。あとをよろしく頼むヨ」

五月の声が聞こえたので安心して行けるネ。

このままいけば2年連続麻帆良祭売上NO.1ネ。……いや、今回の目標は違うネ。

もうそろそろネギ坊主が私のことを探しはじめるだろうし、待っているとするかネ。

「アーニヤちゃん、用意出来た？」

「はい！ 準備万端です！」

「じゃあ出発よ。目標は？」

「麻帆良学園のネギです！」

「元気があってよろしい。でもゲートが開くのは麻帆良祭最終日なのよ。だからちょっと寄り道してから行くわよ」

「……危険ですよね？」

「まあ、それなりにはね」

「……………」

私がここに来てからしばらくしてネギ坊主と刹那サンが来たネ。

……格好については何も言わないネ。

「これは本当にタイムマシンなんですか!？」

「そうネ。……いやーちゃんと起動してよかたネ」

「ちゃんとしてなかったらどうだったんですか？」

「……どことも知れぬ時空の狭間をさまよっていたかも知れないネ」

ま、そんなことが無いのはよく知ってるがネ。

ネギ坊主がそれを聞いてどう思ったかはわからないネ。ただ刹那サンは聞きたいことがあるみたいネ。

「超鈴音、一体あなたは何者なんだ」

「何度も言ってるネ。私は火星人だと」

「そうではない!」

「じゃあ一つヒントをあげるネ。私は、100年後の未来から来た……ネギ坊主の子孫ネ」

「なっ!？」

「信じる信じないは自由ネ。ただ、火星人は嘘つかないネ」

さて、帰って、超包子の仕事をやるネ。武道大会もあるしネ。

もう時刻は夕方になりました。まったく、せつかくの祭なのに無粋なことをする輩がいるせいであまり楽しめませんでした。……関西の強硬派、まだいたんですね。

それにしてもネギ先生が面白いことになってますね。たった今、キスターミネーターが降臨しました。さあ、犠牲になるのは誰でしょう？

向こうのアリスさんも到着したみたいですし。あとはこちらが頑張るだけですネ。

「なあ、俺達の出番ってまだ？」

「最終日って言ったじゃないですか。それまでは武道大会に出る以外は自由です」

「あーそうだったな」

「奥さんと一緒に遊んでくればいいじゃないですか」

僕は薄く笑いながら言う。

「んーそうすつか。じゃあな、兄さん」

はあ。いつの間にか結婚しちゃって。

「おい、今のは誰だ？ 雰囲気ナギに似ていたんだが」

声がしたほうを見ると、ゴスロリ服に身を包んだエヴァちゃんがいた。

「ああ、今のは僕の弟ですよ」

「じゃああいつも未来人か。いつから麻帆良は未来人の巣窟になったんだ」

エヴァちゃんはやれやれとでもいうように首を振って、興味を無くしたのか、その場を去って行った。

所変わって、武道大会会場。

ここには、賞金に釣られてやってきた者や、純粹に力試しをしたという者が集まっていた。

だが当初予定していたよりも多く集まってしまったため、何ブロックかに分けて予選を行うことになった。

……ってこんな説明口調嫌だ！

「秋野さん、何か言いましたか？」

「いえ、何も」

「友はくん、うちも出ていいですか？」

「ダメ。月詠ちゃんが出たら大会がすぐ終わっちゃうから。いろんな意味で」

でも、よく考えたら、ネギ先生のほうはどうか知りませんが、僕のほうで修行してたメンバーだと、あつという間に終わってしまう気がしますね。

「あ、明日菜さんと刹那さんも出ないください。はっきり言って、二人が出ると一瞬で試合が終わっちゃうですから」

「まあ、しょうがないわね。出たかったんだけどな」

と、ここで高畑先生の登場。

「お、ネギ君も出るのか。じゃあ僕も出てみようかな」

まあ、いいんじゃない？ 僕もこれでネギ先生の實力計らせてもらおう。

「くくつ、タカミチ、ぼーやに負けるなよ？　ぼーやは意外と強く
なってるぞ？」

「あ、エヴァちゃん。エヴァちゃんは出ないの？」

「出ないよ。こんなお遊びには付き合ってられん」

なんだ、残念。

「これより予選を行います。参加者はステージのほうへ……」

いよいよ始まるみたいですね。まあ、明らかに怪しいフードが
名いますが。

予選を見たかったのですが、リンから呼び出しがかかったので向
かいます。

その場に行くと、リンが苦しそうにしていました。

「……来た？　まだ大丈夫だと思ってたんだけど……」

「やっぱりか。あんまり使っなくなって言っただろ？　とりあえず応急
措置だけしておくから。全部は無理だからな。時間が足りない」

こんな話をしてもリンの症状は変わらない。

「うん。それでいいよ」

「じゃあ早速始めるぞ。展開・『対干涉結界』。これで誰にも悟られることはない。……リン、背中を」

リンが服を脱いで、背中を顕にする。そこには黒く変色した紋様がある。

「だいぶ進行してるな。……魔法はあと使えて、3回が限度だな」

「それだけあればなんとかするよ。ユウも手伝ってくれるんだし」

「ああ、そうだな。ほら、終わったぞ。もう一回言っけど、無理すんなよ」

「うん。わかった」

第二十七話・「麻帆良祭開幕」（後書き）

あとがきに書くものがない……。
というわけで、二つ名メーカーなるものを使って、3・A全員分や
ってみました。

- ・相坂さよ：宴グロテスク
- ・明石裕奈：傀儡嗜虐ノイローゼ
- ・朝倉和美：喪失戯画サイコロシカルリズム
- ・綾瀬夕映：眼球肅清ペネトレイトラビリンズ
- ・和泉亜子：奈落中毒パラノイドオブジェクト
- ・大河内アキラ：真空立体ブラズマキューブ
- ・柿崎美砂：装弾挽歌ショットガンカーニバル
- ・神楽坂明日菜：微小封神ブラズマスケルプチュア
- ・春日美空：次元乱舞ディメンションパラドックス
- ・絡繰茶々丸：呻く絶望ショットガンプリズン

以上、出席番号1番〜10番でした。今回は11番から20番です。
何人が恐ろしいのが出ましたね。

感想お待ちしております。

二つ名メーカーやってみたいという方はメッセージで知らせてくれ
ればURLを添付いたします。

第二十八話・「麻帆良武道会」(前書き)

では、今回の注意点。

- ・原作乖離
- ・戦闘描写は期待しないで！

第二十八話・「麻帆良武道会」

ああ、なんということでしょう。あのエヴァンジェリンが幼女ではないなんて！

クウネル・サンダース

一夜明けて、今日は武道会の本選の日です。あのフードは今はいいませんが、正体によっては要注意でしょう。

で、今はその会場に千雨ちゃんと向かっています。

「で、昨日のコスプレ大会はどうでしたか？」

「ああ、一応優勝した。……まあ、黒歴史にもなったが」

「黒歴史？ まさか、表彰のときに服が脱げたとか？」

「な……見てたのか！？」

「いえ。勘です。僕も出たかったなあ」

もし僕が出たら、絶対優勝してやりますけどね。

「あ、会場につきましたよ」

会場は昨日と変わらず、龍宮神社です。……神社でこんなことや

っていいんでしょうか？

ちょうど一回戦が始まるところみたいですね。

「あ、千雨ちゃん、ドロー表見せてくれる？」

「ん？ ああ」

ふむふむ。こんな感じか。

ドロー表

第一試合：佐倉愛衣VS村上小太郎

第二試合：田中VS高音・D・グッドマン

第三試合：長瀬楓VS中村達也

第四試合：龍宮真名VS古菲

第五試合：大豪院ポチVSクウネル・サンダース

第六試合：ネギ・スプリングフィールドVSタカミチ・T・高畑

第七試合：（怪我により棄権）VS（諸事情により棄権）

第八試合：山下慶一VS青山詠春

え？ なんかおかしいって？

第七試合の出場者は、僕が出場停止にしました。だって、出るな

っていったのに出てるから。

青山詠春に関しては僕は知りません。麻帆良祭に来ていたのは知ってましたが、まさか出場するとは思いませんでした。

「あ、ありがとう。ちょっとネギ先生のほうに行ってくるから」

なんかややこしくなってるみたいだし。

僕がネギ先生の近くに行く頃には、第二試合が終わってました。

「あ、犬……じゃなくて村上君、おめでとう」

「おお。次も勝つで」

次は田中か。まあ、勝てるでしょう。

「あ、友ちゃん、なんでお父様が出とるん？」

「僕も知りませんよ。麻帆良祭に来ていたのは知ってましたけど、まさか出場するなんて思ってたませんでした」

「うーん、直接会って確かめてくるえ！」

木乃香さんはそういつやいなや、すぐに控室のほうへ行ってしまった。

「秋野殿も来ていたでござるか」

「あ、長瀬さん。もう終わったんですか？」

「あい。今は真名と古の試合でござる」

「おー、本当だ。でも龍宮さん苦戦してるね。いや、それも依頼だったっけか。」

「……10！ 古菲選手勝利です！！」

「お、終わったみたいですね。まあ。予想通りかな。」

「すごいです！ 龍宮さんに勝つなんて！」

「いやーどうアルかな？」

「ま、次の試合は棄権ですね。古さん、腕の骨折れてますし」

「さすがにダメでしょう。魔法使えば治せますけど。」

「む、バレたアル。まあ、しょうがないアルね」

「古さんは保健室に向かいました。さて、僕も千雨ちゃんの所に戻りますか。」

「ただいまー。どうだい？ 千雨ちゃん？」

「どうもこうも、ありえねえだろ。つか、ロボだからってあんなことできるのかよ？」

「さあね。まあ、タネも仕掛けもあるんだろうけど」

その両方とも魔法がかかわってるけど。

「で、次は高畑とネギ先生か。友はどっちが勝つと思う？」

「ネギ先生かな。高畑先生は本気は出さないだろうし」

出したらこの会場吹っ飛んじゃうしね。

「ふーん。お、始まるぜ」

さて。ネギ先生は何を見せてくれるのかな？

と、ネギ先生が走り始めると同時に空気の弾けるような音がする。

居合拳か。よくあれを防いだね。まあ、手加減済みだけでも。

そのあとも、ネギ先生は中国拳法独特の動きで、高畑先生を追い詰めていく。そして、魔法を乗せた一撃『雷華崩拳』で、高畑先生を吹き飛ばした。

「おいおい、あれは人間技か？ 今吹っ飛んでったぞ？」

千雨ちゃんが頭を抱えて悩んでいます。

「って、今度は水の上を歩いてやがる！ 忍者かよ！」

忍者ならクラスにいるじゃないですか。

高畑先生が舞台上に復帰し、今度は攻守逆転となりました。ネギ先生は瞬動を見切られ、手も足も出ない状況です。

さらに、鬼畜な高畑先生は咸卦法を使い、ネギ先生を追い詰める。

「おいおい、やりすぎだろ。あれ死ぬんじゃないの？」

大丈夫ですよ。ちゃんと手加減してるみたいですよ。

危機的な状況に陥ったネギ先生でしたが、最終的には勝利することが出来ました。まあ、お情けの勝利のような気もしますけど。

第八試合、あっという間に試合が終わってしまい、かなり拍子抜けでした。

続いて、2回戦が始まるのですが、残念ながら僕はこれからお仕事があります。

「というわけで、千雨ちゃん、僕の方も楽しんでくださいなね」

「ちょっと待て。なぜだ？」

「これから仕事なんですよ。超包子の」

「ああ、そうか。じゃあ、最後に一つだけ聞きたい。魔法ってあるのか？」

もう魔法の存在に行き当たりましたか。

「……魔法は、ありますよ。それも世界中に」

千雨ちゃんは絶句してませんが、僕も仕事があるので行くことになりました。

とある地下道。そこにはタカミチとちびせつながいた。

「やれやれ、こんなところまで来てしまったカ」

「ネギ先生にもらったダメージは大丈夫ですか？ 高畑先生」

「君たちは……どういうことだい？」

タカミチは二人に問い掛ける。

「仕事です」

「元担任に対し申し訳ないが、私には時間がないネ。明日、学祭が終わるまでの少しの間おとなしくしていてもらうヨ」

後ろでバチツという音がして振り向こうとしたときには、すでに二人に意識はなかった。

「まったく、僕をこんなことに使うなんて、バレたらどうするんだよ」

「いやー、大丈夫だと信じてたネ」

「それよりもあのフードの正体は分かったの？」

「うむ。あのフードは紅き翼の一員、アルビレオ・イマのようネ。ちようど今ネギ坊主と試合してるネ。ナギ・スプリングフィールドに変身して」

リンのパソコンのディスプレイを見ると、試合の映像が映っていた。そこには、ネギ先生と、ナギ・スプリングフィールドの試合が映っていた。

「あはは。もろに魔法使ってるよ。ある意味計画通りだね。あと、千雨ちゃんが魔法の存在に自力で気づいたよ」

「長谷川サンならおかしくはないネ。おと、もうそろそろ先生が目覚めるネ。その前に帰たほうがいいネ」

「じゃあ、帰るよ」

僕が出るのとはほぼ同時に高畑先生が目を覚ましたみたいだ。もし

かしたら後姿はみられたかもね。

「今のは誰だい？」

目を覚ました高畑先生が聞いてくる。

「私の仲間……いや、最も大事な人ネ」

高畑先生はそれを聞いて、言葉を失った。いや、雰囲気からしてこれ以上は話してくれないと思ったのだろう。

「君の目的は何なんだい？」

「まあ、言ったところで支障はない力。私の目的は、世界に魔法の存在を示すことネ」

「な！？ そんなことをすればどうなるか分かっているのか！？」

「もちろん分かっているネ。だが、私はやり遂げなければならないネ。……だから、何も考えようとしない貴様らに邪魔はさせない」

それだけ言うと、超は部屋を出て行った。

残された二人は、その目的について話していた。

「それが目的なのか……。でもなぜ？」

「わかりません。でも、最後の口調はいつもと違いました。それだけ本気なんでしょう。どっちにしろここから脱出しないことには……」

「それなら」

そう言っつて高畑先生は口の中から何かを取り出す。

それは簡易転移魔法陣だった。

「さあ、脱出しようか」

「今年度の優勝者は、青山詠春さんです！ それではインタビューを……」

紅き翼の英雄が出ているとは思わなかったが、魔法の存在を示すには十分な映像が撮れてよかたネ。

「……で、何か用かな？ 魔法先生諸君」

高畑先生もいるネ。まあ、問題はないネ。

「魔法をバラすなぞ許されん。おとなしく捕まれ」

その程度の戦力じゃ、私を捕まえられないネ。

「では魔法使いの諸君、三日目にまた会おう」

第二十八話・「麻帆良武道会」(後書き)

次話は二つのルートに分岐します。しないと解決できない問題が有りまして。

では、前回の続き。

- ・ 釘宮円：ファンタメンタルカラストロフィ終焉原理
- ・ 古菲：インスタントカルマ封印中毒
- ・ 近衛木乃香：ポータブルサッドネス嗜虐領域
- ・ 早乙女ハルナ：モータルミラージュ幻想急報
- ・ 桜咲刹那：ディストーションサブライズ歪曲奇術師
- ・ 佐々木まき絵：サテライトウエロシティ虚空幻想
- ・ 椎名桜子：エンブティエンドレス無限輪廻
- ・ 龍宮真名：アシッドデプレッション饒舌融解
- ・ 超鈴音：ウロボロスメランコリー虚無憑依
- ・ 長瀬楓：ハウリングアビス絶望共鳴

以上、11番〜20番でした。

くぎみん最強説ww

感想お待ちしております。

第二十九話A・「世界が変わる」(前書き)

今回は完全なオリジナルストーリーとなっています。また、最初の構想時のエピソードは、こういう展開にする予定でした。

第二十九話 A・「世界が変わる」

魔法使いの諸君。私の勝ちネ

超鈴音

麻帆良祭三日目。今日が計画の実行日です。

「遂にこの時が来たな。リン、俺は最後まで顔は見せなくていいんだな？」

「うん。顔を見せるのは私だけ」

「そっか。まあ、計画が成功したらまたクラスの奴らに会いに行けよ。あいつらなら魔法があっても変わらないだろうからな」

「そうだね。さて、計画を始めるネ」

「りょーかい。僕も彼らに声をかけてくるよ」

「彼ら？」

「うん。未来からやってきた僕の弟御一行」

だんだんと日が落ちてきたころ、麻帆良には異常な事態が起こっていた。

「おい！ こっちに応援を寄越してくれ！」

「無理だ！ こちらも手一杯だ！」

まず最初の異変はロボットの大量出現だ。ロボットはある場所に向かって進んでいた。

一般人は工学部の出し物と思っていたが、魔法先生・生徒は違った。ロボットの進行方向には魔力溜まりがあることを知っている。だからそれを止めようとした。だが一般人がいる中で、堂々と魔法を使う訳にはいかず、苦戦していた。

そして次に、学園結界が落ちた。いくら人間が集まろうと、茶々丸と伊織には敵うはずもない。

それに伴い封印されていた鬼が解き放たれ、さらに余裕が無くなった魔法先生・生徒を見て、学園長がやむなく魔法使用の許可を出す。それは超の計画通りだった。

「遂に魔法を使い始めたか。ユウ、出番ネ」

「うん。さ、皆、出番だよ。フードは取れないようにね。あと、殺しは厳禁」

「おっしゃー！ やってやるぜー！」

「久しぶりです」

学園の魔法先生が魔法を使い始めたとほぼ同時に、黒いフードをかぶった人物が複数出現した。

「くっ、一体何なんだ、あいつらは」

「……行くぜ！ 『魔法の射手・収束・轟雷の一矢』！」

空に雷が走り、魔法先生数人が脱落する。だが、一般人への影響は無い。

「タカミチ君、あれを任せてもよいかね？」

「はい。……ですが、なるべく早くお願いします」

タカミチを残し、学園長は単身上空の超の下へと向かう。

「ふふ、学園長が来た力。ユウ、頼むネ」

「僕に任せなさい。ついさっき、統合したばかりかだね。口調がバラバラだけど、調子がいいから、すぐに終わらせるよ」

上空へと向かう学園長の進路を阻むように、黒フードの一人が出現する。

「そこをどくのじゃ！　ワシはあれを止めねばならぬ！」

「行きたいのなら、僕を倒してからにしろよ」

焦る学園長に対し、冷静な友。

「その声は！　なぜ秋野君がそちら側にいるのじゃ！」

「なぜ何も、僕はそちらに所属するとは一言も言ってますよ。学園長が勝手にそう思っていただけでしょ？　それに僕は初めからこっちです」

「退いてはくれんかの？」

「今更何を。あなたはこれからの世界に必要無い人間だ。ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マギステル。契約により我に従え、光を司りし数多の王。その伝説を以って、我が矛となり、盾となれ。『光の競演』」

友が詠唱を終えた途端、光が辺りを包み、それが消えたとき、学園長の姿はそこには無かった。

「変化した世界で会いましょう。学園長」

学園長と友の戦いが起こる少し前、地上では熾烈な争いが繰り広げられていた。

「こんなもんかよ！ 紅き翼つてのは！」

タカミチと詠春は二人の黒フードに追い詰められていた。

「タカミチ、出し惜しみはなしです。周りの建物の人間は避難が終わっています！」

「はい！ 右手に気、左手に魔力、『咸卦法』」

タカミチが咸卦法を使うが、あまり情勢は変わらない。

「ふふふ。行きます〜。『雷鳴剣』！」

「くっ、『雷鳴剣』！」

詠春は辛うじて相殺するが、先程から防戦一方なため、体力を消耗している。

「む〜、さっきからそればっかですつまらないです〜。もう終わりにしましょう。『ひな』を使わせてもらいます〜」

「なっ!?!」

黒フードが『ひな』を鞘から抜いた途端、黒い気が体を覆っている。フードから辛うじて見えた目は、白黒が逆転していた。

「行きます〜。『黒刀・斬岩剣』」

「まずい！ 奥義『百花繚乱』！」

二つの技がぶつかり合い、辺りの建物に輝が入る。だが、詠春に押し切るだけの力は残っていなかった。

詠春の技が押し切られ、決着が着く。そこには倒れ伏した詠春と、廃墟のようになった建物が残るだけだった。

私が麻帆良祭に来たのは、木乃香の様子を見るためでした。

麻帆良に通うようになってからは、私は学校での木乃香の様子は、聞くだけでしたので、この機会に見ておこうと思いました。

ですが、タカミチに協力を要請されました。どうやら生徒の一人が良からぬことを企んでいるらしく、それを暴くために力を貸してほしいと。

初めに私は武道会に参加しました。この大会の主催者が件の人物らしく、タカミチが裏で行動するのを隠すために、魔法を知る者に対して注目を集める紅き翼の一員である私が活躍して注意を逸らして欲しいそうです。

決勝は私とアルの戦いでした。アルは本体は出て来れないので分身のようなものでしたが、忒の太刀が使える私にとっては問題はありませんでした。

私は優勝しましたが、この賞金どうしましょうか。

最終日、突如として現れたロボ軍団に辺りはあまり反応しませんでした。どうやら工学部の出し物と思っっているようです。

しかし、どうやら魔力溜まりを狙っているようでしたので、一緒に来ていた千草さんと共に、鎮圧に向かいました。

ですが、倒しても倒しても現れるロボに、麻帆良の魔法先生は脱落していきました。加えて、鬼が出現し、戦力的に厳しいものとなりました。

そんなときでした。黒フードの人物が僕とタカミチの前に現れました。

片方が神鳴流を使っていたので私が相手をする事になりましたが、思った以上に強く、もしかしたら全盛期の私を上回るかもしれません。しかも、封印されていたはずの『ひな』を使い、それをコントロールしていました。

最後は私の力及ばず、負けてしまいました。あれは一体誰だったのでしょうか。

タカミチはその戦い方に既視感を覚えていた。

「（この戦い方はナギさんに似ている。まさか……）くっ、『豪殺居合拳』！」

タカミチが考え事をしている間に魔法が飛んできて慌てて撃ち落とす。

「考え事なんかしてつと死ぬぜ。リア・メア・フレア・クーレイア。来たれ雷精101柱、敵を討て！」 『雷の射手・追尾連弾・101矢！』

追尾性能を追加された『魔法の射手』がタカミチに迫るが、タカミチは居合拳でそれを相殺する。

と、遠くで轟音がする。

「おー、派手にやってんな。あれ決着着いたんじゃないか？」

「まさか！」

「ただいまです〜」

「お、やっぱり終わってたか。じゃあこっちも終わらせるか。リア・メア・フレア・クーレイア。来たれ雷精101矢、敵を討て！」 『雷の射手・収束・轟雷の一矢』！」

タカミチが詠春がやられたことに呆然としている間に魔法が撃ち込まれ、タカミチも戦闘不能となった。

「そんな強くなかったな」

「そうですね〜」

そんな二人を光が包む。

「ん？ これは『光の競演』か？」

「学園長さん、可愛いそうです」

そして運命の瞬間を迎える。

世界樹が一際輝き、強制認識魔法が発動する。発動した魔法は世界中の霊地と共鳴し、瞬く間に世界中を覆い尽くした。

これにより、散々魔法戦闘を見ていた麻帆良生は魔法の存在を認識した。

「これで未来は変わるネ！あとは混乱を出来るだけ少なく収めるだけネ。ユウ、行くヨ」

「りよーかい」

三年後。

世界はよい方向へと向かっていた。魔法の存在は今や公のものとなり、身近なものになった。

また、魔法により以前なら治療不可能だった難病も治るようになり、貧困層の死亡率も激減した。

悠久の風などのNPOの活動も魔法が使用できることから、出来る範囲が広くなり、今や就きたい職業ランキング一位となっている。

だが一方で魔法をバラした超を今だに敵視する者ごく少数だがいる。

そして今日は麻帆良学園高等部の卒業式。旧3・Aのメンバーは、ネギとネギに関わった人物が失踪するということがあったが、噂でNPOに関わっていると聞き、一時の混乱も乗り切った。高等部ではクラスがバラバラになってしまったが、今日は元3・Aで集まることとなっている。

「このメンバーで集まるの久々だね」

「ネギ先生は来れないそうですわ」

それぞれが思い思いのことを話していた。

そんなとき、教室の扉が開く。

「ここだよね？」

「ああ。間違いないな」

入ってきた二人に対してかける言葉を失う人達。

「えっと、超さんですか？」

皆を代表していいんちよが質問する。

「うん、そうだけど？」

すると周りが騒がしくなる。今や超は有名人だ。来ないと思っていたその人が現れたのだ。それは当然のことだろう。

「ところでさー、隣にいるのは誰？」

周りの視線が隣にいる人物に向く。

「ん？ 俺か？ 俺は秋野友だ」

「」「嘘だ！」「」

「いや、本当だから。『アデアット』。……ほら、僕でしょっ？」

「あ、友ちゃんだ。……じゃあ男だったの！？」

「『アベアット』。ああ、こつちが本当の姿だ」

「魔法か。ねえ、ネギ君の居場所知らない？」

またしても視線が向く。

「あいにくと。全然連絡つかないんだ」

会話は一旦それで終わり、パーティーが始まった。

パーティーも終わり、みんなが帰ったことで、教室が静かになった。

「最期にみんなに会えてよかったよ」

「ああ、そうだな。さて、どこに行く？」

「始まるの場所、世界樹へ」

翌朝、世界中を衝撃が駆け回った。超鈴音の死。それは世界を揺るがすほどのものだった。

反超派はこれをきっかけとして、強硬的な立場をとった。だが、それも長くは続かなかった。

反超派は、各地で様々な混乱を引き起こすが、それは悉く鎮圧された。

ある反超派のグループは、『コスモエンテレケイア完全なる世界』と名乗る組織によって、潰された。

ある反超派のグループは、『アラルブラ紅き翼』と名乗る者達によって、潰された。

ある反超派のグループは、『ダイクエヴァンジェル闇の福音』によって、潰された。

またある反超派のグループは、『雪広財閥』によって補給面を断たれ、『日本魔術協会』によって、潰された。

反超派によって一時は世界が混乱したが、その後、世界は平和を

保つことができた。

十年後。

ある墓の前に、現雪広財閥会長、雪広あやかの姿があつた。

「超さん、秋野さん。世界は平和になりましたわ。あなた達のしてきた事は、私がきちんと引き継ぎましたわ。周りのみんなも助けてくれますし。……ネギ先生のことは、みんなには言つてません。あ、そうそう、みんな立派に活動してますのよ。裕奈さんは、母親もあとを継いでいろいろしてるみたいですし、朝倉さんは有名な記者になりました。亜子さん達は『でこぴんロケット』として活動してますし、アキラさんは水泳の日本代表になりました。美空さんはきちんとシスターになりましたよ。茶々丸さんとエヴァンジェリンさんは京都で暮らしています。真名さんは、わかりませんわ。千鶴さんと夏美さんは、保母さんとして、麻帆良幼稚園にいます。風香さんと史伽さんは、魔法世界で暮らしています。五月さんは、超包子のオーナーとして世界的に有名なシェフです。ザジさんは魔界にいるそうです。みんな、あなたたちのことは忘れていませんよ」

そこに、後ろから二人、やってきた。

「雪広さん、こんにちは」

「あら、茶々丸さんにエヴァンジェリンさん。あなた達もお墓参りですか？」

「ああ。今日がやつらの命日だからな。だが、あの時は驚いたな」

「ええ。最期って言ったのが気になって後を着いて行ったら……」

「だが、よく受け入れられたな。ぼーやや、他の奴らのことを」

「嘘をつくようなかたではありませんでしたし、私は薄々気づいていましたから」

「そうか……」

それ以上、会話が続くことはなかった。各々が物思いに耽っているのだろう。

やがて、三人は示し合わせたかのように、去っていく。

その後ろには、まるで、「ありがとう」とでも伝えるかのように、
供えられた花が揺れていた。

第二十九話A・「世界が変わる」(後書き)

これにてこの物語は完結です……………嘘です。

今回のがAパート、魔法バレが起きた後の物語でした。

ちなみに、各登場人物の13年後はこんな感じですよ。なお、まだ登場していない人物もいます。

・ネギ、明日菜、木乃香、刹那、のどか、夕映、楓、ハルナ、古菲：
存在無し

・さよ、朝倉：ジャーナリスト

・裕奈：NPO所属

・亜子、美砂、円、桜子：でこぴんロケット

・まき絵：新体操日本代表

・アキラ：水泳日本代表

・美空、ココネ、シャーケティ：シスター

・茶々丸、チャチャゼロ、エヴァ：京都住まい

・龍宮：傭兵

・千鶴、夏美：保母

・風香、史伽：魔法世界の雑貨屋経営

・葉加瀬：麻帆良大学名誉教授

・あやか：雪広財閥会長

・五月：超包子オーナー

・ザジ：魔界(ときどきあやかのものを訪ねる)

・学園長：死去

・瀬流彦などの魔法先生：麻帆良教師

・タカミチ：悠久の風リーダー

・アーニヤ、ネカネ：NPO所属

- ・ナギ：造物主と体を共有。紅き翼リーダー
- ・アル：図書館司書。紅き翼所属
- ・詠春：日本魔法協会会長
- ・小太郎：傭兵
- ・月詠：完全なる世界所属、雪広家専属ボディーガード

感想お待ちしております。

第二十九話 B・「続く世界」(前書き)

では、本編 B パート、先へと続くパートです。

第二十九話B・「続く世界」

やはり来た力

超鈴音

麻帆良祭三日目。今日が計画の実行日です。

「遂にこの時が来たな。リン、俺は最後まで顔は見せなくていいんだな？」

「うん。顔を見せるのは私だけ」

「そっか。まあ、計画が成功したらまたクラスの奴らに会いに行けよ。あいつらなら魔法があっても変わらないだろうっからな」

「そうだね。さて、計画を始めるネ」

「りょーかい。僕も彼らに声をかけてくるよ」

「彼ら？」

「うん。未来からやってきた僕の弟御一行」

いきなりイベントが変更されました。『火星ロボ軍団VS学園防衛魔法騎士団』って……。

「リン、もしかして、バレた？」

「そうみたいネ。罾を乗り越えてきた力。でも、やることは変わらないネ」

「そっか。じゃあ、やりますか」

「うむ。全田中さん、起動ネ！」

「了解しました。これより全田中は私、伊織の管轄下となります。茶々丸さんは、学園結界を」

「はい。姉さん」

さてと、まずは統合しないと。

「アリス、統合するよ」

「はいはい」

すると、これまでのアリスの記憶、経験が僕の中にあふれてくる。

「ふむ。そっちも順調か」

「少し調整に時間がかかりそうだわ。それまで僕がいなくても大丈夫

夫？」

「口調がめちゃくちゃネ。まあ、今は龍宮が頑張ってるから大丈夫ネ」

でも、なるべく早くしないと。

イベントが始まってから大分時間が経った。麻帆良生は勇猛に戦い、ロボの数も徐々に減ってきた。お助けヒーローの登場も要因の一つだろう。

だが、そんなとき、ロボの銃弾に当たった人が黒い空間に飲み込まれた。それにより、辺りは騒然とする。

「おい、何だよ今の！」

「撃たれた奴が消えたぞ！」

そんなとき、超鈴音の姿が立体映像で映される。

『麻帆良生の諸君、私は君達を甘く見ていたようネ。復活有りのルールは簡単すぎたみたいネ。この銃弾は工学部の協力により完成した失格弾ネ。この銃弾に当たった者は学祭終了まで寝ていてもらうことになるヨ。また、こちらもヒーローユニットに対抗してヒールユニットを投入したネ。では、諸君健闘を祈るネ。……この企画の提供は超包子ネ』

最後の一言が余計だが、麻帆良生はさらに奮起した。また、ボスである超鈴音には懸賞金がかけられた。

「超さん……」

「貴様が桜咲刹那だな」

「……誰だ！」

「まあ、仮にSとでも名乗っておこう。ヒールユニットの一員だ。いざ尋常に……勝負！」

刹那が何者かと戦い始めたとき、明日菜もまた、何者かに会っていた。

「誰よ！ アンタ！」

「あー、Aだっけか。ヒールユニットだ」

「じゃあ敵って訳ね。なら容赦しないわよ！」

「はっ。やってみるよ……」

二人が戦い始めようとしているとき、既に月詠は戦い始めていた。

「そういえばあんさん、名前なんと言つんどすか？」

「うちは、確かMだったような？」

「まあ、いいどす。今はこの戦いを楽しみまひよう」

「うふふ。そうですね」

「ネギ先生、ここにいたんですか」

「あ、秋野さん！ 協力してくれませんか？」

「一人よりもいいでしょうから、協力しましょう。で、早速ですが、龍宮さんに狙われてますよ」

友が指差す方向を見るが、その姿は見えない。だが、銃弾が来たことにより、現実味を持った。

「これは一体……？」

「これは失格弾というらしいです。どうやら、これに当たると、学

祭終了まで動けないらしいです」

「では、いったん隠れましょう！」

ネギはその場にいた、友、のどか、夕映、ハルナ、楓、古菲にそう言つと、電車に隠れる。

「このまま隠れてれば大丈夫なんじゃ……」

「確かにやられはしないかもですが、それでは……」

「敵の目的は我々の足止め。このまま動けずにいれば……」

「そのとおり、君たちの負けだ。綾瀬」

突如、会話に龍宮が入り込んでくる。どうやら電車の通信を介しているようだ。

「君たちとの根競べを楽しみたいところだが、生憎ほかにも仕事がある。悪いが君たちにはここで消えてもらおう。元気でな、ネギ先生」

「イカン、ネギ坊主！！ 電車を出ろ！」

その瞬間、ネギの居た電車が狙撃され、ネギが消えた。

だが、煙が晴れると、そこには、ネギの姿があった。

「ネギ坊主、ここは拙者が引き受ける」

「では、お願いします！」

ネギ達は、龍宮の相手を楓に任せ、走り出す。

少しずつ日が落ちてきた。そんな中、ネギ達は走っていた。だが、行く手を茶々丸三姉妹が防ぐ。

だが、ネギが茶々丸本人ではないと見抜き、それを知った古菲とハルナがその場に残り、他の人は先へと向かった。

「もうすぐ世界樹前広場だぜっ」

だが、待ち受けていた田中の攻撃に遭ってしまふ。ネギは『魔法の射手』で応戦するも、技後硬直を狙われてしまい、動けない。

そこへ、友が飛び込み、ネギへの着弾を阻止する。

「あ、秋野さん!!」

「あー僕のことには気にせず、先に進んでください。大丈夫で」

「先生!! 先に進みましょう!!」

ネギは、のどかに言われ、先へと向かう。

その後ろで、何事もなかったかのように存在する友に気づかずに。

「お、ひとつ陥ちたか。さて、劣勢だぞ。ぼーや」

上空では、その光景をみながらエヴァが酒を飲んでいた。

「事態の帰結に興味はないようじゃな」

そこへ、学園長が現れる。

「なんだ、じじいか。酒がまずくなる。あっちへ行け。大体貴様は止めに行かんでいいのか」

「若い奴らが止められれば、止めるじゃろ。止められんかったら責任は取る」

「フン。だがいいのか？ 秋野友は超鈴音の味方だぞ？」

「な、なんじゃと!!」

午後7時30分。すでに6か所あった拠点のうち、5か所は陥落した。

残る1か所も、陥落目前という状況だ。

そこへ、ネギがやってきて、なんとか盛り返す。ネギはそのまま上空へと向かった。

「ねえ、ゆえ。私の『いどのえにつき』使ったら、超さんの考えることわかるんじゃない」

「確かにそうですね。では、やってみましょうか」

「そうはさせないよ」

二人は後ろを振り向き、驚愕する。

「あ、秋野さん……」

「のどか、呆けてる場合じゃないです。秋野さんは敵です!」

「そうそう。僕は超鈴音の味方。宮崎さんは危険だからね。ここで退場してもらおうか」

夕映が気づいた時にはもう眼前に友の姿はなく、のどかは時間跳躍弾によって、飛ばされていた。

「秋野さん、あなたは どうして超さんのほうに味方するのですか？」

「簡単なことだよ。僕は自己紹介の時に行ったよね？ 火星人だつて。つまるところ、それが理由だよ」

「それはつまり、あなたも未来からやってきたと」

「正解。じゃ、僕はリンのところに行かないと」

友はそういうと、影に身を任せ、消えて行った。

上空では、ネギが仲間に助けられ、超のもとへと到達。戦い始めていた。

「これでカシオペアはなくなりました！降参してください！」

「ふ。この程度では諦めないネ！ コード0121*422191
610121*7523442255417452。呪紋回路解放。
封印解除。ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マジステル。
契約に従い、我に従え炎の霸王。来たれ浄化の炎、燃え盛る大剣」

「呪文！？ それにその始動キーは秋野さんと……」

「ほとばしれよソドムを焼きし火と硫黄。罪ありし者を死の塵に！

『燃える天空』！！」

激しい爆発音が鳴り、あたりが黒い煙で覆い尽くされる。

「……これを耐えるか」

「超さん、そんな力を使っちゃダメです！！ 呪文を唱えるだけで
すさまじい痛みがあなたを襲っているはずですよ！！ なんでっ！！」

「それがどうした！ この計画が私の全てだ！！ ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マギステル！ 火精召喚！ 『槍の火蜥蜴29柱』！」

「くっ、ラス・テル・マ・スキル・マギステル！ 風精召喚！ 『戦の乙女29柱』！」

二人の放った魔法はぶつかり合い、消えていく。

「まだ耐えるか。ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マギステル！ 『紅き焰』！」

「ぐっ」

ネギは徐々に追い詰められていく。そんな時だった。

「ネギーー、私も加勢するわ！！！」

「アーニヤ！？」

アリスに連れて来られたアーニヤがネギの下にやって来た。

「増援か。だが、その程度、問題はない！ ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マギステル！ 契約により、我に従え！ 炎の霸王！ 来たれ、浄化の炎、燃え盛る大剣。ほとばしれよソドムを焼きし火と硫黄！ 罪ありしも……ガハッ！ あと少しもつてくれ！」

「ちよっ、あんた大丈夫！？」

「超さん！ もうやめてください！ それ以上はっ！」

超は詠唱の途中で血を吐き、苦しそうにしている。それを見たネギとアーニヤはやめるように言うが、全く聞き入れない。

「私は止めない！」

「4回目はダメだと言っただろ？ 『眠りの霧』」

突如現れた見覚えのない者に超は眠らされる。

「……ユウか……。あとは任せたよ」

「はいよ。……今回はリンの負けだな。おとなしくしてるよ？」
『開け、影の門』」

超はその人物の影へと沈んでいった。

「あなたは一体誰なんですか！」

ネギはその人物へと問い掛ける。

「ああ、俺か。俺は……」

すると姿が変わっていく。現れたのは……。

「あ、秋野さん！」

「そう。僕だよ、ネギ先生。そして……」

「またも姿が変わっていく。」

「あ、ああ、アリスさん？」

「正解。私は正真正銘アリス・クロイツよ。そして私は……」

「三度姿が変わる。」

「俺、という訳だ。『俺』は『僕』であり、『私』でもある。同時に『僕』も『俺』で『私』。『私』も『俺』で『僕』。分かったか？ まあ、そんなことはどうでもいい。さあ、決着を着けようぜ！」

「戦うしかないか！ ラス・テル・マ・スキル・マジステル！」

「やってやるわ！ フォルティス・ラ・ティウス・リリス・リリオス！」

「やる気になったか。ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マジステル！」

「三人同時に詠唱を始める。」

「影の地統ぶる者スカサハの、我が手に授けん三十の棘もつ愛しき槍を！」

「契約により我に従え、炎の霸王。来たれ浄化の炎、燃え盛る大剣！
ほとばしれよソドムを焼きし火と硫黄！ 罪ありし者を死の塵に！」

「契約により我に従え、十二の位階を持つ天の遣い。来たれ、浄化の光、制裁の矢。現れよ、不義を滅せし神の怒り。彼の者を裁き給え！」

「『雷の投擲』！！」

「『燃える天空』！！」

「『煌めく神域』！！」

三者三様の魔法が放たれ、ぶつかり合う。

ネギの放った『雷の投擲』は他の魔法よりも少し早く詠唱が完成したため、ぶつかり合ったのは、ユウ側に寄っている。

アーニヤが放った『燃える天空』はまだ完成には至っていないが、威力は申し分なく、超のものと同程度のものだ。

だが、二人の魔法は『煌めく神域』によって打ち破られた。

そして儀式は完了する。

「そんな……」

「これで終わったな。ネギ先生、みんなの所へ行きましょう」

いつの間にか戻っていた友が言う。

「でも、強制認識魔法が発動したんじゃ……」

「そのことは心配要りません。ネギ先生がここに到達し、リンを戦闘不能にした時点で、見せ掛けだけの魔法に変わっていますので」

「え……」

絶句するネギを尻目に友は最後の仕上げにかかる。

『麻帆良生の諸君。君達の健闘は讃えるよ。ただ、今回は僕達火星軍団の勝利だ。リーダーの超はネギ先生が倒したが、そのネギ先生は僕が倒した。拠点も僕達が制圧させてもらったよ。……では、皆さんさようなら。提供は超包子でした。失格になった人は指定場で解放されます』

麻帆良生から負けたことにより負のオーラが放たれるが、後夜祭が始まったことにより、そんな空気は無くなっていた。

失格弾に当たった人も解放され、辺りはとても騒がしい。

そんな中、ネギとその仲間たちは人のいない一角にいた。

「秋野さん、超さんはどこですか？」

「今は僕の魔法球の中で休んでるよ。あんまり無理はさせられないし」

「そうですね。確認ですが、秋野さんも超さんと同じなんですか？」

ネギの問い掛けに答えたのは友ではなく夕映だった。

「そうです。ネギ先生が行ってから、私が聞きました」

「ありがとうございます夕映さん。秋野さん、なんでこんなことを？」

「解決不可能の問題を解決するため。そのためにリンはこの方法を選んだ。これ以上は僕が話していいものじゃないからリンに聞いて」

「そうですか。では秋野さんと超さんは未来に帰っちゃうんですか？」

「さあ？ リンは帰るつもりみただけど僕としては帰らないようにするつもりだよ」

と、そこで友の影が動き、中から超が出てきた。

「リン、休んどけって言ったよね？」

「うん。言われたよ。でも一日経って良くなったから」

「……まあ、せっかくの後夜祭だし、いいか。でも痛んだらすぐ言えよ」

「うん」

ふと友が周りを見ると、みんなが友のほうを見て、絶句していた。

「ん？ みんなどうしたの？」

「どうしたのじゃなくて！ 超さん、その口調何よ！」

明日菜が全員を代表して指摘する。

「むづ。この口調はダメ？」

「うっ、なぜ涙目。いや、いいんだけどさ、誰だかわからないのよ」

超は怪我を魔法で回復したので、身体が熱をもっている。なので自然と涙目になってしまふ。実は友もその目を見て理性と戦っていたりする。

「しょうがないネ。これでいいのかな？」

「そうそう。それが超よー！」

「私は口調で区別されていたとは……。気づかなかたネ」

「あ、そんな悲しそうな顔しないでよ……」

「超さん、あなたは何でこんな方法をとったんですか？」

ネギの言葉により、超の雰囲気が一変する。

「何で力……。私が思いつく限り、一番いい方法だからネ。他にも案はあたのだが、どれも上手くいくかは微妙なとこだたネ」

「そうですか……」

「それよりも、後夜祭、楽しまなくていいのかな？」

「そう、ですね」

「細かい話は学祭の後にするネ。今は楽しむことが重要ネ」

重くなっていた空気が少し軽くなり、各々が後夜祭に参加していき。

そしてこの場に残ったのは、ユウとリンだけになった。

「で、私は未来に帰っちゃいけないのかな？」

「ああ。こつちでまだやれることがあるだろう？ たった一回の失敗で諦めるなんてリンらしくもない」

「うん。そうだね」

「さしあたり、それを治療しなきゃいけないな。ま、魔法球もあるし、定期テストには間に合うだろう」

「……次は勝つ」

「俺は負けねえよ」

二人はお互いの顔を見て少し笑うと、手を繋いで後夜祭の会場へと向かっていった。

第二十九話 B・「続く世界」(後書き)

Bパートでした。次回は日常編を予定しています。

二つ名メーカー再開です。今回は21番から31番までです。

- ・ 那波千鶴：幽閉理論ネガティブファクター
- ・ 鳴滝風香：殲滅迅雷アサルトデリート
- ・ 鳴滝史伽：裂空半徑ランダムリベリオン
- ・ 葉加瀬聡美：亡霊摂理スロータープロトコル
- ・ 長谷川千雨：幽閉斬鬼ネガティブタンバリン
- ・ エヴァ(片仮名)：傀儡原理ノイローゼカーニバル
- ・ エヴァ(英字)：冥界周波数アンソウンフルツ
- ・ 宮崎のどか：月蝕抱擁アンソウンクレイドル
- ・ 村上夏美：拘束縛鎖ルナティックフリスベン
- ・ 雪広あやか：電磁回帰シークレットテロル
- ・ 四葉五月：抜刀念慮バラノイアストリート
- ・ ザジ(片仮名)：偶数怨嗟オートマチックチャイルド
- ・ ザジ(英字)：平面検死官ジャッジメントサーフィス

くぎみん最強説に続き風香最強説も……!!

エヴァが意外とあっている気がする。

千雨はあれですか。自分をネットの世界に幽閉して、ブログ女王の座を狙う鬼どもを斬るのでしょうか。

感想お待ちしております。

第三十話・「祭の後の日常」(前書き)

これにて麻帆良祭編は終了です。

あと、ついにミドルネームの秘密が明かされます!.....まあ、分か
ってる人のほうが多いと思いますけど。

第三十話・「祭の後の日常」

今回のテストに死角はないネ！

超鈴音

学祭が終わり、ネギたちは図書館島地下にあるクウネルの居住空間を訪れていた。

目的はもちろんネギの父親、ナギの情報を手に入れるためだ。

「あ、エヴァちゃんがいる」

「なあ、友。ちゃん付けは止めないか？ これだけ成長したのだから」

「んー、止めない」

「うがー！ー！！」

友がエヴァを弄っている間に、ネギたちの方では話が進んでいるようで、今現在ネギの魔力が一時的に放出され風が吹き荒れている。

「迷惑な風だな。興奮したぐらいで魔力が表に出るようでは修業が足りないということか」

「ネギ先生かわいそうに。死なないでね」

なんか僕視点が久しぶりな気が……。いや、そんなことはどうでもいいか。

僕は今、学園長室の前にいます。色々やらなきゃいけないことがあるので。リンの治療も並行してやってますし。治療方法？ 教えませんよ。

「学園長、失礼します」

僕が入ると、予想と違って、いたのは学園長と高畑先生だけでした。てつきり他の魔法先生もいるのかと思ったのに。まあ、この方が楽だからいいけど。

「なんじゃね？」

そんなあからさまに敵対してますオーラ出さなくてもいいじゃん。高畑先生なんか臨戦態勢だし。

「いやー、一応今回のことに関して説明しておこうと思ひまして」

「ほう。なら説明してもらおうかの」

「まず、僕とリン 超鈴音は100年後の未来から来ました。そし

てそれを可能にする技術も披露しました」

二人とも信じられないという感じかな？

「そして僕たちの目的は、将来的に起こるある問題を過去の時点で解決策を用意し、防ぐことです」

「ふむ。未来から来たというのは信じられぬが、時間跳躍弾があるのじゃから真実なのじゃろう。して、その問題とは？」

「僕がそれに答える前に、少し聞きたいことがあります。あなたたちは魔法世界の秘密についてどの程度知っていますか？それによつては話せないこともありますので」

「僕は紅き翼にいた時に全部聞いてるよ」

「ワシは本国からは何も聞かされてはおらんが、アルビレオから全て聞いておる」

二人とも全部知っているのか。

「じゃあ説明しますよ。未来において……………」

今日はテストの日です。つまりはリンとの決戦の日です。

「今回は勝たせてもらおうネ」

「いや、今回も僕の勝ちだね」

僕たちの対決が賭けの対象になってますが関係ありません。ただ勝つだけです。まあ、テストは簡単だったので半分くらい寝てましたが。

結果、両者満点で引き分けでした。

賭けで勝ったのは椎名さん一人でした。

テストも終わり、夏休みが近くなってきて、クラスが騒がしくなっている。それは担任であるネギもであった。

そんな中『ネギま部（仮）』が発足、エヴァが名誉顧問に就任した。

だが、その『ネギま部』という名前が嫌だったのか、部活名が『白き翼』に変更。本格的に部活という名の修業が始まった。

友も誘われたが、修業の面倒は見るものの、メンバーにはならなかった。

これはそんな修業の一風景。

「みんな集まってお下さい」

友の呼びかけに応え、修業していた面々が集まる。

「実は今日から教えてくれる人が増えたので再度割り振りたいと思います」

「それってどんな人なん？」

「今呼びますから。……入ってきてー」

友に呼ばれて入ってきたのは、すっぽりとフードを被った元ヒールユニットのメンバーだった。

「じゃあ自己紹介よろしく」

「あー、これって本名言ってるのいいの？」

「いいよ。どうせ、僕たちの未来には影響しないから」

「そっか。じゃあ、私は長谷川三雨。得意なのは電子関連だな」

「わ、私！？ ……ああ、私の子孫か」

千雨が驚いていたが、すぐに落ち着きを取り戻した。

「おい、友。もしかしてここにいるのって……」

「そうだよ。みんなの子孫」

その場にいたネギたちは驚くが、超・友という未来人の前例がある分、比較的容易に落ち着きを取り戻した。

「次は私です。私は伊織。先日は全田中の制御をしておりました。外見でわかるとは思いますが、茶々丸さんの元となった個体です」

「私は朝倉琴美。専門は情報収集と諜報活動よ」

「私は沙映・ヴィンテです。苗字が違いますが綾瀬夕映の子孫です」

夕映は小さな声で、「なんですか、あの胸は……」と言っていたが、聞こえたのは傍にいたのどかだけだった。

「私は京都神鳴流当主、桜咲刹華といます」

「もう、刹華は固いえ。私は日本魔法協会長の近衛木乃実や。よろしくな」

「この二人は結婚してるよ」

友から補足情報が付け足される。

それを聞いた刹那が何故か顔を赤らめていた。

「私はアカリ・C・スプリングフィールド。誰の子孫かは言わなく

てもわかるだろ？」

「次は私の番です。命・K・スプリングフィールドといいます」

「あー俺が最後だな。俺はアギ・M・スプリングフィールドだ。ユウの弟で命の夫だ」

全員の自己紹介が終わったが、一同は啞然としている。一番最初に再起動したのはのどかだった。

「あー、アギさんが秋野さんの弟ということは、秋野さんは偽名ですか？」

「そうだよ。僕の本当の名前は、ユウ・M・スプリングフィールド。ちなみに男だよ」

これにはネギ以外が驚く。ネギは先日見ているため、驚くことはなかった。

「『アベアット』。これが俺の本当の姿だ。ちなみにリンの本名はリン・オータムだ」

みんなが騒がしくしている中、夕映は何かを見たようだ。

「のどか、先程ユウさんの目が明日菜さんと同じだったように見えたのですが、のどかはどうですか？」

「うーん、私にはわからなかったよ？」

「そうですか。（ですが見間違いでないのなら、明日菜さんの特殊

な目、オッドアイはユウさんに受け継がれている。ですが本人はネギ先生の子孫ではあるようですが、明日菜さんに関しては何も言っていない。一体これは？」

意外と真実に近づいている夕映。

「そういえば、ユウさん、ミドルネームは何の略なんですか？」

「ああ、ミドルネームか。これはネギ先生と結婚した人の頭文字だ。命は自分の姓の神風のK、アカリのCはココロウアのC」

「え！？ 私！？」

「そう。で、俺とアギのMは宮崎のM。ミドルネームを持つてるのは3つの直系だ。あとはAだったか。確かAだけ意味が違ったんだよな」

「きゅっ」

「の、のどかー！？」

あまりの衝撃にのどかが気絶したようだ。

それに構わず、ユウは説明を続ける。

「Aは王位継承権は持たなかった。俺はあんまり詳しくないから、現王のアギ、説明よろしく」

「いや、兄さん、知ってるだろ。まあ、いつか。簡潔に言えば、Aはネギの妹の直系だ」

「え？ 僕に妹なんていませんよ？」

「この世界ではどうなるかは知らねーけど、俺達のいた未来では、確かにネギの妹はいたんだよ。まあ、最後の一人が反乱起こして、消されたからもう潰えたけどな」

「で？ 他に質問は？ 今なら僕が答えてあげるよ？」

いつの間にかユウから友に戻っていた友が聞く。

「では一つだけ。超さんもネギ先生の子孫と言ってましたけどなぜスプリングフィールド姓ではないのですか？」

夕映が質問する。

「流石綾瀬さん。そこに気づくとは。まあ、簡単に言っちゃえば分家なんだよ。スプリングフィールドの分家は季節に関する姓を持つんだ。ウィンテ(winter)、オータム(autumn)、フール(fall)、スメル(summer)、バーナル(vernal)の5つが分家。その中でも序列が決まっていて、上からバーナル、スメル、フール、ウィンテ、オータムとなっているんだ。このうち、スメルとフールは断絶した。そんなところかな」

「ありがとうございます」

友は辺りを見回し、他に質問があるか確かめ、ないようなので、先に進めることにした。

「じゃあ割り振りますよ。基本的には自分の子孫に教えてもらって

下さい。子孫がない人とネギ先生、宮崎さんはこちらで割り振りました。アーニヤさんはアカリと一緒にアリスに教えてもらって下さい」

「え！？ でもアリスさんは……」

「いるわよ。今さっき出てきたけど」

アーニヤが後ろを見るといつの間にかアリスがいた。

「早乙女さんは基本的にはアーティファクトを有効に使用するために、個人で絵を描いて下さい。他の魔法を教わるのなら、沙映さんのところで。古菲さんと長瀬さんは命と刹華さんのところ」

「わかったわ」

「了解アル」

「いげぬ」

「宮崎さんは僕のとこです。あと、長瀬さんも時々僕のとこですしてもらいます」

「よ、よろしくお願いしますー」

「あい」

気絶から復活したのどかも返事をする。

「ネギ先生はアギに教えてもらって下さい。アギの戦い方はナギ・

スプリングフィールドにそっくりですから。但し、拳法の修業も怠らないように」

「はい！」

ナギの戦い方と聞いて、ネギのテンションは上昇している。

「で、最後に明日菜さんなんですけど……一応高畑先生です」

「ちよつ……失恋したばつかなのに!？」

「咸卦法を教えられるのが高畑先生なんですよ。諦めて下さい」

「わかったわよ……」

これで全員の振り分けが終了し、みんながバラバラに散っていく。

「で、私はどうするんだ？」

「エヴァちゃんもネギ先生のところをお願いします」

「わかった」

エヴァがその場を去り、残ったのは友、のどか、明日菜、タカミチになった。

「すみませんが、宮崎さんと明日菜さんは少し外してもらえますか？」

そして、二人が離れていったのを見て、友がタカミチに話し掛け

る。

「高畑先生、明日菜さんの記憶はどうしますか？」

「僕としては、思い出してほしいくないな。でもこの先魔法世界に行くというなら、記憶は戻っていたほうがいいとも思うんだ。秋野君はどう思う？」

「僕は戻したほうがいいと思います。知っているのと知らないのでは、危険に対する心構えも違いますし。だから僕は、高畑先生が明日菜さんと戦って、それで決めればいいと思いますよ」

「そうか。じゃあそうするのでしょうか」

タカミチは決心したようで、明日菜のところへと向かっていった。

第三十話・「祭の後の日常」(後書き)

では、二つ名メーカーの続きです。

- ・ユウ：凶星 エクソダス
- ・秋野友：漆黒散華 タークネスタークネス
- ・アリス：氷雪警報 サタニックスリープ
- ・月詠：凶星 エクソダス
- ・フェイト：木製の雷帝 ヘルベットリミット
- ・学園長：紅蓮器官 ブルータルシステム
- ・タカミチ：残虐没落 ノイジースクランブル
- ・小太郎：忌避蹂躪 パラノイドマンドロイド
- ・チャチャゼロ：火炎因果 スパイラルブラスト
- ・詠春：残虐煉獄 ナバームスクランブル
- ・クウネル：破滅残響 スーサイタルインフェルノ
- ・アル：歌う陥穽 センチメンタルカラミティ

今回はこのぐらいで。

月詠とユウは同じ結果になりました。作者もびっくりです。

感想お待ちしております。

第三十一話・「転換点」(前書き)

今回より、一応魔法世界編となります。

まあ、しばらくは修行の話が続きますが。

第三十一話・「転換点」

僕はそんなに強くないですよ？ただ強く見せてるだけです。

秋野友

今日は終業式の日だ。成績に一喜一憂する日でもある。

バカレンジャーは当然のように一憂するほうである。

だが、そんな3-Aの教室に激震が走る。なんとバカレンジャーの構成員が交代したのだ。

「そ、そんな……私がバカレンジャー……」

「せつちゃん……」

桜咲刹那、バカレンジャーに参入。

「やりました。まあ、私が本気を出せばこんなものです」

「ゆえーよかったね」

綾瀬夕映、バカレンジャーを脱退。

「ゆえー、なんで急に勉強するようになったの？」

「さ……沙映さんが……」

のどかが聞いた途端、夕映の身体が小刻みに揺れはじめ、ブツブツと独り言を言いはじめた。

「ゆ……ゆえー！」

夕映がガクブルしてる時、教室の反対側では違う話題で盛り上がっていた。

「うわ、この二人オール5だよ……」

「当然ネ」

「当然だね」

無論、その二人とは、友と超である。彼らは、麻帆良学園初の二人でオール5（しかも評価は100点）を達成した。そのことでのあと学園長室に行くことになっている。

「リン、もうそろそろ行く時間だよ」

「じゃあ、行くネ」

二人が出ていった教室では、二人のあまりの仲の良さに、盛り上がっていた。

学園長室にやってきた二人は、この呼び出しが建前に過ぎないことをわかっていた。

「で、用は何ですか？学園長」

「君たち二人の処分についてなんじやが、二人とも処分は無しじや」

「「は？」」

予想外の言葉に二人揃って疑問の声をあげる。

「じゃから、処分はなしじや」

「いえ、それはわかったのですが、何故処分無しになったのですか？」

「学祭の件は、少しド派手にやり過ぎたイベントということになったのじや。実際君たちは被害を出さなかったわけじやし、魔法バレもしておらん。ワシはどこを処罰すればいいのじや？」

「詭弁ですね。ですがありがたく受け取っておきます」

これで学祭の件は終了とばかりに学園長は話題を変える。

「して、超君の体調はどうだね？」

「授業を受けても問題ないくらいまでは回復したネ。だが運動はま

だ無理ネ」

「加えて言うなら、魔法の行使は不可です」

超の身体は、外見こそ完治したように見えるが、内面は今だ完治したとは言えない。

「そうか……なら治療に専念するがよい。今日の話はこれで終わりじゃ」

「僕からはまだ話があります。学園長には本当の姿を見せておこうと思ひまして」

そう言つたや否や、友からユウへと変わっていく。その変化に学園長は驚く。

「そ……それは!??」

「これが秋野友の本当の姿。本名はユウ・M・スプリングフィールド。ネギの子孫だ」

「ネギ君の子孫……じゃがその目は……」

「ああ、明日菜と同じだと言いたいのだろう? そうだ。この目は王家に稀に現れる魔法無効化能力を持つ者特有のものだ。まあ、俺のは明日菜ほど便利なものじゃないがな」

「ふむ。このことはワシの胸に留めておこう」

「では、失礼しました」

「失礼したネ」

二人が部屋を出ていったあと、学園長は溜め息をつき、つぶやいた。

「あの二人を処罰しなくて正解じゃったな。……もしMMに渡ったら実験体になっていたかもしれん……」

今、僕の魔法球の中に、いつものメンバーが集まっている。

本当はエヴァちゃんの魔法球でやる予定だったけど、自由に出入りできないから、いつでも入れ、一日経たずとも出ることのできる僕の魔法球でやることになった。

「じゃあ、この前分けた通りで。あと、悪いけど今日だけ宮崎さんは沙映のところで行ってくれる？」

「わかりました」

さて、僕もやるべきことをやらないとね。まあ、審判なんだけど。とりあえずユウになるか。

「さて、俺が審判をやるんだが、何か質問は？」

「いや、特にないよ」

「私もないわ！」

「なら始めるぞ。えーと、まずは空間を区切って、干渉を無効にするやいいか。『対魔・対物結界』、『カシオペア式空間軸分離』、『対干渉無効化』。うげ、何だこの魔力消費量！ 死ぬるぞ。『カシオペア式空間軸分離』解除！ ま、こんなもんだろ。よし、じゃ、開始！！」

開始と同時にタカミチが居合拳を放つが、『ハマノツルギ』で明日菜はそれを防ぐ。

「なかなかやるね。いつの間にそんなに強くなったんだい？」

「ずっと友ちゃんや刹那とやってきたんだから、これぐらい当然よ！」

二人は動きを止め、話していた。だが、それもここまで。これから先は互いの力をもって会話となる。

再びタカミチの居合拳が明日菜を襲う。だがまたしても防がれる。

「（今のは結構な量を撃つただけだね）……『一条大槍・無音拳』！」

「だったら！ 『無極而太極斬』！」

明日菜の技によって、タカミチの技は掻き消される。

「これも防ぐのか。なら！ 右手に気、左手に魔力！ 『咸卦法』
！ いくよ、明日菜君！」

咸卦法によって強化された居合拳が明日菜に迫るが、明日菜も瞬時に咸卦法を発動する。

「私だつて使えるんだから！ 『斬岩剣』！」

「なっ！ それは！」

タカミチは明日菜が神鳴流を使ったことに驚いた訳ではない。そのことは刹那と一緒に修業してることから出来てもおかしくはないと思っていた。

タカミチが驚いたのはただ一点。その剣筋が大戦期の青山詠春とほぼ同じということだ。

「（今のは詠春さんと同じ……記憶が戻りかけているのか？）次いくよ。『豪殺居合拳』！」

「きゃあっ！」

反応が遅れた明日菜に『豪殺居合拳』が当たり、明日菜は吹き飛ばされた。

「……まだ……やれるわ……」

明日菜は不思議な場所を漂っていた。周りには無数の光の球がある。

明日菜は自分から一番近い球に触ってみる。すると、周りの風景が一変した。

「あれ？ これは麻帆良祭？」

今、明日菜が観ているのは麻帆良祭の最終日、自分とアギが戦っている場面だった。

「これは私の記憶……」

明日菜は次々に球に触っていく。その度に再生される記憶。

修業を始めたとき。修学旅行のとき。吸血鬼事件のとき。魔法を知るきっかけとなったこと。

次に再生されたのは、初めて麻帆良に来て、クラスに紹介されたとき。

「やっぱりいいんちょは変わってないわね」

だが、それより前の記憶はない。だからこれで再生は終わりだと思っていた。だが、その先にも球はある。

「あれは私の記憶……？ でも私にはあれより前の記憶はないはず……」

明日菜は好奇心からそれに手を伸ばす。そして再生されたのは自分にはない記憶。

それは雪が降り続く中での会話だった。

辺り一面の雪景色。そんな中を二人が歩いていく。

「タカミチ、これからどうするの？」

男の方は、今よりも若いタカミチ。彼はその問いに少し考え、答えた。

「麻帆良で全てを忘れて平和に暮らすのです。姫
姫と呼ばれた女の子は黙って歩いていく。」

「今のは私？ でも私にはあんな記憶はない……。それに姫って何
？」

明日菜は次の球に触る。

それは何処とも知れない森のこと。

そこには三人いる。うち一人は重傷を負っている。

「タカミチ、アスナを頼んだ」

「はい、師匠」

「ガトウ、死んじゃやだ！」

アスナは泣いている。

「おう、俺のために泣いてくれるのか。ありがとうな。……タカミチ、行け」

「……はい」

タカミチはアスナを連れていく。向かう先は旧世界。

最後に観たガトウは笑顔だった。

「え……今のは、学祭で見た……？ ガトウ……」

明日菜は呆然としながらも、ナニカに導かれるように次の球へと手を伸ばす。

それはある都市の風景だった。アスナは港で海を見ている。

「師匠、僕はいつになったら咸卦法が出来るんでしょうか」

「練習するしかないさ。ほら、右手に気、左手に魔力」

アスナはそれを真似してみる。すると、いともたやすく出来た。

「お、咸卦法か。さすがは姫様だな。タカミチ、抜かれちゃったぜ」

「はは……」

「どうだ、嬢ちゃん、俺のパートナーにならないか？」

するとアスナは、違う方向を向く。

「ナギでいい」

「今は、ネギのお父さん？ ……一体何なのよ！ ……」

だが明日菜は手を伸ばすことをやめない。

まるでそれがシメイであるかのように。

次に観えて来たのは、どこだかわからない場所。

アスナは自分の力がナニカの儀式に使われていることはわかっている。だがそれがナニカはわからない。

そして自覚する。自分が姫御子という名の　である。

「……………」

明日菜に反応はない。ここから先には球はない。つまり、これが記憶の果て。

「まだ整理が出来てないのね。私があなたと一緒にいるまで、身体を使わせてもらっわ。安心して。神楽坂明日菜。私もあなただから」

そしてアスナは表へと現れる。

「秋野君、どうしよう。吹き飛んでっちゃったよ」

「そんなに心配すんなよ。きちんと当たる瞬間に後ろに引いてたから、大丈夫だって」

明日菜が吹き飛んでから、まだそんなに時間は経っていない。つまり、明日菜が観た時間はほんの一瞬に過ぎないということだ。

と、明日菜が吹き飛んでいった方から光が見えてきた。

「お、おいちよつと待て。結界が消えてるだど？ ヤバいつて！」

次の瞬間、ガラスが割れるような音が聞こえ、結界が破れると同時に、魔力消失現象が起こり、区切っていた結界が消失したため、バラバラの場所で修業していた面々が現れた。

だが、突然のことだったため、みんなが混乱している。また、魔力消失現象の影響も起こっている。

アーティファクトは効力を失い、科学の力も含まれている茶々丸はなんとか動けるものの、チャチャゼロは動かなくなっている。

そして、気分よく空を飛んでいたエヴァは墜落した。

「一体何なんだこれは」

エヴァが呟くが、これは一部を除いた面々の心情であった。

「まさか……解けたのか？」

「そつみたいだな」

だんだんと光が収まり、魔力消失現象もなくなっていく。その光の向こうからアスナが現れる。

「私の身体、随分大きくなった。確かタカミチと 戦っている最中だったっけ」

「君はどつちだい？」

「私は、神楽坂明日菜で……アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア。今はアスナ。明日菜は今記憶の整理をしている」

未来から来た人は驚いていないが、クラスメイトは驚いている。特にエヴァは長く生きてるだけあって、『エンテオフュシア』の持つ意味を知っているため、驚きも一際だ。

「タカミチ、続きやらないの？」

「いや、やりません。この戦いの意味は無くなりましたから」

「そつ」

アスナはそれだけ言うと、何処かへ歩いて行ってしまった。

「……どうするよ、タカミチ」

「……僕が着いていくから、説明頼んだよ」

タカミチもアスナを追っていく。

残されたユウは溜め息をつく。

「おい、なぜ神楽坂明日菜がエンテオフュシアの名を持っている？」

「ああ、エヴァか。なぜも何も、アスナは本物だ。魔法世界最古の王家の姫様だよ」

「え？ 明日菜ってお姫様なん？」

みんなが同じ疑問を持っているだろう。だが事実である。

ユウはこれからのことに対して、大きく溜め息をついた。

第三十一話・「転換点」(後書き)

アスナ復活！明日菜は、もう少しお待ちください。

感想お待ちしております。

第三十二話・「亡国の姫君」(前書き)

久しぶりに連日投稿！ 今日はずいぶんスムーズに書けました。

今回はいわゆるつなぎ回です。

第三十二話・「亡国の姫君」

あなたは本当に明日菜さんですか？

雪広あやか

アスナを追って出ていったタカミチは困っていた。

なぜなら、アスナにどんな態度で接すればいいのかわからないのだ。

昔のように？ いやいや、明日菜のときのように？

タカミチの思考はグルグルと廻っていた。

「どうしたの？ タカミチ」

アスナも昔の調子で話してくる。

それがタカミチを余計に混乱させる。

そんなときだった。

「あら、明日菜さんじゃありませんか」

一方、魔法球の中にいるユウは、質問攻めにあっていた。

「今の、明日菜！？ 雰囲気全然違うんだけど！」

「ああ、そっだよ。間違いなくアスナだ。つーか、あっちの雰囲気
が元々のアスナだ」

お互いに『あすな』のニュアンスが違うが、それに気づいている
のはほとんどいないだろう。

「本当にお姫様なん？」

「でしたら私はなんて身分不相应な態度をつ！」

「ああ。さつきも言ったが、魔法世界最古の王国のお姫様だ。まあ、
今はその国もないんだけどな。だから気にすることはないぞ、刹那」

ユウは質問攻めで少し疲れてきた。だが、まだ止まる気配はない。

「おい、じゃあうちのクラスは一体何なんだ？ 特殊属性持ちばっ
かじゃねえか」

「さすが千雨だな。確かにこのクラスはおかしい。幽霊にガイノイ
ド、吸血鬼、傭兵、忍者、ハッカー、英雄の娘、神鳴流が二人、未
来人が二人、亡国の姫、加えて担任が英雄の息子ときた。明らかに
学園長が仕組んだんだろうな」

「どういう意図……って、そうか！ 先生の従者候補か！」

「まあ、それだけじゃないだろうな。俺が見た限り、アスナの護衛の意味もあるだろうな。更に、さっき俺が挙げた名前は魔法に関わっている人物だけだ。それ以外でもあやかや千鶴はお嬢様だし、桜子の直感はや予知のレベルだ。とことん異常なクラスだよ」

「ああ……頭が痛い」

千雨が頭を抱えているが、気にもとめずエヴァが質問を続ける。

「あの魔法無効化能力も王家の力なのか？」

「ああ。時々現れるらしい」

「そうか。ではあと一つだけだ。一体あれは何歳だ？」

「え？ 明日菜って同じ年じゃないん？」

「うーん、正確には知らないけど、百歳は越えてるはずだよ」

「なら今あいつは百年分の記憶を取り戻したのか。果たして元の神楽坂に戻るのかな？」

エヴァはそれを聞くと、どっかに行ってしまった。

「あ、エヴァに言い忘れたことがあったんだ！」

ユウはこれを口実に、その場を逃げ出すことにした。この時代に

来てから初めての逃走だった。

タカミチはまたしても悩んでいた。というか、頭を抱えていた。

先程あやかに遭遇し、一目で「あなたは明日菜さんではありませんね？」と見抜かれ、しかもその説明にアスナが魔法のことを交えて話したため、あやかが魔法を知ってしまったのだ。

あやかは雪広財閥の娘であり、魔法をかけて記憶を消すことは勝手に出来ない。というかタカミチ自体が魔法を使えない。

「高畑先生大丈夫ですか？」

「タカミチ、元気出して」

二人に慰められるが、二人が元凶なため、タカミチは微妙な気分になる。

更に、そこに、混乱をもたらすであろう人物たちがやってくる。

タカミチの苦勞はまだ続く。

エヴァに追いついたユウは忘れていたことを話す。

「エヴァの登校地獄、解けたぞ」

「は？」

エヴァは「何を言ってるんだこいつ」みたいな顔をしてユウを見ている。

「さっきのやつで、呪いに使われていた魔力が消えたんだよ。だから登校地獄も解けたってわけ。なんだったら学園の敷地外に出てみる」といい

「そうか。まあ、どうでもいいな。既に登校地獄は本来のカタチに戻っていたからな。卒業すれば解けたものが早くなっただけのことだ」

エヴァはあっさりとこの話を流した。

「で？ それだけじゃないだろう？」

「さすがエヴァ。みんなの前じゃ言えなかったことがあってね。エヴァはネギの母親について何か知ってるか？」

「いや、知らないな」

「そうか。ま、いいか。ネギの母親の名前はアリカ・アナルキア・エンテオフュシア。つまりネギも王家の末裔なんだ」

「おい、それじゃあー！」

「そう。アスナはネギの叔母あたりになる。そしてネギの子孫たる俺達も王家の末裔。ちなみに俺も魔法無効化能力が使える。燃費が最悪だがな」

「だからか。あんなに仲がいいのに、ぼーやと神楽坂の子孫がいなかったのはそれが原因だったか」

「いや、違うから。近親婚は禁止されていたわけではなかったし」

エヴァは自信たっぷりに言ったことが的外れだったため、顔を赤くして、下を向いてしまった。

「あー、その誰にでも失敗はあるさ」

ユウの慰めも今のエヴァにとっては傷口に塩を擦り込む行為と大差ない。

「うわああああん」

だからエヴァは声をあげて逃走した。幼女の姿ではないのに、幼女のとぎのように。

タカミチは更に困っていた。

あやかへの対処に悩んでいたときに、紅き翼のアル、詠春がやつ

てきたのだ。

当然、アスナは駆け寄っていく。そして更に力オスな空間が出来上がっていくのである。

「とうかなんでアルは出歩けてるんですか！ 学祭期間だけじゃなかったんですか！」

「ついさっき学園長と友さんがやってきましてね。ある魔道具をくれたんですよ。友さんが言うには、学園長への借りを返すためらしいですが、まあ、そのおかげでこうして出歩くことが出来るようになりました」

「じゃあ詠春さんは？」

「木乃香に会いに行くところでした。友さんの魔法球でやっているということ以案内してもらってました」

「え？ でも詠春さんの後ろにいるのは秋野君じゃないですよ？」

そう言われ、詠春が後ろを向くと、そこに友の姿はなく、見知らぬ人物が立っていた。

「あなたは誰ですか？」

詠春はそこにいる彼女に意識を集中する。もし攻撃されても対処出来るように。

そのせいで、口元を隠し笑っている千草に気付かなかった。

「私ですか？ 見てわかりませんか？」

「いや、全然わからないよ」

攻撃する意思がないとみたのか、詠春は気を緩める。そして自分以外が笑っていることに気付く。

「なぜ皆さんは笑ってるのですか!？」

「詠春、よく見ればわかりますよ」

「いや、全くわからないんですけど」

「はあ。やはりわからんか」

「もしや……エヴァンジェリンですか!？」

「ああ。そうだ。ま、本人じゃないが」

「ねえ、ナギにもなれるの？」

そこに話に参加していなかったアスナが参加する。

「うん。僕のアーティファクトなら出来るよ」

いつの間にか友に戻っていたようだ。

「アーティファクトでしたか。……ってそれよりも！ アスナの記憶が戻ったんですか！」

少し離れたところでナギになった友と遊んでいるアスナを見ている。ちなみにあやかはさつきから会話においてきぼりになっている。

「戻ったみたいだね。だからこれからどうしようかと思って」

「何をするにせよ、友さんの魔法球に行きましょう。こんな往来でする話じゃないですよ」

アルの提案によって一同は友の魔法球に行くことになった。

第三十二話・「亡国の姫君」(後書き)

あやかを関わらせただけどどうでしょうか。

そして学園長への借りは返済です。見返りとしては十分でしょう。なにせ紅き翼のアルが普通に活動できるんですから。これで学園長の本国に対する影響力もアップ!!

感想お待ちしております。

第三十三話・「復活」(前書き)

区切りのいいところにしたら短くなってしまいました。

そして、またしてもオリキャラ登場。

第三十三話・「復活」

私、復活！！

神楽坂明日菜

ユウがいた場所には、アスナが戻ってきていた。当然、アルや詠春、あやかもいる。

ちなみにタカミチは心労により、部屋に戻って休んでいる。

「あ、いいんちょ！ どうしたの？」

「ハ、ハルナさん！ わ、私にもわかりませんわ。気がついたら明日菜さんが明日菜さんじゃなくて、魔法で、ミニチュアで……」

「まあまあ、落ち着くです」

珍しくあやかが混乱していることによって場はカオスと化している。

「いいんちょさん、大丈夫ですか？」

「ネ……ネギ先生？ ……大丈夫ですわ！」

結局あやかの混乱はネギによって収まることとなった。

ユウがその場に戻って来たときには、あやかの混乱が収まったにも関わらず、更にカオスな空間と化していた。

あつちでは詠春、木乃香、刹那、月詠が話している。

そつちではあやかが加わったことで、夕映が改めて魔法を説明している。

こつちではアスナの行動がなぜか幼女化し、これまたなぜかナギに変身している友（分身体）と遊んでいる。その姿を見たネギとエヴァが大騒ぎし、それをアルが眺めている。

ちなみにチーム未来人は夕映と一緒に魔法について説明している。

ユウはとりあえず事態の収束を図ることにした。

「あつちとそつちは放置でいいや。こつちをどうにかしないと。まずは分身を解くか」

一番の原因である分身を消したことにより、一応は落ち着きを取り戻したネギとエヴァ。

「あ……ナギ、消えちゃった……」

次にどうにかすべきなのは、言動が幼女化しているアスナだ。だが、ユウは少し考えたあと放置することにした。理由は明日菜の人格が戻ったときに面白そうだから。どうやら記憶は共有しているらしい。

少し騒がしいものの一定の落ち着きを取り戻した。

「えーと、あなたはどちら様ですか？」

ユウが振り向くと、そこにはあやかがいた。知らない人がいたから挨拶しようとしたようだ。

「ああ、俺か？ 俺は秋野友だ」

「本人でしたか。魔法とはすごいですわ」

どうやら誰かから聞いていたようだ。

「それにしても明日菜さんはどうしてしまったのですか？ 元々おバカさんでしたが、今のは幼児退行みたいですけど」

「ああ、しばらくすれば戻るさ。今は昔の人格が出てくるような感じだからな。それよりあやかはどうすんだ？ 成り行きで魔法に関わったわけだが、今なら引き返すことも出来るぞ？」

「いえ。知ってしまった以上、引き返すようなことは致しません。明日菜さんだけでなく他の皆さんも関わっているようですし」

と、ここでユウは面白そうなことを思いついた。

「そうか、ならネギと仮契約してこいよ」

「そつだよ、いいんちよ。マジックアイテムも貰えるし」

面白そうなおいを嗅ぎ付けたのか、ハルナが話にのってくる。

「で、でしたら……。それで方法は？」

「ん？ 方法か？ キスだよ」

「しかもディープなやつ」

「……」

3-A の あやか は こうぶん している

「ほら、やるなら早くしたほうがいいぞ？ 明日菜が見たら面倒なことになる」

「そ、そうですね」

あやかはネギのほうに走っていった。そしてユウとハルナは爆笑している。

「あれ、信じちゃったのか？」

「いいんちよだからね」

「お、契約の光だ」

明日菜は記憶の海を漂っていた。前回の球のような形ではなく、一面に広がった記憶を観ていた。

「これが私の記憶って言われてもなんかピンと来ないのよね。否定するわけじゃないんだけどさ」

その記憶を自らの中で処理し、整理していく。時折、今表明に出ているアスナの様子も見ながら。

「……ちよっ！　なんであんな幼い行動してんのよ！」

だが、記憶の整理をやめるようなことはしない。……顔が羞恥で赤くなるうと。

「はあ。これで一段落ね。少し休憩しないと」

一応ここは精神世界なのだが疲労は感じるようで、休憩を取る。

「……いいんちょも関わっちゃったか。まあ、アスナが悪いんだけど。それにしても重い記憶が多いわね」

明日菜は自分が観てきた記憶を振り返る。

「……よく考えたら私って中学生っていう年じゃないわよね？　ていうかお婆さん？」

明日菜は自分の言った言葉に絶望する。

「……しかもバカレンジャーって……」

「記憶の整理は終わったの？」

明日菜がまたしても絶望しているところに、アスナがやってきた。

「あれ？ なんでいるの？」

「今は就寝中。もうそろそろ終わりそう？」

「あ、うん。でも終わったらいなくなっちゃうんでしょ？」

「ううん。私から会いに行くことは出来る」

「あ、そうなんだ」

明日菜はそのあと、記憶の整理を再開した。

翌朝、昨日はなんだかんだで出来なかった修業を開始することになった。

そして、朝食の時間。

「……私、復活！！」

明日菜が復活した。

魔法世界某所。ここでは、何かの実験が行われていたらしい。

らしい、というのは、たった今、この場所は廃墟と化したからだ。

「……君は？」

「……私……？」

「そう。君は自分の名前はわかるかい？」

「……私は……1032号……」

「……実験の被害者かな。どうだい、僕たちと来るかい？」

自分のことを1032号と呼んだ少女は少し考える。

「……うん」

「そう。でも1032号じゃダメだよ。……そうだね、ミラ、君はミラだ」

「……ミラ……ありがとう」

「じゃあ行くか。僕たちの家に」

彼らは歩きだす。

「……あの……あなたの……名前……は……？」

「僕かい？　僕はフェイトだよ」

第三十三話・「復活」(後書き)

これから先も修行風景が続きます。

そして、いまだにあやかの立ち位置が決まりません。魔法世界には行かないのですが、魔法を覚えさせるべきか悩んでいます。

感想お待ちしております。

第三十四話・「ある組織」(前書き)

少し短いです。

第三十四話・「ある組織」

サヴァン症候群って知ってるかい？ ……彼女はそれなんだ。
フェイト・アーウェルンクス

「……で、フェイト様、この娘は誰ですか？」

「ミラ」

「いや、名前じゃなくてですね」

完全なる世界の本拠地では、フェイトが連れ帰ってきたミラが一騒動を起こしていた。

元々、フェイトが孤児を拾ってくるのはありふれたものなのだが、そのほとんどはアリアドネーへと預けられる。こうして連れ帰ってくるのは珍しいことなのだ。

ちなみに今までフェイトが引き取った孤児に男の子はいない。

そして連れ帰ってきたまでは良かったのだが、そこで問題が発生した。ミラがフェイトから離れなかったのである。そしてそれを見た曆が嫉妬やその他諸々で暴走してしまったのだ。

今は落ち着きを取り戻してはいるが、この騒ぎによってこの場にいたすべての人が集まるといった事態になってしまった。だが、人が増えれば増えるほどミラはフェイトにくっつき、離れようとはしなかった。

「ミラは今日行ってきた場所に居たんだ。それで僕に着いてくるっていつから連れてきた」

「あ、そうですね」

フェイトが理由を話すと、すぐに納得してくれたようだ。曆たちも今日の任務については知っている。だから、フェイトの側から離れようとする理由も察した。

「ミラ君、ここにいる人はみんないい人だから安心できる」

「……わかった……」

「そう。6セクストゥム、任せていいかい？」

「お任せください」

フェイトは6セクストゥムにミラを任せ、自室へと戻る。ミラも容姿が似ているからか、6セクストゥムには懐き、問題はなさそうだ。

フェイトは自室に戻り、先刻の研究所のレポートを読んでいた。

1032号についての調査報告

被検体？1032号は、身体年齢10歳の少女である。一般的な人間と外見的にはさほど差はみられない。特徴は白い髪と蒼い目である。

魔力量に関しては、平均的な10歳児の約5倍の数値を示した。

これは、概算ではあるが、このまま順調に成長すれば、かの千の呪文ドラスターの男と比べても見劣りしない数値である。

1032号はこの施設に入ってから一言も発していない。先天的な異常がある可能性が浮上した。そこで詳細に検査をすることとした。

検査結果から言えば、1032号は「サヴァン症候群」であると判明した。

「サヴァン症候群」についての詳しい内容はここに記さないが、あえて記すのであれば、『天才的な能力を持つが、通常の学習能力に障害を持つ者を指す』ということだ。

1032号はコミュニケーション能力に障害があり、それゆえ、自らの感情を表に出すことが困難である。あくまで困難であるというだけで、表情に僅かに感情が見られる。また、言葉を理解することとは出来るが、書くことはできないようだ。

1032号はそのような障害と引き換えに、治癒魔法に関しては明らかに常人のそれを超えている。1032号の魔力が残っている間であれば、死後1分以内でなおかつ心臓もしくは脳があれば蘇生も可能であることが実験により明らかとなった。

また、1032号本人も魔力がある間に限っては傷つけられてもすぐに回復する。これは賭けではあったが、一度心臓を貫いたこと

があつたが、それすらも間をおかずに回復した。

これにより、1032号は魔力が一定以上残っているという条件付きではあるが、不死であることが確認された。

その後、同様の実験を繰り返す間に興味深い出来事が起こった。1032号が我々に逆らい、治癒魔法で攻撃を仕掛けてきたのだ。直撃を喰らつたものは一瞬で老い、絶命に至つた。

これについては次のページで

フェイトはそこまで読むと、そのレポートを読むのを止めてしまった。表情にこそ変化は見られないが、部屋の空気は怒気で包まれていた。

「あ、フェイト様、この子可愛いんですよ!」

心を落ち着けたフェイトはみんながいるところへと戻つた。そこでは何故か着せ替え人形になっているミラがいた。

「……つぎは……これが……いい」

わずかに読み取れる表情からするに、別段嫌がつている様子ではなかつた。むしろ、喜んでいるようだった。

「む? 一体この騒ぎは何だ?」

そこへデュナミスが帰ってきた。どうやら任務が終わったようだ。

「……………けが、してる……………」

「む？ ああ、そうだな」

「……………なまえ……………なに？」

「ああ、デュナミスだ」

「……………みんなの……………ともだち？」

デュナミスはそう聞かれて答えに詰まった。はっきりというなら上司と部下なのだが、こんな子供にそれを言う意味があるのかといえない。ゆえにデュナミスはこう答えた。

「……………そうだな」

「……………じゃあ……………ミラのともだち……………だから……………なおしてあげる」

デュナミスの腕が光り、次の瞬間には傷は癒えていた。

「ほう、これは凄いな」

デュナミスはミラの頭を撫で、自室へと向かおうとした。そんな時だった。

「大変じゃ！ あの施設が襲われたのじゃー！」

慌てて駆け込んできた女性の話す内容で、場の雰囲気が一変した。

「詳しく教えてくれるかい？」

「まだ詳しくはわからん！　じゃが、やつらによって施設が壊滅したのじゃ！」

「え……じゃあ、あの樹はどうなったんですか！？」

「多分、残ってはおらんじやろ……」

「彼は間に合わなかったの？」

セクストウム
6が女性に問い掛ける。

「済まねえ。俺も急いで向かったんだが、間に合わなかった」

「ちょうど帰ってきた彼は、悔しそうに話す。」

「で、犯人の目星は付いたのかな？」

「ああ。犯人は」

メガロメセンブリア元老院直轄・治安維持部隊だ」

「そんな……」

全員が絶句する中、二人だけ、正常の思考を保っている者がいた。

「確認はとったのかい？」

フェイトと。

「……あのひとたち……きらい」

ミラだった。

第三十四話・「ある組織」(後書き)

ここでミラについて補足説明。

容姿については、エヴァの髪を白くして、目を透き通るような青にした感じです。背丈も同じくらい。表情がうまく作れないので、姫巫女時代のアスナみたいな感じの人。

感想お待ちしております。

第三十五話・「ある部活」(前書き)

前話とつながっています。

今回は会話文が当作品比5割増しとなっています。

第三十五話・「ある部活」

正々堂々手段を選ばず真っ向から不意討って御覧に入れましょ
う。

萩原子菝（戯言シリーズ）

今日から本格的な修行が始まる。ネギは気合を入れていた。

「あー、今日はそんなにキツイのはやらねーぞ。だからそんなに気合入れても無駄だ」

「あ、そうですね」

そして、その気合は空回りした。

「今日はちよっと兄さんの強さの秘密を話しておこうと思ってな。兄さんに頼まれたんだよ」

「ほう。あいつの強さの秘密か。ぜひ聞きたいな」

「まず、兄さんは根本的には弱い。そこらの魔法使いにも負けるくらいいな」

「そうですねですか？でも負けたとこ見たこと無いんですけど……」

「まあ、今じゃあんなに強いが、昔は本当に弱かったんだ。魔力もほとんど持ってなかったしな。今でもあれを使わなきゃ一般より少し多い程度だと思うぜ」

「だが、聞いたところによれば『天の方陣』を使ったそうじゃないか。あれはその程度の魔力では使えんはずだが？」

「焦るなよ。ちゃんと説明してやつから。まあ、この指輪を見てくれ」

アギはそう言うと、ポケットからシンプルな指輪を取り出す。

「これは魔力を溜めておける指輪だ。兄さんはこれを使って自分の魔力よりも多いものを使ってる。俺のやつには魔法が込められているからその魔法以外には使えねえけどな」

「それは凄いな。あとで私にもくれないか頼んでみるとしよう」

エヴァは研究心に火がついたのか、その指輪を熱心に見ている。ネギも同じようで、興味を持っている。

「だが、これだけじゃないんだ。兄さんが魔法を操作してるのを見たことあるだろう？ 収縮だとか追尾だとか」

「ああ、前にそれでやられたな」

「それも兄さんの強さの一つだ。魔法の扱いに長けているんだ。だから魔法に色々な効果を付けることができる。俺は『魔法の射手』に追尾を付けるだけで精いっぱいだけどな」

「だが、それは私でも時間をかければ習得できるぞ？ そんなものじゃないだろう？」

「ああ。あと二つ、秘密があるんだ。一つ目は、詠唱が不要ということだな。しかもただの無詠唱じゃない。始動キーすら不要なんだ」

「え？ でも秋野さんもユウさんも詠唱してましたよ？」

「表向きはな。そうしないと目をつけられちまうからな。そしてこれは圧倒的なアドバンテージになる。まあ、魔力がそんなにないから微妙なところだが」

「確かにそうだな。私ほどの魔力があればかなり有利だが、あの指輪を使ったところでそこまで有利にはならないだろう」

「そこで二つ目の秘密だ。兄さんはある出来事があったその時に召喚したんだよ」

「何をだ？」

「悪魔。それも高位も高位、七大悪魔の一つレヴァイアタンをな」

「おい！ ちょっと待て！ レヴァイアタンだと？」

「そう。そして兄さんは盟約を結んだ。一方的に縛る契約ではなく、お互いが対等な盟約を。そのおかげで兄さんの魔力は格段に増えた。その時点で俺は兄さんに勝てなくなっただ」

「そりゃそうだろうよ」

「でもそれだけじゃなかったんだ。気づいた時には七大悪魔全員と盟約を結んでいた」

「……………あいつ、人間か？」

「で、今に至る、と」

「でもユウさんって光系統の魔法をよく使いますよね？ 普通、使えなくなるんじゃないか……………」

「ああ、それか。なんか兄さんが言うには『光と闇は表裏一体。ということは、普通は使えるはずさ。逆になんでみんなは使えないんだ？』らしい」

「バグか……………」

ユウの暴論に呆れている二人だった。

「で、ここからが修行に関係あるものだ。一応、俺の計画では、ネギに『闇の魔法』を覚えてもらう」

「なっ！ あれはただの人間には無理だ！」

「だろうな。ありゃ、不老不死になる儀式みたいなもんだからな」

「そうなのか？」

「ああ。人外が使うことを想定している術式だからな。使えないやつが使おうとすると人外に近づくんだったよ」

「え？ え？」

ネギはどうやら話についていけないみたいだ。今も混乱しているような顔をしている。

「で、それを普通の人間にも使えるようにしたのが、リンの刻印だ」

「やはりか。あれからは魔の感じがしたからな」

「そう。そして失敗した。あれの代償は使用者の魂だ。魂を削りながら魔法を使っている。だからあれは禁術指定になった。オータム家のやつは勝手に使ったみたいだが」

「では、本家をぼーやに教えるのか？」

「いや、俺が使っているこれを使う」

アギはポケットから一枚の紙を取り出した。その紙一面に複雑な術式が描かれている。

「これは兄さんが刻印をモデルに作ったものだ。まあ使い捨てで、本来のものよりも効力は弱いけど、副作用なしで使えるんだ。俺たちは『疑似・闇の魔法』と呼んでる」

「ふむ。貸してみる」

エヴァはアギからその紙を受け取り、解析し始めた。どうやら集中しているようで、アギが呼びかけても反応しない。仕方なくアギはネギのほうに向かった。

「で、これを使うには条件がある。まずはこの術式を自分で描くことができること。そして一番大事なのが、自分の闇に向き合うことだ」

「自分の闇に……」

「それができなきゃ、これを使う資格がねえ。まあ、選択は任せろぜ。別にこれ以外にも強くなる方法はあるしな。ただ、これが最も手っ取り早く力を手に入れられる方法だ。ほかの方法だとかかなり時間は掛かる」

アギはそう言うと、その場から立ち去って行った。

ユウはのどか相手に修行を始めた。

「最初に言っておく。のどかの魔力は普通の魔法使いと大して差はない。だからネギみたいな大魔法の連発は出来ない。普通ならな」

「じゃあ私は何をすれば」

「まあ、焦るな。そこでだ。これをやる。これは俺が作った魔道具だ。発動体としても機能する。そしてこれには魔法を籠めることが出来る」

「えーと」

のどかは少しの間思考停止に陥った。

「つまり、これを使えば私も大魔法を使える……?」

「そういうことだ。で、のどかの基本的な戦い方は、『正々堂々手段を選ばず真つ向から不意討つて御覧に入れましよう』だ。アーティファクトの効果からしてこれが一番いい」

「えーと、つまり、アーティファクトで行動を読んで戦うってことですか?」

「そつだ。そこである魔道具が必要だ。それもやろう。『鬼神の童謡』だ。これで相手の名前がわかる」

ユウが魔道具を影から取り出す。

「ちなみに使い方は簡単だ。正面から『アナタノオナマエナシデスカ我、汝の真名を問う』だ。死神の目よりも使い勝手は悪いがノートがあれば新世界の神になるのも出来るぞ?」

「そんなことしませんよ!」

「まあ、これから戦闘のやり方も教えるからな」

「はい。頑張ります」

その日の夜、みんなが寝静まったころ、ユウとリンはユウの部屋にいた。

「一応これで治療できるとこまではしたが……初期状態に戻っただけだな」

「そうだね。でも随分と楽になったよ」

「ああ。……一つだけ。その刻印の問題を解決する方法があるんだ」
「なに？」

「それは元々『闇の魔法』だ。ならば魔の力を持てばいい。悪魔と契約なり盟約なりをすればいいんだが……」

「でもそれじゃ犠牲が出る……」

「そうだ。だから……俺と本契約しよう」

「……へ？」

リンは驚きのあまり、変な声を出した。

「俺の身体は半ば魔の物と化している。だから……それに、俺達、もう本契約でもいいだろ」

「……そうだね。でも、優しくしてね？」

「ああ」

その後、たまたま部屋の前を通り掛かった刹那は顔を赤くして走っていったということをごここに記しておこう。

三日目の朝（現実世界ではまだ三時間）、その知らせは届いた。朝食を摂っているときだった。

「ユウ、ちよつと来てくれる？」

分離しっぱなしになっているアリスにユウは呼ばれた。

二人は少し離れた場所に移動した。

「どうした？」

「あそこが襲われて壊滅したらしいわ」

「そんな！……犯人は？」

「メガロメセンブリア元老院直轄・治安維持部隊だつてさ。クルトにも確認とつたから間違いないわ。それとクルトから『すみません』だつて」

「いや、クルトに非はない。くそっ！　せつかく上手く行ってたのに！　何が目的なんだ！？」

「どうせ世界を救うのは私たちだ！　みたいなことじゃないの？」

「奴らが考えそうなことだな。やっぱりMMは滅ぼしておくべきだったか」

ユウは悔しそうに呟くと、そのまま出て行ってしまった。

「くくくっ。これで我等がこの世界を救う英雄になるのだ」

「そうですね。ですが奴らはどうするのです？」

「構わん。放っておけ。それよりも手筈は整っているだろうな」

「はっ。既に手は打ってあります」

「そうか。真実を教えてやればサウザンドマスターの子も、どちらが正義かわかるだろう。……くくくっ」

第三十五話・「ある部活」(後書き)

次回で修行は終わりです。そして魔法世界へと向かいます。

感想お待ちしております。

第三十六話・「始まりの終わり」(前書き)

ちなみに魔法世界編はオリジナルになる予定。

第三十六話・「始まりの終わり」

.....

アリス・クロイツ

外へ出て行ったユウは、暫く経った後に帰ってきた。そしてすぐにアリスと月詠を連れて出て行った。

何も聞かされず連れ出された二人は黙ってユウに着いて行く。

着いたところは、何もない部屋だった。

「あら、ここに来たってことは向こうに行くのかしら？」

「ああ。アリスと月詠には先に行ってもらおう。本当は俺が行きたいんだがやることがあってな」

「あー、話が見えへんどす」

「ああ、そうか。じゃあ改めて。月詠に依頼だ。アリスに着いて行き、指示に従え」

「依頼ですか。わかりました」

「では、呼ぶぞ」

アリスが部屋の端によったのを見て、月詠もそれにならう。一方、ユウは部屋の中心へと向かった。

「『盟約により、我が下に姿を顕し給え。我が名はユウ・M・スプリングフィールド、彼の名はレユウウ！』……呼ぶ前に来やがった……」

姿を顕したのは、黒のドレスを着た女性だ。

だが、威圧感は相当なもので、常人であれば耐えられないだろう。

〜その頃〜

「Case 1：エヴァ&刹那」

朝食が終わって寛いでいるときだった。

「……！？ なんだこの寒気は!?!」

エヴァは強烈な寒気を感じていた。

「エヴァンジェリンさんも感じますか」

「刹那もか。どうやら私たちだけみたいだな」

よく見れば、エヴァも刹那も顔を青くし、身体が震えている。

「いえ、どうやらアギさんたちは気付いているようです」

エヴァはチーム未来人の方を見る。そこには何故か笑顔の面々がいた。

「なら原因はあいつか……」

「Case 2：真名」

真名は夕食後の餡蜜を食べていた。

「……！？（この気配は……魔王クラスだぞ！？）……敵意はないようだし放っておこう。うん。それがいい」

真名は到底敵わない相手だと悟ると、どれだけ報酬が出ててもこれの討伐依頼は受けないと心に決めた。

実は魔を持つ人にしかわからないのでそんな依頼が来ることはないのだが。

「Case 3：ザジ」

ザジはあやか（明日菜復活のあとに魔法球から出てきた）に誘われ、一緒に夕食をとっていた。ちなみに、千鶴と夏美は保育園の手伝いに行っているのではない。

「ザジさんと一緒に夕食をとるのも久しぶりですわね」

「……………」

「ええ」

そんなときだった。

「……………（この気配は！？ な、なななんでもレヴィアタン様が！？
ど、どどどどうすれば）」

内心かなり動揺するザジだった。

「だ、大丈夫ですか！？ 顔も青いし、震えていますわよ！？」

訂正。外面でも動揺していた。

そんなことが起こっているとは知らずに、話は進んでいく。

「で、何の用かな？」

「ああ、この二人を魔法世界に送ってほしいんだ」

「ああ、それで魔界を通して行くってことかな？」

「そう。じゃあレヴィ、頼んだ」

「任された！ ……対価は魔力ね」

「はいはい。ほら、月詠。頼んだぞ」

「……かしこまりました」

月詠は少しあてられているようで、若干ふらふらしている。アリスはユウの分身なので影響はない。

「じゃ、行きましょうー！」

レヴィが、二人の手を掴み、次の瞬間にはいなくなっていた。

「まあ、これでなんとかなるかな？ ……うおっ！ この感覚久しぶりだな」

ユウは対価の魔力をとられ、身体が変化してきた。

この対価の魔力は、盟約によって増えた魔力ではなく、ユウ本人の魔力なので、今はそれが空っぽになっている状態だ。そして、その空っぽを埋めようと、魔力が流れ込んでいるため、この時に限ってユウは魔族と化していた。

「この姿で行ったら驚くだろうな……」

今のユウの姿は、翼が生えている。ユウ本人と認識されなくても不思議ではない。

「まあ、行くしかないわけだが」

ユウは諦めて行くことにした。

案の定、リビングに行ったユウはリンやアギたち未来人を除いて、
本人と認識されなかった。

「あの、フェイト様？ 前から気になってたんですけど、『彼』って誰なんですか？」

「そういえば君たちは知らなかったね。彼は、しいかみ弑神天燎、まて傭兵だよ」
その名前に対して、暦は過剰に反応する。

「弑神天燎って、今、闘技会の人気をジャック・ラカンと二分するほどの人じゃないですか！」

「そつらしいね」

「ん？ 俺がどうかしたか？」

二人が話していると、件の天燎がやってきた。

「弑神さん！ サイン下さい！」

「おう。後ろの奴らはいいいのか？ 今なら名前入りでサインしてや

るぜ？」

いつの間にか暦の後ろには見慣れた4人が。

「「「「「お願いします！」「」「」

「ほいよつと」

天燎はすらすらとサインを書き、5人に渡すと、またどこかに出かけていった。

「ほえ〜、これが魔法世界ですか。でも人がいませんな〜」

「今日は平日だから、みんな学校にいるのよ。そういえば、もうそろそろゲートが開くころかしら」

月詠とアリスは無事に魔法世界に到着した（但し、レヴィのミスにより時間はずれた）。

アリスはアリアドネーに用があるようで、二人は今アリアドネーにいる。

「そういえば天兄も魔法世界にいるって言ってたような……」

「月詠ちゃん、ちょっと待っていてくれる？すぐ取って来るから」

アリスは目的の場所に着いたようで、月詠を置いてどこかに向かっ
ていった。

月詠は一人になってやるのが無くなってしまった。月詠は何故
か近くにいた猫で遊ぶことにした。

一方、アリスは自分の研究室に向かっていた。

だが、何か違和感を感じていた。

「（いくら平日だからって静かすぎるわね。まるで誰もいないよう
に……）……っ！ セラスっ！」

アリスは自分の研究室の前で倒れているセラスを発見した。

死んではいないようだが、傷だらけだ。

「……アリス……？」

「ええ、そうよ。一体なにがあつたの!？」

「……逃げて……私はいいから」

「逃げるなら、連れてくわ！」

そんなときだった。

もうここに用はない。潰せ

拡声器で大きくしたような声が聞こえ、外で魔力が高まるのが感じられた。

「くっ。『開け、影の門』！」

アリスは間一髪で転移に成功し、月詠のもとにたどり着いた。

「月詠ちゃん！ こっちに！」

異変に気付き、辺りを警戒していた月詠をアリスは呼び寄せ、もう一度転移を発動させる。

転移した先はアリアドネーからさほど離れていない森の中だった。セラスが怪我をしているため、あまり無理は出来ない。

「セラス、何があったの？」

「……………」

セラスは血を流しすぎたのか、気を失っていた。

「これはまずいわね。とりあえず私の魔法球に入れておくしかないわね。月詠ちゃん、看病できる？」

「できます。でも魔法球使ってもいいですか？」

「心配しないで。この魔法球は時間差がないから。だから看病をお」

アリスは最後まで言うことが出来なかった。

大きな音が聞こえたのだ。

月詠のほうを見ると、呆然としている月詠がいた。

視線の先を見たアリスは言葉をなくした。

「そ……そんな……アリアドネーが……」

二人の視線の先には、アリアドネーがあるはずだった。

だが、そこにあるのは

草一本生えていない真つ新な更地だった。

学術都市アリアドネーの消滅。及び全ゲートの破壊。

これは後に『二世世界戦争』と呼ばれる戦争の序章に過ぎなかった。

第三十六話・「始まりの終わり」（後書き）

今回は、『彼』の正体が明らかになりました。

アマテラス。ちなみにスサノオを出す気はありません。

「燎」の字は、普通は「てらす」と読みませんが、携帯では「てらす」で出てきたので採用しました。

感想お待ちしております。

第三十七話・「終わりの始まり」(前書き)

後半は少し読みにくいかもしれません。

今回で本編での未来人、Sの登場は終了です。引き続きユウとリンは出ますけど。

第三十七話・「終わりの始まり」

卒業試験開始。

伊織

魔法球内で約一ヶ月が経過した。外の時間でも一日が経過し、今は午後8時ころだ。

明日にはイギリスに向けて発たなければいけない。

そして、アギたちも、未来へと帰る準備が終わり、ネギたちがイギリスへ向かったあとと帰る予定だ。その準備中に一波乱あったが。

そして今日は最後の仕上げ　　卒業試験が行われていた。

「これぐらい避けてみせろよ！」

「ネギせんせい、右から来ます！」

試験形式はパーティー戦。個人の卒業試験は昨日終わっている。

チーム分けは、

チーム未来人

アギ・M・スプリングフィールド

命・K・スプリングフィールド

近衛木乃実

桜咲刹那

沙映・ヴィンテ

長谷川三雨

朝倉琴美

アカリ・C・スプリングフィールド

伊織

白き翼

ネギ・スプリングフィールド

神楽坂明日菜

宮崎のどか

近衛木乃香

桜咲刹那

綾瀬夕映

長谷川千雨

アーニャ

茶々丸

長瀬楓

古菲

朝倉和美

早乙女ハルナ

第三勢力

ユウ・M・スプリングフィールド

リン・オータム
エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル
チャチャゼロ
タカミチ・T・高畑
クウネル・サンダース
龍宮真名

となっている。

第三勢力は基本的には審判の役割だが、たまに魔法を撃ち込む。
……その魔法も脅威だが。

現状では、チーム未来人のほうが僅かに優勢に見える。白き翼は
のどかの先読みでなんとかなっているようなものだ。

「次いくぜ！ リア・メア・フレア・クレーア！ 『千の雷』！」

「私に任せなさい！ 『無極而太極斬』！」

アギの『千の雷』を明日菜が掻き消す。その隙にネギは詠唱を終
わらせる。

「行きます！ 『雷神の鉄槌』！」

「私にお任せを。神鳴流奥義『斬魔剣・百花繚乱』」

ネギが放った魔法も刹華によって消される。

先ほどからこのようなやり取りが続いている。

お互いが昨日の卒業試験で実力を知っているがゆえに、大技を出して隙を突かれるのを恐れている。

だが、それを第三勢力が許さない。

「リン、いくぞ！」

「OK！」

「ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マギステル。契約により我に従え、闇の主。全てを破壊し、愉悦となれ。『暁の明星』」

二人が放った魔法は分け隔てなく、両陣営に襲い掛かる。

「くそつ、兄さんのオリジナル魔法か！」

「ここはウチが。発！ 『是、八咫鏡』」

木乃実の八咫鏡によって、『暁の明星』は吸収され、ネギたちのほうへ放出された。

一方、ネギたちは最初の『暁の明星』を明日菜が消し、木乃実が放ったほうは、のどかの先読みによって回避した。

「発！ 『是、天叢雲剣』。せつちゃん、これを！」

「はい！」

刹那は木乃香から渡された天叢雲剣を持ち、背中の翼を広げる。

「行きます！ 『神刀・斬岩剣』！！」

刹那の放った『神刀・斬岩剣』は、上空から放たれたため、威力はさらに増大している。

だがそれは、刹那と命の連携技によって相殺される。

ネギたちはそれを読んでいたようで、この間にそれぞれが詠唱を終わらせていた。

「掌握！ 『雷天双壮』！ 術式統合『万の雷』！！」

「行くわよ！ 『燃える天空』！」

「発！ 『火具土』！」

「えーと、『解放・千の雷』」

「行くです。『雷神の鉄槌』」

「行くわ！ 『アーニヤ・フレイム・カノン』！」

ネギたちは今の自分が放てる最大の威力の魔法を使った。

一方アギたちも魔力の高まりに気付き、迎撃しようとしていた。

「行くぜ！ 『万の雷』！！」

「発！ 『火具土』」

「行くですよ。『轟き渡る雷の神槍』」

「行くよ！ 『逆巻く水流』！！」

ネギたちから一瞬遅れてアギたちの魔法が発動する。

お互いの魔法は、真っ向からぶつかる。発動の差から、ややネギたちのほうが有利だ。

だが、アギもただやられているわけではない。『万の雷』に魔力を送りながら、新たな魔法を使おうとしている。

さらには、技後硬直の解けた命、刹華、刹那も加わる。

「リア・メア・フレア・クーレイア！ 契約により我に従え、奈落の王！ 地割り来れ、千丈舐め尽くす灼熱の奔流！ 滾れ！ 迸れ！ 赫灼たる亡びの地神！ 『引き裂く大地』！」

「『黒刀一閃・神威』！」

「『真・雷光剣』」

「『神刀・雷光剣』！」

さらに威力を増したぶつかり合いは、辺りの空間を軋ませていく。

そして突然魔法が収縮し、弾けた。

その余波でネギたちも、アギたちも、ユウたちも吹き飛ばされた。

あとに残ったのは、大きなクレーターがひとつ。

「つたく、人の魔法球荒らしてんじゃないよ」

「しょうがないんじゃないの？」

「あの魔法たちが当たったら真祖たる私でも死ぬな」

吹き飛ばされはしたが、ユウたちは少し離れた場所にいたため、特に怪我もなくすぐに起き上がった。

「さて、結果はどうなったかな？」

「ああ、俺たちの勝ちだよ、兄さん」

ユウの問い掛けに近くまで来ていたアギが答える。

アギたちに近い場所で弾けたにも関わらず、木乃実が気を失っているのを除けば、怪我は見当たらない。

「木乃実が結界を張ってくれたおかげで俺たちは無傷だぜ。そのかわり木乃実が気を失っちゃったけどな」

「あれを使ったのか。確か木乃香にも教えたって言ってたな。……ネギたちはどうなった？」

「ネギたちならみんな気絶してたぞ。外傷はないから明日菜が魔法無効化で頑張ったんじゃないか？」

アギが向いている方を見ると、ネギたちが地に伏せていた。

「で、試験としてはどうだ？」

「もちろん合格だろ。あれだけ出来れば大丈夫だろ」

アギは満足げな表情でそう言った。

卒業試験、終了。

次の日。一行はイギリスにいた。いよいよネギたちが魔法世界へ
と行く日がやってきた。

それは同時にアギたちとの別れでもある。

今はみんながそれぞれ挨拶をしている。

「兄さん、ありがとな」

「ん？ 何がだよ」

ユウのところにもアギが来ていた。

「……それにしても、もう帰ってくることはないのか？」

「……少なくともこの件が終わるまでは無理だな。ま、これが終わったら一旦帰るさ」

「そっか。ならいいや。絶対来いよ！」

「ああ。アカリも元気だな」

アカリは頷く。言葉を発しないのは泣きそうだからだ。

「さて、ネギたちももう行かなきゃだろ？ 俺とリンはあとで行くから、それまで楽しんでる。あと一つ忠告だ。魔法世界では、聞いたこと、見たことだけを信じるな。自分で考え、行動しろ。周りに流されるな。以上だ」

「はい！ では皆さん、行きましょう！」

ネギたちはドネットに引き連れられ、ゲートへと向かっていった。

「アギたちも、ここでお別れだな。こっちが一段落ついたらそっちに行くから」

「おう。……そういえば向こうだとどれくらい経ってるんだ？」

「んー、試算だと一週間かな。行った当日に戻るにはまだ調整が必要だし、これ以上時間かけたら飛ばす魔力が霊地一つじゃ足らなくなるからな」

「うへー。じゃあ一週間分の仕事が溜まってんのかよ」

アギが明らかに嫌そうな顔をする。

「さて、そろそろゲートも開くだろうし、やるぞ」

ユウには辺りが魔力に満ちていくのが分かった。

「じゃあな、兄さん」

「それでは、失礼します。ユウ様」

「さよならー、お義兄様」

「じゃあな、ユウ」

「さよならです」

「また、未来で待ってるえ」

「では」

「……またね、ユウ兄」

次の瞬間にはアギたちの姿はなかった。

ネギたちはゲートに到着していた。イギリスの霊地は『ストーンヘンジ』。地球上にある12か所の霊地の中の一つだ。ちなみに麻帆良の『神木・蟠桃』も含まれる。

「僕たちしかいないんですか？」

「そうみたいね。……珍しい」

ゲートにはネギたち以外、誰もいなかった。

だが、そんな日もあるだろうと誰もが気にも留めなかった。

ゲートが開く時間になり、辺りが魔力で輝き始めた。

そして、次の瞬間、ネギたちは魔法世界へと旅立った。

魔法世界でネギたちが初めて見た光景は、魔法が迫ってくる光だ

った。

影の転移で麻帆良に帰ってきたユウは、リンのところへ向かって
いた。

そんなときだった。アリスから連絡があったのは。

「…………ユウ…………アリアドネーが…………消えた…………。私は…………どうすれ
ば…………」

それとほぼ同時にタカミチもやってきた。

「ユウ君、各地のゲートが…………」

それだけではない。リンが急いでこちらに向かってくる。

「ユウ！ どうしよう…………ゲートが突然開いて亜子たちがっ！」

それはこの世界の始まりの終わりにして終わりの始まり。

人々は問われる。

『意志』を。『意思』を。『遺志』を。『覚悟』を。『信念』を。
『理想』を。『誓い』を。『誇り』を。『正義』を。『善』を。『
悪』を。『力』を。『光』を。『闇』を。『己』を。『家族』を。
『友』を。『恋人』を。『守るべきもの』を。『守りたいもの』を。
『世界』を。『国』を。『生』を。『死』を。『命』を。『心』を。
『運命』を。『魔法』を。

そこには、『傍観者』もなく、『観察者』もなく、『被害者』も
なく、『加害者』もなく、『英雄』もなく、『大人』もなく、『子
供』もなく、『老人』もなく、『男』もなく、『女』もなく、『人
間』もなく、『亜人』もなく、『貴賤』もなく、『神』もなく、『
悪魔』もなく。

全てが等しく』当事者』

そして、二つの世界を巻き込む戦争の

幕開け。

第三十七話・「終わりの始まり」（後書き）

ネギは結局『闇の魔法』を覚えました。術式統合は『雷天大壮』にならないと、まだ使えません。

『解放・千の雷』と言ってるのはのどかです。

次回からいきなり戦争の話というわけではありません。

ただ、シリアスが続きます。

感想お待ちしております。

第三十八話・「勢力」(前書き)

久々の連日投稿！ ……ただストックを放出しただけですけど。

第三十八話・「勢力」

『正義』か。一番嫌いな言葉だよ。

ユウ

今回の騒動のため、麻帆良の魔法先生・生徒は学園長室に呼ばれている。

タカミチもユウを呼びに来たのだ。

「……タカミチ、学園長室に行く前に覚悟を決めておけ。……自分は何をしたいのかをな」

「？ ……分かったよ」

タカミチも最初は訳が分からなかったようだが、ユウの目を見て気付いた。事態はそこまで切迫しているのだと。

「リン、俺の部屋で用意しておけ。これが終わったらすぐ発つ」

「……分かった」

リンはその場から立ち去り、タカミチとユウは影の転移で学園長室に向かった。

ユウとタカミチが着いたときには、既に大半の魔法先生・生徒が揃っていた。

「今日集まってもらったのは、今回の騒動についてじゃ。麻帆良にある破棄されたゲートを除き、全てのゲートが破壊されたのじゃ。また、それに先だってアリアドネーが消滅したとの一報もあった」

「そんな！ 犯人の目星はついているのですか！」

ガンドルフイーニが騒ぎ立てるが、それは全員の心情だろう。

「うむ。ゲートが破壊される前に本国から連絡があった。本国の調査では、ヘラス帝国と思わしき部隊が確認されたそうじゃ。それを受けて本国はヘラス帝国に宣戦布告、今、魔法世界は戦争状態じゃ」

「それで、本国は何と」

「こちらから人員を送れと言ってきおった。じゃが、ゲートが壊されては送ることは出来ん。麻帆良のゲートも使えん。そこで、秋野君の出番じゃ」

その場にいる人の目が、一斉に友のほうを見る。

「秋野君の転移はゲートの近くであれば世界間でも使える」

「まあ、出来ますけど。ですが、使う気はありません」

「何を言ってるんだ、君は!!! 戦争が起こっているんだぞ!!!
それでも『正義』の魔「黙れ!!!」……」

友が激怒しているのは、ここにいる人のほとんどが分かった。

だが、ガンドルフィーニは気付かない。

「なぜわからんのだ!」

「黙れと言ったはずだが。しょうがないか。自分が正義だと思ってるバカだからな」

この発言に対し、周りからも罵声が飛びはじめる。

だが、既に友からユウになっていたユウは魔力を放出することで黙らせる。

「……ここはバカどもの巣窟か」

「何を言っている! 我々は正義だ!」

「いい加減黙れ! 貴様のような奴がいるから! 俺も! リンも!
あいつも!」

ユウの身体からは魔力が放出され続けている。

その圧力で学園長室のガラスは割れ、部屋は軋みだしていた。

「なぜそこまでして拒む！ さては貴様、帝国のスパイだな！！」
ガンドルフィーニはそう言うやいなや、懐から銃を取り出し、ユウに向けて撃った。

リンは途中まで学園長室での会話を盗聴器によって聴いていた。

その盗聴器はユウの魔力の圧力に耐えられず壊れてしまったため、全部は聴くことは出来なかった。

だが、ある程度は聴くことが出来たので、ある行動を起こした。

リンは学園の監視カメラをハッキングし、ある人物を探し始めた。

「ここじゃない……ここでもない……いた！」

リンは目的の人物を見つけるとすぐに影の転移で向かった。

学園長室に乾いた音が響く。

ガンドルフィーニの撃った弾は、ユウに当たることはなかった。

だが、その撃った弾はガンドルフィーニ自身に当たった。

それも、ユウが狙われた場所と寸分違わぬ場所　　心臓に。

ガンドルフィーニは何も言えずにその場に崩れ落ちる。

人の死を間近で見た者たちは叫びながら部屋を出て行った。

「この程度で騒ぐか。やはりバカどもの巣窟だな。……タカミチ、
選択を誤るなよ」

ユウは冷めた目で周りを見て、部屋を出ようとした。

そこで思い出したかのように、一言。

「明石教授、あなたの娘は友達と一緒に、今魔法世界にいますよ？」

ショックを受けている明石教授を尻目にユウは今度こそ部屋を出ていく。

ユウが出て行った部屋は沈黙に包まれていた。

それも当然だろう。ガンドルフィーニを一步も動かずに何が起こったかも悟らせる間もなく殺し、終いには無関係な生徒が魔法世界にいると言ったのだ。

明石教授は娘の携帯に連絡をとろうとするが、繋がるはずもない。

そんな中、学園長が口を開く。

「皆、今日は帰るといい。また明日集まることにしよう」

魔法先生は物言わぬガンドルフィーニを連れ、退出した。

その場に残ったのはタカミチと学園長だけだった。

「タカミチ君、君にも本国から命が下っており」

「お断りします。僕は本国には従いません。自分の意思で動きます。それでは、失礼します」

タカミチも退出していく。

学園長は頭を抱えるが、まだやるべきことは残っている。

学園長は関西呪術協会に連絡をとるが、返ってきた返事は、『関西呪術協会はヘラス帝国に加担する』というものだった。

自分の部屋に戻ってきたユウは、部屋にいる人が増えているのに気付いた。

リンはもちろん、エヴァや真名、葉加瀬もいる。そして、美空とココネもいた。

「ちよつ、あんた誰ツスか？」

「ああ、秋野友だ。詳しい説明はあとだ。ちょっと面倒なことになってな。今、一人始末してきたんだが、追手が来る前に向こうに行く」

「ケケケ、殺シタノカ？」

「正当防衛の結果だ。ん？ タカミチが来たのか？」

ユウは今、薄く魔力を放出して辺りを感知している。それにタカミチが引っ掛かったのだ。

「少し行ってくる。準備してろ」

ユウはそう言うと、タカミチの下へ行っただ。

タカミチはユウを探していた。そしてそのユウからタカミチに会いに来た。

「ユウ君、僕も連れて行ってくれないかな？ 僕は本国には従わない。僕は僕の生徒を守る！」

その目は嘘をついている目ではない。ユウはタカミチを信用して連れて行くことにした。

部屋に戻ったユウは早速術式を展開する。

魔法世界にいるアリスを捕捉し、影の転移で向かう。

そして、影に包まれ、ユウたちは姿を消した。

ネギたちは何処とも知れぬ森にいた。

ゲートを抜けた先でいきなり魔法が迫っていたが、ドネットとネギが即座に障壁を展開し、時間を稼いでいる間に、木乃香と刹那が持ってきた転移魔法符でその場を脱した。

今は木乃香の東洋式結界と夕映の西洋式結界で姿を隠している。

「ネギせんせー、これからどうするんですか？」

「そうですね……アリスさんと月詠さんが先に来てるそうなので連絡が取ればいいんですけど……」

「でもさっきから仮契約カード通しても反応がないえ」

そんなときだった。

「ネギ先生、何者かが結界に掛かりました」

夕映のその言葉に全員が臨戦体勢に入る。

やがて、その人物は姿を現した。

「ん？ お前がネギ・スプリングフィールドか？ 俺は弑神天燦。依頼でお前らを保護しに来たんだ」

「……信用できません。依頼人は誰ですか？」

「こづい場合合って言うてもいいのかな？」

「アマテラスって神様の名前やね。もしかしてつーちゃん、月詠ちゃん知り合い？」

「ん？ 月詠もこづち来てんのか？ まだ会えてねーな」

天燎が月詠を知っていることで少し警戒レベルは下がるが、臨戦体勢を解くことはしない。

「ま、このままじゃ信用してくれねーだろうし、言うてもいいか。俺の雇い主は、アリカ・アナルキア・エンテオフユシア。ネギ、お前の

……母親だ」

「え……？」

少し時間は遡る。

クウネル・サンダース、本名アルビレオ・イマはその名の通り情
眠を貪っていた。

そんなとき、突如として、部屋が揺れ、魔力が大量に感知できた。
ただ事ではないと思い、アルは起き上がり、地上と連絡をとろう
とした。だが魔力が満ちすぎている空間では、連絡も思うように取
れない。

そんなときだった。後ろから声を掛けられたのは。

「ふむ。貴様がアルビレオ・イマか」

「おい、てめえ、今は俺の番だろーが！」

「今はそんなことで争っている場合ではないじゃろっが。私はこれ
から詠春のところに行かなくてはいけないのじゃ」

背後で全く同じ声と女性が争っている。

その声に覚えのあるアルは、驚きとともに笑みをこぼす。

「お久しぶりですね。……………アリカ様。それに

……………ナギ

第三十八話・「勢力」(後書き)

これで主要人物はほぼ全員が魔法世界にわたりました。

感想お待ちしております。

第三十九話・「集結と選択」(前書き)

第三十九話・「集結と選択」

うわ！ 空に浮いてる！！

明石裕奈

とある場所で、亜人の男が必死に逃げていた。

「くそっ！ いったいなんなんだよ！」

「まだ逃げるのですか。ああ、そうそう。あなたが最後の一人ですよ」

「な！？」

「まあ、何も知らないで逝くのもあれでしょうから、教えて差し上げますよ。今回、私たちの目的は開戦することになりました。そして、その目的が達成されましたので、計画を知っているあなたたちはもう用済み。排除しなければいけないのですよ」

「なら、俺らは始めから騙されていたのか……。くそっ！ いったい何のために俺らはヘラスを裏切ったんだ！！」

「もういいでしょう。あなたたちは、アリアドネー消滅の実行犯として消されるのです。正義は私たちにあり、ですよ」

「くそがつ！」

「やりなさい」

男の周りに控えていた者達が、魔法を放つ。そして、亜人の男は、
花弁のようになり、跡形もなく消え去った。

「……え？ 僕の母さん……ですか？」

「ネギせんせい、この人、嘘は言ってないですよ」

のどかは天燎が現れてから、ずっと『いどのえにつき』を使っていた。

「お、『いどのえにつき』か。レアなモノ持ってんじゃねえか。…
…まあ、今は関係無いか。で、どうすんだ？」

「分かりました。連れて行って下さい」

「はあ、やっとか。じゃあこっちだ。転移魔法陣敷いてあつから、
そこから跳ぶぞ」

ネギたちは天燎の案内で森の奥深くに入っていく。

10分程歩くと、少し開けた場所に出た。そこには一目で魔法

陣とわかる模様が描かれていた。

「よし、全員乗ったか？ 使い捨てだから迎えに行けないぞ？」

天燎は全員が乗ったのを確認すると、魔力を流し、魔法陣を起動させる。

光が一際輝きを放ち、それが収まったころには、付近に人影はなかった。

アリスの下に転移したユウたちは絶句していた。アリスはショックでその場から動けていなかった。

「これはひどい……」

「アリス、取り敢えず、俺の中に戻ってろ。セラスの治療も任せておけ」

「……………」

ユウはアリスから反応が無いので、強制的に戻す。

「いつまでもここにいるわけにはいかない。まずは本拠地に行く。話はそれからだ。『開け・影の門』。これをくぐればすぐだ」

ここにいても、何か変わる訳ではないので、全員がくぐっていく。

「……この威力、『天の方陣』か。しかも少なくとも50発……」
少し遅れてユウも門をくぐる。その先にカオスがあるとも知らずに。

門をくぐったユウが見たのは、カオスだった。先程までのシリアスな空気は完全に吹き飛んでいた。

ネギはナギを見つけ、エヴァと一緒に泣いている。

明日菜はアスナになってアリカとの再開を喜んでいる。

天燎と月詠はミラを可愛がり、木乃香と刹那は詠春と話している。

いたるところでそのようなことが起こっているが、ある一角だけ周りと違った。ユウとリンはそちらに向かっていく。

「あ！ 超りん！ ……と、誰？」

そこにいたのは、麻帆良から飛ばされてきた、裕奈、亜子、アキラ、夏美、まき絵と、周りの空気に着いていけなかった美空とココネだった。

「ん？ 俺か？ 俺は秋野友だ」

「嘘だよな？」

「いや、本当だった。ほら『変化・秋野友』……ね？ 僕でしょ？」

「魔法……だよな？ じゃあもしかして麻帆良にいる間ずっと使ってたってこと？」

「正解。ていうかもう戻すよ」

ユウに戻ったユウは、再び説明する。

「とりあえず、お前たちは図らずともこっちに来ちゃったわけだが……どうする？」

「どうするって選択肢あるの？」

「ああ。一つはこのまま魔法の世界に入る、つまり、自分も魔法使いになる。一つはこのことを口外せずに暮らす。一つは忘却魔法で忘れる。ちなみにこれが一般的だ。で、最後の一つは口封じ。つまり、死んでもらう。この選択肢は今はいらないけどな。ま、もう少し考えな。将来のことでもあるからな」

とりあえず、ここから先は当人が決めることなので、ユウに口出しする権利はない。周りを見回すと、ポヨポヨ言ってるザジがいたので、話しかけることにした。

「よお。久しぶりだな」

「ポヨ？ ユウ、まだこっちにいたのか」

「まだとは失礼な。まだ終わってないよ。それにしてもまだポヨポヨ言ってるのか」

「これがないと妹と区別がつかないポヨ」

「そりゃそうだけど」

まだまだこの雰囲気は終わりを見せないようだ。

さすがにいつまでもこうしているわけにもいかず、これからのことについて話し合うことになった。

今は本拠地 墓守り人の宮殿 の大広間に集まっている。さすがに全員というわけにもいかず、各陣営から何人かが集まった。

「あー、とりあえず自己紹介からしときますか。俺はユウ・M・スプリングフィールド。100年後の未来から来た。あと蒼き翼のリーダーだ。一応な」

「私はリン・オータム。偽名は超鈴音。ユウと同じで未来から来ました」

「私は紹介する必要あるのか？ ま、いいか。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ」

「私はデユナミス。完全なる世界の大幹部だ」

「僕はフェイト・アーウェルンクス」

「私は造物主だ」
ライフメーカー

「俺はナギ・スプリングフィールド。千の呪文の男だ！」
サウザンドマスター

「私はアリカ・A・スプリングフィールドじゃ。旧姓はエンテオフ
ユシアじゃが」

「私は……ここではアルビレオ・イマと名乗っておきましょう」

「僕はネギ・スプリングフィールドです」

「私は、アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフユシ
ア。神楽坂明日菜でもいい」

「わ、私は宮崎のどかです……」

「妾はテオドラじゃ。名は長いので省略させてもらおう」

「私は近衛詠春です。今は関西呪術協会会長です」

「私はザジ・レイニーデイ。麻帆良にいるのは私の妹ポヨね」

そうそうたるメンバーだ。未来人に吸血鬼、魔族、造物主の使徒、
造物主、英雄、最古の王族、古本、黄昏の姫御子、帝国第三皇女、
関西呪術協会会長、ラスボス級の魔族だ。

今現在で、世界最高峰の実力者がここに揃っている。世界を落とすことも容易だろう。だが、そのような人物が集まらなければいけないような事態になっているともいえる。

「で、MMがヘラスに対して宣戦布告をしてきた。これはMMの言い分だが、『アリアドネーを消滅させたのはヘラス帝国の部隊であり、目撃者もいる。また、ゲートの破壊に関しても、その直前にヘラス帝国の部隊が確認された。我々メガロメセンブリアは魔法世界の秩序と安寧のため、苦汁の決断ではあるが、戦端を開くこととした。尚、そちらが降伏するのであれば、直ちに武装を解除し、皇帝がこちらの首都まで来ることを条件とする。期限は一週間とする。その内に降伏を受け入れぬ場合は交戦の意思有と見做し、戦端を開くこととする』……だつてさ。まあ、自作自演なのは分かってるんだが、実際にヘラスの部隊がいたんだよ」

「妾も確認したのじゃ。奴らは今の帝制に反対する奴らで、メガロメセンブリアから資金提供を受けていたことも裏がとれたのじゃ」

そこで会話は終わってしまった。開戦まではまだ猶予があるものの、皇帝が相手国の首都に赴くなど有り得ない。

ならばどうするか。そうなると、残された手段は一つ、開戦しかない。出来れば話し合いで解決したいが、既に国民感情は今までの不満も我慢の限界に達したのか開戦に傾いている。

「すみません、遅れました」

膠着した会議だが、遅れて入って来た人物の意見で進展を見せる。

「ん、ご苦勞様。一応自己紹介を」

「私は元メガロメセンブリア元老院のクルト・ゲードルです。……で、元老院の動きですが、開戦の方向で動いています。降伏しようとするれば、その際に攻撃を仕掛ける算段です。また、今回の事件に関わったヘラスの部隊は全員消されました。ただ、その消されかたが、花びらのように消えていったと……」

その情報で完全なる世界は動揺する。デユナミスが造物主に確認した結果は、鍵は全てここにあるということだった。

だが、これにより、とるべき方針は決まった。つまり開戦。

「おーい造物主、あいつら復活させた方がいいんじゃないの？」

「貴様に言われるのは不快だが、確かにそうだ。では、少しの間身体を貸してもらおうぞ」

会議の間ただのローブになっていた造物主がナギに取りつき、行動を開始する。それにはデユナミスとフェイトも着いて行く。

その後も次々と退席していき、残ったのは蒼き翼と白き翼の代表。

「で、のどか、あいつらの言葉に嘘はあったか？」

「いえ。みんな本当のことを言っていました。でもこんなことしていいんですか？」

「いいんだよ。それに、予定と違ってクラスの奴らが来ちまったんだ。それくらいやっておいた方が安心だろ」

「あの、ユウさん、あの人は本当に僕の母さんなんですか？」

「間違いねえよ。ほら、行ってやれよ」

「はい！」

ネギが出て行ったのを皮切りに、残っている人も出て行く。そして、最後に残ったのは、ユウとリン。二人はそのまま影の転移でどこかへと向かった。

「亜子たちどこ行ったんだろ？ ついさっき世界樹の前にいるってメールきたばっかなのに」

「んー、こっちにいる気がする」

「じゃあ行ってみようか」

「桜子、いないじゃん」

「んー、いると思ったんだけどなー。……あれ？ くぎみんは？」

「そついえばいなくなってる！ ……て、あれ？ 桜子？ どこに
い」

「そうですね。亜子さんたちが……」

「……………」

「いえ。私も行きたいのですが、向こうは戦争中なのでしょう？
亜子さんたちが心配ですが、これ以上向こうに行く人が現れないよ
うにすべきと思ひまして。それにユウさんもいらっしやいますし」

「……………」

「まあ。それなら安心出来ますわね。ザジさんのお姉さんですか。
会ってみたいですわ」

「ネギ・スプリングフィールドは確保出来なかったか。おかしいな。
この時点でのネギ・スプリングフィールドはもっと弱いはずだ。そ
れに周りの奴らも……。これは計画に修正が必要だな」

「修正なんてしなくてもいいだろ。最強として調整された私がい
るんだからな」

「それでも、だ。他の奴らも起動しておくか。行くぞ、
2」

セクンドウム

第三十九話・「集結と選択」(後書き)

蒼き翼はユウがリーダーの組織です。

一応構成メンバーを。

- ・ユウ
- ・リン
- ・エヴァ
- ・真名
- ・月詠

感想お待ちしております。

第四十話・「動向」(前書き)

相変わらずうまく文章に出来ない。

第四十話・「動向」

お前に人は殺せない。

ユウ

ユウたちが居なくなった麻帆良では、魔法先生・生徒が慌ただしく動いていた。

それも当然だ。世界樹に近づいた生徒が次々と消えているのだ。現在分かっているだけで13名、うち半数近くが3-Aの生徒だ。

それだけではない。この機に関西呪術協会からの侵入が増え、エヴァが居なくなったことにより、本能に従い、なりを潜めていた鬼や悪魔が襲撃を始めたのだ。

学園長は関西呪術協会が協力してくれるものと樂觀していたので、今の状況に適切な対応が出来ていない。タカミチが抜けたのも大きい。

まだ本格的な戦争は始まっていないが、始まってしまえば麻帆良が戦場になることも有り得る。そのことも学園長の頭を悩ませていた。

「学園長！ 本国から連絡が！」

「なんじゃと！」

ゲートが破壊されていれば連絡も来ないはずだ。だが、現に連絡が来ている。学園長は不思議に思ったが、まずは連絡を見ることにした。

「……………そんな馬鹿な……………。こんなことを承諾できる訳がない」
学園長が痛みを感じて自分を見ると、胸から刃が突き出ていた。

「……………な……………す……………ま……………ぬ……………」

「あなたに拒否権なんて無いんですよ。拒否の意を示した時点であなは裏切り者。まあ、聞こえてないでしょうけど」

学園長を刺したローブの男は物言わぬ死体となった学園長を一瞥し、転移と思われる魔法で姿を消した。

セラスが目を覚ました場所は、彼女にとって見覚えのない場所だった。

セラスの目の前にはユウとリン、ミラがいた。彼女にすれば面識がないので他人だが。

「……………こ……………こは？」

「ここはアリスの魔法球の中だ。あ、急に身体を動かすなよ！ 今治ったばっかなんだから」

「……うごいちゃ……だめ。……わたしは……けがは……なおせても……たいりよくは……もどらない」

「ありがとう。……そ、そうだ！ アリアドネーは！」

少し思考する余裕が出て来たのか、アリアドネーのことをセラスは尋ねる。

「アリアドネーは消滅した。今はただの更地だ」

「……そう。でもみんな生きてるはずよ。アリスの転移魔法符を全部使って脱出させたから」

「そうか。で、辛いとは思いますが、答えてもらえるとありがたい。アリアドネーを襲撃したのは誰だ？」

「私が見たのは、ヘラスの部隊と……ローブを着た男よ。私はその男にやられたわ。気がついたら、そいつは私の後ろにいたの」

「そうか……。セラスはもう少し休んでいるといい。ミラ、頼める？」

「……まかせて……」

「ユウ、アリスは出さなくていいの？」

「まだ無理だ。全然意識が出て来ない。リン、行くぞ」

「うん」

ユウとリンは転移で外に出て行った。

その場に残ったセラスとミラは黙ったまま向かい合っている。だが、セラスはミラにお礼を言うために口を開く。

「ミラちゃん、ありがとうね」

「……きにしないでいい。……わたしの……ちからが……やくにたつて……うれしい……から。……やすんで。』ねむりのきり』」

ミラに魔法をかけられ、セラスは穏やかに眠り始める。実際、ミラは魔法を使つてはいないのだが、『眠りの霧』と聞いただけで寝てしまうほど身体が疲れているのだろう。

ミラも特にやることはないので、セラスを安心させるかのようにセラスを抱きしめ、眠り始めた。

ユウとリンが帰ってくると、また人が増えていた。

造物主が復活させた面々は、性格に問題がある者が多少いたが、概ね問題を起こさずに溶け込んでいる。

「ラカン！ 勝負だ！」

「お前誰だよ」

「私は忒だ！ 勝負だ！」

「いやだね。どうしてもっていうなら、あそこの赤髪ツインテールのやつに勝ってからな」

「よし！ 待ってる！ おい！ その赤髪ツインテールのまな板！ 勝負だ！」

「ま……まな板ですって！！ なによこの褐色まな板！！」

……一部の奴らは何故か戦っているが。

それより問題なのが、新しく麻帆良から来た柿崎、椎名、釘宮のほうだ。ただでさえ和泉たちがいるというのに、これ以上守るべきものが増えるのは勘弁して欲しかった。

今は造物主によってゲートは封じられたので、これ以上来ることは無いが、向こうから封を破られる可能性はあるらしい。

二人は溜息をつき、ネギたちのいる場所に向かった。

「ネギ……というか、白き翼に言うべきことがある。ちょっと来てくれないか？」

言われたネギたちは、不思議に思いながらもユウに着いていく。

少し歩いた先にあつたのは、先程まで会議を開いていた場所だ。ユウはそこに入っていく。中には月詠にエヴァ、龍宮がいた。

「それで、言うべきことって何ですか？」

「ネギ……お前たちはこの戦争には参加するな」

「ど……どういふことですか？」

「どうもこうもない。お前たちは戦争に参加しない。ただそれだけだ」

「なんでですか？ 僕たちだって戦えます」

「ああ。それは分かってる。だが、お前らには人は殺せない」

『人は殺せない』。この言葉はネギたちに深く刺さった。それもそうだ。今まで普通の学生だった者が出来るわけがない。

「だからお前らには参加させない。これは決定事項だ」

「じゃあ、ユウさんは人を殺せるんですか！ そんなことは出来な
いはずですよ！」

確かにネギの言っていることは間違つてはいない。なにせユウの年齢は15歳。木乃香たちと変わらない。

だが、ユウはこの時代の人間ではなく、未来から来ている。そも
そも周りの環境からして違っているのだ。

「ああ、俺は人を殺せる。今まで何人も殺している。……それに最初の一人は母親だった。次は友人だと思っていた奴ら」

母親を殺したと聞いて、ネギたちは目に見えて動揺する。だがユウはそれに構わず話を続ける。

「この時代に来る前に叔父も殺したし、ついさっき、ガンドルフィーニも殺した。まあ奴は自業自得だがな」

「……え？ ガンドルフィーニ先生を？ どうして！」

「いや、殺したという表現は微妙だな。あいつは自分で自分を撃つたんだからな。まあ、そうなるように幻術を使っただけがな。あの幻術は何もしなければ問題ないものだったんだが、奴は俺を撃とうとした。そんなことをしなければよかったのにな」

「でも……だからって殺す必要はなかったんじゃない？」

「だから言っただろ？ 自業自得だって。あの幻術はただ認識をずらすだけのものだ。『攻撃は自分以外を対象に出来ない』程度のものだ。攻撃によらず、話し合いで決着を着ければ誰も傷付かなかった。なのに奴は問答無用で銃を撃ってきた。自業自得以外のなにものでもない。幻術を使ったのは俺だがな」

ネギは黙ってしまった。確かにこの話だけを聞けば、ユウは悪くないように聞こえる。

そして、こっそりとのどかが『いどのえにつき』を使って真偽を確認しており、その話が真実だという確証もある。

それでもネギは納得出来なかった。

「ぼーやにいくら言ったって無駄だ。そもそもお前とは周りの環境が違ふんだ。予定通りお前の過去を見せればいいだろう」

「やっぱりそうするしかないか。分かったよ、見せるからこっちに
来い」

物語の舞台は過去へ。

第四十話・「動向」(後書き)

感想お待ちしております。

第四十一話・「未来の過去・前編」(前書き)

過去編は前後編となりました。

第四十一話・「未来の過去・前編」

自分の過去なんて見たくねえよ

ユウ

ユウは自分の影から、ある装置を取り出した。

「これを見れば、俺の過去が分かる。まあ、かなりあれな内容だから、見ないほうがいい奴もいるぞ。それでも見るといふなら何も言わないが」

「おい、どんだけヤバいんだよ」

「まあ、グロ方面でかなりヤバいな」

「……うわあ、見たくねえ」

「じゃあ見なきゃいいだろ」

ユウと千雨が話している間に、準備は整ったようだ。結局、この場にいる全員が見るようだ。

「あー、見てから後悔すんなよ?」

全員が頷く。それを確認し、ユウは再生を始める。

ユウ・M・スプリングフィールドは先日10歳の誕生日を迎えた。かつての英雄ナギが旅立った歳であり、ネギが世界を救った歳でもある。

その英雄の直系であるユウも、同様の活躍を期待されていた。だが、その期待は外れてしまった。ユウの魔力や気は、一般人とさして差は無かった。

対照的に弟のアギは魔力、気ともに常識はずれの量を誇り、既に戦果も挙げている。比較されるのは当然、王位継承順もアギを一位にしてはどうかという議論まで起こっている。

それでもユウは第一王位継承権を持っている。なぜなら……

「父上、新しい魔道具が出来ました」

「そうか。ユウは力はないが、こういうことをやらせれば他の追隨を許さないな」

ユウはとにかく理論と開発に長けていた。今までに創られた魔道具は裕に百を超え、新たな魔法理論をも創り出した。

ユウは、父親 コウ・M・スプリングフィールド に褒めてもらいたかった。弟は既に戦場に行っているのに、自分は何もしていない。そういうことが嫌だった。

例え、その功績が父親の懐に入る金に変えられていると知っていても。

「ユウよ。一体どうやってこんな物を思いつくのだ？」

「姫御子の部屋にいるときに思いつくのです」

姫御子の部屋。それは、約100年前に魔法世界の崩壊を止めるために人柱となったアスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフロシアが眠りにつく部屋。一般人はおるか、王族でも入ることの出来ない部屋で、中に入るには、先天的な完全魔法無効化を持っているなければならない。

伝承によれば100年後に目覚めるようだが、その気配は見られない。

これはユウしか知らないことだが、アスナは時々笑みを浮かべる。何を思っているのかは分からないが、きまって笑みを浮かべるのは、部屋に何人かの気配が現れるときだ。ユウはこの気配をおそらく、神楽坂明日菜のクラスメイトであろうとあたりを付けている。

果たしてそれが当たっているのかは分からないが、友人に似た気配が感じられるので間違っていないだろう。

「では、私はこれで失礼します」

ユウは部屋を退出し、ある場所を目指す。

しばらく歩いて着いたのは、自分の部屋ではなく、アギの部屋。

「お、兄さん、来たか。さっさと行こうぜ」

そう言うと、アギは窓を開け、外に飛び出す。とはいえ、所詮は2階なので、魔力を使えばどうということはない。

「はあ。ま、行きますか」

続いてユウも出ていく。後ろにはいつの間にかいた命がついて来ている。

三人が向かった場所は城の裏手にある森だ。その中には、ユウが父親に明かしていない魔道具で巧妙に隠された場所がある。

そこに着くと、既に先客がいた。

「よう。もう来てたのか」

黒い髪をしたその少女はのちに超鈴音と名乗るリン・オータム。末席ながら、王家の一員である。……が、彼女は魔力を使えない体質にあり、家を追われた。今は昼は魔法薬を使いアリアドネーに行き、夜はここで暮らしている。

「ん？ 今日随分早いね」

「いや、リンが遅いんだよ。もう昼だからね」

「……………そうなの？ ま、今日は休みだしいつか。で、パーツは持ってきたの？」

「アギが持ってきたはずだよ？」

「おう！ ……でもなんに使った？」

「フフフ。まだ秘密だよ」

アギは持ってきたパーツの使い道が気になるが、秘密と言われた以上は聞かない。というか笑っている顔が何故か怖くて聞けない。

「さあ、ユウ、行こうか」

「そうだね」

「また俺だけ仲間外れかー！」

アギが絶叫するも二人には届かない。

その代わりに命がアギに声をかける。

「ウチと試合しましょう」

「ひいつ！ ……戦略的撤退！！」

逃げるアギに追う命。それを見て、ユウとリンが笑っているのだが、当人は気づかない。

「さて、僕たちも始めようか」

「そうだね」

二人の視線の先には、のちに伊織と呼ばれるガイノイドの原型や、開発途中と思われる様々な物があった。

「お邪魔するわよー」

二人の背後にはいつの間にか一人の少女が立っていた。

銀の髪に碧眼。まだその姿は幼いが、間違いなく

映像が途切れる。

「……い、今は……。ユウさん？ あれ？」

「ん？ ユウなら『自分の過去なんて見たくねえよ』って言ってリ
ンと一緒に出て行ったぞ？ 何だ？ ぼーやは聞きたいことがあっ
たのか？」

「はい。あの最後に出て来た人って……」

「ああ、間違いなくあいつだな。だが、それ以上のことは私にもわからん」

「……そうですか」

「ほら、続きが始まるぞ」

エヴァの言うとおり、続きが始まるうとしていた。

ユウが11歳を迎えてから数ヶ月が経った。

少しずつ進めてきた『伊織』の製造もあと少しで終わる。今日は息抜きも兼ねて、ユウとリンは街に出かけることにした。ちなみにアギと命は戦場に赴いている。今頃は無双しているだろう。

ユウは仮にも王族なので、そう簡単に街に行ける訳ではない。そ

ここで、信頼している侍女に頼み、ユウは姫御子の部屋にいたと言ってもらい、ユウ自身は魔法薬を使って、『秋野友』になって街に出かけた。

「リン、今日はどこに行きたい？」

「うーん、全然考えてないんだよね。適当にぶらぶらしよっか」

本当に何も考えていなかったらしく、いきあたりばったりに歩いていく。

あっちの店に入ったかと思えば、何も買わずに出て行き、こっちの店に入ったかと思えば、何も買わずに出て行き。

それでも二人は楽しかった。

ユウは王族故に、市井に行くこともままならず、いつもは城で魔法道具を作るしかやることがない。

リンはユウよりは自由ではあるものの、年齢詐称薬、その他諸々で自分の姿を偽り生活しているので、自然と周りと距離を開けてしまっ。

二人、特にリンが自分を出せるのは、森にある秘密の場所だけだから、このような時間はとても貴重だった。

「ユウ、そろそろお昼の時間だよ？ どうする？」

「じゃあ、あそこに行こうか」

「あそこ？」

「うん。ちょっと前にオープンしたところで、確か……『クローバー』って言ったっけ。旧世界じゃかなり有名みたいだよ」

「じゃあそこにしようか」

二人が着いたときには、既に行列が出来ていた。よく見れば、その中に見知った顔がいる。

「お？ 友にリンじゃねえか。今日はここに来たのか？」

「うん。それにしてもすごい行列だね」

そこにいたのは、ユウが城を抜け出した時に出会い、友人となった、レオンとサラだった。

二人とも王族だからといって遠慮するような人物ではない。だからこそ、友人になり得たのだろう。

「で、今どれくらい待ってるの？」

「うーん、多分一時間ぐらい待ってるわ。ま、ちょうど昼時だからしょうがないけどね」

最近はなかなか外に出ることができなかったので、お互いに会話が弾む。

「そついや今日はアリスさんはいないんだな」

「アリスさんは家の用事だって。ま、これなかったのは残念って言うてたよ」

「そっかー」

その後も他愛もない話を続け、それは昼食が終わるまで絶えることはなかった。

映像が途切れる。

そして、続きが始まる。

「一体これは……」

ユウは森だった場所を見て呟く。今まで自分達が隠れ家としていた場所ごと森が焼き払われたのだ。

「そつだ！ リンは？ 伊織、分かるか？」

「この場に反応はありません。塵一つ残さずに消されたか、連れ去られたかと思われます。しかし、現状からすると連れ去られた可能性が一番高いかと」

「根拠は」

「この場には、森を焼き払った火の魔法の痕跡のほかに、捕縛に優れた風の魔法の痕跡があります」

「追跡は出来るか？」

「はい。少々お時間を頂ければ」

「構わない。始めてくれ」

「了解しました」

一連の会話を終え、ユウはポケットから、ある魔道具を取り出す。それはユウの発動体であり、同時に新たな魔法理論を組み込んだ特製品だ。

「ユウ様、魔力解析が終了しました。追跡可能です」

「分かった。案内を頼む」

ユウは最低限の魔力で『戦いの歌』を使い、伊織のあとを着いていく。

到着したのは街の外れにある一軒家だった。ユウは見覚えがあるような気がしたが、そのことは考えずに、家の中に突入した。

家の中はガランとしていて、生活感がまるでなかった。どうやら地下室があるようなので、ユウはその地下室に向かった。

そしてユウは見た。

手術台のような物のうえで手枷足枷、首輪を付けられ、身動きが出来ないうえに、身体中に黒い紋様を刻まれ痛みで身体を震わせるリンと、それを囲む男達を。

「ア……」

「ーッ!」

そして訪れたのは、暴走。ユウの魔力量からは考えられない魔力が噴き出し、男達を吹き飛ばす。それでもリンには影響はなかった。

吹き飛ばされた男達は、目の前の光景に恐れをなし、我先にと逃

げていった。

男達が居なくなっても、ユウの暴走は止まらない。唯一止めることが出来ると思われるリンも、痛みと魔力の圧力で気を失っている。

そんなユウに近づく人影がいた。

「久しぶりに喚ばれてみれば、暴走中！？ それに、この魔力……まずいわね。生命力を削ってるわ。とりあえず暴走を止めないと」

蒼い髪に黒いドレスを纏った女性は、人間には認識出来ない言葉を紡ぐ。

詠唱が進むにつれて魔力暴走が収まっていく。程なくしてユウは正気を取り戻した。

「暴走を止めて頂き、ありがとうございます。ところで、貴女は誰ですか？」

どうやら暴走したときの記憶も残っているらしく、ユウは目の前の女性に尋ねる。

「私は、レヴィアタン。一応魔界で王族をやってるわ。私はあなたに召喚されたのよ。さあ、望みを言いなさい」

「レヴィアタン？ まあいいや。僕の望みは『力』だ」

「『力』ねえ。別に私は構わないんだけどさ、一応形式的に聞いておくわ。何の為に使うの？ 復讐の為？ それとも守る為？」

「僕は自分の為に使う。復讐するも守るも全ては自分の意思だから。『力』が無ければ何も出来ない」

「いいわ。その理由。実に悪魔好みね。……私はツイてるのかしら。前に召喚されたときもこんな感じだったわね。あ、今からちよっとだけ時間頂戴。魔法陣書くから」

そう言うと、レヴィアタンは自らの影からかなり大きなサファイアを取り出し、それを魔法陣を描くのに使用した。

ほんの数分で魔法陣は書き上がり、二人はその中に立っている。

「さ、あとは自分の血をこの中に垂らして準備は完了よ」

ユウは言われた通りに血を垂らす。すると、魔法陣の発光が一段と強くなった。

「さ、あとは言葉を紡ぐだけね。言葉は自然に浮かび上がってくるわ。私が先に言うわね。『我が名はレヴィアタン。嫉妬を司りし魔の王。彼の者に我が加護を与えん。加えて、我が名において彼の者と盟約を結び、対等な者として認め、我が盟友として契りを交わす』」

「『我が名はユウ・ミヤザキ・スプリングフィールド。黄昏を継承せし者。我が名において、魔の王の加護を受け入れる。加えて、魔の王と盟約を結び、盟友として契る』」

二人が言葉を紡ぎ終わると、魔法陣がユウの身体に入っていく。

「これで終わりよ。私の力がユウに流れてるはず。だから、私が得

意とする闇と水の魔法が強くなってるはずよ。……さ、私は還るわね。喚びたくなったらいつでも喚びなさい。私たちは盟友なんだから」

レヴィアタンは一方的に喋るだけ喋って、さっさと還ってしまった。

第四十一話・「未来の過去・前編」(後書き)

過去編の前編でした。

ネギたちから見れば未来なのにユウたちからすれば過去。そんな意味で題名をつけました。

あー、頭がダークな方面の話ばかり思いつく……。

感想お待ちしております。

第四十二話・「未来の過去・後編」(前書き)

今回は独自設定が出てきます。ご注意ください。

第四十二話・「未来の過去・後編」

知ってる？ 進歩っていうのはね。犠牲の上に成り立つのよ。
それが分からない？

リズ・スプリングフィールド

「へえー、流石ね。私を召喚するぐらいだから他の魔王も召喚でき
ると思ってたけど……まさか本当にできるなんて！」

リンが連れ去られるという事件から、既にそう短くない時間が過
ぎた。ユウは自らが召喚したレヴィアタンの指導の下、魔法の制
御を教わっていた。

今日はレヴィアタンの思いつきで、試しに他の魔王を喚んでみ
ようということになり、魔法球の中で召喚の儀式を行っていた。そ
の結果として、新たな魔王が召喚されたのである。これには、さし
ものレヴィアタンも驚くことになった。普通であれば魔王を喚ぶ
だけでも規格外であるのに、それを二人も召喚したので、驚いてい
る。

「レヴィアタンですか。では、この人があなたを召喚し、この度私

を喚んだのですか？」

「ええ。それにこの子、どことなく似てない？ ずいぶん昔だけど、私たち全員を召喚した彼に」

「……そう言われてみれば確かにそうですね。姿かたちは似ていませんが、雰囲気似てますね」

「で、あなたは誰ですか？」

「ああ、私はルシフェルといます。ルシファーとかルキフェルとかでも構いませんが。一応、傲慢を司っています」

ルシフェルは金髪に浅黒い肌という出立ちで、顔は整っている。中性的な印象だが、れっきとした男である。その身は昔は神に最も近い位置にありながら、反逆を企て、墮天した天使である。

現在は、神も悪魔も昔のようにいがみ合うことはなく、魔界で暮らしている。そもそも魔界という名称自体、人間が勝手につけたもので、悪魔や魔族がいる空間としか認知されていない。神や天使も魔界にいると知ったら、世界の宗教家たちは驚愕するだろう。ただ、人間が召喚できるのが一部の例外を除いて悪魔や魔族だけなので、このことが知られることは殆どない。例えあつたとしても異端審問にかけられ、真実が世に出回ることはないだろう。

「それで、私を召喚したということは何か望みでもあるのでは？」

「いや、特にはないです。ただ、レヴィが「やってみたら？」って言ったので、やってみただけです」

「ですが、何か言ってもらわないと私も魔界に帰れないんですよ」

「じゃあ……………どうしよう?」

実際、今回の召喚にいたって、ユウが願うものはない。『力』もレヴィアタンからバックアップを受けているので、問題はない。あるとすれば、この急激な魔力増加をどうやって隠すかということである。だが、それも自力で解決できる問題なので、いちいち頼むようなことではない。

ユウが願いについて悩んでいると、レヴィアタンが横から口を出してきた。

「ねえ、ユウ。ルシとも盟約結べば?」

「僕はそれでもいいですけど……………」

「ねえ、ルシはどう?」

「私としては一向に構いませんよ。彼に似ていますし、何よりこの子にも強い意志が感じられます。盟友でもいいでしょう」

「だってさ。ほら、さっさと結んじゃいなよ」

ルシフェルも乗り気なようで、魔力を使って魔方陣を描いていく。ユウも盟約を結ぶことについて、損は無いので、引き受けることにした。

「では、私からいきますね。『我が名はルシフェル。傲慢を司りし魔の王。彼の者に我が加護を与えん。加えて、我が名において彼の

者と盟約を結び、対等な者として認め、我が盟友として契りを交わす』」

「我が名はユウ・ミヤザキ・スプリングフィールド。黄昏を継承せし者。我が名において、魔の王の加護を受け入れる。加えて、魔の王と盟約を結び、盟友として契る』」

「これにて盟約は完了です。まあ、助けが欲しければ喚んでください。よっぽどの緊急事案が無い限りは応じますので」

ルシフェルはそれだけ言うと、魔界へと還って行った。

「さて、この調子で他の魔王とも盟約結んじやいまいしょうか！」

結局この日、ユウはルシフェルだけでなく、憤怒のサタン（男）、怠惰のベルフェゴール（男）、強欲のマモン（女）、大食のベルゼブブ（男）、色欲のアスモデウス（女）とも盟約を結ぶこととなった。

「戦争？」

「ああ。なんか知らねえけどさ、反抗勢力が集結して何かやってるらしいんだ。で、それを叩けだよ」

「それって戦争っていうのかな？」

「さあな。ま、俺は俺のやることをするだけだけだな」

ユウが魔王たちと盟約を結んでから数日。城内はあわたたしい空気に包まれていた。侍女たちの話を掻い摘んでみるに、どうやら戦争があるらしい。それを裏付けるかのように、アギが招集され、そのアギからユウは戦争が起こることを教えてもらった。

ユウも盟約を結んだおかげでアギよりも強くなったのだが、その力のことは隠しているため、そのことは伝えられなかったのだ。

ただ、アギの話を聞く限りでは、戦争というよりも、殲滅と言った方が正しいような気がしている。事実、宣戦布告などはなしに、こちらから仕掛けるようだ。

「じゃあ僕はいつものように姫御子の部屋に居ればいいのかな？」

「ま、そうなるだろうな」

「あ、そうだ。アギ、これ使ってみてよ」

そういつてユウが取り出したのは、小さな物体だった。

「おい、これってまさか！」

「そう。アギが欲しがってたやつだよ。ようやく完成したんだ」

以前からアギは、ガンダム系の武器を使いたいとユウに言っていたのだ。そして、つい先日完成したのが、この『スーパードラグーン』だ。勿論、ユウがこだわって作ったので、原作同様の攻撃ができる。

「で、これってどうやって動かすんだ？」

「魔力を込めれば起動するよ。ただし、オートで狙いをつけてくれるわけじゃないから、自分で操るんだけどね」

「まじかよ……俺に出来るかな？」

「ま、何とかなるでしょ。縦横無尽に動き回るのは無理だとしても、自分の側で滞空させておけばいいじゃん」

「そうだな。でもいつかは使いたいな」

アギが戦争に赴いてから数日。ユウはいつものように姫御子の部屋で過ごしていた。

ユウがふと顔をあげると、自分を覗き込むような恰好をしている人物がいた。

「……………誰？」

「あれ？ 私が見えるんですか？」

「見えてるけど……………いったい誰ですか？ この部屋には普通は入れないんですけど」

「私は、相坂さよっていいいます。明日菜さんのクラスメイトでしたよ?。」

「え? でもそれって百年も前のことですよね?。」

「そうですね。でも、私、幽霊なんで。ちなみに幽霊歴は150年を超えました!。」

ユウは思わぬ人物の登場に驚いた。相坂さよと言えば、ネギ・スプリングフィールドとともに、英雄となっている人物だ。主な功績は人命救助。幽霊としての特徴をうまく使い、アーティファクトを使用して、人命救助を行っていた。治癒術士というわけではないが、それでも多くの治癒関係者に尊敬されている存在だ。

「そうですね。じゃあ、このあたりに漂ってる気配も、姫御子のクラスメイトですか?。」

「よくわかりましたね。今日来てるのは……木乃香さんと刹那さんですね。」

「……一つだけ聞きたいんですけど、いいですか?。」

「いいですよ。」

「では。ネギ・スプリングフィールドは生きていますよね。」

「よくわかりましたね。今まで気づいた人はいませんでしたよ。いたいどうやって知ったんですか?。」

「友達に聞きました。今、魔界に居ると。」

戦争が終結し、城内は落ち着きを取り戻していた。

戦争は、反抗勢力がなかなか強かったらしく、こちらにも犠牲者が出てしまったようだ。一応の決着はついたようだ。アギは連絡はあったものの、まだ戻ってきていない。

どうやらアギは、現地で戦後処理をしているらしい。伊織がついて行ったので、文字通り処理地獄に陥っているだろう。

そんななか、ユウは城内を探し回っていた。

アリスが行方不明となり、ユウは搜索しているのだ。城下に行くことはユウにとって容易いものではないので、城下はリンが搜索している。

戦争に行ったのなら、犠牲になったとも考えられるが、アリスは戦争に行っていない。

「城内にはいないのかな？ 城下はリンが搜索してるし……」

ユウは城内のほとんどの場所を搜索し終えていた。残るは、自分の両親の部屋だけだ。

そして、母親の部屋に入ったとき、ユウは不吉な予感を感じた。出所は、母親の寝台の下。ユウはそこを見る。

「こんなところに扉が？ 鍵はかかってないみたいだし、行ってみるか」

そこには、下へと続く階段があった。ユウの記憶によれば、この下は、ただの壁だったはずなのだが、どうやら空間があるらしい。

ユウが階段を下りている時だった。微かにではあるが、声が聞こえた。ユウは急ぐことにした。

階段を降り切ると、そこには一つの扉があった。窓が付いていないので、中の様子を覗くことはできない。

ユウは思い切ってその扉を開けた。

中には、自分の母親のリズ・スプリングフィールドと、レオン、サラがいた。さらにその先には、何人もの人がいる。

ユウが扉を開けたことで、全員が目がユウを捉える。その時、ちよつど部屋の真ん中にある台とその上のモノが見えた。

そこに乗っていたのは、

既に人の形をしていないアリスだった。

「あら？ 見えてしまったのかしら」

ユウはそれを気にも留めずに、今度はレオンとサラに向かう。

「クソッ！ こんなところで死んでたまるか！！ 『闇の吹雪』！！」

「私もこんなところで死にたくない！！ 『雷の暴風』！！」

「その魔法を喰らう。『暴食』」

レオンとサラは、死にたくない一心で魔法を放つが、魔王の力の一端である『暴食』をユウが発動させ、魔法を喰らう。その余波で、リズが今度こそ完全に絶命したが、気にも留めない。

「その手足、頂戴。『強欲』」

『強欲』の魔法により、二人の手足は根元から引きちぎられ、ユウの目の前に現れる。

「こんなもの要らない。『魔法の射手・火の一矢』」

目の前に現れた手足を、ユウは焼き払う。

「あ……あああああああ！！」

サラが狂乱するが、ユウは聞く耳を持たない。更なる魔法を行使しようと、詠唱を始める。

「なんで君たちは生きているの？ 私たちは死んでしまったのに。君たちに生きる価値はあるの？ ないよね。だから、苦しんで死んで？ 『嫉妬』」

問いかけのような詠唱を終え、ユウは『嫉妬』の魔法を放つ。

正体不明の痛みがレオンとサラを襲い、二人は苦痛のうちに死んでいった。

周りにいた人たちは、既に逃げ出していたが、ユウは彼らを逃がす気はなかった。影の転移を繰り返し、逃げた者を一人残らず捕まえると、先ほどと同じ内容の『嫉妬』を放つ。

程なくして、その場に生きている人間はユウだけになった。

「あら？ 私の力を使ったからと思っけてきてみれば、また随分派手にやらかしたのね」

「レヴィか。なあ、アリスをもとに戻す方法ってないか？」

「アリス？ ああ、あの子ね。可哀想に。ちょっと待ってなさい。今専門家を連れてくるから」

レヴィはそういうと、影に沈み込んでいった。

数分後、レヴィは二人の悪魔を連れてきた。

「こっちのシヨタっ子が、ガミュギユン、こっちのロリっ子がダンタリアンよ」

「あ、はい。ボクはガミュギユンと言います。ボクは靈魂を操れます」

「私はダンタリアン。あなたが望む知識をあたえましゅ……あたえ

ます」

ガミュギユンは、黒いローブを着て、フードをかぶっている。顔は分からないが、声が幼い。また、大きな鎌を持っているので、死神と呼ばれることもある。

ダンタリアンは、ベレー帽をかぶり、片手で本を持っている。髪は明るい色で、やはり幼い顔立ちをしている。

「そうか。じゃあ、アリスを元に戻す方法を教えてくれ。別に僕は恨まれたって構わない」

「そうですか。ですが、完全に戻すのは無理ですね。僕は霊魂を戻すことはできませんが……」

「ですので、この『闇の魔法』を使って、取り込んで、あとは分身にでも魂を乗せればいいと思いましゅ」

「レヴィイ……それしかないのか？」

「ええ。私を知る限りでは、これがもっともいい方法よ。勿論、あなたがやるかどうかは別だけれどね」

「やるさ。それに、『闇の魔法』は使えるしね」

ユウは、この前までの特訓で『闇の魔法』を習得していたので、問題はないと考えた。

「えーと、その『闇の魔法』は、あくまでもこの世界のものなので、魂を取り込むことはできません」

「ですので、これから私がやり方を頭に直接叩き込みましゅ……ます」

ダンタリアンが手に持った本をめくり、目的のページで手を止める。そして、人間には理解できない音節を使い、ユウの頭に、直接術式を叩き込む。

「ぐっ……これ……かなりきついぞ」

「我慢してください……さい」

ユウにとっては、かなり長く感じたのだろうが、実際は一分と経っていない間に完了し、ダンタリアンは既に本を閉じている。

「これが……真の『闇の魔法』……。……よし。理解できた。始めてくれ」

「わかりました」

「さて、もうそろそろ時間ね。……私は遣り遂げてみせる。だから安心してね。ユウ」

その言葉を最後に彼女は時間を越え旅立っていった。向かったのは過去。それも100年前。

「リン、絶対俺もそっちに行くからな」

彼のその声は誰もいなくなった場所に響いていた。

再生が終わり、風景が元の部屋の風景へと戻る。

「今のが、ユウさんの過去……?」

「だとしたらアリスさんはもともと別人ということですか?」

各々が疑問を口にする中、エヴァだけは一人考え込んでいた。

「(ー) いったいあいつはこれを見せてどうするつもりだったんだ? これを見ただけでは人を殺すという重みが理解できない。ならば他に目的がある? あるとすれば、アリスが別人ということだが…… それではないだろう。ならば何だ?) …… ぼーや、これを見てお前はどうか考える?」

「僕は…… はつきり言って何を伝えたいのかが分かりませんでした」
「そうか……。ん? どうした?」

ネギとエヴァが話しているところに、ザジ(姉)が走ってきた。

「まずいポヨ。どうやら敵にここがバレたらしいポヨね。今も侵入者が来てるポヨ」

「映像はあるか？」

「これポヨ。ほかの人はいつでも戦闘できるように準備しておくほうがいいポヨ」

ザジ（姉）から渡された映像をエヴァとネギは見る。そして、驚愕をあらわにする。

「そんな……。なんでネカネお姉ちゃんが……」

ユウとリンは造物主を伴って麻帆良に来ていた。目的は、こちら側のゲートを封じるため。

だが、麻帆良に一步入ったところで、異変を感じる。一瞬だけ違う風景が見えたのだ。

「これは……『幻灯のサーカス』か？ いったい何故？」

「とにかく行くよ。あとでザジさんに聞けばいいよ」

三人は目標であるゲートに向かうために世界樹へと近づいて行った。

世界樹広場には、ザジやあやかなど、残りの3-Aのメンバーがいた。ただし、ザジとあやか以外は寝ているが。

「いったいどうしたんだ？ 学園全域に『幻灯のサーカス』をかけるなんて」

「MMが攻めてきたのです。なので、被害を出さないように、茶々丸の姉妹機を使って麻帆良結界の効果を『幻灯のサーカス』に変えました。敵の目的はネギ・スプリングフィールドに対する人質の確保のようでしたので、クラスメイトのみなさんを集めました」

「そうか。で、被害状況は？」

「既にゲートによって送られた者が約50名、今回の侵略による死傷者は非魔法関係者は0ですが、魔法関係者には多数出ています。」

学園長は亡くなりました」

「わかった。一刻も早くゲートを封じ、送られた奴らを保護しよう。最悪、奴隷になっている可能性も考慮しなければいけないが……」

敵の行動目的が分かった以上、あまり長く麻帆良にすることはできない。どうやら非魔法関係者には手を出さないようなので、この『幻灯のサーカス』が切れないように細工をしたあと、麻帆良から出て行った方がいいだろう。ユウはそう考え、ゲートのもとへ急ぐ。

第四十二話・「未来の過去・後編」(後書き)

過去編終了。

ちなみに、次の展開は、衝撃展開に。しかも否定意見が多そうな予感が……。

ですが、あくまで作者の予定通りです。……次話の反応が怖い。

感想お待ちしております。

第説話・「設定集」（前書き）

あけましておめでとございます。

本編の前に設定集を公開。今まで出てきた、オリキャラ、オリ設定、オリ魔法の設定集です。

前話までのネタバレが含まれておりますので、読んでいない人はこの設定集はひとまず置いて、先に本編を読むことを強く推奨します。

オリ魔法の詠唱については、すべてラテン語とさせていただきます。だって古代ギリシャ語とかわから（ry

ルビが多いのでPC推奨です。

第説話・「設定集」

原作との設定における変更点

・超鈴音のいた未来とネギのいる世界は繋がっていない。

・魔法世界へのゲートは12の霊地。

・霊地の場所。

日本：「神木・蟠桃」

イギリス：「ストーンヘンジ」

トルコ：「ハギア・ソフィア大聖堂」

エジプト：「クフ王のピラミッド」

中国：「始皇陵」

ペルー：「マチュピチュ」

オーストラリア：「エアーズロック」

アメリカ：「グランドキャニオン」

ギリシャ：「パルテノン神殿」

インド：「菩提樹」

バチカン：「サン・ピエトロ大聖堂」

南極：「極点」

・魔力の発生：各霊地より発生する。

・真祖の能力。

(1) 「一定の体年齢になった後の不老」

(2) 「極端に死にづらい身体」

(3) 「肉体年齢の操作」

・魔界の意義：悪魔や魔族が主に召喚されるため、魔界と呼ばれる。実際は神や天使も同じ場所に存在する。また、神と悪魔は対立関係ではない。

・カシオペアの能力：時間軸を y 、世界軸を x とつた時に、 y 軸移動は $+ - 1$ か月まで可能。 x 軸移動は不明。使用魔力により、軸移動距離が決定される。ちなみに魔界は $(x, y) \parallel$ （世界軸、時間軸）で表現される二次元軸（魔法世界・旧世界）ではなく、 $(x, y, z) \parallel$ （世界軸、時間軸、空間軸）で表現される三次元軸の z 座標に位置する。

・『闇の魔法』の意義：魔族化への儀式魔法。

オリジナル魔法

【名称】
ホルタ・ウンブラエ
『影の門』

【属性】

影

【詠唱】

ホルタ・ウンブラエ
○○、影の門

【説明】

物の収納などの用途で使用される。また、転移魔法の媒介としても使用可能。

影の魔法を応用したもので、魔力を使い自らの影に容積を与え、その中に物や魔法などを入れることが出来るようにしたもの。

【名称】

ブルウィア・グラビニア
『重き雨』

【属性】

水・土

【詠唱】

ウエニアント・ヌビアーサウタステレウス
来たれ水精、土の精。 ファール・ミクスタ
混じりて降れ、 グラヴィス・インベル
豪雨。

【説明】

濁った雨を降らせる。合成物は変更できる。
2 属性魔法だが比較的簡単な部類。主に補助的な目的で使われる。

【名称】

トレンテ・ルークス
『光の奔流』

【属性】

光、雷

【詠唱】

ウエニアントヲ及びゼリトヤヲルネキス
ラポーレ・エト・ルトタスルエンテム
プリファイケーテオホクグリエンス
来たれ雷精、光の精。光を纏いて流れる、浄化の雷。

【説明】

『雷の暴風』や『闇の吹雪』と同系列の直進系呪文。貫通力に優れる。

光と雷による2属性呪文。威力は『雷の暴風』よりやや劣る。

【名称】

フラーズ・ルーキス
『光の一閃』

【詠唱】

ウエニアント
プリファイケーテホクネテ・プロクール
来たれ、浄化の光。消し去れ。

【属性】

光

【説明】

ユウオリジナルの魔法。
レーザーのような攻撃となる。貫通力だけで言えば、『光の奔流』よりも上位。

【名称】

『テンタテオ・ソーリス
陽の審判』

【詠唱】

コトラクトウアリセクンドゥム・ノスト~~ロ~~ムス・ソーリス
契約により我に従え、太陽の王。来たれ闇を砕く真実の象徴。燃
イレ・ドローア・フィンド マッレウス・テイ
え上がり下せ、神の鉄槌。 ウエニアン~~ト~~ランジェ・テネジ~~ス~~キルム・ヴェーリ
フラ

【属性】

光

【説明】

光属性の広範囲殲滅魔法。
光属性の魔法の中では最上位の魔法。『千の雷』や『燃える天空』
などと同じ広範囲殲滅型。指定された範囲内を光の柱で焼き尽くす。

【名称】

『スクアイレ・ケイリ
天の方陣』

【詠唱】

コントラクトウアリ・セクンドウム・ノストラウ瓜トウーア・トリヂヤギヤヒラミククトウスネリスティークエ・フオダヌモンス・ローレム・イプスム
契約により我に従え、四属性の天使。聖なる力を以って魔を掃え。
イトウ・デ・ケイロ・ウエニアント・プリファイケイテルセト
其は天より来たりし浄化の輝き。

【属性】

火・水・風・土

【説明】

特一級指定の禁魔法。四属性の混合。

過去において圧倒的な火力を誇っていたが、扱いの難しさから暴発する例が後を絶たず、ついには禁魔法となった。火・水・風・土の四属性を均等に使うため難易度が高い。対応する天使は、火はミカエル、水はガブリエル、風はラファエル、土はウリエルとされているが、諸説ある。

【名称】

あめのむすぶくせのしるあめ
『天叢雲剣』

【詠唱】

来たれ、大蛇より出でし三種の一。己が力を以って我が敵を薙げ。

【属性】

無

【説明】

アリス・友によって開発された魔法。

日本の三種の神器をイメージして作られた魔法。術式兵装の一種で、光の剣を作り出す。遠隔操作ができ、普通に持つて戦うこともできる。

詠唱は日本語。

【名称】

『やさかににぎのまがたま
八尺瓊勾玉』

【詠唱】

来たれ、謎に包まれし三種の一。己が力を我に与え給え。

【属性】

無

【説明】

三種の神器の一つ。この魔法を使ったものに力を与える術式兵装。魔法を強力にしたり、自らの力をあげて近接戦闘を有利にしたりと個人の能力を上げるのに役立つ。ただし、他人に貸し与えることはできない。

詠唱は日本語。

【名称】
やたのかがみ
『八咫鏡』

【詠唱】

来たれ、世を照らす三種の一。己が力で我を守り給え。

【属性】

無

三種の神器の一つ。敵の攻撃を吸収し、任意のタイミングで放つことが出来る。ただし、吸収できるのはこの魔法を発動した時に消費した魔力以下のもののみ。また、打撃は吸収できない。魔力がない攻撃でも、銃などの遠距離攻撃であれば吸収することができる。詠唱は日本語。

【名称】
セレクトイオ・グラディウス
『選定の剣』

【詠唱】

ウエニアント
来たれ、王を選別する湖と台座の剣。その輝きを以って我が敵を討て。
ロレム・イブスム・レゲルークスアエボトシ・ケラテルホスティアークエ・イトゥ・ルゼト・ホステス
・デイビラーテ

【属性】

光

【説明】

術式兵装として開発された。開発者は、秋野友とアリス・クロイツ。Fateの約束された勝利の剣をモデルとして作られた。エクスカリバー

【名称】

『コンテスタ・ルーキス
光の競演』

【詠唱】

コントラクトウアリセクンドウム・ノストヨムシヤ・ルーセムレクス・ムルタ
トリスティークエ・イトロジエンド
契約により我に従え、光を司りし数多の王。その伝説を以って、
ノス・フアクテイ・ドーロ クリベウム・ヴェニート
我が矛となり、盾となれ。

【属性】

光

【説明】

光属性広範囲殲滅型魔法。『陽の審判』よりも威力が高く、範囲が広い。

世界中の神話において、光の象徴となっている者たちの力を再現する魔法。対象を指定した場合は、『数多の王』レクス・ムルタの部分を対象名にする。

【名称】

『セイスミツカレア・シンティランス
煌めく神域』

【詠唱】

コントラクトウアリセクンドウム・ノスタヲオテシムヲド・アウラム・オルヲシタテラ
契約により我に従え、十二の位階を持つ天の遣い。来たれ、浄化
テイルキスサンクテイオネス・アワツバレト アドウルテリウシキクナイラ・デイ
の光、制裁の矢。現れよ、不義を滅せし神の怒り。彼の者を裁き給
え。
クエーエ

【属性】

光

【説明】

光属性最大の攻撃力を持つ。

『燃える天空』と同様に、ソドムとゴモラの伝承を基とする魔法。

『燃える天空』とは違い、光の矢で攻撃する。

【名称】

『フェレウス・イクトウ・フルミネオ
雷神の鉄槌』

【詠唱】

ウエニアント ラチオ・アングエスマツレウス・トニトルオエステイブルーム・ホステス
来たれ、蛇を討ちし雷神の槌。敵を碎け。

【属性】

雷

【説明】

上空より雷の槌を落とす。

『氷神の鉄槌』の雷属性バージョン。

【名称】

アウロラエ・ルシファー
『暁の明星』

【詠唱】

コソトラクトウアリセクンドウム・ノストテホフラエ・ドミヌムニス・ブラエチエビータマウリス・ウト・ヴォルプテ
契約により我に従え、闇の主。全てを破壊し、愉悦となれ。

【属性】

闇

【説明】

ユオオリジナルの魔法。

名前の通り、ルシフェルの力を借りる魔法。一直線に進み、対象物を破壊する。

【名称】

アークア・サーロ
『逆巻く水流』

【詠唱】

コントラクトウアリセクンドウム・ノストヌ谷リートウス・アクアエ
契約により我に従え、水の精霊たち。その流れで、敵を掃え。

【属性】

水

【説明】

水属性広範囲殲滅型魔法。
急流を操り、敵を攻撃する。基本的には圧力で攻撃するため、他属性に比べると攻撃力は低い。

キャラ説明

【名前】

ユウ・M・スプリングフィールド
ミヤザキ

【性別】

男

【年齢】

15歳

【身長】

174?

【容姿】

黒髪でナギの髪形に似ている。また、前髪をおろし、目を隠すとのどかに似ている。目は普段は黒だが、魔法無効化能力を使うときだけ、右が緑で左が青のオッドアイ。

【始動キー】

ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マギステル

【アーティファクト】

セラテム・ムータティオ
七変化

【仮契約】

主：リン

従：リン

【説明】

未来においてスプリングフィールド国の第一継承者。魔力・気の保有量が双子の弟のアギよりも劣り、一般的な魔法使いとさほど変わりのない量だった。それでも第一継承者であったのは、ユウが理論と開発に優れ、その分野で功績を残しているからだだった。

精霊との親和率が高く、魔力の満ちているところでは、詠唱どころか名称や始動キーを唱えずに魔法を使うことができる。そうでなくても始動キーを必要としない。だが、普段は周りの目を気にして始動キーを用いている。

先天的な魔法無効化能力を持つが、常時発動型ではなく任意発動型。そのため普段は使用していない。

魔力暴走時に偶然召喚したレヴィアタンと盟約を結び、魔界からの魔力供給を得られるようになった。だが、アーティファクトで姿を変えた場合は魔力供給を得ることができない。

レヴィアタンによって魔界の面々とも交流を深め、七大悪魔全てと盟約を結んだ。

光属性、影属性の魔法を好んで使うが、他の属性の魔法にも適性があり、様々な魔法を使うことができる。

リンとは本契約を結んでいる。

自分がもともと持っている魔力を使い切ると、一時的に魔族化してしまう。また、自分の意思で魔族化することも可能。その場合、七大悪魔の力を借りることになるが、その借りた悪魔と同じ髪色になる。

【名前】

秋野友あきのとも

【性別】

女

【年齢】

15歳

【身長】

159?

【容姿】

めだかボックスの黒神めだか（胸は控えめ）。

【始動キー】

ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マジステル

【アーティファクト】

セラテム・ムータティオ
七変化

【仮契約】

主：リン

従：リン

【説明】

ユウがアーティファクトを使い変身したあとの姿。

未来においても死を偽装した後は、これに近い姿で生活しており、アリアドネーに在籍していた。

この姿では魔界からの魔力供給を受けることが出来ず、『魔力を溜めておける指輪』を使う。また、この姿の時は体術を中心に戦う。

【名前】

アリス・クロイツ

【性別】

女

【年齢】

19歳

【身長】

170?

【容姿】

銀髪のポニーテール。目は碧眼で少し吊り上っている。最近では伊達メガネを着用することが多い。胸は少し残念な大きさだが、本人は気にしていない。「これくらいでちょうどいいのよ」「byアリス」。
ズボンが嫌い。

【始動キー】

エリ・エリ・レマ・サバクタニ

【アーティファクト】

なし

【仮契約】

主：

従：

【説明】

アリアドネーの研究者。仲間内からは『未知の開拓者』と呼ばれることもある。その意味は、誰も考えもしなかったところに着目し研究を進めることからきている。

本人はただの娯楽好きだと言っているが、周りからすれば、場を引つ掻き回す迷惑な人。それでもすべて解決するのであまり文句が言えない。

内部崩壊萌えという特殊な嗜好を持ち、黒い噂がありそれが確定した組織を内部崩壊でつぶした時には、恍惚の表情を浮かべる。だが、見境なしというわけではなく、あくまでも黒い噂が確定した場合のみ。

交友関係が広く、クルト・ゲイデル、フェイト・アーウエルンクス、テオドラなど、多くの友人を持つ。また、所属組織の関係上、セラスとはとても仲が良く、一時期その関係を疑われた。

辛い物が苦手で、それを故意に出したある研究員が半殺しされたこともある。

弟子一号はアーニヤ。

実はユウの分身能力によってつくられている身体だが、その魂は完全に別人のもので、未来での親友のもの。そのため、ユウの中心ながらユウと会話することができる。

【名前】

リン・オータム（超鈴音）

【性別】

女

【年齢】

15歳

【身長】

155?

【容姿】

原作の超鈴音と変更なし。ただし、場合によっては髪をおろしている。

【始動キー】

ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マジステル

【アーティファクト】

デイトラヘレ・アヌルス
制御輪

【仮契約】

主：ユウ

従：ユウ

【説明】

スプリングフィールド王家の血縁ではあるが、序列が一番下のため常に劣等感に苛まれる家系に生まれる。さらに、リン自身が魔法を使うことができない体質だったため、幼少期より家族に虐げられてきた。

ある日、リンが捨てられ、死にかけていたところをユウが助けた。それ以降は城の裏手にある森で暮らし、年齢詐称薬を用いてアリアドネーに通っていた。

自分の生家であるオータム家によって誘拐され、不完全の『闇の魔法』の紋様を身体中に刻まれる。そのおかげで魔法を使えるようにはなったものの、不完全であるがゆえに命を削りながらの魔法行使であるため、そのたびに激痛が走る。

麻帆良祭での計画がネギによって破られたが、未来に帰ることなく、未来を変えるために行動している。

ユウとの本契約のおかげで紋様を自在に操れるようになり、魔法

行使時の痛みもなくなった。

【名前】

アギ・M・スプリングフィールド
ミヤザキ

【性別】

男

【年齢】

15歳

【身長】

160?

【容姿】

年齢詐称薬使用時のネギ。目は黒。

【始動キー】

リア・メア・フレア・クーレイア

【アーティファクト】

なし

【仮契約】

主：

従：命

【説明】

ユウの双子の弟であり、魔法世界国の現国王。

ユウが過去へと旅立ったのちに魔法世界を統一、国名を『魔法世界国』と改めた（ただし家臣たちにそのネーミングセンスを疑われた）。

魔力・気ともに一般的な魔法使いの量を逸脱し、幼少時から各地の紛争地帯に赴き、多大な戦果をあげた。反面、机仕事が苦手で、伊織が居なければ30分と経たずに脱走する。

魔法戦では敵無しと言われ、その圧倒的な力は畏怖と尊敬の対象になっている。だが、接近戦に関してはお粗末で、武器を使う才能がない。それでも『戦いの歌』を使用するだけで、一般的な魔法使いを軽く退けることができる。

身長が低いのが悩みで、過去に悪魔を召喚してまで背を伸ばそうとしたが、召喚に失敗し、大怪我を負った。そのことを聞いていたレヴィアタンが苦手。

雷属性の魔法を得意とし、『疑似・闇の魔法』を用いた戦いをする。始動キーは愛猫の名前である。

魔法世界統一後、命と結婚した。

【名前】

伊織いおり

【性別】

女性型

【年齢】

4歳

【身長】

170?

【容姿】

茶々丸と同型。

【始動キー】

なし

【アーティファクト】

なし

【仮契約】

主：

従：

【説明】

ユウとリンが密かに造っていたアギ専用のガイノイド。目的はアギの脱走防止だが、アギ自体の戦闘力が非常に高いため、伊織の戦闘力もそれにつられて向上した。そのため、アギの護衛も務めている。

茶々丸の原型となった。

少々毒舌であり、「心」を持っていることが確認されている。

【名前】

みこと かみなぎ
命・K・スプリングフィールド（旧名・かみなぎみこと神凧命）

【性別】

女

【年齢】

17歳

【身長】

155?

【容姿】

原作魔法世界編の月詠

【始動キー】

なし

【アーティファクト】

おとり
妖刀鳳

【仮契約】

主：アギ

従：

【説明】

月詠の子孫であり、ユウの剣の師匠兼ユウとアギの護衛。神鳴流の道場には所属していないが、現在最強の使い手。

状況によって一刀流と二刀流を使い分けることができる。一刀流の場合は、ユウから譲り受けた妖刀ひなを主に使い、二刀流の時はそれに加えて妖刀鳳を使う。

滅多に使わないが、符術も相当の腕であり、遠距離戦もこなせる。神鳴流特有の暴走状態を完全にコントロールすることができる。

アギと結婚し、王族入りをした。民衆には「帯刀姫」と呼ばれ慕われている。

【名前】

アカリ・C・スプリングフィールド
アキラ

【性別】

女

【年齢】

13歳

【身長】

144?

【容姿】

麻帆良祭でのネギ女装バージョン。髪と目は赤。

【始動キー】

リル・フィル・フィール・ラ・シール

【アーティファクト】

なし

【仮契約】

主：

従：

【説明】

王族の中でも第2位の権威をもつ家の生まれ。両親は幼いころに反国派によって殺されており、現状この家系はアカリ一人。

ユウやアギにとっては可愛い妹であったが、アカリはユウに対して恋慕を抱いていたようだ。

水属性の魔法が得意で、水辺での戦いではかなり強い。

ユウからのプレゼントである発動体の指輪を常に身に着けている。

【名前】

シェリア・シェーン

【性別】

女

【年齢】

30歳

【身長】

166?

【容姿】

Fate/EXTRAのライダー。

【始動キー】

レイ・ライ・クライ・ローレライ

【アーティファクト】

なし

【仮契約】

主：

従：

【説明】

未来において、アリアドネー特別自治区の総長をしている。『魔法世界国』となり、アリアドネーが特別自治区になった際、総長の座とともに、近衛隊の臨時教官にも就任した。

旧世界出身の人間であり、両親は麻帆良在中。また、麻帆良にいたことからエヴァの指導を直接受けており、闇属性を得意としている。

現在独身。

【名前】

沙映・ヴィンテ^{サエ}

【性別】

女

【年齢】

21歳

【身長】

152?

【容姿】

綾瀬夕映にそっくりだが、髪はショートカットで、胸が大きく、身体とつりあっていない。

【始動キー】

ルート・マルクト・プロテスト

【アーティファクト】

なし

【仮契約】

主：

従：

【説明】

綾瀬夕映の子孫であり、スプリングフィールド王家の一員。父親は哲学者で、沙映も哲学的なものの考え方をすることが多い。戦闘の力が高く、アリアドネー騎士団の長を務めている。また、

その容姿からファンクラブもあるらしい。

【名前】

はせがわ
長谷川三雨
さきめ

【性別】

女

【年齢】

15歳

【身長】

160?

【容姿】

長谷川千雨のショートカットバージョン。ただしメガネはかけない。

【始動キー】

ハック・リロード・シャットダウン

【アーティファクト】

なし

【仮契約】

主：

従：

【説明】

長谷川千雨の子孫であり、代々続くネットアイドル界のコミュニティ『ちう一族』の族長。趣味もコスプレとパソコン弄りであり、電脳戦では伊織にも勝る。

魔法はそこそこ使えるが、基本的に戦うことをせず、逃げに徹する。それゆえ撤退戦では圧倒的な実力を発揮し、模擬戦ではあるが、アギの猛攻を耐えきり、見事撤退した。

【名前】

近衛木乃実
このえ このみ

【性別】

女

【年齢】

31歳

【身長】

160?

【容姿】

木乃香がそのまま成長した感じ。

【始動キー】

ケア・キュア・クリア・リザレクト

【アーティファクト】

コチノヒオウギ

ハエノスエヒロ

【仮契約】

主：刹華

従：刹華

【説明】

近衛木乃香の子孫。ネギが世界を救ったのちに統一された日本魔術協会の長と麻帆良学園長を兼任している。

治癒魔法のエキスパートであり、この人にかかれば死人以外は治るとまでされている。そのため、年中患者が訪れる。

刹華と結婚し、子供が一人いるが、木乃実は先天的に子供が産めない身体のため、孤児を養子として引き取った。

【名前】

桜咲刹華
さくらさきせつか

【性別】

男

【年齢】

30歳

【身長】

178?

【容姿】

切れ長の目、サイドポニーの髪形など、刹那との共通点が多いが、男。

【始動キー】

なし

【アーティファクト】

アラ・アルカ
白き翼

【仮契約】

主：木乃実

従：木乃実

【説明】

桜咲刹那の子孫であり、現神鳴流当主。当主ではあるものの、実力の面では命に劣っている。木乃実の護衛として活動していたが、結婚し、その任から解かれた。

アーティファクトの白き翼は、刹那の半妖の部分を少し受け継いでいるため、常時発動型となっており、戦闘時には翼を開放する。

【名前】
朝倉琴美あさくらことみ

【性別】
女

【年齢】
19歳

【身長】
165?

【容姿】
パイナップルヘア。色は黒。

【始動キー】
プラクテ・ビギ・ナル

【アーティファクト】
なし

【仮契約】
主：
従：

【説明】
朝倉和美の子孫であり、魔法世界・旧世界問わず情報屋として活動している。

魔法適正がほとんどなく、魔法使いとしては活動できないが、『認識阻害』のみを極め、情報収集に役立てている。未来において、

龍宮真名の死を看取った一人。

【名前】

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル（未来）
アタナシキティ

【性別】

女

【年齢】

約700歳

【身長】

約135？

【容姿】

原作と変更なし。

【始動キー】

リック・ラク・ラ・ラック・ライラック

【アーティファクト】

なし

【仮契約】

主：

従：ネギ

【説明】

登校地獄から解放され、現在は京都の木乃実の実家で暮らしており、仮契約の関係上、ネギが生きていることを知っている。

エヴァが京都にいることによって、京都における妖怪の発生率が極端に下がった。

木乃実に胃袋を掴まれているので、よく使われるが、その見返りに目がくらみ、使われているという認識をしていない。

茶々丸は魂が寿命を迎えこの世から去ってしまったが、チャチャゼロは健在。

【名前】

ミラ
(元1032号)

【性別】

女

【年齢】

10歳(推定)

【身長】

125?

【容姿】

白い髪に透き通った蒼い目。表情が変化しないため、姫御子時代のアスナに似ている。

【始動キー】

なし

【アーティファクト】

なし

【仮契約】

主：

従：

【説明】

とある研究所で実験体として監禁されていたところをフェイトが助け、そのまま居ついている。話すことがあまり得意ではなく、途切れ途切れの話し方をする。また、文字を読むことができない。これは『サヴァン症候群』によるものだと調査報告ではされていたが、真偽は不明。

治癒魔法の適性が異常に高く、逆にそれ以外の適性が全くない。始動キーが不要であり、その理由は自分でもよくわかっていない。木乃香や月詠にはすぐ懐いたが、真名には怯えて近づこうともしない。

【名前】

しいかみまてらす
弑神天燎

【性別】

男

【年齢】

20歳

【身長】

184?

【容姿】

黒髪黒目の純日本人。細身だが筋肉質。

【始動キー】

プラクテ・ビギ・ナル

【アーティファクト】

なし

【仮契約】

主：

従：

【説明】

幼いころ月詠と兄妹同然に暮らしていた。また、月詠から神鳴流を教わったため、一通り使うことができる。

現在は魔法世界で傭兵稼業をやっており、その関係から真名とも関わりがある。

闘技場ではラカンと人気を二分しており、その対戦成績は50勝50敗のイーブン。

武器は何でも使うが、よく使うのは呂布が使ったとされる『方天画戟』。ラカンと同じく大雑把な戦いをするため、ラカンとは気が合う。

【名前】

レヴィアタン

【性別】

女

【年齢】

？

【身長】

約160？

【容姿】

水色の髪に同じく水色の目。髪は長く、結んでいない。体型も出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでいる理想的な体型。

【説明】

七大罪のうち、『嫉妬』を司る悪魔。リヴァイアサンとも呼ばれる。本来の姿は翼を生やした水蛇であるが、その姿を見せることはほとんどない。

陽気な性格で、何事も楽しんで行う。また、悪魔らしく残酷な面を見せることもある。

彼女の使う『嫉妬』の魔法は、詠唱に問いかけを使うという独特の方法で行われる。また、水属性の魔法も得意としており、同じ水属性である大天使ガブリエルとも仲が良い。

彼女に対してセクハラを行った者は、生死の境を彷徨うらしい（ゼウス談）。

【名前】

ルシフェル

【性別】

男

【年齢】

？

【身長】

約180？

【容姿】

浅黒い肌に金髪、目は墮天した影響で黒ずんだ金。中性的な顔立ちをしている。背中から黒い羽根を生やしている。

【説明】

七大罪のうち、『傲慢』を司る悪魔。ルキフェル、ルチフェル、ルシファーなど地域によって呼び方が異なる。

紳士的な性格であり、普段は『傲慢』な一面を見せることはない。だが、一度戦闘となれば、自らの力を振りかざし、弱者を狙う。配下にはヘルマンがいる。

彼の使う『傲慢』の魔法は、人間には使えず、また使うことができるのがルシフェルのみなので詳細が分かっていない。

【名前】

サタン

【性別】

男

【年齢】

？

【身長】

約180？

【容姿】

赤い髪に赤い目をしている。また、かなり細身の身体をしている。

【説明】

七大罪のうち、『憤怒』を司る悪魔。また、悪魔の中で最も高い位に就いているため、口調がとても丁寧。

彼の使う『憤怒』の魔法は、詠唱を必要としないタイプであり、魔力、気などが増大する代わりに、敵味方を区別する以外の理性を失う。

火属性の魔法も得意であり、大天使ウリエル、火炎公アィムなどと仲が良い。

【名前】

ベルフェゴール

【性別】

男

【年齢】

？

【身長】

約190？

【容姿】

髪と目は茶色で、老人の姿をしている。

【説明】

七大罪のうち、『怠惰』を司る悪魔。その通りに、一日中をだらけて過ごす。

未知のものには目がなく、その時だけは想像もつかないような行動力を発揮する。また、発明家でもある。

彼の使う『怠惰』は魔法ではなくスキルなので、他人が使うことはできない。

【名前】

マモン

【性別】

女

【年齢】

？

【身長】

約140？

【容姿】

緑色の髪と目を持ち、ショートカット。体型は幼女。

【説明】

七大罪のうち、『強欲』を司る悪魔。『強欲』ではあるものの、意外と人のものを上げるのが好き。

彼女の使う『強欲』の魔法は、対象を指定し、それを自分の眼前に持ってくるというもの。空間的制約を受けないので、遮蔽物の裏に隠れても無駄。

風属性の魔法を好んで使い、気晴らしという理由で人間世界に台風を起こしたりする。

【名前】

ベルゼブブ

【性別】

男

【年齢】

？

【身長】

約2?～約200?

【容姿】

基本的には黒髪黒目。初老の男性。

【説明】

七大罪のうち、『暴食』を司る悪魔。魔法すら喰らうことができる。

身体が虫で構成されており、虫を媒介とした転移を行うことが可能。唯一人間界に自在に行き来できる悪魔。

彼の使う『暴食』の魔法は、敵が放つ攻撃を喰らい、無効化するものである。ベルゼブブ自身が使う場合は、龍種すら喰らうことができる。『強欲』と同じく対象を指定し、使う。

【名前】

アスモデウス

【性別】

女

【年齢】

？

【身長】

約170？

【容姿】

紫の髪に、紅い目を持つ。髪は長く、ポニーテールにしている。体型は、召喚者が望む体型になる。望みがない場合は、レヴィアタンとほぼ同じ。

【説明】

七大罪のうち、『色欲』を司る悪魔。部下にサキュバスとインキユバスの軍団を持っている。

身体から異性を虜にするフェロモンを発することができ、自由に操ることができるようにする。

彼女の『色欲』は体質のため、他人には使えない。

【名前】

ガミュギユン

【性別】

男

【年齢】

？

【身長】

約140？

【容姿】

常にフードをすっぽりとかぶっているため、顔だちは不明。

【説明】

鎌を持ち、魂を操ることから、『死神』とよばれることもある。

声から推測するに、10歳くらいに自分の姿を固定しているよう

だが、その姿を見た者はいない。

死者の魂を呼び出すこともできる。

【名前】

ダンタリアン

【性別】

女

【年齢】

？

【身長】

約130？

【容姿】

金髪でショートカット。要するに、『恋姫』の朱里。

【説明】

常に本を持ち、その本の中には、世界中の知識が詰まっているとされる。

また、その本は武器として使用することもでき、殴ってよし、開いて魔法を使ってよしの万能品。

自分の姿を変える魔法が苦手で、この姿から変えることができない。

原作と変更点のあるキャラ

【名前】

ネギ・スプリングフィールド

【仮契約】

主：

従：明日菜、のどか、夕映、ハルナ、千雨、和美、楓、古菲、茶
々丸、亜子、裕奈、まき絵

【説明】

仮契約相手を変更。

【名前】

神楽坂明日菜・アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテ
オフユシア

【始動キー】

不要

【説明】

アスナに記憶が戻っている。
始動キーが不要。

【名前】

近衛木乃香

【始動キー】

プラクテ・ビギ・ナル

【アーティファクト】

コチノヒオウギ

ハエノスエヒロ

天の羽衣

【仮契約】

主：刹那、月詠

従：刹那、月詠

【説明】

仮契約相手の変更。

アーティファクトの追加。

魔法使い 符術使いに変更。

【名前】

桜咲刹那

【アーティファクト】

建御雷

天之尾羽張

【仮契約】

主：木乃香、月詠

従：木乃香、月詠

【説明】

仮契約相手の変更。
アーティファクトの変更、追加。

【名前】

かみなぎ
神風月詠

【アーティファクト】

村正
鬼切

【仮契約】

主：木乃香、刹那
従：木乃香、刹那

【説明】

名字の追加。
3 - A に転入。
仮契約執行。
アーティファクト所持。

【名前】

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

【身長】

156?

【容姿】

幼女から少女へ。

【説明】

成長した。

登校地獄解除。

本気時は幼女に変身。

【名前】

宮崎のどか

【始動キー】

ルック・ブック・ラ・ブック

【説明】

始動キーの決定。

戦闘スタイルの変化。

【名前】

朝倉和美

【始動キー】

ノース・イースト・ウエスト・サウス

【説明】

始動キーの決定。

アーティファクト説明 (オリジナルのみ)

【名称】

セブテム・ムーダータイオ
七変化

【説明】

自らの姿を変える。声だけを変えたり、体の一部のみを変えることも可能。

常時発動型のため、『アデアット』と言う必要はなく、自分の意思のみで可能。また変身途中は無防備となる。

変えられるのは姿や声のみであり、口調や魔力の質を変えることはできない。また、変身中は他者からの魔力供給を受けられない。

【名称】

ディートラヘレ・アヌルス
制御輪

【説明】

指輪型のアーティファクトで、これを身に着けている間は、自らが放った魔法に魔力消費なしで操作を加えることができる。また、魔力を消費することによって相手の魔法を操作することも可能。その場合は操作する対象の魔法以上の魔力が必要となる。

【名称】

てんのほころも
天の羽衣

【説明】

羽衣を纏った者に飛行能力を与える。また、自動防御術式が織り込まれ、意識せずとも発動する。
大きさを自在に変えることができ、最大で5m四方まで大きく出来る。

【名称】
村正むらじまの

【説明】

本来の『村正』と同じく、特定の相手に対し多大な力を発揮する。相手の指定には、相手の血が必要となり、その血を『村正』に記憶させることによって力を発揮する。

この剣を使用している間は、『斬魔剣』が使用できない。

【名称】
鬼切おにぎり

【説明】

その名の通り、鬼等の人外に対して力を発揮する。人に対しては切れ味のよい刀としてしか作用しない。また、この刀であれば、鬼を還すことなく消滅させることができる。

【名称】
天之尾羽張あめのおぼろ

【説明】

『火』の属性に対し、圧倒的優位を誇る剣。また、『建御雷』とは神話の相性上併用しやすい。

また、自動で動かすことができ、他人へ貸し出してもその威力を十分に発揮することができる。

第説話・「設定集」（後書き）

多少の矛盾や実際の文献との違いについては目をつぶっていただけ
るとありがたいです。一応、本編には矛盾がでないようにしました
ので。

質問等ありましたらお知らせください。ただし、ただの文句は受け
付けません。きちんと問題点をあげて下さるととても助かります。

第四十三話・「それぞれ」（前書き）

間違えて消してしまった！！　なので再投稿です……………やはり寝不足の状態でやるべきではなかったか……………。

バックアップがあつてよかった……………。

第四十三話・「それぞれ」

暫定的ではありますが、私が新しい学園長の近衛詠春です。

近衛詠春

「黙祷」

通常より一月遅れて行われた麻帆良学園の始業式は黙祷から始まった。

「全世界同時多発テロ」。一般的にそう呼ばれる事件が起こり、麻帆良もその対象として被害を被った結果、数百にも及ぶ死傷者を出した。

未だに犯人は捕まっておらず、厳戒体制は続いている。麻帆良に出入りする人間は必ずチェックを受けなければならない。そんな中、校舎の修復が終わり、今日始業式を迎えたのだ。

だが、これはあくまでも表向きの話だ。少しでも裏に関わりのある者は、このテロの違う面を知っている。尤も、その情報もあちらこちらで尾鱗が付き、錯綜しているのだが。

曰く、「今回のテロは、魔法世界からこちらに仕掛けてきた戦争

だ
」

曰く、「魔法世界の人間がこちらに対し、交友を閉ざすためだ」

曰く、「旧世界の人間が魔法世界の人間をこちらに来させないためだ」

等々。だが、一つだけ。どんな人物に聞いても同一の答えが返ってくるものがある。

それは、「この戦争の首謀者が生死不明である」ということだ。逆に言えば、それ以外は真実かどうかすら分からないのだ。

新田は、帰郷しているネギの代理として3 - Aの臨時担任を務めることになっていた。

新田は優秀な教師だ。学生から怖がられているが、卒業後に新田の下を尋ねる者は後を絶たない。彼は卒業後にその有り難みが分かるタイプの教師なのだ。

そんな彼も、今の3-Aにどう接すればいいのか悩んでいた。いつもは騒がしく、注意しても治らない。それが3-Aだ。彼もそんな3-Aが好きだった。手は掛かるが、それだけ接する時間も長く、まるで自分の娘のような感じだった。

だが今日は、あの3-Aが大人しい。無論、あのような事件があり、麻帆良でも被害が出ている以上、騒がしいのは好ましくない。だが、それを差し引いても、大人しすぎるのだ。

彼も担任を引き受けるに当たって、クラスの状況は聞いている。それでも、彼にはどう接すればいいのか分からなかった。

考え抜いて彼が出した結論。それは、いつも通り接することだった。

詠春は学園長室の自分の席に腰を下ろすと、大きく溜め息をついた。

彼は手元の資料に目を落とす。そこには現在麻帆良に来ていない3-Aの情報があった。

担任であるネギは、ナギ、のどか、アーニヤと共に、メルディアナでユウの残した資料をもとに、村人の石化解除を行っている。

明日菜はアリカ、クルトと共に、ウエスペルタティア復興に尽力し、こちらに帰ってくる時間がない。

木之香、刹那、月詠は未だ療養中で登校出来る状態ではない。

ザジ、真名は魔界に赴いている。

そして……。

「リンさんとユウさん、アリスさんは生死不明……ですか」

「なあ、せつちゃん。まだ学校行ったらあかんの？」

「ダメですよ。まだ左目が見えてないでしょう？」

「むー。暇や」

京都の実家で療養している木之香は暇を持て余していた。

最初は、日本魔術協会の発足があり、療養中にも関わらず慌ただしい日が続いた。それも一段落つき、日がな一日大人しくするだけの毎日が続いている。

一応木之香は日本魔術協会の次期長になるため、符術の練習などもあるのだが、夏休みの修業のおかげで教師役である日本魔術協会関西支部代表・天ヶ崎千草よりも優れ、逆に教える始末。

ユウヤリン、アリスのことは気にかかるが自分が動いても何も分からないことは分かりきっているので、信じて待つことしか出来ない。

結果、暇なのだ。

「あれ？ そっいえばつーちゃんは？」

「月詠なら、天燎さんと一緒に……その……デ……デートに……」

自分のことでもないのになぜか刹那は顔を赤らめて言った。

「むー。なんでつーちゃんは自由に動けるのにウチはダメなんやー
ー……!」

「ここが魔界か……。普通の街と変わらないな」

「まあ、所詮は第一階層ですけど」

真名は自らの眼に起こった異常の原因を探るために、ザジとともに魔界を訪れていた。既に人間界単位で二週間が過ぎ、その間は色々な検査や手続きのため、魔界を見て周ることが出来なかった。

それも昨日で全て終了し、今はザジとその姉ポヨ（仮）に魔界を案内してもらっている。

「さて、まずはこの第一階層について説明するポヨ。第一階層は主に魔法世界にいる魔族たちの階層ポヨ。マナもこの階層ポヨね。あとは唯一この階層には人間も来れるポヨ」

「次は第二階層です。第二階層は主に召喚魔法で召喚される魔族で構成されています。アルカナさんが自由に立ち入り出来るのはこの階層までです」

「ということは、これ以上先もあるのか？」

「ええ。私たち姉妹は第三階層です。第三階層は爵位持ちの階層ですね。最後の第四階層は魔王様たちです。あまり詳しくは知りませんけど」

「そうか。それとさつきから気になっていたんだが……」

そう言いながら真名が視線を向ける先には、いかにも悪魔らしい蝙蝠のような羽根を持つ子供が、いかにも天使らしい純白の羽根を持つ子供と遊んでいる光景があった。

「所謂天使というものも魔界にいるのか？」

「そもそも魔界という名称自体人間が付けた名前ポヨ。だから天使もいるポヨ。第四階層まで行けば神様だっているらしいポヨ」

「それは……あまり言わないほうが良さそうだ。世界中の宗教家が混乱してしまいそうだ。というか統一宗教が出来る可能性があるな」

「ええ。ですが、全世界統一宗教は色々と問題がありますから他言無用でお願いします。まあ、日本は統一宗教と言ってもいいんですけどね」

「確かに八百万神の発想はそうなるか」

「ここに全員おる」

メルディアナに来たネギたちは、校長の案内で地下にある一室に向かった。そこには石化した人たちが、その姿のまま保管されていた。

「……では、僕はこれから魔法陣を描くので、魔力は使わないで下さい。暴発させたくないのです。特に父さん」

「おいおい、俺は信用されてねえのかよ」

「……」

「何か言えよ……」

実際、口に出すことはしないが、ネギは戦闘以外の魔法についてナギを信用できない。何せ、『登校地獄』をともに掛けられないという前例があるのだ。

今回は『登校地獄』よりも遥かに高度な魔法を使うのだ。気を遣わない訳がない。

「もうすぐ終わります。……よし、これで終わりです。あとは魔力を注げば、術式は起動するはずですよ」

描き終えた魔法陣は部屋中に広がっている。大小合わせて約50もの魔法陣が描かれ、そのどれもが複雑だ。

「じゃあ父さん、魔力流すのは手伝って下さい。僕だけじゃ足りない

いので」

「よし、任せろ！」

二人が魔力を流し始めると、魔法陣が輝き始める。三分ほど流したところで、二人は魔力を流すのを止める。それでも輝きは強くなり、ネギは術式が成功したことが確信できた。

一際輝きが強くなり、それが収まる頃には石化していた村人は皆石化が解けていた。

「アーニヤ！」

「お母さん！！」

アーニヤは無事に両親との再会を果たし、泣いている。ネギとナギもスタンを見つけ、そちらに向かっている。のどかもネギの後を追っていった。

「スタンさん……」

「ん？ ネギか？ それにナギも」

「よお、じーさん」

「ネギ、ネカネはどうした？」

「……ネカネお姉ちゃんは……」

「な……何かあったのか！？」

スタンはネギにつかみ掛かるような勢いで問い掛ける。

「……ネカネお姉ちゃんは………」

「俺が言う。ネカネは今魔法世界の病院にいる。今行ったところで何か出来る訳じゃねえ。……何せ、精神を壊されたからな」

「はあ。やっと自由時間ね。自分から手伝うって言ったけど、結構キツイわね」

つい先日、アリカの汚名は濯がれ、晴れて公に活動出来るようになった途端、アリカは寝る間も惜しんで復興に取り掛かった。しかもクルトはそれを止めるどころか、新しい案件を持ってきてアリカの意見を聞く始末だ。

明日菜はこのままではアリカが倒れてしまうと思い、クルトと肉体言語によるお話をしたあと、アリカにかなり強めに『眠りの霧』を掛け、強制的に休ませたのだ。

かく言う明日菜自身もこの休みを利用して街をぶらぶらしている。明日菜はアリカほどではないものの、色々やっていたので疲れているのだ。

「そういえばもうそろそろお昼の時間よね。どこか適当な場所はないかしら」

明日菜は辺りを見回すが、ちょうど昼時ということもあり、どの店を見ても混み合っている。

明日菜もちょっとした有名人になったため、一応変装はしているが、混み合っている場所はなるべく避けたいと考えている。

だが、それは昼ご飯を犠牲にするようなことではないと考え、適当な店に入ることにした。

「いらっしやいませ。ただ今当店は満席となっておりますが、相席でしたら空いていますか、いかがなさいますか？」

「相席でいいわ」

「かしこまりました。では、こちらになります」

明日菜は店員の後を着いて行き、窓際の席に案内された。そこには、水色の髪と目をした人が座っていた。

とりあえず、明日菜は挨拶することにする。

「相席させてもらうわね。私はアヤカ。あなたは？」

明日菜がアヤカと名乗ると、目の前に人物は少し笑った。

「僕はユーリと言います。見た目では分からないかも知れませんが、一応魔族です。ああ、別に偽名を名乗らなくてもバラしたりしませんから。アスナ様」

「げ。なんでバレてるの？」

「多分皆気づいてますよ。流石に髪形を変えた程度じゃ分かりますよ。皆は空気を読んで言わなかっただけです。アスナ様が忙しいのは知っていますからね」

「じゃあユーリも空気を読みなさいよ。ていうか様付けなんてしなくてもいいわよ」

明日菜は様付けされることに違和感があるようだ。

「そうですか。まあ、ゆっくりしていつてくださいよ。僕は仲間から買い出しを頼まれていますので、もうそろそろ行かなければいけないんです」

「そうなの。じゃあ、また会えたらその時はもっと話しましょう」

ユーリはそう言うと、きちんと自分の分の伝票だけもって会計に向かった。

その姿を見送り、明日菜はメニューを見る。

「あ。おススメぐらい聞いておけばよかったわね」

第四十三話・「それぞれ」(後書き)

もう一度謝ります。間違えて消してしまい申し訳ありません。

感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1316u/>

魔法先生ネギま！ ～もう一人の未来人～

2012年1月9日23時54分発行